宮城県文化財調査報告書第135集

寂光寺跡ほか

平成2年3月

宮城県教育委員会

序　文

好調な景気と首都圏における地価の高騰、それに仙台市の政令指定都市への移行といった好印象も加わって、近年の本県における各種開発事業の活発化には目を見張るものがあります。特にゴルフ場を初めとする大規模なレジャー施設や工場団地・住宅団地の進出が著しく、これらの開発によって埋蔵文化財が破壊の危機にさらされる場合が多くなってきています。

改めて申すまでもなく、埋蔵文化財は文献などに記録されていない地域の歴史を解明することができる貴重な歴史資料であるばかりでなく、その地域に住んでいる人々にとって最も親しみやすく、精神的なよすがとなるものであります。

また、時には発掘された土器・石器・骨角器の優品が美術的価値を持ち、見る人々に感動を与える場合さえあります。

しかし、埋蔵文化財は土地との関連で保存されてきたものであるため、各種開発事業によって絶えず破壊・消滅のおそれにさらされております。当教育委員会としては開発関係機関等との協議を通してこのような貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。従来はともすれば開発事業と埋蔵文化財の保護は相容れない関係にあると理解されがちでしたが、最近では開発関係者の中に“開発は常に古き価値あるものの保存と新しきものの創造との調和のもとに行うべきもので、むしろ積極的にそれを開発の中に取り込んで活用していこう”という姿勢がみられるようになったことは心強い限りであります。

本書は開発関係機関等との協議・調整に基づき平成元年度に当教育委員会が行った発掘調査のうち、国庫補助金を得て実施した流通団地・住宅団地・個人の住宅建設などに伴う 9 遺跡の発掘調査の成果を収録したものであります。これらの成果を地域の歴史的解明と文化財保護思想の高揚のために役立てていただければ幸いです。

最後に、協議にあたり各遺跡の保護調整に理解を示され、調査にあたっても多大なご協力・ご支援をいただきました関係機関各位、および発掘作業にあたられた皆様に深く感謝申し上げる次第であります。

平成 2 年 3 月

宮城県教育委員会 教育長　**武 田 武 男**

目　　次

平成元年度発掘調査の概要…… 1
寂光寺跡…… 9
一里塚遺跡…… 35
天皇寺遺跡…… 167
廻立古墳群…… 189
猿喰東館跡…… 203
保呂羽館跡…… 215
唐木崎貝塚…… 231
日影貝塚…… 241
白山遺跡・ほか…… 253

例　　言

1. 本書は宮城県が平成元年度に埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助金を得て、宮城県教育庁文化財保護課が担当して実施した発掘調査等の調査報告書である。
2. 開発工事等にかかる埋蔵文化財保護のための協議や発掘調査にあたっては、次の開発担当部局や発掘届提出者および地元教育委員会等から多大なご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。
   計仙麻大嶋神社造営委員会、吉岡東土地区画整理組合、吉岡南土地区画整理組合、大河原土地改良事務所、宗教法人大崎八幡神社、宮城県農政部耕地課・保健環境部医務課・企画部空港整備対策室、小野寺二三夫氏、佐々木満氏、星文郎氏、菊地徳治氏、熊谷満氏、武地栄一氏、亘理町建設課、関係各市町村教育委員会
3. 本書で使用した土色については『新版標準土色帖』（1973）を参照した。
4. 本書に各遺跡の位置図として掲載した地形図は建設省国土地理院発行の 1/25,000 の地図を複製して使用したものである。
5. 本書は調査員全員の協議を経て下記の者が執筆・編集した。
   平成元年度発掘調査等の状況－白鳥良一、寂光寺跡－菅原弘樹、一里塚遺跡－手塚均・加藤明弘・岩見和泰、天皇寺遺跡・廻立古墳群－斎藤吉弘、猿喰東館跡－鈴木実夫（気仙沼市教委）、保呂羽館跡－吉田雅之、唐木崎貝塚－阿部恵、日影貝塚－大和幸生、白山遺跡・他－鈴木真一郎・木皿直幸
6. 発掘調査で出土した遺物および調査記録類などは宮城県教育委員会ないしは地元市町村教育委員会で保管している。

平成元年度発掘調査の概要

1．国庫補助事業関係発掘調査

(1) 概要

宮城県教育委員会が平成元年度に埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助金(総事業費 10,000 千円、補助率 1/2）を得て実施した発掘調査は表 1 のとおりである。これらはいずれも土木工事等の開発行為により埋蔵文化財包蔵地が破壊されてしまう恐れが生じたため、それらの保存措置を講じるための資料を得ることを目的として緊急に対処したものである。具体的な調査内容としては、①大規模な開発計画が持ち上がっているため、その計画が具体化する前に遺跡の範囲や性格を明らかにし、遺跡の保護を図るための発掘調査（表 1 の 1・4）、②個人の用に供する住宅等の建設で、個人に費用の負担を求めることが困難な場合の発掘調査（5〜8・11〜13）、③土木工事等の掘削範囲から除外したり、建物などの建築場所を選定するなど、遺跡を保存するために開発行為との調整を図ることを目的とした遺跡範囲や遺構のあり方等の確認調査（2・3・9・10・14〜16）などがある。

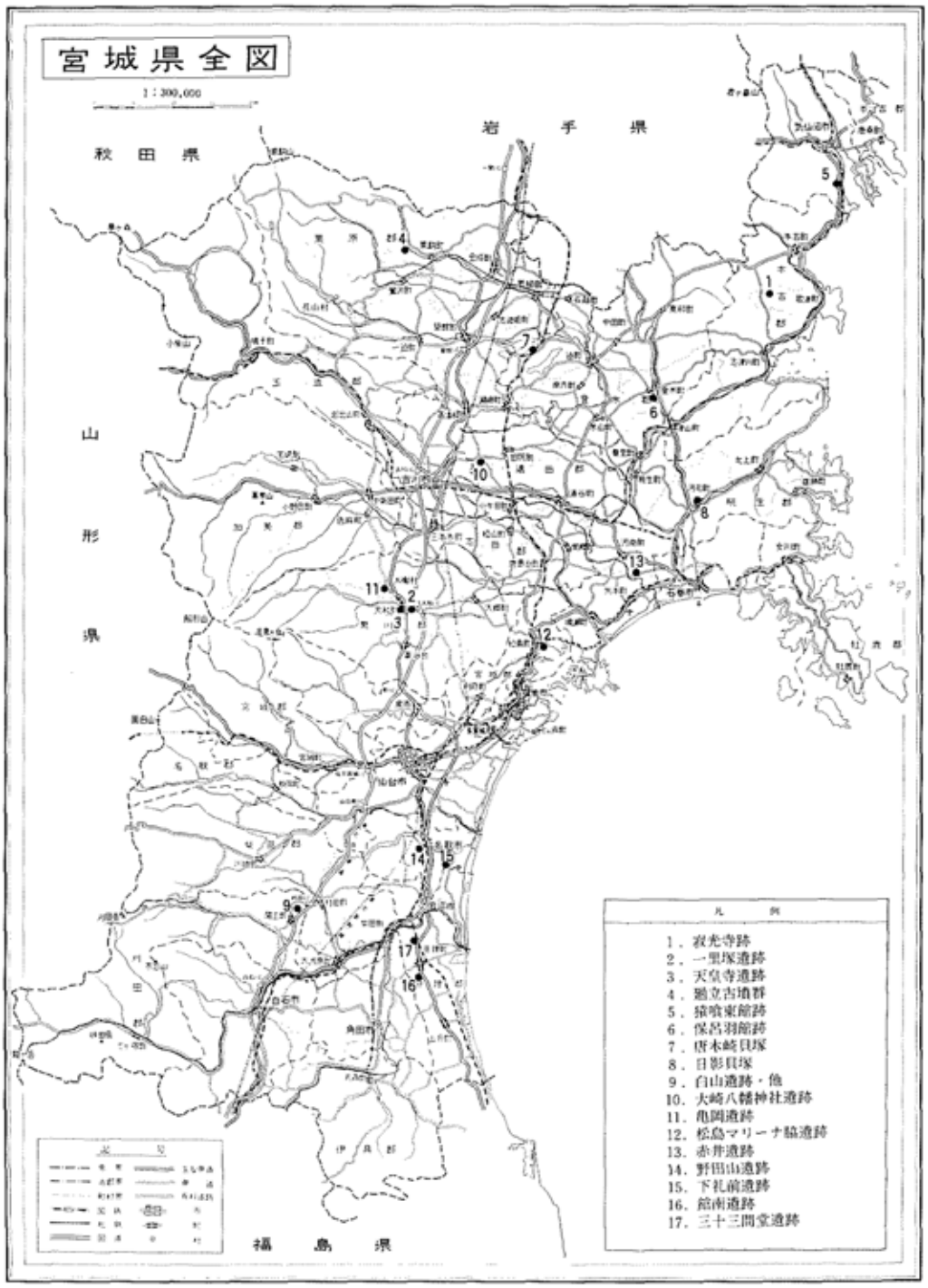
本報告書はこれらの事業のうち、一定の成果が得られた 1〜9 の 9 遺跡の調査結果を収録したものである。これら以外の遺構や遺物が発見されなかった遺跡、および別途に報告書を刊行予定の 13 と 16 については、次項に調査に至る経過とともに調査結果の概要を記しておいた。

(2) 調査に至る経過

各遺跡ごとの調査に至る経過および調査結果の概要は以下のとおりである。

〔寂光時跡〕

本遺跡は本吉郡歌津町から本吉町にまたがる田束山の南斜面に立地する山岳寺院および修験道にかかわる遺跡である。享保 4（1719）年に成立した『奥羽観蹟聞老志』には山頂に羽黒山清水寺、中腹に田束山寂光寺、北嶺に幌羽山金峰寺があり、70 余坊があったと記されている。現在も田束山の中腹には建物が存在したと推定される平場や礎石が数多くみられ、「東の行場」、「西の行場」など修験に関連した地名も遺存している。また、田束山の山頂には平安末期頃の 11 基の経塚からなる史跡田束山経塚群が存在する。したがって、田束山全体が古代から近世にかけての宗教遺跡として把握できる。ところが、昭和 62 年 5 月に中腹に祭られている計仙麻大島神社の建て替え計画、昭和 63 年 6 月に生活環境保全計画（農林水産省補助）の協議が相次いで提出され、一方、これを受けた地元歌津町には現在も霊山として信仰の篤い田束山を保存・活用したい意向もあり、本遺跡をいかに保存するかが大きな問題となってきた。そのためにはまず、遺跡の性格や範囲を正確に把握し、その上で神社建て替え地の選定および



第1図　国庫補助関係遺跡位置図

生活環境保全計画との調整を図る必要があるため、宮城県教育委員会と歌津町教育委員会は昭和63年度に国庫補助金を得て8月～9月に第1次の発掘調査を実施した。その結果、中・近世の整地地業や礎石建物跡などが検出され、鎌倉前期の中世陶器や中国銭などが発見された。本年度の第2次発掘調査は遺跡の構成をさらに明確にすることを目的として、修験関係の建物が存在したとみられる平場を対象に5月に実施したものである。調査の成果については本文を参照されたい。

〔一里塚遺跡〕

一里塚遺跡は吉田川北岸の最低位段丘面に立地する、遺物の分布範囲が 90,000 ㎡にもおよぶ奈良・平安時代の大規模な集落跡である。昭和62年4月に大和町吉岡東土地区画整理組合から、本遺跡を含む地域で昭和63年～66年に土地区画整理を実施したい旨の協議があった。協議の結果、（1）まず、遺構の範囲、密度を把握する確認調査を年度別して実施する。（2）遺構が存在する場合は、道路等は位置・工法の変更、宅地については盛土などして遺構の保存を図る。（3）やむを得ない部分については年次計画に基づいて確認調査を実施した後に事前調査を行う、という諸点を相互に確認した。これらのことを踏まえ、昭和63年6月～7月に第1次調査（確認調査）を実施した。その結果、調査範囲内における遺構の分布状況が明らかとなり、雇用促進住宅建設予定地には遺構が認められず、工事を施行しても何ら問題ないことが判明した。また、宅地予定地で、奈良・平安時代の竪穴住居跡が密集する遺跡の中央丘陵部分の20,

表1　平成元年度国庫補助事業一覧

No.	遺跡名	所在地	開発事業の種別	開発担当部局
1	寂光寺跡	本吉郡歌津町字樋の口	神社改築用地造成	計仙麻大鳴神社造営委員会
2	一里塚遺跡	黒川郡大和町吉田字桧木	土地区画整理	吉岡東土地区画整理組合
3	天皇寺遺跡	黒川郡大和町吉岡字天皇寺	土地区画整理	吉岡南土地区画整理組合
4	廻立古墳	栗原郡栗駒町中野廻立	各種開発事業	
5	狼喰東館跡	気仙沼市字最知北最知	宅地造成	個人
6	保呂羽館跡	登米郡登米町寺池道場	畜舎建設用地造成	個人
7	唐木崎貝塚	登米郡迫町新田字彦道	農家作業場建設	個人
8	日影貝塚	桃生郡河北町相野谷字柿木前	宅地造成	個人
9	白山遺跡・他	刈田郡蔵王町大字円田字曲木　他	県営圃場整備	大河原土地改良事務所
10	大崎八幡神社遺跡	遠田郡田尻町八幡字御殿坂	神社改築	宗教法人大崎八幡神社
11	亀岡遺跡	黒川郡大衡村大瓜字四反田	住宅建設	個人
12	松島マリーナ脇遺跡	宮城郡松島町磯崎字西ノ浜	住宅建設	個人
13	赤井遺跡	桃生郡矢本町赤井字星場	畑地改良（天地返し）	個人
14	野田山遺跡	名取市愛島塩手字野田山	県立病院増築	保健環境部医務課
15	下札前遺跡	名取市植松下札前	空港拡張	企画部空港整備対策室
16	館南遺跡	亘理郡亘理町字館南	町道改良	町建設課
17	三十三間堂遺跡	亘理郡亘理町逢隈下郡椿山	住宅団地造成	一般開発業者

000㎡については、50㎝ほどの盛土をするよう設計変更を申し入れ、了承を得た。さらに、水路改修予定地では遺構が認められたが、設計変更が困難と判断されたため、途中から事前調査に切り替えて第2次調査として10月から実施し、11月に調査を終了した。本年度の第3次調査は昨年の第1次調査に引続き、5月から道路予定地および工場予定地の確認調査を実施したもので、9月に調査を終了した。調査の成果については本文を参照されたい。

〔天皇寺遺跡〕

天皇寺遺跡は吉田川北岸の低位段丘上に立地する古代の土師器・須恵器の散布地である。平成元年4月に大和町吉岡南土地区画整理組合から、本遺跡を含む地域で昭和63年～平成4年に土地区画整理を実施したい旨の協議があった。この協議を受けて分布調査を行った結果、本遺跡はかなり広範囲にわたって広がることが予想されたため、本年度はとりあえず都市計画道路予定地を中心に遺構の有無の確認調査を実施することになり、8月～9月に調査を行ったものである。調査の成果については本文を参照されたい。

〔廻立古墳群〕

廻立古墳群は昭和63年に発見されたばかりの10基からなる古墳群である。この古墳群は丘陵の裾部に近い斜面に形成されており、径5～6m、高さ1mほどの塚が群集している状況から末期古墳の可能性があった。栗駒町ではこの遺跡が近い将来開発にかかることも予想されるため、遺跡の性格や年代を早急に把握し、その結果を踏まえて町史跡に指定し、永く保存していくための発掘調査を計画し、県教育委員会に協議してきた。県教育委員会では、国庫補助事業に組み込んでこれに対処することとし、町当局でも発掘経費の一部を予算化して7月に発掘調査を実施したものである。調査の成果については本文を参照されたい。

〔猿喰東館跡〕

猿喰東館跡は気仙沼湾に面した低丘陵に立地し、延享 3（1746）年の最知村風土記に阿部太郎左衛門の居館とされている平山城である。平成元年5月、市教育委員会に地権者の小野寺二三夫氏から気仙沼市内の不動産業者を通じて、館跡の一部を宅地に造成し、一画を分譲してその売却資金で自宅を建築したいがどうか、という問い合わせがあった。早速、市教育委員会が現地を確認し、協議書を提出してもらい、県教育委員会および不動産業者・地権者と館跡の保存について協議を重ねた。その結果、地権者は館跡の保存に理解を示し、土地の分譲を断念して自宅のみを建築することで合意し、建物にかかる部分についての発掘調査を実施することになったものである。調査結果は本文に記したとおりであるが、館にかかわる溝跡が検出されたため、基礎工事でこの遺構を破壊しないよう盛土した上で建てること、今後新たな造成は行わないことを条件に自宅建築を認めることとした。なお、市教育委員会では館跡の構造を正確に把握し、併せて今後の遺跡保存に役立てるために館跡の全体図作成費を予算化し、平成2年1

月に測量調査を実施し、1/250 の地形図を作成した。

〔保呂羽館跡〕

保呂羽館跡は戦国時代に登米・本吉・牡鹿・磐井・伊沢・江刺・気仙のいわゆる葛西 7 郡を領した葛西氏の居城跡と考えられている遺跡である。昭和 63 年 10 月にこの地に畜舎を建てて養豚を営んでいる佐々木満氏から畜舎増築の協議書が提出された。何度か協議を重ねた結果、増築予定地について遺構の確認調査を行い、それに基づいて再度保存のための協議を行うことになった。調査は 4 月に実施し、その結果は本文に記したとおりであるが、顕著な遺構は認められなかったため、畜舎の増築はやむを得ないものと判断された。

〔唐木崎貝塚〕

唐木崎貝塚は伊豆沼南岸に突き出た舌状丘陵の先端部に立地する縄文後・晩期の淡水性貝塚である。貝塚の主要部の地形は開田で失われている。昭和 63 年 6 月に地権者の星文郎氏から開田部分に農作業場を建築したいとの協議書が提出され、協議がもたれた。現地踏査の結果、建築予定地の一部は既に削平されているものの、盛土部分の下にはまだ貝層が残存している可能性があったため、工事に先立って発掘調査を実施することになったものである。調査は平成元年 4 月に行い、その結果は本文に記したとおりであるが、盛土下で縄文時代の貝層が認められたものの、盛土が厚く、建築工事によって貝層が破壊される恐れはないことが判明したため、建物の建築はやむを得ないものと判断された。

〔日影貝塚〕

日影貝塚は北上川（追波川）旧河道南岸の舌状台地に立地する縄文前期の滷水性貝塚である。平成元年 5 月に河北地区教育委員会から宅地造成のため貝塚がある台地の裾部が一部掘削を受けてしまったが、貝塚とのかかわりがあるかどうか現地を見て欲しいとの連絡があった。6 月に現地確認を行ったところ、削平部分は貝層が堆積している場所からは離れていたが、縄文前期の遺物を含む層が及んでいることが判明した。そこで地権者高橋千夫氏にその旨を伝え、改めて発掘届を提出してもらい、建設工事に先立ち 6 月に建物にかかる部分の発掘調査を実施したものである。調査の成果については本文を参照されたい。

〔白山遺跡他〕

昭和 59 年 8 月に蔵王町円田地区を対象とした宮城県営圃場整備事業の施行申請公告があり、昭和 60 年 9 月に事業計画が採択された。対象地域内には台遺跡、戸の内脇遺跡、白山遺跡、本宿前遺跡、中組遺跡など数多くの遺跡が存在する。この事業は昭和 60 年度から 6 ヶ年計画で実施されるもので、昭和 63 年 8 月に 63 年度実施分についての協議書が出されたため、現地踏査を実施し、それをもとに協議を行った。その結果、用水路部分については事前調査を実施し、水田面の切盛については用水路部分の調査結果をもとに別途協議することになった。昭和 63

年度実施分の台遺跡・戸の内脇遺跡および白山遺跡の主要水路部分については9月～11月に調査を実施して終了し、白山遺跡の丘陵にかかる部分については日程の関係上調査を次年度に持ち越した。本年度実施分には白山遺跡のほか、多くの遺跡がかかるため、用水路部分の事前調査は初めから次年度に繰り越すこととし、事業にかかる遺跡の範囲を明確にすることに主眼を置いて7月～8月および10月に確認調査を実施した。調査の対象とした遺跡は白山遺跡、本宿前遺跡、中組遺跡、中沢A遺跡、中沢B遺跡、立目場遺跡、屋木戸内遺跡、赤鬼上遺跡の8遺跡である。それぞれの遺跡の範囲が明らかになった8月と9月に再度保存協議を行い、遺跡の範囲外の地域および計画水田高の設計変更で盛土などにより遺構面の保護が可能な地域については工事を施行し、遺構面の保護に問題を残す部分についてはさらに協議していくことになった。調査の成果については本文を参照されたい。

〔大崎八幡神社遺跡〕

田尻町大崎八幡神社遺跡は築館丘陵南端の大崎平野に面した低丘陵上に立地する古代城柵新田柵の推定地とされている遺跡である。現在、丘陵上の平坦面には大崎八幡神社が祀られているが、かつてこの境内から古代の軒瓦が採集されている。平成元年8月に宗教法人大崎八幡神社から社殿改築に伴う協議書が出されたため、その是非を判断するため確認調査を実施することになった。平成元年9月28日～29日に社殿南側の境内2ヶ所にトレンチを設定して計73㎡を調査した結果、表土下10～20㎝ほどですぐ地山に至り、遺構・遺物は発見されなかった。

〔亀岡遺跡〕

亀岡遺跡はなだらかな大松沢丘陵上に立地し、官衙跡の可能性も指摘されている大規模な古代遺跡である。平成元年4月に土地所有者の菊地徳治氏より自宅建築の協議が出された。現地踏査したところ、小規模な面積であり遺構などを破壊しないよう盛土して建てるということであるため、建物部分の確認調査を実施することになったものである。5月16日に調査を行った結果、遺構・遺物とも発見されなかった。

〔松島マリーナ脇遺跡〕

松島マリーナ脇遺跡は松島湾に面した丘陵の麓に立地する古代の土師器・須恵器の散布地である。平成元年5月に地権者の熊谷満氏からすでに造成を終えている宅地に自宅を建築したいとの協議が出された。当該地は遺跡の中心からは離れていたが、念のため6月29日に建物建築部分の遺構の有無の確認調査を行ったものである。調査の結果、遺構・遺物とも発見されなかった。

〔赤井遺跡〕

赤井遺跡は矢本町の北部に東西に延びている砂堆（浜堤）上に立地する大規模な古代官衙跡である。平成元年5月に行った県道・町道の改良事業に伴う発掘調査の際、付近の畑の所有者

である武地栄一氏が畑改良のため天地返しをしていることを知った。掘削が深く、遺構を破壊する恐れがあったため、所有者に発掘届を提出させ、6 月に急遽発掘調査を実施した結果、古代官衙にかかわる材木塀跡や溝跡などが検出されたものである。遺構の詳細については、3 月に刊行される県道・町道の改良事業に伴う発掘調査の報告書に併せて掲載することになっているため、本書では割愛した。

〔野田山遺跡〕

野田山遺跡は名取市西部の野田山丘陵に立地する弥生・古墳時代の遺物散布地である。昭和63年3月に県保健環境部医務課長から県立成人病センターおよび高等看護学校の改築整備事業に伴う協議書が出され、6月に分布調査を行った。その結果、本遺跡は昭和30年代の病院建設でかなり破壊されてはいるものの、旧地形を留める部分にはまだ遺構が残されている可能性があり、確認調査が必要と判断された。今回は丘陵の北側裾部に建設が予定されている高等看護学校の敷地を対象として、平成元年 8 月 1 日～2 日に確認調査を実施したものである。校舎、体育館、グランド予定地の 3 ヶ所にトレンチを設定して調査した結果、スクモ層、灰白色火山灰層などの堆積が認められたが、遺構・遺物は発見されなかった。

〔下札前遺跡〕

下札前遺跡は名取市東部の沼地区を南北に延びる砂堆（浜堤）に立地する土師器の散布地である。平成元年 5 月に県企画部空港整備対策室から仙台空港の滑走路を 3,000㎞ に拡張する整備計画に伴う協議が出された。6 月に現地踏査したところ、遺物の散布が認められず、遺跡かどうかも不明確であったため、遺跡の確認調査を行うことにした。6 月 19 日に最も遺構が存在しそうな場所を選定し、そこを中心に重機を使って広く表土を除去してみたが、遺構・遺物ともに全く発見されず、この場所が遺跡である確証は得られなかった。

〔館南遺跡〕

館南遺跡は亘理町西部の低丘陵上に立地する弥生土器・土師器・須恵器の散布地である。平成元年 4 月に亘理町長から現在建築中の亘理中学校の通学路として、遺跡の南端を通る町道の改良事業を行いたいとの協議がなされた。現地踏査の結果、遺物の散布は希薄であったが、遺構が存在する可能性もあったため、確認調査を実施することにしたものである。7 月 4 日～17 日に調査を行った結果、古代の竪穴住居跡や当初予想していなかった中世の多数の柱穴や井戸跡、土壙などが検出され、改めて事前調査を行う必要が生じたため、一時調査を中止することにした。事前調査は経費事業者負担で 10 月から 11 月にかけて実施したが、日程の関係で東半分だけ終了し、西半分については来年度に持ち越した。したがって、調査の成果も来年度の調査終了を待って報告することとなったため、今回は概要を記すに止めた。

2．国庫補助事業以外の発掘調査等

宮城県教育委員会が平成元年度に実施した国庫補助事業以外の発掘調査および県内市町村が調査主体となった発掘調査に対する調査協力は表２のとおりである。これらのうち、調査によって遺構や遺物が発見された遺跡については、個別に報告書が刊行される予定である。

表２　平成元年度発掘調査一覧（国庫補助以外）

No.	遺　跡　名	所　在　地	開発事業の種別	開発担当部局
1	大年寺山横穴群	仙台市太白区向山	急傾斜地崩落防止工事	仙台農林事務所
2	山王遺跡	多賀城市南宮字八幡	高規格道路建設	東北地建仙台工事事務所
3	上野館跡	志田郡松山町千石字松山	高校改築	教育庁財務課
4	赤井遺跡	桃生郡矢本町赤井字星場	県・町道改良	石巻土木・町建設課
5	小松遺跡	桃生郡矢本町小松字柴	町道改良	町農林課
6	新蜂崎遺跡	柴田郡村田町大字関場字新峯崎	町道建設	町建設課
7	堀の内遺跡	刈田郡蔵王町大字円田字堀の内	幼稚園用地造成	町建設課
8	館山館跡	志田郡田尻町大貫字下山居	町道改良	町農村環境整備課
9	上沼館跡	登米郡中田町上沼字浦沼	町道改良	町建設課
10	寺池館跡	登米郡登米町寺池桜小路	裁判所改築	仙台地方裁判所
11	館崎館跡	牡鹿郡女川町針浜字針浜	鉄塔建設	東北電力
12	出島貝塚	牡鹿郡女川町出島字別当浜	県道建設	石巻土木事務所
13	倉崎貝塚	登米郡迫町新田字倉崎	町道改良	町建設課
14	花山寺跡	栗原郡花山村本沢字御堂	県道改良	築館土木事務所
15	小林遺跡	柴田町大河原町小山田字小林	ゴルフ場造成	一般開発業者
16	稗柄遺跡	柴田郡村田町大字沼田字稗柄	ゴルフ場造成	一般開発業者
17	鍛冶沢遺跡	刈田郡蔵王町大字曲竹字青ノ峯	広域農道建設	大河原土地改良事務所
18	台町古墳群	伊具郡丸森町金山字下片山	阿武隈川築堤	東北地方建設局角田出張所
19	館貝塚	栗原郡若柳町字下畑岡内谷川	町道改良	町建設課
20	日の出山窯跡群	加美郡色麻町四竈字東原	分布状況確認調査	
21	柧木Ａ遺跡	黒川郡大衡村大衡字柧木	県道改良	仙台土木事務所
22	千石城跡	志田郡松山町千石字花館	野外ステージ建設	町産業課
23	西の浜貝塚	宮城郡松島町磯崎字西ノ浜	住宅建設	個人
24	松島アリーナ脇遺跡	宮城郡松島町磯崎字西ノ浜	住宅建設	個人
25	藤田新田遺跡	仙台市若林区荒井字藤田	高規格道路建設	日本道路公団
26	下飯田遺跡	仙台市若林区下飯田	高規格道路建設	日本道路公団
27	高田道路	仙台市若林区日辺字高田	仙台南道路	県道路公社
28	三十三間堂遺跡	亘理郡亘理町逢隈下郡字椿山	分譲宅地造成	一般開発業者
29	官林遺跡	刈田郡蔵王町大字円田字弁天	町道改良	町建設課
30	伊治城跡	栗原郡築館町字城野唐崎・大堀	住宅建設・町道改良　他	個人・町建設課　他
31	玉萩台遺跡	栗原郡築館町照越新田	町道改良	町建設課
32	照越台遺跡	栗原郡築館町字照越台	町道改良	町建設課
33	三輪田遺跡	古川市長岡字三輪田	化女沼ダム放水路	古川土木事務所
34	浜田洞窟遺跡	宮城郡利府町赤沼字井戸尻	遺跡環境整備	個人
35	山苗代遺跡	宮城郡利府町菅谷字山苗代	住宅団地進入路建設	宮城県住宅供給公社
36	山中遺跡	宮城郡利府町森郷字川袋	資材置場造成	一般開発業者
37	稲葉崎Ｂ遺跡	宮城郡利府町加瀬字稲葉崎	県道改良	仙台東土木事務所
38	下札前遺跡	名取市植松下札前	空港拡張	企画部空港整備対策室
39	羽山館跡	白石市白川犬卒都婆字黒森	砕石採取	一般開発業者

田束山寂光寺跡（たつかねさんじゃっこうじ）

目　　次

1　はじめに …… 11
2　層序 …… 12
3　発見された遺構と遺物 …… 16
4　考察 …… 26
5　まとめと今後の課題 …… 28

調 査 要 項

遺 跡 名：田束山寂光寺跡（宮城県遺跡地名表登載番号 64007）
遺跡記号：ＫＰ
所 在 地：宮城県本吉郡歌津町字樋の口
発掘面積：約 200 ㎡
調査期間：平成元年 5 月 8 日～31 日
調査主体：宮城県教育委員会・歌津町教育委員会
調査担当：宮城県教育委員会
調 査 員：進藤秋輝・白鳥良一・真山悟・佐藤則之・赤澤靖章・菅原弘樹・近藤和夫
木皿直幸

田東山寂光寺跡（たつかねさんじゃっこうじ）

1　はじめに

寂光寺跡は、本吉郡歌津町字樋の口に所在する。

遺跡が立地する田東山は標高 512m の山で、古くから修験の山として知られる霊峰である。中腹には東西の「行場」があり、とくに東の行場には穴瀧・蜘蛛瀧の嶮があって荒行の条件をそろえている（歌津町史編纂委員会 1986）。田東山の歴史については、『奥羽観蹟聞老志』や『封内風土記』（1772（明和 9）年）などによれば平安時代末に平泉の藤原秀衡によって大規模な寺院が造営され、中世には葛西氏によって再興されたとされている。とくに秀衡は、山頂に羽黒山清水寺、半腹に田東山寂光寺、北嶺に幌羽山金峰寺の七堂伽藍をはじめ、新たに七十余坊を造営したと伝えられている。なお、これらの記載についてはいずれも由来不詳で不明な点が多

第 1 図　遺跡の位置（1/100,000）

いが、山頂には平安時代末頃のものと推定される史跡田束山経塚群があることから、少なくともこの頃には霊山としてこの地方の人々の信仰をあつめていたものと思われる。

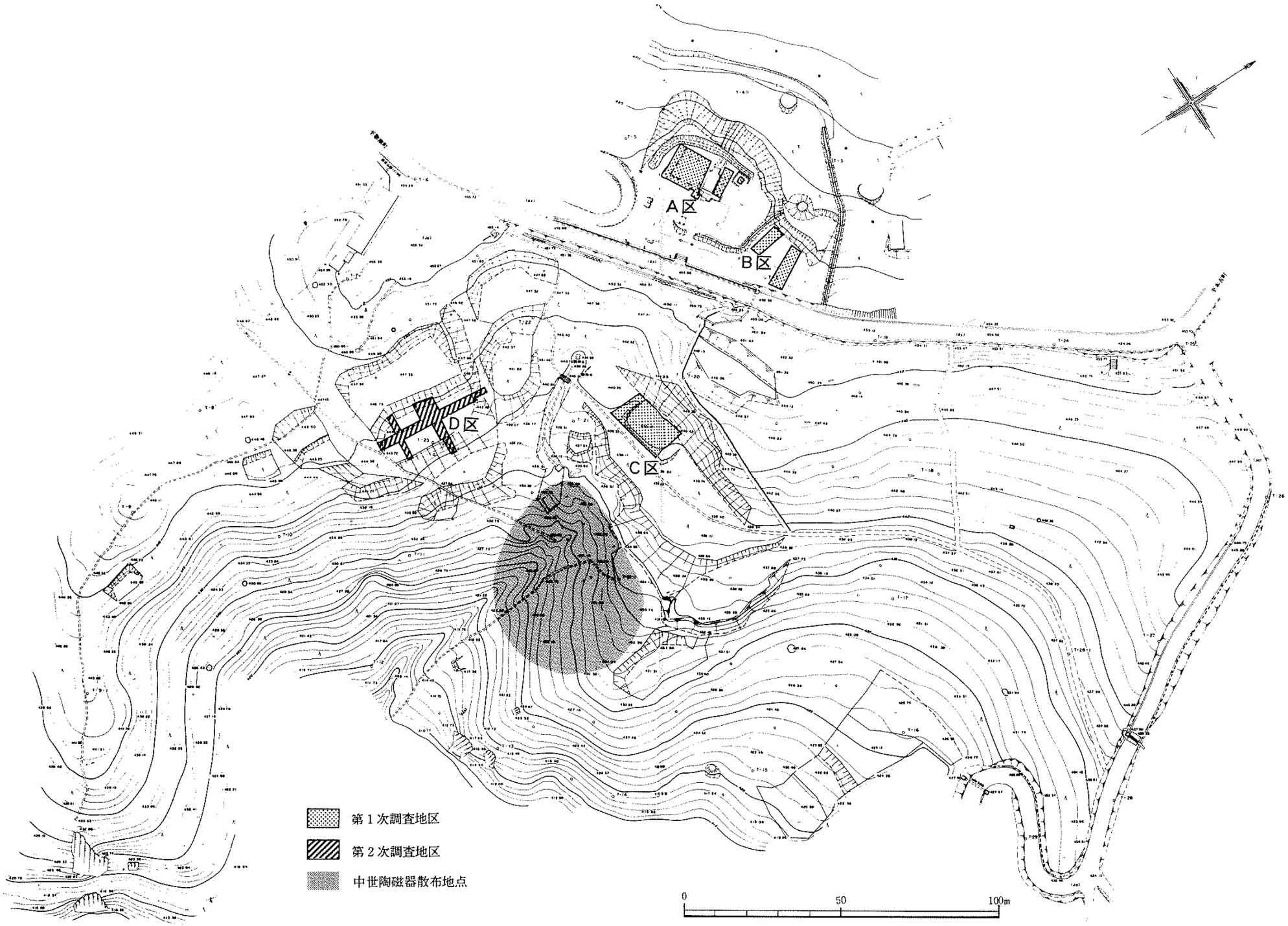
寂光寺については、山頂より 50m 程下がった山の中腹付近の、現在計仙麻大島神社が建っている場所がその跡と言われている。拝殿は堂や坊の跡とみられる平坦面上に立地し、境内には礎石が多数残されている。また、その下の斜面上には大小の平坦面が南向きと東向きに形成されており、これらが沢を囲むように「L」字形に並んでいることが明らかになっている。一方、葛西氏が坊舎四十余宇を再興した後に、さらに再興されたという記録はなく、「田束根山由来記（出典不明）」（1708（宝永 5）年）や『封内風土記』、『細浦文書』などによるとこの頃には既に荒廃していることから、上記の平坦面や礎石が文献にみられる寺院や坊の跡である可能性が想定された。

昨年の第 1 次調査は、これらの年代や性格、構造などを明らかにするために、神社境内（A・B区）とその下の斜面上に点在する平坦面のうちの一つ（C区）を対象として行った。その結果、A区では、礎石建物跡 2 棟および基壇、溝 1 条、B区では整地地業と溝 1 条、C区では礎石建物跡 1 棟および基壇が検出された。A・C区で検出された建物跡はいずれも近世以降のものであるが、基壇の堆積状況と大きさや方向等からそれ以前の寂光寺跡に関わる可能性のある建物の存在も想定された。また、B区の整地地業が中世のものであることやC区南側下方の沢周辺から中世陶磁器等が採集されたことからも、平坦面のいくつかは少なくとも中世には存在していたと推定され、田束山の歴史が文献にみられる平安時代末～中世まで遡れる可能性が出てきた（菅原 1989）。

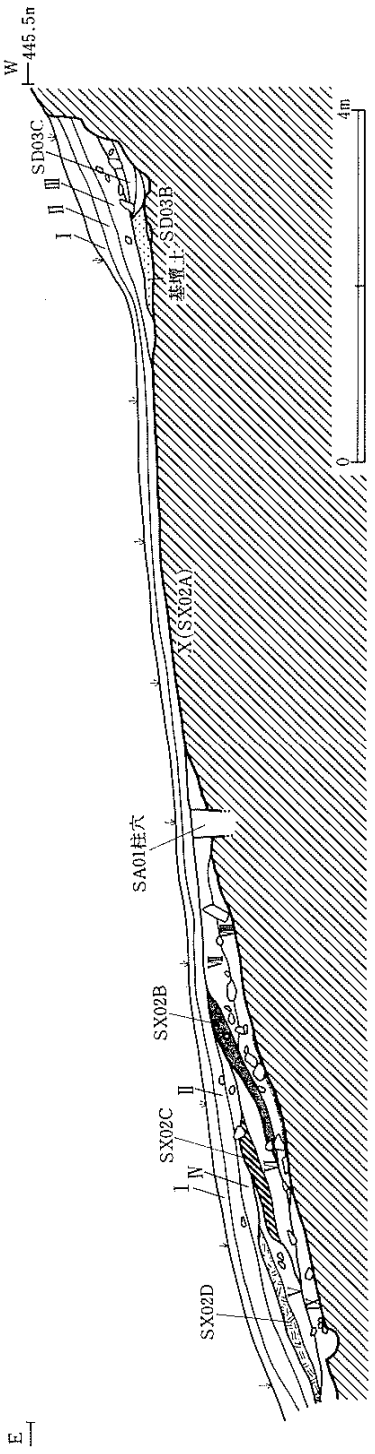
そこで本年度は、これらの成果を踏まえ、平坦面上の遺構のあり方や年代、さらにはその性格等を明らかにするために、中世陶磁器が多く採集されている沢の上方に点在する平坦面のうちの一つ（D区）を対象として調査を行った。この平坦面は、寂光寺跡とされている現在の計仙麻大島神社より南に 15m 程下った標高約 445m の東向きの斜面上にある（第 2 図）。調査は、平坦面の中央に幅約 3m のトレンチを長軸（南北）方向に設け、遺構の検出状況に合わせて東西に拡張して行った。なお、調査に際しては、平坦面の長軸方向を基準にして発掘基準線を設定した。その際の原点の国家座標はX＝－139179.611、Y＝55497.063 で、基準線は真北に対して 3°01′55″東へ偏している。

2 層序

D区の平坦面は、斜面の切り盛りによって作り出されているが、西半部が斜面の削り出し、東半部が自然堆積土および盛土整地によって形成されている。調査区内の層は 9 枚の自然堆積層と 3 枚の盛土整地層（以下、整地層と記す）からなり、整地層はいずれも間に自然堆積層を



第２図　田束山寂光寺跡地形図



第３図　調査区内の層序

挟んで形成されている。以下、各層の分布や特徴について述べる。ただし、これらは部分的な調査と断面の観察（第３図）に基づくものであり、各層の面的な広がりについては必ずしも捉えられていない。

第Ⅰ層：表土。調査区全体を覆う黒色土（10ＹＲ2/1）である。

第Ⅱ層：第Ⅰ層と同様に調査区全体を覆うにぶい黄褐色土（10ＹＲ4/3）の自然堆積層で、地山粒および炭化物を含む。平坦面奥壁斜面で第Ⅲ層を、中央付近で地山面を、東半部で第Ⅶ層およびＳＸ02Ｂ整地層を覆い、東斜面では第Ⅳ層および地山面を覆う。ＳＡ01・02 塀跡、小柱穴群、ＳＸ03 鏡埋納遺構など今回検出した遺構群は、すべてこれによって覆われることから塀跡などが廃絶した後に堆積したものと思われる。中世陶器、かわらけ、石製品等が出土した。

第Ⅲ層：奥壁斜面から平坦面にかけて分布する褐色土（10ＹＲ4/4）の自然堆積層で、基壇土および地山面を覆う。地山粒、地山礫、炭化物を含む。鏡が出土した。

第Ⅳ層：3 枚の整地層および間層となる第Ⅴ・Ⅵ層を覆うにぶい黄褐色土（10ＹＲ4/3）の自然堆積層で、平坦面の東端に分布する。地山粒、地山礫、炭化物を含む。遺物は出土していない。

ＳＸ02Ｄ整地層：地山土を主体として、地山粒、地山礫および炭化物を含むにぶい黄褐色土（10ＹＲ4/3）の整地層である。平坦面の東斜面に沿って形成され、第Ⅴ層を覆い、第Ⅳ層によって覆われる。東西約 2.2m の範囲に分布し、層厚は最も厚い部分で 15 ㎝程ある。遺物は出土していない。

第Ⅴ層：ＳＸ02Ｃ整地層とＳＸ02Ｄ整地層との間に挟まれて、平坦面の東斜面に分布する褐色土（7.5ＹＲ4/4）の自然堆積層である。地山粒、地山礫、炭化

物を含む。遺物は出土していない。

ＳＸ02Ｃ整地層：地山土を主体として、地山粒、地山礫および炭化物を含む褐色土（7.5ＹＲ4/3）の整地層である。平坦面の東斜面に沿って形成され、第Ⅵ層を覆い、第Ⅳ・Ⅴ層によって覆われる。東西約 1.5m の範囲に分布し、層厚は最も厚い部分で 15 ㎝程ある。遺物は出土していない。

第Ⅵ層：ＳＸ02Ｂ整地層とＳＸ02Ｃ整地層との間に挟まれて、平坦面の東斜面に分布するにぶい黄褐色土（10ＹＲ5/3）の自然堆積層である。地山粒、地山礫、炭化物を含む。中世陶器、漆器等が出土した。

ＳＸ02Ｂ整地層：地山土を主体として、地山粒、地山礫および炭化物を含むにぶい黄褐色土（10ＹＲ5/4）の整地層である。平坦面の東斜面に沿って形成され、第Ⅶ・Ⅷ層を覆い、第Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ層によって覆われる。東西約 2.0m の範囲に分布し、層厚は最も厚い部分で 20 ㎝程ある。遺物は出土していない。

第Ⅶ層：平坦面の東半部から斜面にかけて分布するにぶい黄褐色土（10ＹＲ4/3）の自然堆積層で、第Ⅷ・Ⅸ層を覆い、第Ⅱ層およびＳＸ02Ｂ整地層によって覆われる。地山粒、地山礫、炭化物を含む。この上面でＳＡ01・02 塀跡、ＳＸ03 鏡埋納遺構を検出した。瓦器質土器、刀子等が出土した。

第Ⅷ層：平坦面の東斜面に分布する暗オリーブ褐色土（2.5Ｙ3/3）の自然堆積層で、第Ⅸ層を覆い、ＳＸ02Ｂ整地層によって覆われる。地山粒、地山礫を含み、炭化物、焼土を多く混じえる。中世陶器、かわらけ、鉄釘、石製品等が出土した。

第Ⅸ層：平坦面の東斜面に分布する褐色土（7.5ＹＲ4/4）の自然堆積層で、地山面を覆い、第Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層およびＳＸ02Ｄ整地層によって覆われる。地山ブロックを多く混じえ、地山礫、炭化物、焼土粒を含む。遺物は出土していない。

第Ｘ層：ＳＸ02Ａ切り出し整地による地山である。

3　発見された遺構と遺物

今回の調査で発見した遺構には、整地地業 4、塀跡 8 以上、小柱穴群、基壇 1、溝跡 5、鏡埋納遺構 1、土壙 3 などがある（第 4 図）。また、これらの遺構や整地層、自然堆積層からは、中世陶器、かわらけ、瓦器質土器、漆器、鏡、鉄製品、石製品などが出土した。

【ＳＸ02 整地地業】斜面を切り盛りして、東西約 14m、南北約 33m 程の平坦面を作り出した地業である。地業には、地山切り出しによる整地と 3 枚の盛土整地があり、いずれも自然堆積土が間層となることから 4 時期あることがわかる（第 3 図）。

ＳＸ02Ａは、斜面の切り出しによる造成で東西約 7m、南北約 33m 程の平坦面を作り出してい

第４図　Ｄ区平坦面遺構配置図

る。ＳＸ02Ｂ以降の３時期にわたる地業は、間に自然堆積土を挟んで東側の低い部分に盛土し平坦な面を形成したもので、ＳＸ02Ｂは約 3.0m、ＳＸ02Ｃ・Ｄはそれぞれ約 0.6m ずつ平坦面の規模を東側に拡張している。また、奥壁際で斜面に沿って溝（ＳＤ03）が検出された。これには重複がみられ、新しいもの程西側にずれてめぐっていることから、平坦面の西側についてもＳＸ02Ｂ以降の地業に伴って、奥壁斜面を削り出し規模を広げていたことが予想される。ただし、南北方向については平坦面の規模を拡張するような割り出しおよび盛土整地は認められなかった。

なお、部分的な調査のため遺構との関係については捉えられていないが、整地層、自然堆積層とも炭や焼土を含んでいることから、この場所が何度か火災に遭っていることが窺える。

【塀跡】平坦面の長軸方向に平行して延びる一本柱列による塀跡が８条以上、第Ⅶ層上面および地山面で検出された。

ＳＡ01 塀跡は、平坦面のほぼ中央から南に延びる南北５間の一本柱列による塀跡で、同位置で６回以上建て替えられている。柱間は相互に若干のばらつきがあるものの 2.1～2.5m 間隔で総長が 11～12m あり、方向はＮ－7～12°－Ｅで建て替えによって約５°ずれる。柱穴は径 40～70 ㎝の円形もしくは一辺が 30～60 ㎝の方形であり、柱痕跡は径 10～15 ㎝程の円形である。埋土中より、元豊通宝（第８図７）と鉄釘が出土している。

ＳＡ02 塀跡は、平坦面のほぼ中央から北に延びる南北４間と推定される一本柱列による塀跡である。調査区の端にかかるため詳しい重複関係については不明だが、柱穴に重複が認められることから、ＳＡ01 塀跡同様、数回にわたって建て替えがあったものと考えられる。柱間は 2.5～2.7m 間隔で総長が 10.6m あり、方向はＮ－4°－Ｅである。柱穴は 30～50 ㎝の方形であり、柱痕跡は径 10～15 ㎝程の円形である。

なお、ＳＡ01 塀跡とＳＡ02 塀跡はほぼ直線的に並ぶことから一対の塀跡と考えられ、両塀跡の間は出入口であったと推定される。

【小柱穴群】ＳＡ01・02 塀跡の西側で多数の小柱穴が、後述する基壇下の地山面で検出された。これらについては、部分的にしか検出していないため組合せなどが不明であるが、建物跡もしくは塀跡と考えられる。また、これらは相互に重複していることから、数時期におよぶものとみられる。柱穴は一辺が 20～50 ㎝の方形であり、柱痕跡は径 10～15 ㎝程の円形である。

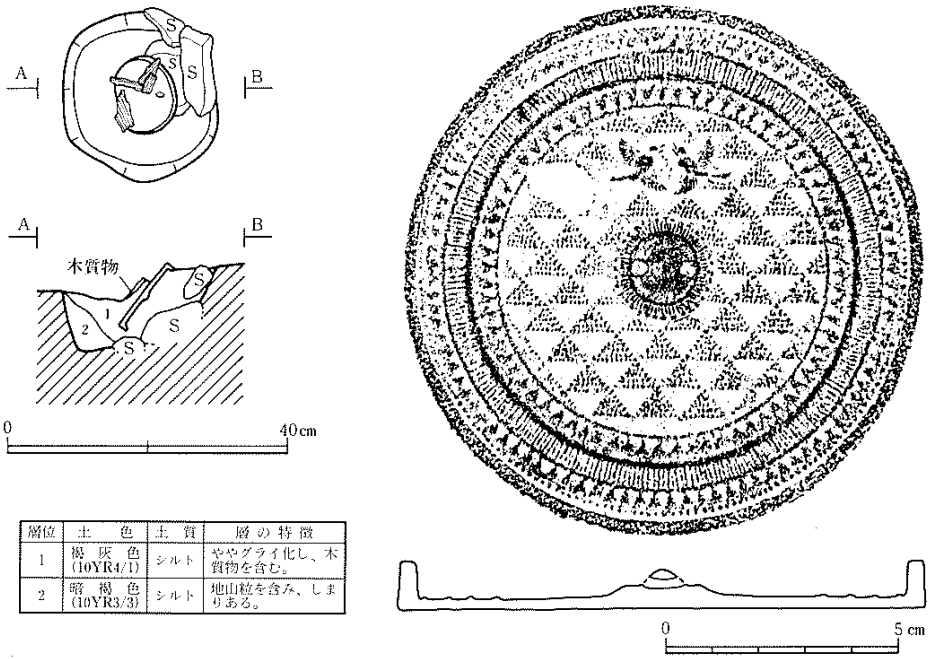
【基壇】平坦面のほぼ中央の奥まった部分で確認された。地山土を主体とした地山礫・炭化物を含むにぶい黄褐色土（10ＹＲ5/4）で、地山の上に直接盛土し壇を形成している。残存状態が悪く、ごく一部しか残っていないが、この上に何らかの建物があったと考えられる。

【ＳＤ03 溝跡】平坦面の奥壁沿いにめぐる溝で、２度作り替えられている。最も新しいＳＤ03Ｃ溝跡は基壇土を切り、古い２期(ＳＤ03Ａ・Ｂ溝跡)は前述の小柱穴に切られ、さらに基壇土によって覆われる。規模はＳＤ03Ｃ溝跡が上幅 40～60 ㎝、下幅 15～40 ㎝、深さ 30 ㎝で、ＳＤ03Ｂ

溝跡が上幅 20～30 ㎝、下幅 10～20 ㎝、深さ 10 ㎝程であり、ＳＤ03Ａ溝跡についてはＳＤ03Ｂ・Ｃ溝跡によって壊されているため不明である。埋土は地山粒・礫・炭化物を含む褐色や黄褐色などの自然堆積土である。これらは平坦面全体に対する排水溝と考えられ、その性格は踏襲されていたものと考えられる。

【ＳＸ03 鏡埋納遺構】平坦面のほぼ中央、塀跡出入口前面において、第Ⅶ層上面で検出された。鏡は径 20 ㎝、深さ 10 ㎝程のピットに対して斜めの状態で出土した（第 5 図）。鏡の表面には板や木質が付着しており、本来は木製の箱に入れられて埋納されたものと思われる。埋土は 2 層からなり、第 1 層は上記の炭化物を含むややグライ化した褐灰色土で、第 2 層は地山粒を含む暗褐色土である。出土した鏡は、径 11.5 ㎝、厚さ 0.2 ㎝、重量 180g で、高さ 1.0 ㎝の直角式縁をもつ三鱗地双鳥鏡である。鏡背の文様は二重圏によって区切られ、外区には鋸歯文帯と櫛歯文帯をめぐらし、内区には三つ鱗を地文に接嘴した双鳥（双雀？）を配している。鈕は、花形座鈕で菊を模している（菊花座鈕）。なお、内区左上方には鏡面から鏡背に貫通する穴が穿たれており、懸垂のための穴と推測される。鏡面に毛彫りや墨書等の痕跡は認められない。

【土壙】平坦面北斜面の自然堆積層上面で 2 基検出されたが、部分的に検出したにとどまり全体の規模等については不明である。ただし、ＳＫ02 土壙は埋土に整地層が間層として入ることから、ある段階で意図的に埋められた可能性がある。埋土からは瓦器質土器の破片が出土している（第 6 図 15）。



層位	土色	土質	層の特徴
1	褐灰色 (10YR4/1)	シルト	ややグライ化し、木質物を含む。
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒を含み、しまりある。

第 5 図　SX03 鏡埋納遺構と出土鏡

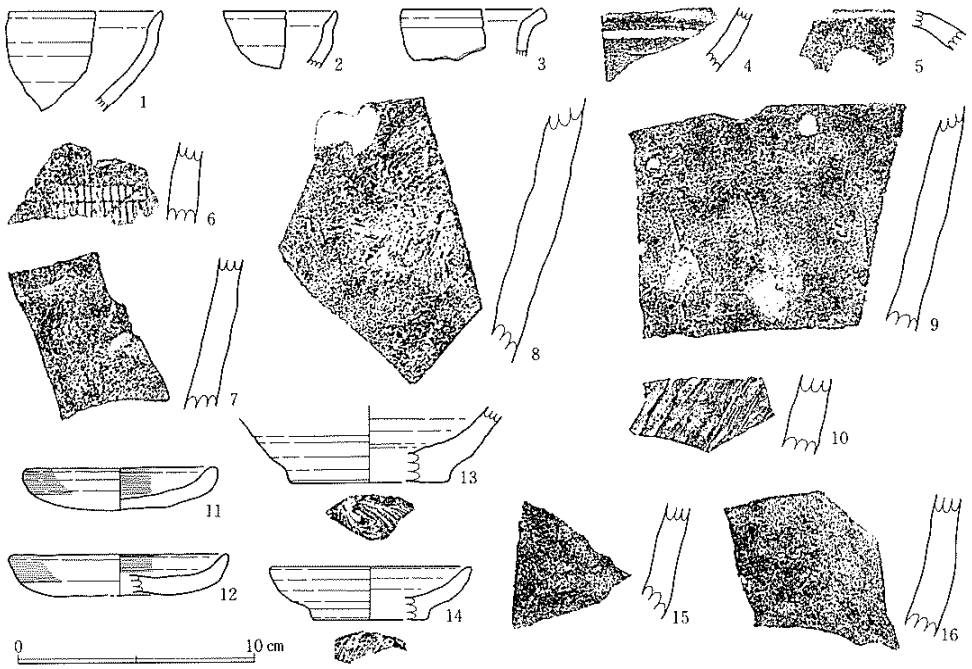
このほか、東斜面において断割り調査を行った際に、地山面でＳＤ04・05 溝跡、ＳＫ03 土壙および小柱穴が確認された。これらは部分的であり詳細は不明であるが、第Ⅷ層および第Ⅸ層によって覆われていることから、平坦面が造成された最も古い段階に関わる施設と考えられる。

整地層および自然堆積層出土の遺物

整地層や自然堆積土中から中世陶器、かわらけ、瓦器質土器、漆器、鏡、古銭、鉄製品、石製品などが発見された。

中世陶器は、いずれも破片で全体の形態が推定できるものはないが、中国産のものかと思われる天目茶碗、瀬戸産の瓶子・天目茶碗・深皿・小皿、常滑産の大甕などがある（第６図）。

かわらけには、手づくねのもの（第６図11・12）とロクロ調整（同13・14）のものがある。いずれも胎土に粗い砂粒を含む。前者は平底で丸く立ち上がる小皿で、胎土には砂粒を多量に含む。色調は内外面とも浅黄橙色（7.5ＹR8/3）ないし淡橙色（5ＹR8/4）で、焼きむらがあるなど概して雑な焼成であり、遺存状況も悪い。これに対して後者はロクロ調整で、体部が急激に



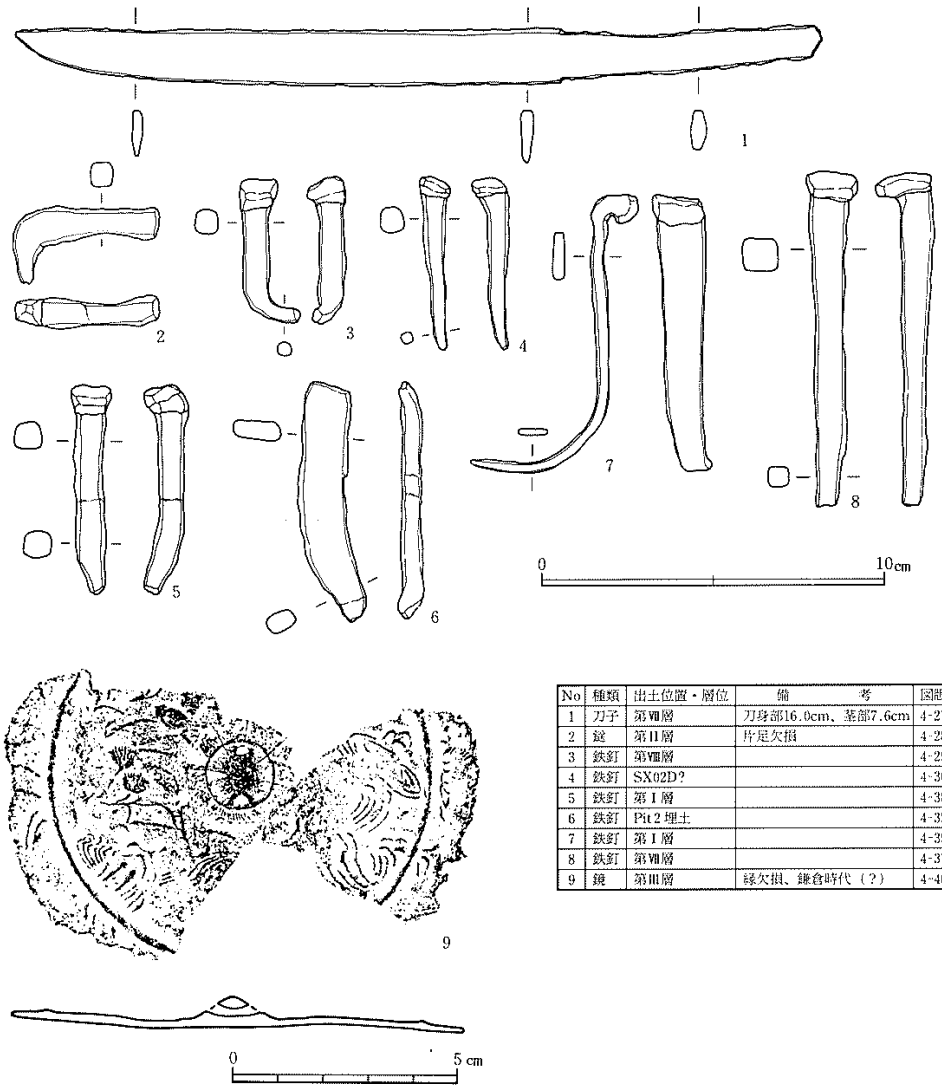
No	種別・器形	出土位置・層位	備　　考	図版	No	種別・器形	出土位置・層位	備　　考	図版
1	施釉陶器・天目茶碗	第Ⅵ層	瀬戸産；口径約11cm	3-2	9	無釉陶器・大甕	第Ⅵ層	産地不明；体部破片	3-10
2	施釉陶器・天目茶碗	第Ⅱ層	中国産？	3-1	10	無釉陶器・大甕	沢表採	須恵器系・産地不明；体部破片	3-13
3	施釉陶器・小皿？	第Ⅷ層	瀬戸産；口径約12.5cm	3-3	11	かわらけ・小皿	第Ⅱ層	手づくね；口径8.2cm、器高1.8cm	3-17
4	施釉陶器・深皿	第Ⅵ層？	瀬戸産；体部破片	3-8	12	かわらけ・小皿	第Ⅷ層	手づくね；口径9.4cm、器高1.8cm	3-16
5	施釉陶器・瓶子	第Ⅱ層	瀬戸もしくは美濃産；肩部破片	3-4	13	かわらけ・坏	第Ⅰ層	ロクロ調整；底径約6.6cm	3-20
6	無釉陶器・大甕	沢採集	常滑産；体部破片	3-12	14	かわらけ・坏	第Ⅰ層	ロクロ調整；口径約8.5cm、底径約4.8cm、器高2.3cm	3-19
7	無釉陶器・大甕	第Ⅵ層？	常滑産；体部破片	3-11	15	瓦器質土器・器形不明	SK02埋土	内外面黒色化、内面に指頭による押さえ痕あり。	3-14
8	無釉陶器・大甕	第Ⅰ層	産地不明；体部破片	3-9	16	瓦器質土器・器形不明	Pit 11埋土	内外面黒色化、内面に指頭による押さえ痕あり。	3-15

第６図　中世陶磁器・かわらけ・瓦器質土器

立ち上がる坏である。緻密な胎土でしっかり焼き上げており、遺存状況も比較的よい。色調は内面がにぶい橙色（7.5ＹR7/3）で、外面が灰黄褐色（10ＹR4/2）である。

瓦器質土器は、胎土に粗い砂を含み、摩滅が著しいが内外面に黒色化の痕跡を残す。また、内面には指頭による押さえ痕が認められる。ただし、破片資料のため器種・形態については不明である。

漆器は、第Ⅵ層から出土した。漆の部分のみが残存するもので器形等については不明であるが、内面には朱漆（写真図版３−22ａ）、外面には黒漆（同 22ｂ）が塗られている。



No	種類	出土位置・層位	備　　考	図版
1	刀子	第Ⅶ層	刀身部16.0cm、茎部7.6cm	4-27
2	鎹	第Ⅱ層	片足欠損	4-28
3	鉄釘	第Ⅶ層		4-29
4	鉄釘	SX02D?		4-30
5	鉄釘	第Ⅰ層		4-38
6	鉄釘	Pit2 埋土		4-32
7	鉄釘	第Ⅰ層		4-35
8	鉄釘	第Ⅶ層		4-37
9	鏡	第Ⅲ層	縁欠損、鎌倉時代（?）	4-40

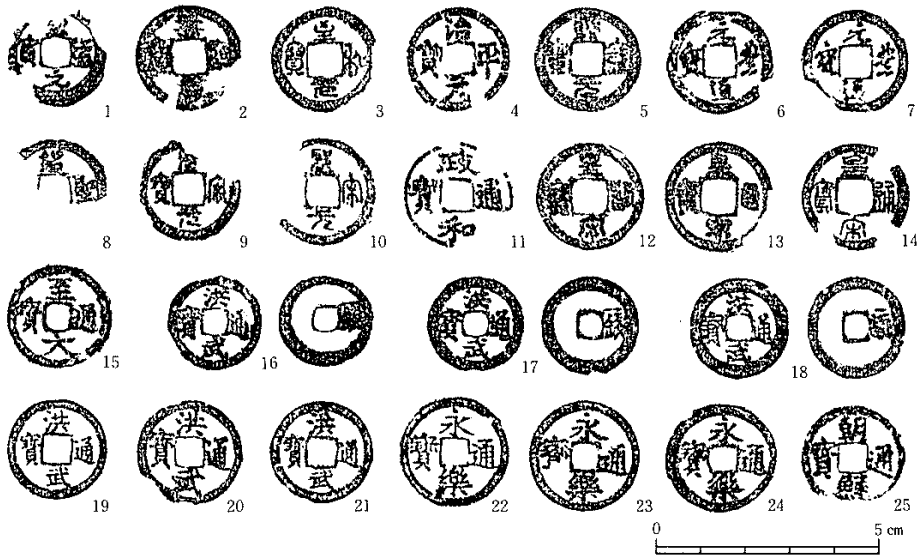
第７図　鉄製品・鏡

鏡は、破損が著しく縁は欠損している。残存する径は10.5㎝、厚さは0.15㎝程で、鈕は菊花座鈕である。鏡背の文様については摩滅も著しく不明な点が多いが、細線による単圏で区切られ、鏡背全体に草花と鳥と流水？を配している（第7図9）。こうした写実的な要素が濃く、かつ界圏にとらわれない文様構成は鎌倉時代のものに多くみられる特徴である（中野1969）。なお、縁については経筒の底などに転用するために意図的に取り去られた可能性もある。

鉄製品には、刀子、鏃、鉄釘がある（第7図）。刀子は刀身部が平棟・平造で、両関である。目釘穴はない。なお、この他に鉄滓（写真図版 4—39）が自然堆積層より出土し、また沢周辺でも採集されていることから、付近で鍛冶が行われていた可能性もある。

古銭には、治平元宝・元豊通宝・聖宋元宝・皇宋通宝・洪武通宝・永楽通宝などがあり、量的には洪武通宝が多く出土している（第1表）。

石製品は、いずれも板状の粘板岩を素材にし、上下端を除く3〜4面に擦痕が認められる。擦痕は側辺においてとくに顕著で、平坦な面を形成している。背・腹面は概して自然面を多く残しているが、部分的に節理に沿った剥離がなされ、擦痕はこれによって切られている。用途は不明だが、付近にはない石材であり何かの未製品と思われる。可能性の一つとしては、第9図については塼・硯、第10図については板碑などが考えられる。

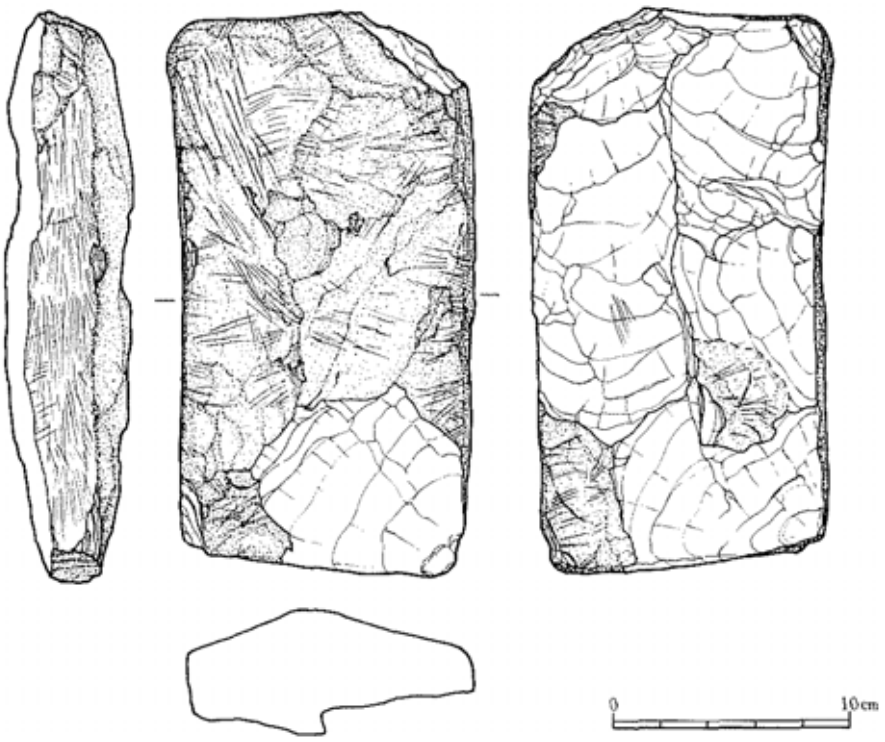


No	貨幣名	出土位置・層位	備考	図版
1	至道元宝	第Ⅵ層		4-1
2	祥符通宝	第Ⅱ層		4-2
3	至和元宝	第Ⅵ層		4-3
4	治平元宝	第Ⅵ層？		4-4
5	熙寧元宝	第Ⅵ層？		4-5
6	元豊通宝	第Ⅰ層		4-7
7	元豊通宝	Pit 3埋土	SA01住穴	4-6
8	紹聖元宝	第Ⅱ層		4-8
9	聖宋元宝	第Ⅱ層		4-10
10	聖宋元宝	第Ⅵ層		4-9
11	政和通宝	第Ⅵ層？		4-11
12	皇宋通宝	第Ⅱ層		4-14
13	皇宋通宝	第Ⅲ層		4-12
14	皇宋通宝	SX02C？		4-13
15	至大通宝	第Ⅰ層		4-15
16	洪武通宝	第Ⅰ層	背右に 二銭	4-16
17	洪武通宝	第Ⅱ層	背右に 二銭	
18	洪武通宝	第Ⅱ層	背右に 二銭	4-17
19	洪武通宝	第Ⅰ層		4-18
20	洪武通宝	第Ⅱ層		4-21
21	洪武通宝	第Ⅳ層		4-19
22	永楽通宝	第Ⅰ層		4-24
23	永楽通宝	第Ⅱ層		4-22
24	永楽通宝	第Ⅱ層		4-23
25	朝鮮通宝	第Ⅱ層		4-26

第8図　古銭

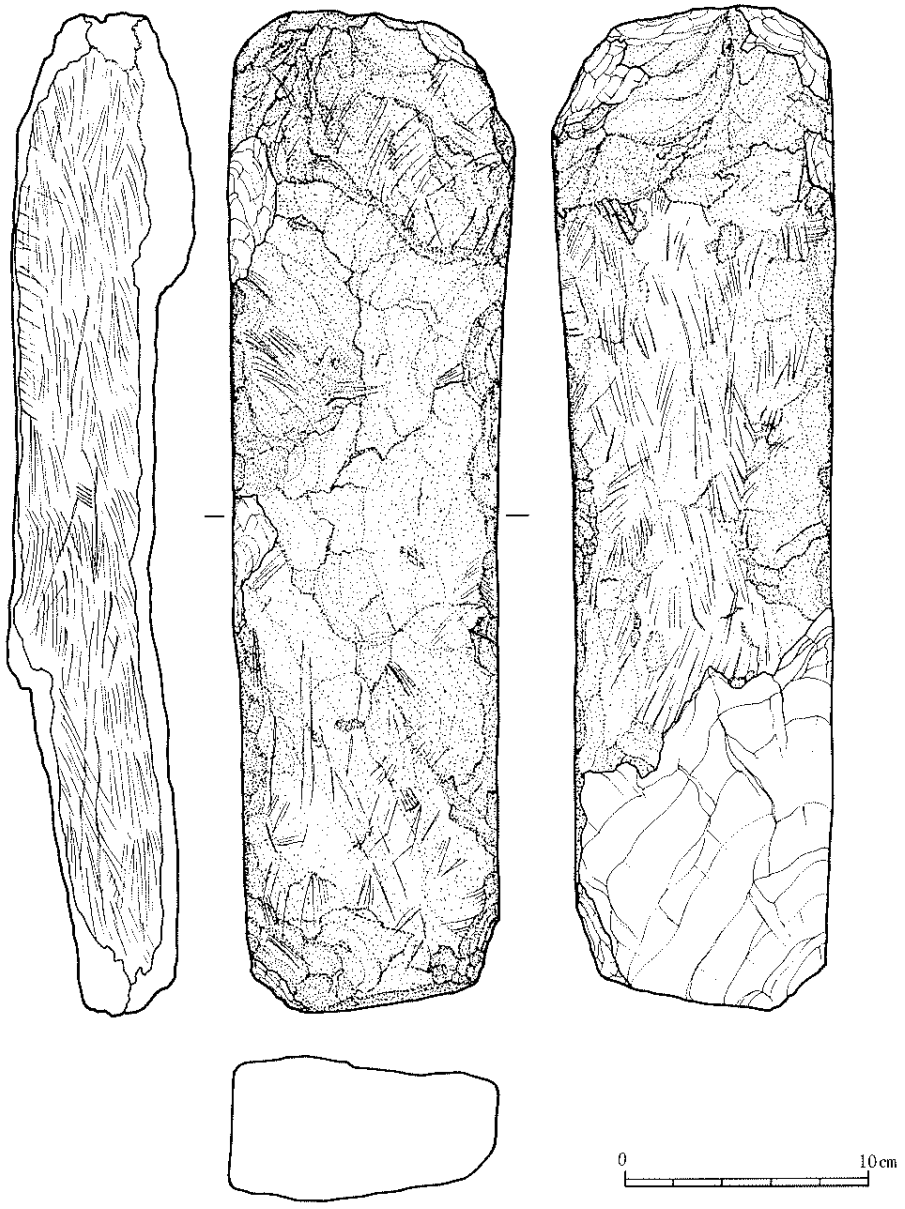
第1表　古銭集計表

貨幣名	初鋳年	第I層	第II層	第III層	第IV層	SX02C	第VI層	pit3	pit5	pit7	pit12	計
至道元宝	995～7						1					1
祥符通宝	1008		1									1
至和元宝	1055						1					1
治平元宝	1064～67						2					2
熙寧元宝	1068						1					1
元豊通宝	1078	1	1					1				3
紹聖元宝	1094		1									1
聖宋元宝	1101		1				1					2
政和通宝	1111						1					1
皇宋通宝	1253～59		1	1		3						5
至大通宝	1309～	1										1
洪武通宝	1368～98	4	11		1							16
永楽通宝	1408	1	3									4
朝鮮通宝	1415		1									1
不明銅銭		2	9			5			1	1	1	19
計		9	29	1	1	8	7	1	1	1	1	59



No	種別	出土層位	備考	図版
1	不明	第II層	長さ24.0cm、幅12.2cm、重量2.2kg 背面・左側辺の擦痕が顕著。背面に粗い擦痕が目立つ。腹面は節理による剥離。	4-41

第9図　石製品（1）



No	種類	出土層位	備考	図版
1	不明	第Ⅷ層	長さ41.0cm、幅11.8cm、重量5.2kg; 両側辺の擦痕が顕著。腹面に粗い擦痕が目立つ。腹面は節理による剥離。	4-42

第10図　石製品（２）

沢採集の遺物

平坦面東下斜面の沢周辺において、中世陶器および鉄滓が採集された（第６図）。中世陶器はいずれも大甕の破片で、６は常滑産、10は産地不明だが須恵器系の中世陶器である。

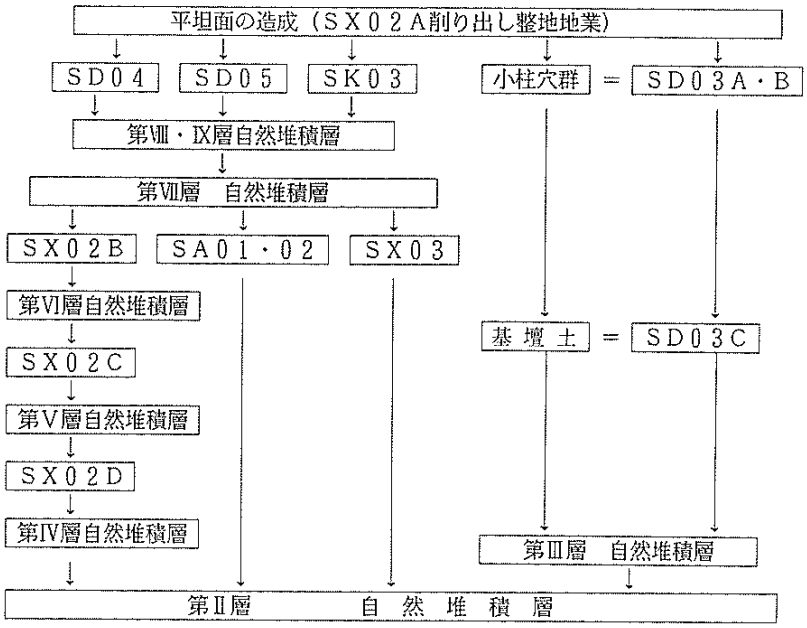
4 考察

＜平坦面について＞

平坦面は、斜面の地山切り出しによる造成（ＳＸ02Ａ整地地業）とその後の３時期におよぶ盛土整地（ＳＸ02Ｂ～Ｄ整地地業）の計４時期にわたる整地地業によって形成されている。ＳＸ02Ｂ以降の盛土整地は第Ⅶ層堆積後に行われ、ＳＸ02Ｄは第Ⅱ層によって覆われている。これらは、いずれも自然堆積土を間に挟んで斜面のより低い方に向かって形成されており、相互に時間差をもちながら、段階的に平坦面の規模を広げていっている様子が窺える。

＜平坦面上の施設について＞

部分的な調査にとどまっており不明な点が多いが、大まかには平坦面上を区画する塀跡とその内側に存在する建物跡によって構成される。塀跡は、平坦面のほぼ中央を長軸方向に延びる一対の一本柱列からなり、ＳＡ01 塀跡についてみれば、ほぼ同位置・同規模で７回以上の変遷をもつ。いずれも第Ⅶ層および地山面上で検出されており、上記の盛土整地とは直接的な重複関係をもたないが、これらは“第Ⅶ層堆積以降、第Ⅱ層堆積以前”というＳＸ02Ｂ～Ｄ整地地業と同じ時間幅の中で捉えられる。このことから、平坦面全体としてはＳＸ02Ｂ以降３時期におよぶ整地地業に並行して、７ 時期以上の遺構の変遷があったものと考えられる。一方建物跡は、重複する小柱穴群とこれを覆う基壇土の存在によって想定された。これらはいずれも地山面上で



第11図　遺構変遷図

検出され、第Ⅱ層によって覆われている。建物跡の具体的な規模や性格、整地地業や塀跡との関係等については不明であるが、上記の塀跡はこれらの建物跡の区画施設と考えられることから、建物跡についても掘立柱建物とこれに後続する基壇上に建てられた礎石建物とによって数期にわたる変遷があったものと推定される。なお、平坦面の奥壁沿いにめぐる溝跡は、基壇土との重複関係より、最も新しい溝（ＳＤ03Ａ）が礎石建物跡、それ以前の古い２期（ＳＤ03Ａ・Ｂ）が掘立柱建物跡に伴うものである（第 11 図）。

以上のことから、平坦面上には少なくとも第Ⅶ層が堆積して以降、廃絶するまでの間に数期にわたって塀および建物が存在していたことが明らかになった。また、建物についてはその規模など不明な点が多いが、塀についてはほぼ同位置・同規模で建て替えられていることから、平坦面上の施設の配置や性格は長期にわたって踏襲されていたものと考えられる。ただし、これらの施設の性格については建物の規模や構造等が不明であるため、明らかにすることはできなかった。

なお、これらの他に鏡を埋納したピット（ＳＸ03 鏡埋納遺構）が検出された。鏡には、懸垂のためと考えられる穴が穿たれていることから、いずれかの場所で御神体あるいは御神宝など信仰の対象として懸垂奉納されていたものを地中に埋納した可能性が高い。さらに、これは他の遺構群と同様に第Ⅶ層上面で、しかも平坦面のほぼ中央、出入口正面において検出されていることから、盛土整地や施設の構築・建て替えに伴う鎮壇的性格のものとも考えられる。鏡の年代については、縁が高く全体につくりが重厚であることや二重圏によって区切られていること、また外区に幾何学的な圏帯をめぐらすといった漢式鏡にみられる特徴を有する（＝擬漢式鏡）ことなどから、室町時代でも後期以降のものと考えられる（中野 1969）（註）。

（註）法隆寺西円堂の奉納物（黒川古文化研究所編 1951）および『東京国立博物館図版目録―和鏡篇』（1969）の中に類似するものがある。

＜年代について＞

今回発見された遺物は断片的であり、上記の遺構群の変遷に対応するような具体的な年代を指し示す資料はないが、平坦面全体についてみれば天目茶碗や常滑産の中世陶器などの特徴から大きくは鎌倉～室町時代に位置付けられる（藤澤 1985）。また、古銭についても北宋銭以降の渡来銭のみで構成されており同様の年代が与えられるが、江戸時代以降のものが見つかっていないことから、平坦面上の施設は少なくともこの頃には廃絶していたものと考えられる。これらのことから、平坦面は鎌倉～室町時代、すなわち葛西氏がこの土地を治めていた頃に営まれたものであると考えられる。

5　まとめと今後の課題

① 調査の対象となった平坦面は、斜面を切り盛りした4時期にわたる整地地業によって形成されていることが明らかになった。

② 平坦面上の施設は建物とこれを区画する塀によって構成されているが、塀がほぼ同位置・同規模で7時期以上の変遷をもつことから、これらの配置や性格は長期にわたって踏襲されていたものと思われる。ただし、これらの施設の具体的な性格については明らかにすることはできなかった。

③ 平坦面上の施設の年代については、発見された中世陶器や鏡、古銭などの年代より、鎌倉～室町時代頃に位置付けられ、江戸時代の初め頃には廃絶していたものと思われる。

④ 田束山は、平安時代末期から中世にかけての時期には修験の中心地として隆盛したと考えられるが、平坦面上に存在した施設が修験に関わるものであるかどうか、さらには文献にみられるような奥州藤原氏の時代にまで遡るかどうかについては今後に残された課題である。

なお、出土遺物については東北歴史資料館の藤沼邦彦氏、多賀城市埋蔵文化財センターの千葉孝弥氏に、また「田束根山由来記」の解読にあたっては東北歴史資料館の大橋俊夫氏に御教示頂いた。

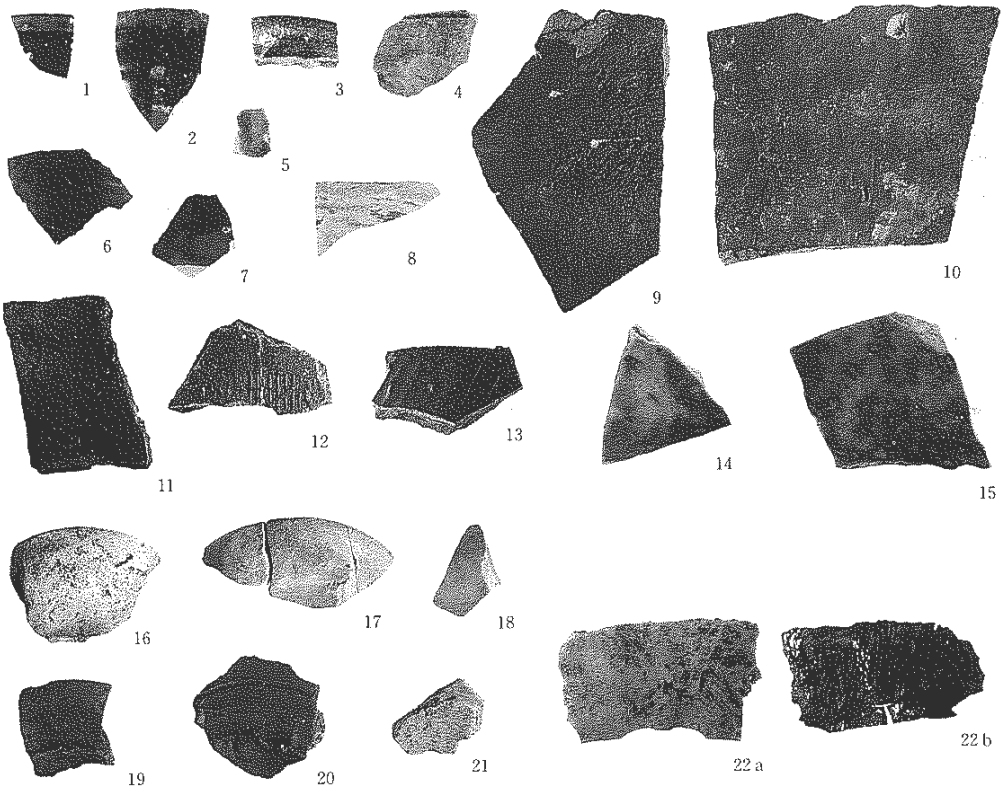
引用参考文献

「奥羽観蹟聞老志巻之九」『仙臺叢書』第16巻
「封内風土記巻之十四」『仙臺叢書』『封内風土記』第4巻
「風土記御用書出」『宮城県史』第26巻（資料篇4）
「田束根山由来記」（出典不明）志津川町史編纂室所蔵
歌津町史編纂委員会（1986）：『歌津町史』歌津町
大阪市立博物館（1985）：『日本の古鏡－女装美のプロデューサー』
黒川古文化研究所編（1951）：『古鏡図鑑（黒川古文化研究所収蔵品図録）』便利堂
佐藤則之（1984）：「多賀城跡第43次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1983
菅原弘樹（1989）：「田束山寂光寺跡」『宮城県文化財調査報告書』第131集
高野芳宏（1988）：「多賀城跡第50次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1987
東京国立博物館（1969）：『東京国立博物館図版目録－和鏡篇』
中野政樹（1969）：『和鏡（日本の美術42）』至文堂
福井県立博物館（1986）：『古鏡の美－出土鏡を中心に－』
藤澤良祐（1984）：「“古瀬戸”概説」『美濃陶磁歴史館報』Ⅲ　美濃陶磁歴史館
藤沼邦彦（1975）：「宮城県の経塚について」『研究紀要』第1巻　東北歴史資料館
町田市立博物館（1986）：『特別展池谷コレクション和鏡－文様に見る花鳥風月－』図録

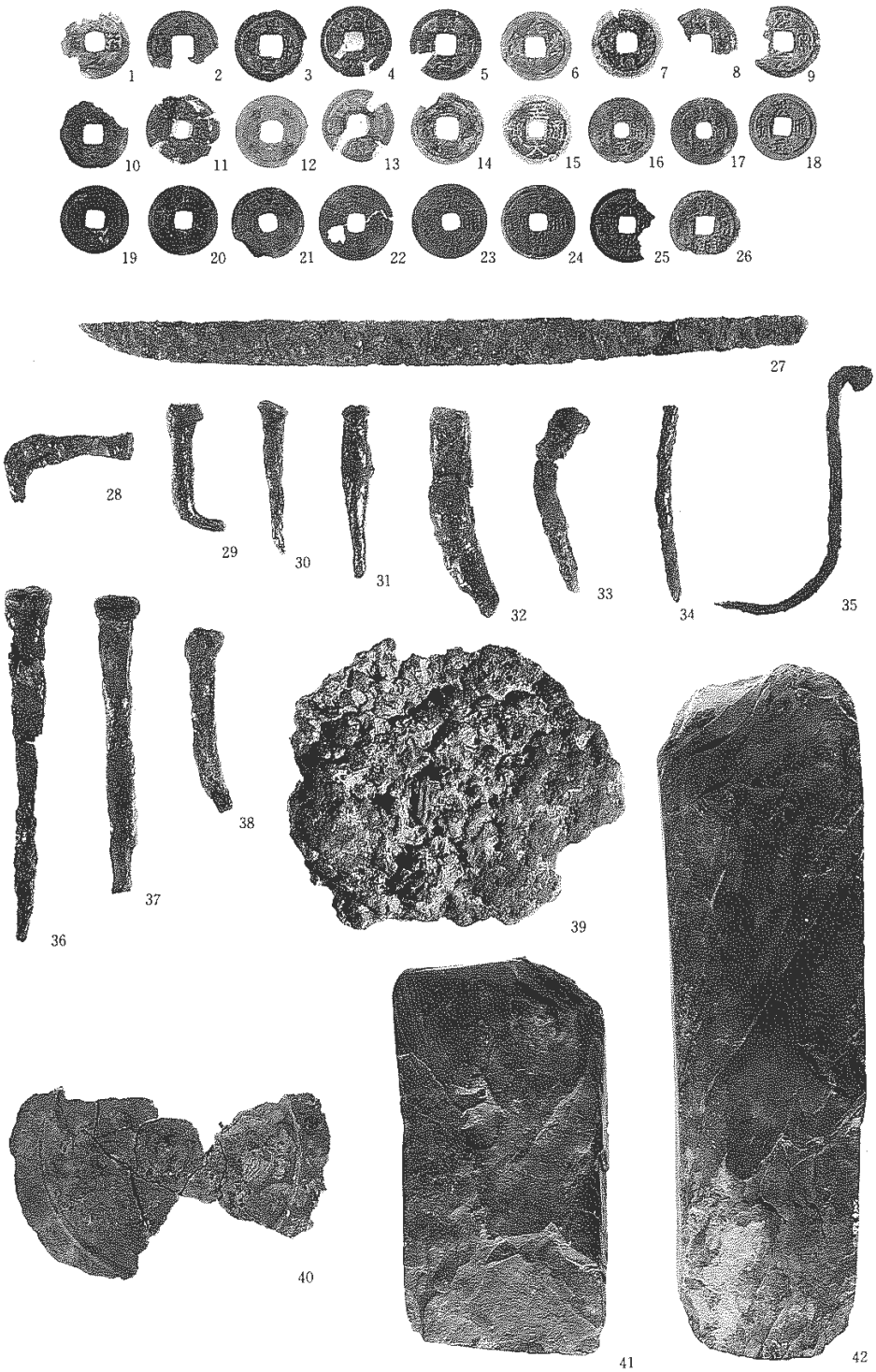
写　真　図　版

写真図版1　上　：D区平担面(南東から)
左下：調査区全景(南から)
右下：SA01塀跡(南から)

写真図版２　左上：ＳＡ02塀跡(南から)
右上：小柱穴群(東から)
下　：小柱穴群(東から)



写真図版３　ＳＸ03鏡理納遺構と出土鏡（上）、Ｄ区および沢出土遺物（下）



写真図版４　Ｄ区出土遺物

一里塚遺跡（いちりづか）

目　　次

Ⅰ．はじめに…… 37
Ⅱ．発見された遺構と遺物…… 40
1. C地区で発見された遺構と遺物…… 40
2. B地区で発見された遺構と遺物…… 107
3. E地区で発見された遺構と遺物…… 113
Ⅲ. 考察…… 122
1. 出土遺物と遺構の年代…… 122
2. 遺構の特徴と変遷…… 128

調 査 要 項

遺跡所在地；宮城県黒川郡大和町吉田字桧木地内
調査主体；宮城県教育委員会
調査担当；宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員；調査第一係長　進藤秋輝、調査第二係長　白鳥良一
技術主査；真山悟・阿部博志・手塚均
技　　師；菊地逸夫・古川一明・須田良平・吉田雅之・伊藤裕
鈴木真一郎・加藤明弘・岩見和泰・大和幸生・木皿直幸
調査期間；平成元年5月8日～平成元年9月25日
発掘面積；約10,500㎡
遺跡記号；ＫＪ
遺跡番号；23019（宮城県遺跡登載番号）
調査協力；大和町教育委員会、大和町吉岡東土地区画整理組合
㈱熊谷組仙台工事所吉岡東作業所

一里塚（いちりづか）遺跡

Ⅰ．はじめに

一里塚遺跡は宮城県黒川郡大和町吉田字桧木地内に所在し、大和町吉岡の中心部から南東方向に約1㎞、吉田川左岸の広い範囲に形成された河岸段丘の最低位段丘面東端部分（標高16～20m）に立地している。この面は北から南に緩やかに傾斜しており、遺跡の東側は河岸平野である吉田川低地に連なっている。遺物の散布状況から推定される遺跡の範囲は約90,000㎡におよび、地形的に見るとさらに北・東側に広がる可能性が考えられる（第1図）。

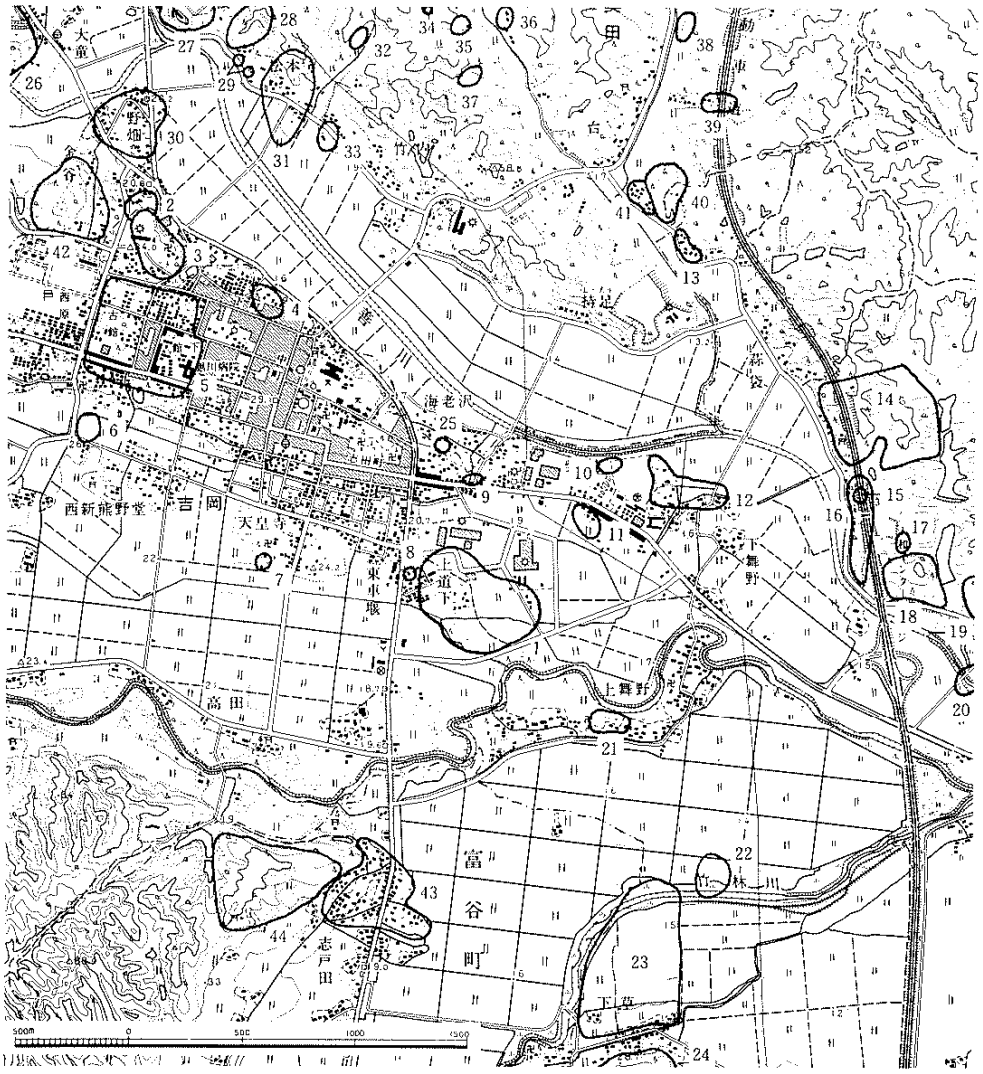
本遺跡の調査は大和町吉岡東土地区画整理組合による吉岡流通工業団地造成工事に係わるもので、昭和63年4月に分布調査を行いＡ～Ｅの5地点で遺物の分布を確認、同年6月～7月に遺構確認を主体とした調査（第一次調査）、10月～11月に水路建設に伴う事前調査（第二次調査）を行い、Ａ～Ｃ・Ｅの4地点で古墳時代後期～平安時代の竪穴住居跡、奈良時代～中近世の掘立柱建物跡・溝跡など多くの遺構を検出した。これらの遺構は近接あるいは重複するものが多く、遺構の存在密度は極めて高いことが明らかになった。また、調査の結果としてＡ・Ｂ地区、Ｃ地区、Ｅ地区がそれぞれ奈良時代～平安時代頃の独立した集落跡であり、大溝で区画された環濠集落になる可能性が考えられた（詳細は手塚・加藤（1989）；大和町一里塚遺跡－昭和63年度報告－宮文報131集pp.107～161を参照）。

今回の調査は第一次調査で確認したＣ区の遺構の広がりを調べる遺構確認調査と区画整理事業に係わる幹線道路部分の事前調査に大きく分けられる（第2図）。
調査は5月8日に開始し、事前調査対象のＣ地区・Ｅ地区・Ｂ地区の順で行ない、Ｃ地区の調査の終盤と並行してＣ地区東側の遺構確認調査を行った。

グリッドは幹線道路中心杭のＳＴＡ－Ｃ13（Ｘ＝－173,892.111m、Ｙ＝5,804.258m）とＳＴＡ－Ｃ12（Ｘ＝－173,797.007m、Ｙ＝5,756.325m）を結ぶ線を基準線として3m単位で設定した。基準線は真北から20°11′西に偏している。

Ｃ地区の事前調査では竪穴住居跡8軒・掘立柱建物跡7棟・土壙281基、井戸2基、溝21条などを精査し、6月の中旬頃から行った遺構確認調査（幅6m・長さ50～100mのトレンチを9m間隔で5本設定）では竪穴住居跡6軒・掘立柱建物跡5棟・土壙・溝・ピット多数が検出され、昨年度の調査で集落を区画すると考えた大溝の東辺を確認した。またＥ地区では竪穴住居跡1軒、土壙3基、井戸1基、溝10条などを、Ｂ地区では掘立柱建物跡5棟、土壙4基、溝4条などを検出し、精査した。

また、以上のような遺構の精査がほぼ終了に近づいた7月1日には一般県民を対象とした現



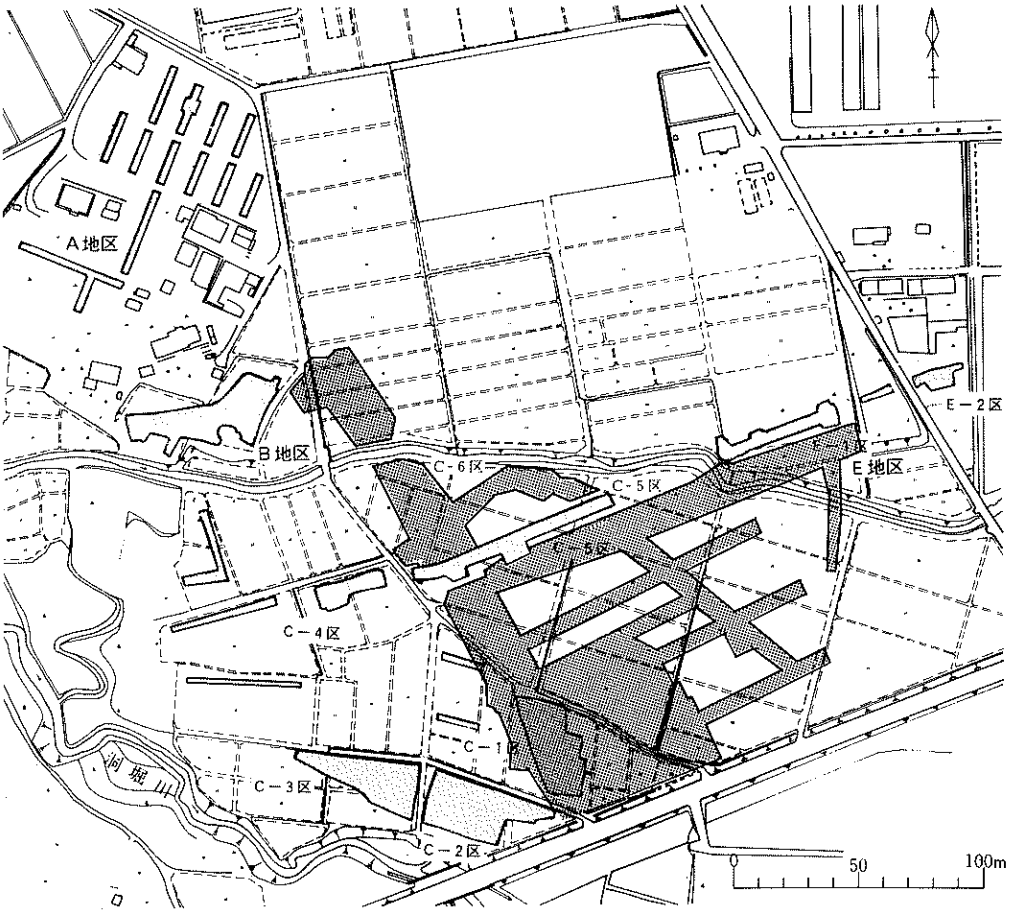
番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	**一里塚遺跡**	集落跡	縄文、奈良・平安	16	八谷館跡	城跡	中世	31	松本遺跡	包含地	縄文、古代
2	石神沢遺跡	包含地	旧石、縄文晩、平安	17	新田古墳 3号	古墳	古墳後	32	寺沢遺跡	包含地	古代
3	中興寺遺跡	包含地	縄文晩	18	八谷古城跡	城跡	中世	33	要害遺跡	包含地	古代
4	安楽院遺跡	包含地	縄文中・後	19	大沢遺跡	包含地	古代	34	前原囲B遺跡	五輪塔	
5	吉岡城跡	城館	江戸	20	相川堤防遺跡	包含地	縄文、古代	35	前原囲A遺跡	包含地	縄文、古代
6	車遺跡	包含地	古代	21	上舞野B遺跡	包含地	古代	36	五十沢遺跡	包含地	縄文、古代
7	天皇寺遺跡	包含地	平安	22	上舞野A遺跡	包含地	縄文、古代	37	前代沢遺跡	包含地	縄文、古代
8	一里塚	一里塚	江戸	23	下草古城跡	城跡	中世	38	荒屋敷遺跡	包含地	古代
9	糸櫛遺跡	包含地	縄文、古代	24	鶴巣館跡	城跡	中世	39	大蛸遺跡	包含地	平安
10	西浦田遺跡	包含地	平安	25	海老沢遺跡	包含地	縄文中	40	舘館跡	城跡	中世
11	柴崎遺跡	包含地	奈良	26	亀岡遺跡	包含地	縄文中・晩、古代	41	下屋敷遺跡	包含地	古代
12	古川遺跡	包含地	古代	27	大衛城跡	包含地、城跡	縄文、中世	42	金谷遺跡	包含地	旧石器、縄文中～晩
13	岩下遺跡	包含地	古代	28	古城館跡	城跡	中世	43	三ヶ森遺跡	包含地	奈良・平安
14	御所館跡	城館	中世	29	松本B・C遺跡	包含地	古代	44	駿取遺跡	城跡	中世
15	新田古墳 1・2	古墳	古墳後	30	大衛役場前遺跡	包含地	縄文、古代				

第1図　一里塚遺跡の位置と周辺の遺跡

地説明会を開催した。

その後、C－1 区東側の部分を調査して欲しいとの要望が組合・町当局から出され、協議の結果、約 2,000 ㎡について調査を行うことになった。この地区では竪穴住居跡 9 軒・掘立柱建物跡 22 棟・土壙 32 基・井戸 1 基・溝 7 条・多数のピットなどの遺構が検出された。最終的な調査面積は約 10,500 ㎡で、調査は 9 月 25 日に終了した。

各調査区で検出された遺構については遣り方・平板測量による平面図を作成し、精査した遺構については必要に応じて断面図も作成した。また、35 ㎜モノクロ写真・同カラーリバーサル写真等による記録を併せて行った。



第 2 図　調査区位置図

Ⅱ．発見された遺構と遺物

調査区は先にも述べたように大きくＢ・Ｃ・Ｅの 3 地区に分かれている。初めに、最も多くの遺構が検出されたＣ地区について説明し、次にＢ地区、Ｅ地区の順で説明してゆく。なお、多くの遺構が検出されたＣ地区については別に項を設けて年代等について検討することにするが、検出された遺構・遺物の数が少ないＢ・Ｅ地区については事実記載の後に年代等についての検討を行なうことにする。

1. Ｃ地区で発見された遺構と遺物

Ｃ地区は水田として利用されていた部分で調査前はほぼ平坦な地形と思われたが、表土である水田耕作土を除去すると東側に向かって緩やかに傾斜していることが明らかになった。堆積層は西側部分では表土下約 20～30 ㎝で地山であるローム面に達し、東端にあたる後述するＳＤ 09 溝東辺に近い部分では耕作土下に黒褐色のシルト層が 10 ㎝ほどの厚さで認められ、さらに下には褐灰色の粘土層シルト層が数㎝の厚さで見られ、その下が地山面になっていた。

Ｃ地区で検出された遺構は竪穴住居跡 17 軒・掘立柱建物跡 31 棟・土壙 313 基・井戸 2 基・溝 27 条・一本柱列 1 条・多数のピットなどで、Ｃ－1 区を主に調査区全体に分布している（第 3～5 図）。これらの遺構は圃場整備や水田耕作によって削平されているものが多く、残存状況は良好とは言えない。以下、精査した遺構について順次記載してゆく。

(1) 竪穴住居跡と出土遺物

Ｃ－1 区で 16 軒、Ｃ－5 区で 2 軒の計 17 軒が検出されているが、削平などにより床面の一部しか残っていないものも何軒かに見られる。

第 1 号住居跡（ＳＩ－01）

第 1 号住居跡はほぼ同位置で拡張が行われている住居跡である。古い段階の住居跡を 01Ａ号住居跡、新しい段階の住居跡を 01Ｂ号住居跡として説明する。

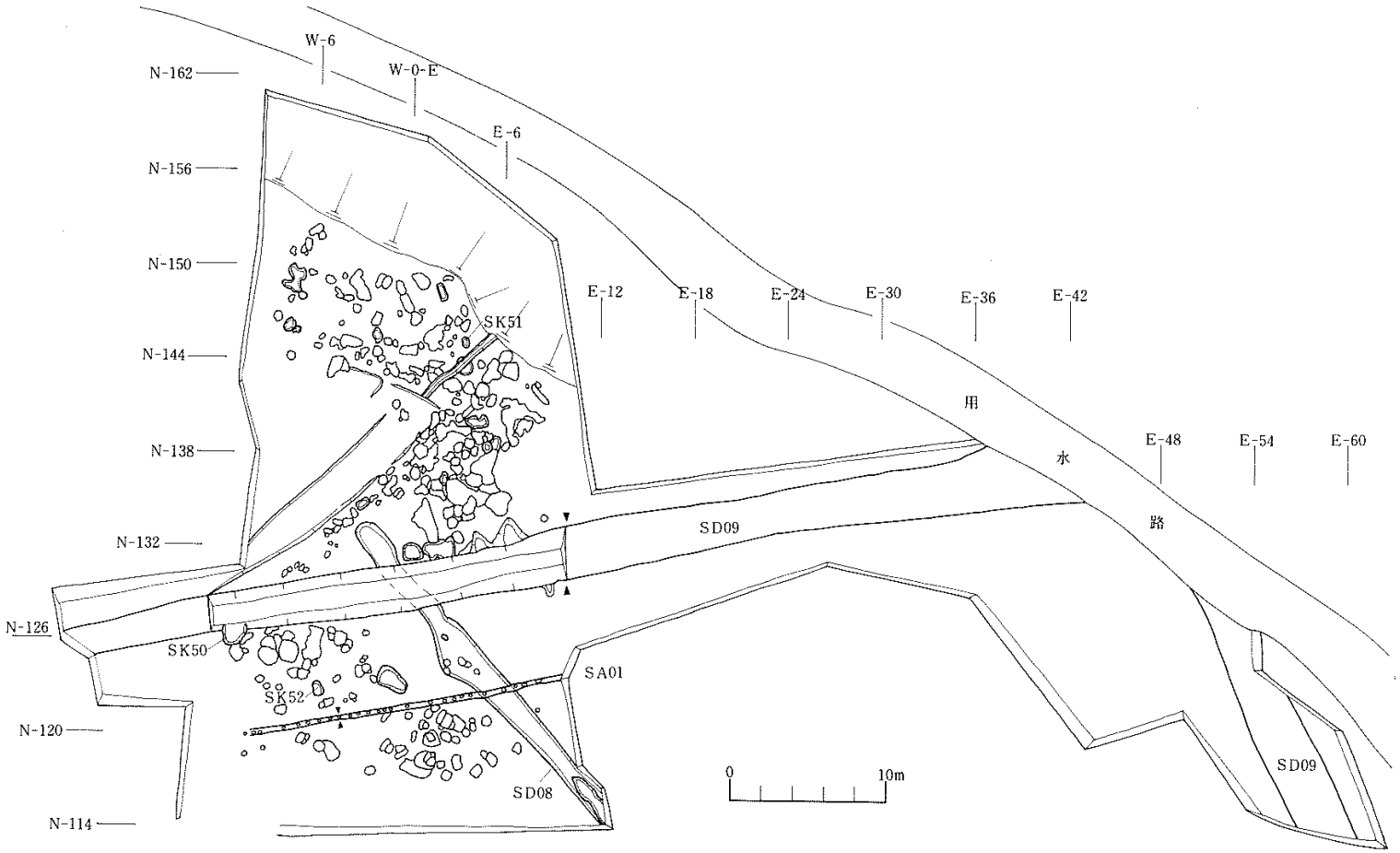
第 01Ａ号住居跡（ＳＩ－01Ａ：第 6 図）

[重複] ＳＢ01 掘立柱建物跡・ＳＤ03・05 号溝と重複し、いづれにも切られている。

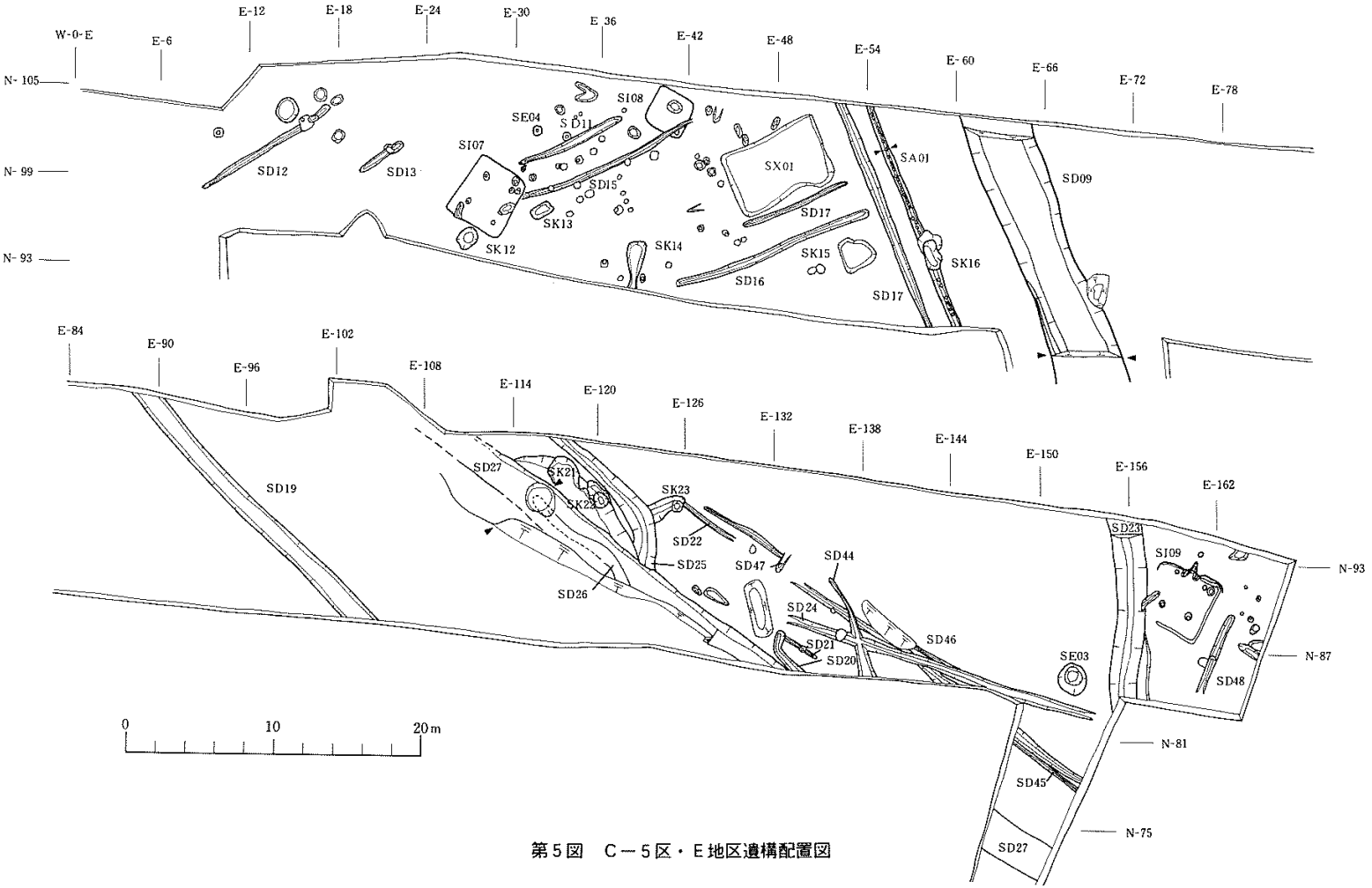
[平面形・規模]平面形は長方形を呈し、南北軸 5.23m、東西軸 3.94m である。南西側は削平・攪乱を受けており、コーナー部分と西壁の状況は不明である。

[壁]検出できた壁の大部分は地山である。壁は拡張の際に壊されており、立ち上がり部分のみが僅かに残っている程度である。堆積土は残存していない。

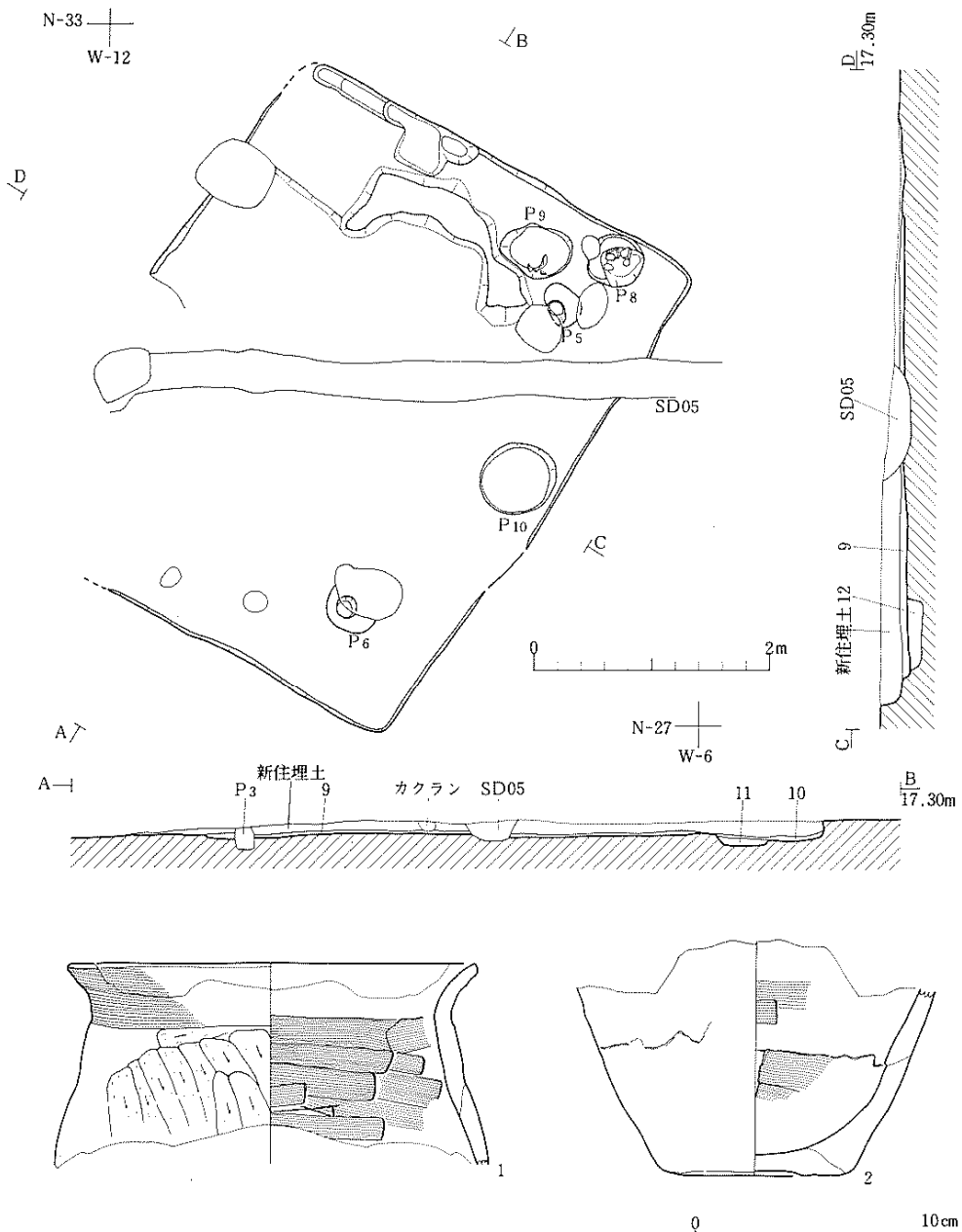
第３図　Ｃ－１区遺構配置図



第４図　Ｃ－６区遺構配置図



第５図　Ｃ－５区・Ｅ地区遺構配置図



番号	種別	層位	器面調整（外面）	器面調整（底部）	器面調整（内面）	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	登録	図版No
1	土師器 甕	ピット9	口縁部：横ナデ、体部：ヘラケズリ		口縁部：不明、体部：ヘラナデ	173		(86)	1	19-1
2	土師器 甕	ピット8	体部：摩滅のため不明	ナデ	体部：ヘラナデ		79	(99)	2	

第6図　第01A号住居跡

[床面]地山と黒褐色粘土質シルトの混土による貼り床で、堅くしまっている。ほぼ平坦であるが、北側中央に黄褐色土を主体とした土手状の高まりがある。床面下については掘り下げを行っていない。

[柱穴]柱穴として確認できたのは東半部分の 2 個（P5・P6）である。柱穴の平面形は楕円形、柱痕跡は径 18 ㎝ほどの略円形で深さは確認面から 57 ㎝である。柱間は 3.1m である。

[周溝]北壁沿い西側に幅 18 ㎝、長さ 1.5m ほどの周溝状の遺構が認められた。深さは約 6 ㎝で凹凸があり、幅 40 ㎝くらい内側に広がる箇所がある。

[カマド]検出できなかった。拡張の際に取り壊された可能性がある。

[その他の施設]貼り床の上面で柱穴以外に 4 個のピット（P7～10）が検出されている。切り合い関係から P8～10 の 3 個が本住居跡に伴うものと考えられる。深さは 10～16 ㎝で、堆積土中には焼土粒・炭化物が含まれていた。出土遺物に示した土師器甕は P8・9 から出土したものである。貯蔵穴状ピットであろうか。

[遺物]出土遺物はピット出土の図示した 2 点のみで、ともに非ロクロ土師器甕である。1 は口縁部が外反し、体部中央がやや膨らむ長胴形であり、2 も長胴形と思われる。2 は底部中央がナデ調整され、やや上げ底になっている。

第 01B 号住居跡（ＳＩ－01Ｂ：第 7・8 図）

[重複]ＳB01 掘立柱建物跡・ＳD03・05 溝と重複し、いづれにも切られている。

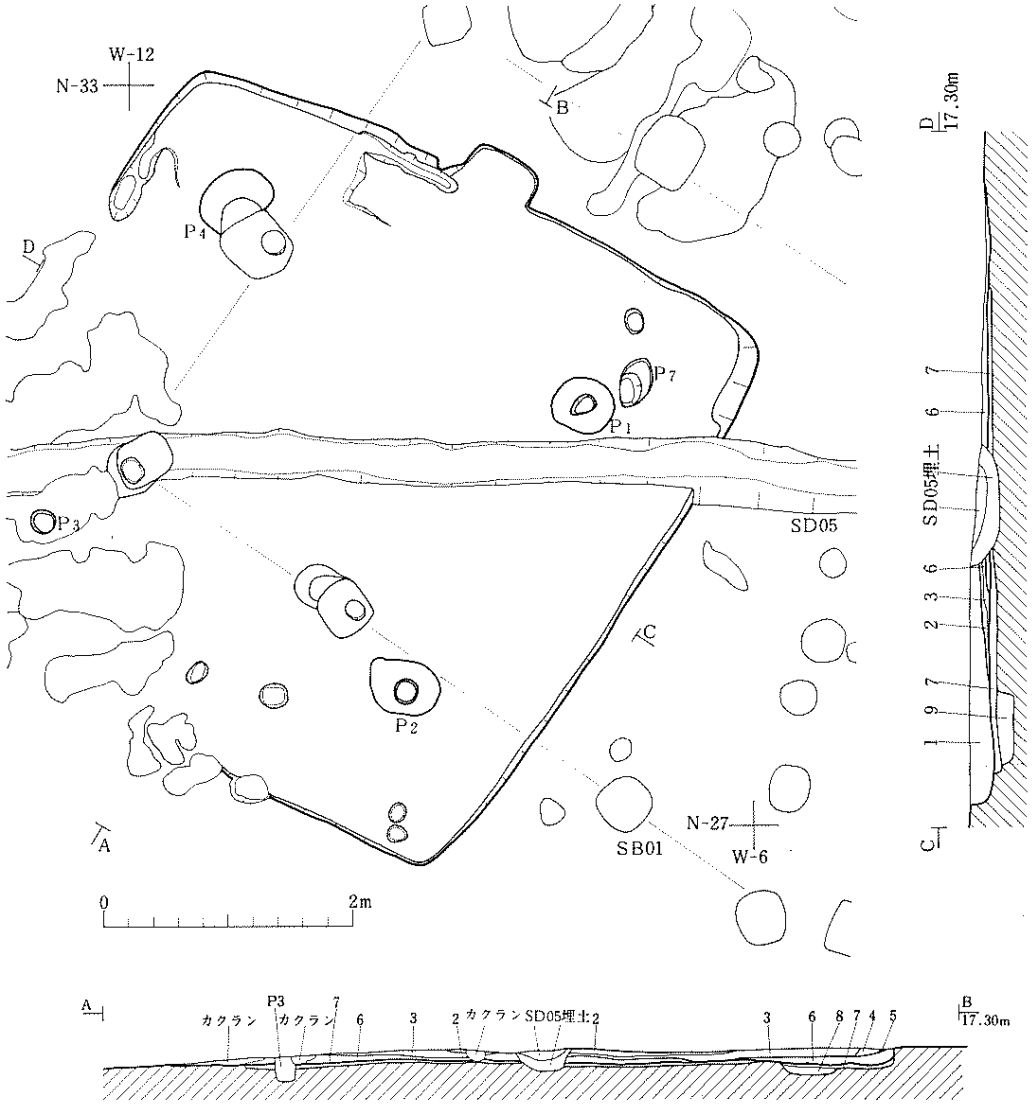
[平面形・規模]平面形は隅丸正方形で、北壁中央部に隅丸方形の張り出し部がある。規模は南北軸が 5.15m・東西軸が 5.28m である。01A 住居跡を西側に一回り広く拡張したものと考えられる。

[壁]北壁と東壁を検出した。大部分が地山を掘り込んでいる。残存高は北壁が 6～11 ㎝で比較的急に立ち上がり、東壁は残存高 10～16 ㎝で北壁に比べやや緩やかに立ち上がる。

[床面]拡張部は地山面を床面としているが、01A 住居跡と重複する部分では床面に貼り替えが見られる。第 1 期の床面は 01A 住居跡の床面に地山と黒褐色粘土質シルトによる混土を貼ったもので、ほぼ平坦であるが、全体的に見て地山面である西側が高くなっている。また、第 2 期の床面は第 1 期の床面に継ぎ足すように住居中央部寄りで見られ、東側が低くなっている。それぞれの床面上には炭化物と焼土粒が面的に広がっており、生活面と考えられた。

[柱穴]住居平面形の対角線上に位置する 4 個（P1～4）が柱穴と考えられる。P3 は攪乱により確認できないが、他は平面形が楕円形を呈し、柱痕跡は径 20 ㎝ほどの略円形で深さは確認できたもので 44～57 ㎝である。柱間は南北が 2.7～2.85m、東西が 3.2m である。

[周溝]北壁中央寄りの一部と西壁北側の一部で周溝状の落ち込みを検出した。北側は幅



層No	土　色	土　性	備　考	
1	暗褐色(10YR3/4)	シ　ル　ト	地山ブロックを含む。	Ｂ２期の住居内堆積土
2	暗褐色(10YR3/4)	シ　ル　ト	焼土粒を少し含む。	Ｂ２期の貼り床
3	黒褐色(10YR2/3)	シ　ル　ト	焼土粒を少し含む。ややしまりあり。	Ｂ１期の住居内堆積土
4	暗褐色(10YR3/4)	シ　ル　ト	焼土小ブロックを多く含む。	Ｂ１期のカマド内堆積土
5	黒　色(10YR2/1)	シ　ル　ト	木炭層。	
6	暗褐色(10YR3/3)	シ　ル　ト	地山ブロックを多く含む。焼土粒を含む	Ｂ１期の生活層
7	暗褐色(10YR3/3)	シ　ル　ト	地山と混じり斑状である。しまりあり。	Ｂ１期の貼り床
8	暗褐色(10YR3/4)	シ　ル　ト	焼土粒・炭化物粒を含む。地山ブロックを多く含む。粘性あり。	ピット１０堆積土
9	暗褐色(10YR3/4)	シ　ル　ト		ピット１１堆積土

第７図　第01Ｂ号住居跡

12～18 ㎝、深さ 4～6 ㎝、西側は幅 18～24 ㎝、深さ 3～4 ㎝で、いづれも断面形は「U」字状を呈している。

[カマド]北壁中央部の張り出し部の堆積土には焼土塊を含む層や木炭層が見られ住居内堆積土とは層相を異にしている。焼け面がはっきりしないもののこの部分がカマドと考えられる。

[その他の施設]床面では検出できなかったが、01A住居跡床面で検出されたピットのうちＰ7 は本住居跡に伴うものと考えられる。深さは 15 ㎝ほどである。性格は不明である。

[堆積土]7 枚の層が観察された（層Ｎｏ1～7）。このうち自然堆積層は 1 と 3～5 の 4 枚である。1 は第 2 期の住居内堆積土であり、3～5 はカマド部分の堆積層である。他の層は人為的堆積層で、6 は生活層と考えられる層である。

[遺物]堆積層からの出土遺物は細片ばかりである。土師器は非ロクロ使用で坏は内面が黒色処理されている。第 8 図に示した 2 点は西壁付近の攪乱から出土した非ロクロ土師器甕で本住居の遺物である可能性が考えられる。1 は体部から外傾して立ち上がり口縁部が外反する長胴形、2 は体部が球形に膨らむものである。

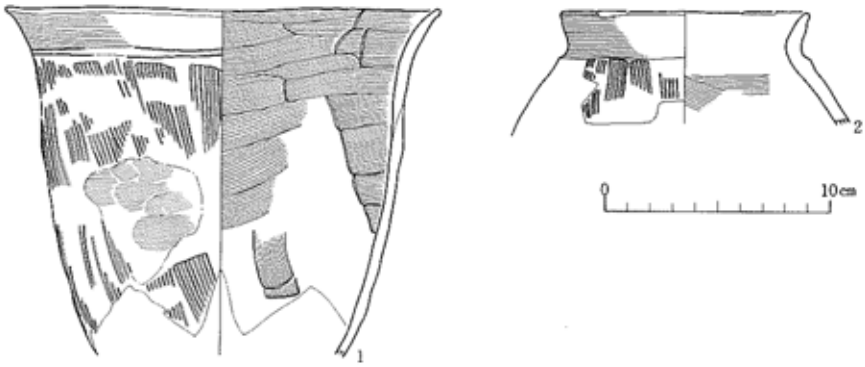
第 02 号住居跡（ＳＩ－02：第 9 図）

[重複]ＳD02 溝と重複し、切られている。またＳＩ03 住居跡とは近接しており、同時存在は考えられない。

[平面形・規模]平面形はほぼ正方形で、規模は南北軸が 4.4m・東西軸が 4.75m である。

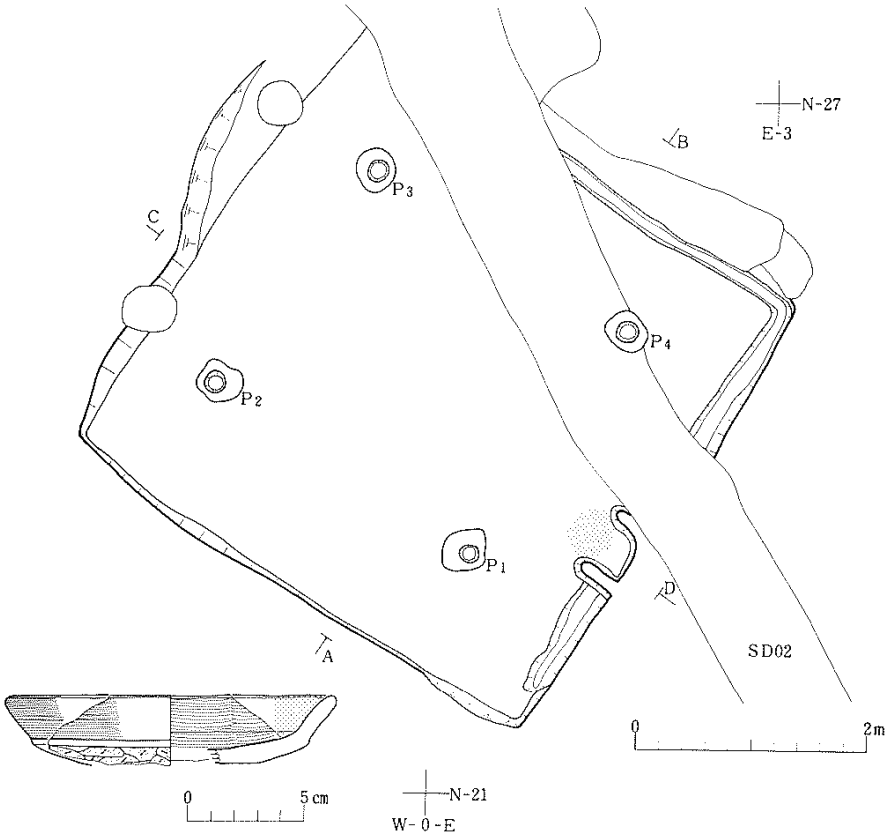
[壁]地山を掘り込んで壁としている。西壁の北側から北壁にかけては重複および削平により明らかではない。残存する壁高は 5～8 ㎝である。

[床面]住居には掘り方があり、掘り方埋土上面を床面としている。ほぼ平坦であるが、細かな凹凸も見られる。床面上には炭化物混じりのしまりのある薄層が見られ、生活層と考えられた。

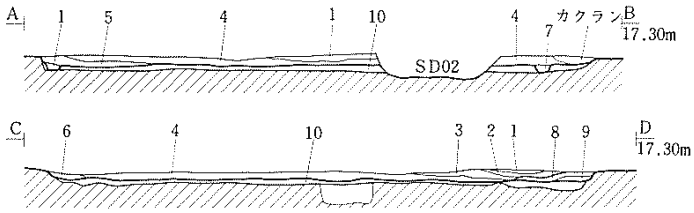


番号	種別	外面	内面	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	登録	図版No
1	土師器 甕	口縁部：横ナデ、体部：ハケメ・ナデ	口縁部：ヘラナデ、体部：ヘラナデ	192		(145)	3	
2	土師器 甕	口縁部：横ナデ、体部：ハケメ	口縁部：摩滅のため不明、体部：ナデ	120		(50)	4	19-2

第 8 図　第01Ｂ号住居跡内攪乱出土遺物



番号	種別	外面	底部	内面	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	登録	図版No
1	土師器	坏	口縁部；横ナデ、体部；ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	143	(72)	29	5	



層No	土色	土性	備考	
1	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト	地山ブロックを少量含む。	人為的埋土
2	暗赤褐色(5YR3/3)	シルト	焼土を多く含む。堅くしまっている。	
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	焼土・炭化物・地山小ブロックを含む。	
4	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト	地山ブロックを斑状に含む。堅くしまっている。	
5	暗赤褐色(5YR3/2)	シルト	壁際で少量の地山ブロックを含む。	
6	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山ブロックを斑状に含む。堅くしまっている。	
7	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト	しまりなし。	周溝堆積土
8	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	焼土を多く含む。	カマド内堆積土
9	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト		
10	黄褐色 (10YR5/8)	ローム	地山に暗褐色土が混じる。	掘り方埋土

第9図　第02号住居跡

[柱穴]住居平面形の対角線上に位置する 4 個（P1～4）が柱穴と考えられる。平面形は不整の楕円形状を呈し、柱痕跡は径 18 ㎝ほどの円形で深さは確認できたもので 17～24 ㎝ある。柱間は南北が 2.3～2.35m、東西が 2.55～2.65m である。

[周溝]東壁から北壁にかけて検出された。幅は 15～25 ㎝、深さは 5～7 ㎝である。断面形は「U」字状を呈している。

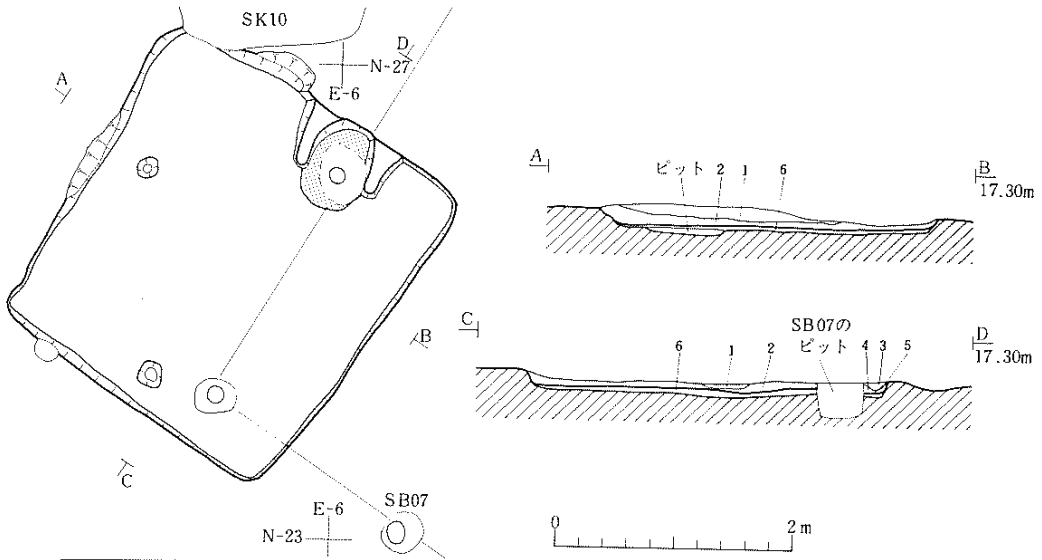
[カマド]東壁中央部のやや南寄りに位置している。燃焼部が検出され、側壁は地山削り出しである。燃焼部は最大幅 75 ㎝・奥行き 60 ㎝で、焚き口部分は径 35 ㎝ほどの焼面になっていた。

[堆積土]9 枚の層が観察された（層Ｎｏ1～9）。4 層が床面を覆い、5・6 層は壁際に堆積している。4 層は地山粒を斑状に含み、人為的に埋められた層と考えられる。8・9 層はカマド部分の堆積層である。

[遺物]図示した資料は 4 層出土の非ロクロ土師器坏である。外面のほぼ中央に段があり、口縁部は僅かに外反、底部は丸底気味である。他に非ロクロ土師器甕の細片が出土している。

第 03 号住居跡（ＳＩ－03：第 10 図）

[重複]ＳB07 掘立柱建物跡・ＳK10 土壙と重複し、切られている。また、ＳＩ02 およびＳＩ18 住居跡とは近接しており、同時存在はないと考えられる。



層Ｎｏ	土　色	土　性	備　考	
1	暗褐色(10YR3/4)	シ　ル　ト	若干の炭化物と地山粒・ブロックを含む。	
2	暗褐色(10YR3/3)	シ　ル　ト	焼土・炭化物を微量に含む。	
3	褐　色(10YR4/4)	シ　ル　ト	カマド天井崩落土。	カマド内堆積土
4	黒褐色(10YR2/3)	シ　ル　ト	焼土・炭化物を多量に含む。	
5	黒褐色(10YR2/3)	砂質シルト		
6	黄褐色(10YR5/8)	粘土質シルト	微量の暗褐色土が混じる。	掘り方埋土

第10図　第03号住居跡

[平面形・規模]平面形はほぼ正方形で、規模は南北軸が 3.0m・東西軸が 2.7m である。

[壁]地山を掘り込んで壁としている。東西の壁は緩やかに、南北の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。残存する壁高は最大で 15 ㎝である。

[床面]住居の掘り方埋土上面を床面としている。ほぼ平坦でしまりがある。

[柱穴・周溝]検出されなかった。

[カマド]北壁中央部に敷設されており、側壁は黄褐色粘土と暗褐色土の混土で構築されている。燃焼部は最大幅 85 ㎝・奥行き 50 ㎝で、底面はＳＢ07 の柱穴に大部分が壊されている。

[堆積土]5 枚の層が観察された（層Ｎｏ1～5）。1 層が床面を覆い、2 層は壁際に堆積している。層相から人為的に埋められた層と考えられる。3～5 層はカマドの堆積層である。

[遺物]非ロクロ土師器の坏（内黒）・甕の細片が出土しているが、図化できる資料はない。

第 04 号住居跡（ＳＩ－04：第 11 図）

[重複]ＳＤ02・03・04 溝と重複し、これらに切られている。また、住居の北西隅から南東隅にかけての南半部分は削平により壊されている。なお、ＳＩ18 住居跡とは近接しており、同時存在は考えられない。

[平面形・規模]平面形はほぼ正方形で、規模は南北軸が 8.2m・東西軸が 8.0m である。

[壁]北辺と東辺を検出した。西辺と南辺は削平され、コーナー部分が残存するだけである。地山を掘り込んでおり、床面からはほぼ垂直に立ち上がっている。残存する壁高は 20 ㎝ほどでカマド右側の壁面では植物の茎を並べたと思われる炭化物の付着が見られた。

[床面]北西隅から南東隅にかけての南半部分は削平により壊されている。残存部では後述する旧カマド部分を除き住居掘り方埋土上面を床面とし、旧カマド部分では部分的な貼り床がなされている。全体にほぼ平坦で堅くしまっている。新カマド周辺の床面では炭化物の広がりが面的に確認され、生活面と考えられた。

[柱穴]住居平面形の対角線上に位置する 4 個（Ｐ1～4）が柱穴と考えられる。平面形は不整方形や不正円形で一辺あるいは長軸が 70 ㎝ほどの大きさである。柱痕跡は径 20～25 ㎝の円形で、深さはＰ3 が 31 ㎝、他は 47～51 ㎝である。この差は確認面の違いによるもので底面のレベルで見るとほぼ同様の深さである。柱間隔は南北が 4.2～4.4m、東西が 4.9m である。

[周溝]検出された壁下を巡り、新カマド構築時にカマド部分を除いて掘っている。幅は 35～40 ㎝、深さは床面から 5～9 ㎝で、断面形は逆台形を呈している。

[カマド]東壁(旧)から北壁(新)への造り替えがなされている。旧カマドは東壁のやや南寄りに位置している。燃焼部側壁は新カマド構築時に壊され、煙道部と燃焼部底面の一部を残すだけである。一方、新カマドは北壁の中央部に位置し、燃焼部・煙道部が検出された。燃焼部は

最大幅 1.5m・奥行き 0.9m で煙道部との境は 6 cmほどの段になっている。側壁は粘土質シルトを主体として構築され、外側が直線的で内側は湾曲している。側壁内面・燃焼部底面は赤変が著しい。また、煙道部は幅約 30 cm・長さ 80 cmで底面は凹凸があり、先端に向かって高くなっている。

[その他の施設]旧カマド燃焼部に接して 2 個のピット（P5・6）と溝状の掘り込みが見られる。前者は旧カマド燃焼部側壁と推定される部分に位置しており、カマド構築に関連したピットの可能性がある。また、後者は旧カマド部分の貼り床を切って掘り込まれ、周溝と連なることから周溝と一体化した溝の可能性が考えられる。

[堆積土]10 枚の層が観察された（層Ｎｏ1～10）。4～7 層が床面に達する層で、2・3・8～10 層はカマド上に堆積している。9 層を除いては地山ブロック・地山粒を含み、特に 5・6 層では褐色あるいは暗褐色土と斑状に混じり、自然堆積土とは考え難い。堆積状況・層相から人為的に埋められた層と考えられる。

[遺物]図示した資料は床面出土の非ロクロ丸底土師器坏 3 点である。1 は口縁部が短く、直立気味で端部が外反し、口縁部と体部の境には稜が形成される。2・3 では対応する内面にも稜が見られる。内面は黒色処理されず、ナデ調整が施されている。なお、開示できなかった資料としては非ロクロ土師器坏（内黒）・甕の体部破片がある。

第 05 号住居跡（ＳＩ－05：第 12 図）

[重複]ＳＩ06 住居跡・ＳＸ03 小溝跡群と重複し、切られている。

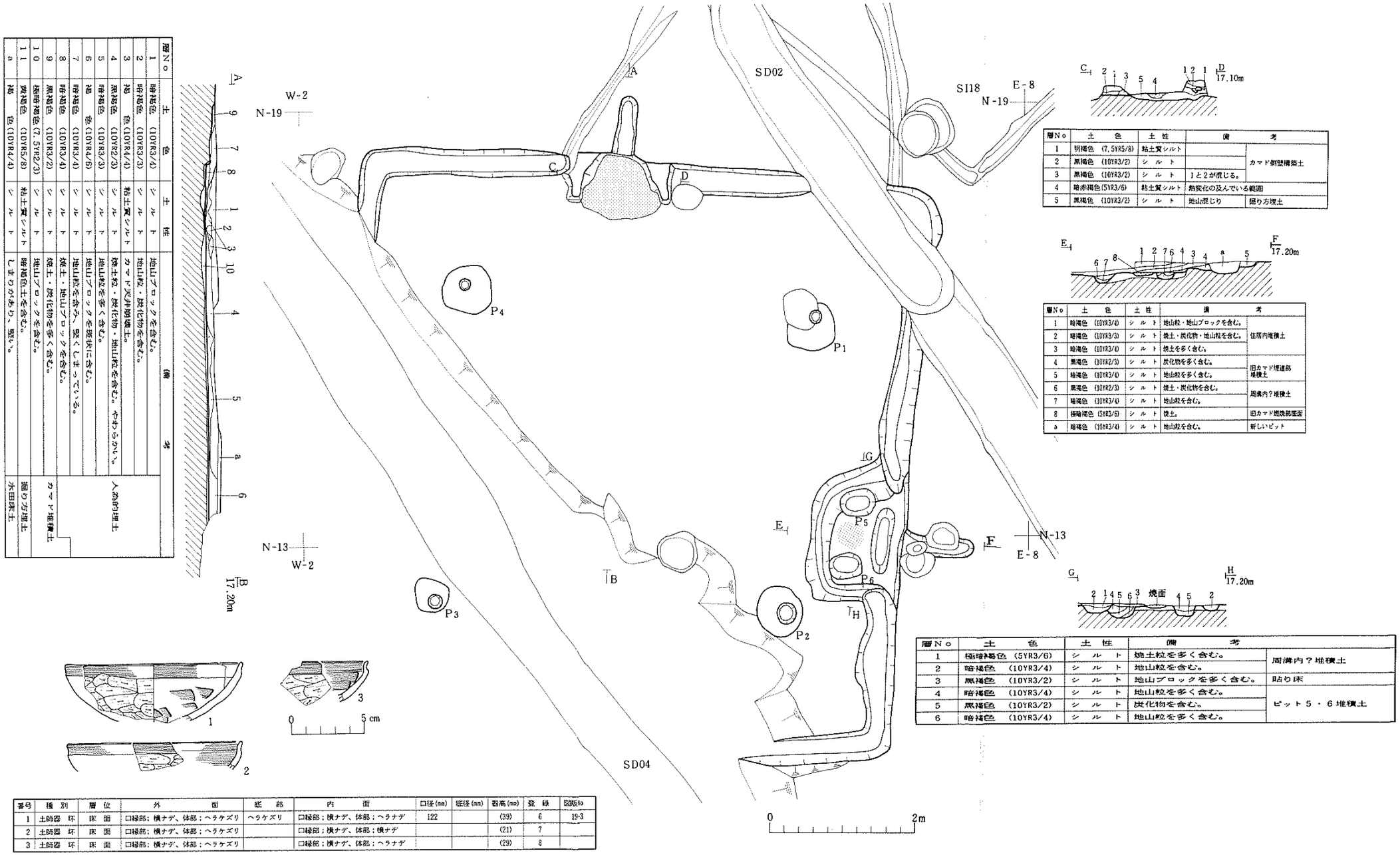
[平面形・規模]削平により大部分が壊されている。残存部から推して一辺 4m ほどの方形を呈するものと考えられる。

[壁]北壁と東西壁の北側部分しか残っていない。地山を掘り込んで壁としており、残存する壁高は最大で 6 cmである。

[床面]北半一部しか残存していない。住居の掘り方埋土上面を床面としている。ほぼ平坦でしまりがある。

[柱穴]住居平面形の対角線上に位置するＰ1～4 が配置の規則性・埋土の特徴などから柱穴と考えられる。柱穴は楕円形状を呈し、柱痕跡は径 15 cmほどの円形・深さは 21～28 cmである。柱間隔は東西が 1.95m、南北が 1.95～2.15m である。また、これら 4 個のピットと重複して 4 個のピット（Ｐ7～10）が検出されており、Ｐ8・10 では柱痕跡が明らかになっている。柱の建て替えがあった可能性が考えられる。

[カマド]北壁中央部で地山が削り出されている部分がある。形状からカマド燃焼部側壁の可能性が考えられる。



層No	土色	土性	備考	
1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロックを含む。	人為的埋土
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒・炭化物を含む。	
3	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	カマド天井崩壊土。	
4	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	焼土粒・炭化物・地山粒を含む。やわらかい。	
5	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒を多く含む。	
6	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山ブロックを斑状に含む。	
7	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒を含み、緊くしまっている。	
8	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	焼土・地山ブロックを含む。	カマド堆積土
9	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	焼土・炭化物を多く含む。	
10	極暗褐色 (7.5YR2/3)	シルト	地山ブロックを含む。	掘り方埋土
11	黄褐色 (10YR5/8)	粘土質シルト	暗褐色土を含む。	水田床土
a	褐色 (10YR4/4)	シルト	しまりがあり、堅い。	

層No	土色	土性	備考	
1	明褐色 (7.5YR5/8)	粘土質シルト		カマド側壁構築土
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト		
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	1と2が混じる。	
4	暗赤褐色 (5YR3/6)	粘土質シルト	熱変化の及んでいる範囲	
5	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山混じり	掘り方埋土

層No	土色	土性	備考	
1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒・地山ブロックを含む。	住居内堆積土
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	焼土・炭化物・地山粒を含む。	
3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	焼土を多く含む。	
4	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	炭化物を多く含む。	旧カマド煙道部堆積土
5	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒を多く含む。	
6	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	焼土・炭化物を含む。	周溝内？堆積土
7	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒を含む。	
8	極暗褐色 (5YR3/6)	シルト	焼土。	旧カマド燃焼部底面
a	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒を含む。	新しいピット

層No	土色	土性	備考	
1	極暗褐色 (5YR3/6)	シルト	焼土粒を多く含む。	周溝内？堆積土
2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒を含む。	
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山ブロックを多く含む。	貼り床
4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒を多く含む。	ピット5・6堆積土
5	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物を含む。	
6	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒を多く含む。	

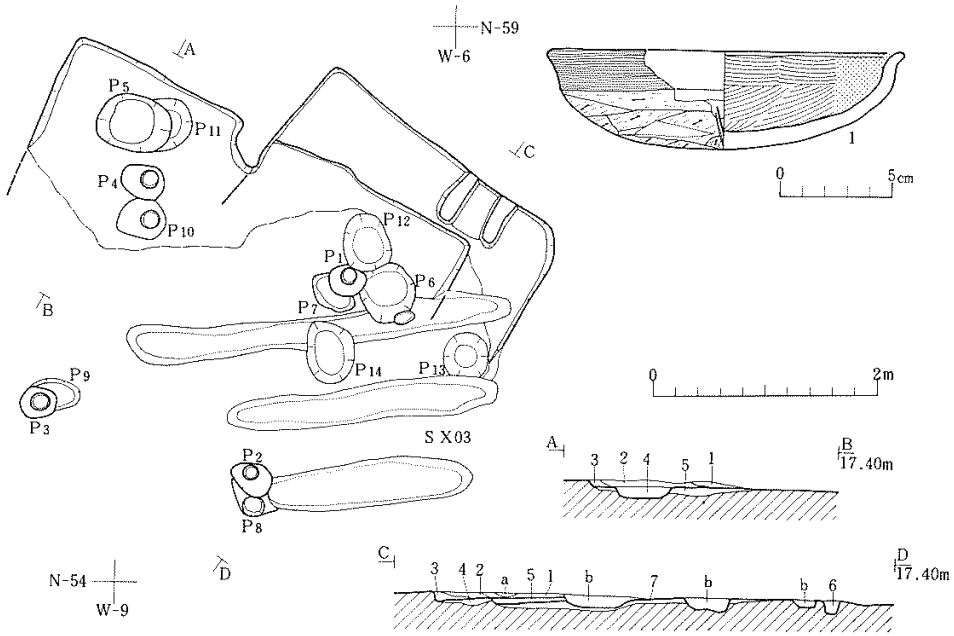
番号	種別	層位	外面	底部	内面	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	登録	図版No
1	土師器 坏	床面	口縁部；横ナデ、体部；ヘラケズリ	ヘラケズリ	口縁部；横ナデ、体部；ヘラナデ	122		(39)	6	19-3
2	土師器 坏	床面	口縁部；横ナデ、体部；ヘラケズリ		口縁部；横ナデ、体部；横ナデ			(21)	7	
3	土師器 坏	床面	口縁部；横ナデ、体部；ヘラケズリ		口縁部；横ナデ、体部；ヘラナデ			(29)	8	

第11図　第04号住居跡

[その他の施設]燃焼部側壁と推定された西側に長軸 65 ㎝・深さ 10 ㎝ほどのピット（P5）が検出されている。堆積土中には焼土・炭化物などを含み、遺物の出土も見られる。貯蔵穴状ピットの可能性が考えられる。

[堆積土]3 枚の層が観察された（層Ｎｏ1～3）。いづれも床面上に堆積し、層中に地山粒・ブロックを含んでいる。人為的に埋められた層と考えられる。

[遺物]図示資料は非ロクロ土師器坏（内黒）である。底部は丸底で口縁部と体部の境に稜が巡り、対応する内面にも稜が見られる。口縁部は直立のち端部が外反している。他には非ロクロ土師器甕・須恵器甕の体部破片が出土している。前者では外面にヘラケズリ・ハケメ調整のものがあり、後者では内面に青海波オサエ痕を残すものがある。



番号	種別	層位	外面	底部	内面	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	登録	図版No
1	土師器 坏	ピット5	口縁部：横ナデ、体部：ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	160		44	9	19-4

A－Bライン

層Ｎｏ	土色	土性	備考	
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロックを多く含む。	住居内堆積土
2	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山粒を含む。	
3	褐色(10YR4/6)	シルト	地山ブロックを含む。	
4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	焼土・炭化物・地山粒を含む。	ピット５堆積土
5	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山粒を多量に含む。	掘り方埋土

C－Dライン

層Ｎｏ	土色	土性	備考	
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	炭化物を含む。	ＳＩ０６堆積土
2	暗赤褐色(5YR3/3)	シルト	焼土を多く含む。	ＳＩ０６カマド内堆積土
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	焼土を多く含み、下位は焼け面。	
4	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山粒を多量に含む。	ＳＩ０６掘り方埋
5	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	炭化物・地山粒を含む。	ＳＩ０５堆積土
6	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒を少量含む。	ピット８堆積土
7	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山粒を多量に含む。	ＳＩ０５掘り方埋
a	褐色(10YR4/6)	砂質シルト		
b	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	しまりがあり、堅い。	ＳＸ０３堆積土

第12図　第05・06住居

第 06 号住居跡（ＳＩ－06：第 12 図）

[重複]ＳＩ05 住居跡・ＳＸ03 小溝跡群と重複し、前者を切り、後者に切られている。

[平面形・規模]北側の一部を検出しただけである。北壁は 2.75m で東西壁は 1.2m ほどしか検出していない。平面形は方形基調と考えられる。

[壁]北壁と東西壁の北側部分しか残っていない。地山を掘り込んで壁としており、残存する壁高は最大で 10 ㎝である。

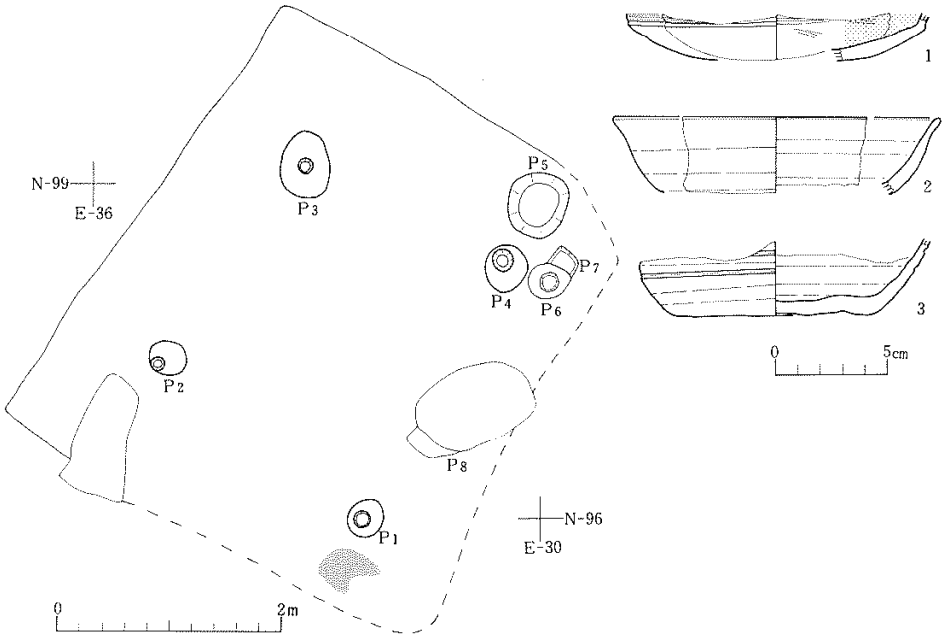
[床面]北半の一部しか検出できなかった。住居の掘り方埋土・ＳＩ05 住居跡堆積土上面を床面としており、ほぼ平坦である。

[柱穴]検出できなかった。

[カマド]北壁中央部の東寄りに敷設されている。燃焼部が検出され、側壁は粘土で構築されている。燃焼部は幅 60 ㎝・奥行き 50 ㎝ほどで、底面は赤変し堅くなっていた。

[堆積土]3 枚の層が観察された（層Ｎｏ1～3）。1 が床面上に堆積し、2・3 はカマドの堆積土である。

[遺物]非ロクロ土師器甕の体部破片が数点出土しているだけである。外面にヘラケズリ調整が見られる。



番号	種別	層位	外面	底部	内面	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	登録	図版No
1	土師器 坏	ピット3	口縁部；横ナデ、体部；ケズリ？	ヘラケズリ？	ヘラミガキ→黒色処理			(20)	10	
2	須恵器 坏	床面	ロクロ調整		ロクロ調整	144		(37)	11	
3	須恵器 坏	床面	ロクロ調整	ヘラ切り→周縁部；回転ケズリ	ロクロ調整		85	(34)	12	

第13図　第07号住居跡

第 07 号住居跡（ＳＩ－07：第 13 図）

[平面形・規模]削平により壁は壊されている。西辺側では住居掘り方の線が明瞭であるが、東辺側では床面まで削平が及んでおり、床面の範囲は不明瞭になっている。残存部から推して平面形は方形を基調とし、一辺は 4.5m ほどになるものと考えられる。

[床面]住居の掘り方埋土（灰黄色粘土質シルト）上面を床面としている。ほぼ平坦でしまりのある面で、南東隅に近い所から焼面が検出されている。

[柱穴]床面で 6 個のピット（P1～6）が検出され、1～5 で柱痕跡が認められた。これらは住居平面形のほぼ対角線上に位置し、4 と 5 は北東部で近接している。堆積土・深さの類似性からＰ1～4 が柱穴と考えられる。柱穴は円形あるいは不正楕円形で、柱痕跡は径 15 ㎝ほどの円形で深さはＰ1 が 30 ㎝、他は 13～17 ㎝である。柱間隔は南北が 2.2～2.6m、東西が 2.0～2.3m である。

[遺物]図示資料は 3 点である。1 は有段の非ロクロ丸底土師器坏で、段に対応する内面には稜が見られる。2・3 は須恵器坏で、2 は口縁部が僅かに外反している。3 は底部がヘラ切りで周縁部にはナデ調整が施されている。体部には平行沈線が巡っている。他には非ロクロ土師器甕の体部・底部破片、須恵器甕の体部破片が数点出土している。

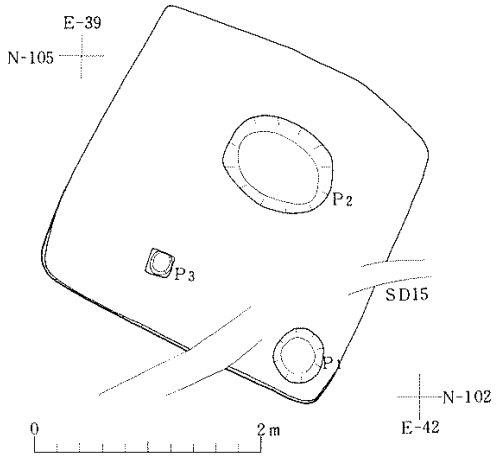
第 08 号住居跡（ＳＩ－08：第 14 図）

[重複]ＳＤ15 溝跡に切られている。

[平面形・規模・壁]地山を掘り込んでいる。削平のため南壁と東西壁南隅の部分が 5 ㎝ほどの高さで残っているだけである。残存部から推して、一辺が 3m ほどの隅丸方形を呈するものと考えられる。

[床面]住居の掘り方埋土上面を床面としており、しまりのある平坦な面である。床面から 3 個のピット（Ｐ1～3）が検出されたが、いづれも柱穴とは考えられない。周溝・カマドは検出されなかった。

[遺物]出土しなかった。

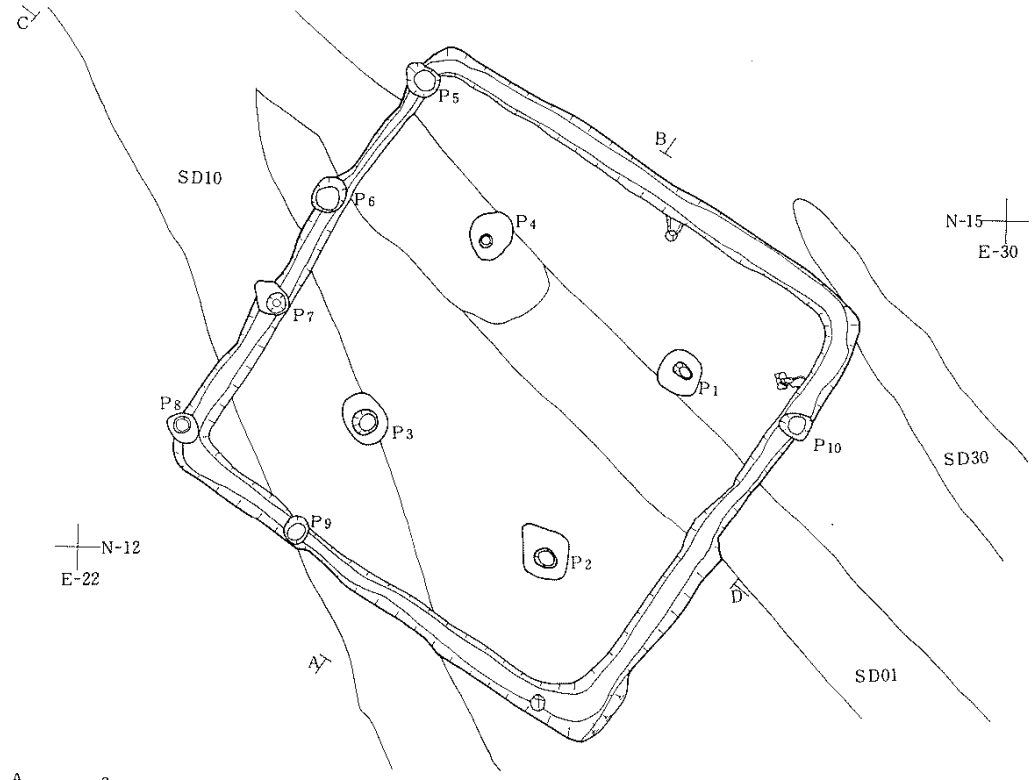


第14図　第08号住居跡

第 10 号住居跡（ＳＩ－10：第 15・16 図）

[重複] ＳD01・10・30 溝跡と重複し、これらに切られている。また、ＳB12・18 掘立柱建物跡とは近接しており、同時存在はない。

[平面形・規模] 一辺 4.4～4.6m のほぼ隅丸方形である。



層No	土色	土性	備考	
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	炭化物を含む。	ＳＩ０６堆積土
2	暗赤褐色(5YR3/3)	シルト	焼土を多く含む。	ＳＩ０６カマド内堆積土
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	焼土を多く含み、下位は焼け面。	
4	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山粒を多量に含む。	ＳＩ０６掘り方埋
5	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	炭化物・地山粒を含む。	ＳＩ０５堆積土
6	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒を少量含む。	ピット８堆積土
7	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山粒を多量に含む。	ＳＩ０５掘り方埋
a	褐色(10YR4/6)	砂質シルト		
b	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	しまりがあり、堅い。	ＳＸ０３堆積土

層No	土色	土性	備考	
1	暗褐色 (7.5YR3/4)	砂質シルト	地山ブロックを含む。	大別第Ⅰ層人為的埋土
2	暗褐色 (7.5YR3/4)	砂質シルト	多量の地山粒と少量の炭化物を含む。	
3	暗褐色 (7.5YR3/4)	砂質シルト	地山粒を含む。	
4	黒褐色 (7.5YR2/2)	シルト	炭化物を多く含む。	大別第Ⅱ層
5	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	地山粒・炭化物を含む。	
6	極暗褐色(7.5YR2/3)	砂質シルト	炭化物を多く含む。	大別第Ⅲ層
7	黒褐色 (7.5YR2/2)	シルト	地山粒を含む。	
8	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	地山粒・炭化物を含む。	大別第Ⅳ層周溝内堆積土
9	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト	地山ブロック・炭化物を含む。	
10	黄褐色 (10YR5/8)	ローム	暗褐色土が混じる。	掘り方埋土

第15図　第10号住居跡

[壁]地山を掘り込んで壁としている。北壁側では削平が大きく、残存する壁高は最大で 12 ㎝である。他の壁では 18～22 ㎝の残存高があり、周溝底面からは急角度でたちあがっている。

[床面]壁沿いの部分では住居掘り方があり、掘り方埋土上面を床面としているが、中央部では地山を床としている。ほぼ平坦であり、堅くしまっている。

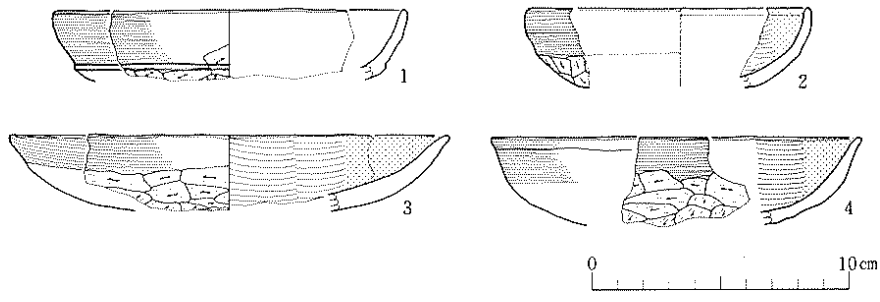
[柱穴]主柱穴と壁柱穴が検出された。主柱穴は住居平面形の対角線上に 4 個（P1～4）が方形に配され、平面形は楕円形あるいは隅丸方形状である。柱痕跡は径 14～20 ㎝の円形で、深さは 20～35 ㎝である。柱間隔は東西が 2.0～2.1m、南北が 1.9～2.05m である。一方、壁柱穴は西壁側で 4 個（P5～8）がほぼ 1m の間隔で、南・東壁でそれぞれ 1 個（P9・10）が検出された。平面形は円形で、柱痕跡の明らかなものは径 15 ㎝ほどの円形で深さは周溝底面から 4～9 ㎝である。

[周溝]検出された壁下で認められた。幅は 25～30 ㎝で底面には凹凸がある。深さは 3～10 ㎝で断面形は逆台形状を呈している。

[カマド]検出されなかった。ただし、北壁中央部床面上に焼土塊と焼面が認められており、この部分にあった可能性も考えられる。

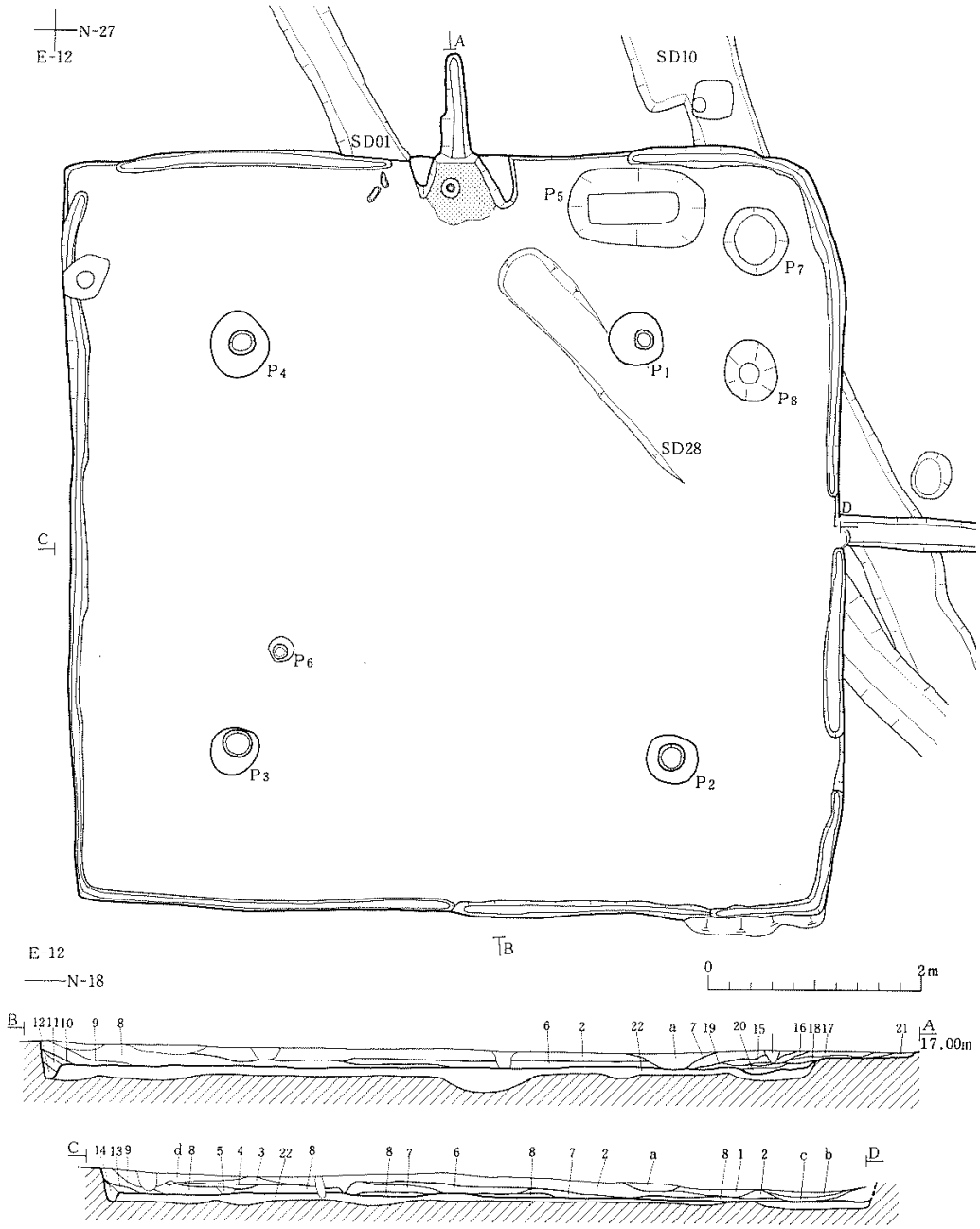
[堆積土]9 枚の層が観察され（層Ｎｏ1～9）、Ⅳ層に大別された。Ⅰ層は地山粒・ブロックを含み住居中央部に、Ⅱ層は床面上に堆積している。また、Ⅲ層は壁浴いに、Ⅳ層は周溝内に堆積土している。Ⅰ層は層相から人為的埋土である可能性がある。

[遺物]第 16 図の資料は床面（1・2）・堆積土（3・4）出土の非ロクロ丸底土師器坏である。1 は体部に段が、2 は軽い稜がつき、口縁部が内湾気味に立ち上がっている。3・4 は器壁に屈曲がなく、底部から口縁部まで丸みを持って外傾し、3 は口縁部が大きく開いている。図示資料以外では床面から非ロクロ土師器甕の体部・底部破片が見られ、外面にヘラケズリ調整が施されている。



番号	種別	層位	外面	底部	内面	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	登録	図版No
1	土師器 坏	床面	口縁部；横ナデ、体部；ヘラケズリ		摩滅不明	(136)		(27)	13	
2	土師器 坏	床面	口縁部；横ナデ、体部；ヘラケズリ		ヘラミガキ→黒色処理	(120)		(31)	14	
3	土師器 坏	6層	口縁部；横ナデ、体部；ヘラケズリ		ヘラミガキ→黒色処理	(190)		(29)	15	
4	土師器 坏	2層	口縁部；横ナデ、体部；ヘラケズリ		ヘラミガキ→黒色処理			(35)	16	

第16図　第10号住居跡出土遺物



第17図　第11号住居跡

第 11 号住居跡（ＳＩ－11：第 17～19 図）

[重複] ＳD01・10・28 溝跡と重複し、これらに切られている。また、住居の東側には外延溝があり、ＳB12・13・15・16・19 掘立柱建物跡、ＳK111 土壙に切られている。さらに直接の重複はないが、ＳＩ18 住居跡・ＳB07 掘立柱建物跡とは近接しており同時存在はない。

[平面形・規模] 一辺 7.2～7.25m のほぼ正方形である。

[壁] 地山を掘り込んで壁としている。周溝底面からほぼ垂直に立ち上がり、残存する壁高は 20～25 ㎝である。

[床面] 住居には掘り方があり、掘り方埋土上面を床面としている。ほぼ平坦でしまりがあり、全体に炭化物・焼土の分布が見られ、カマド周辺で顕著であった。

[柱穴] 住居平面形の対角線上に 4 個（P1～4）が方形に配され、径 45～60 ㎝の円形を基調とし、柱痕跡は径 22～30 ㎝の円形で、深さは 62～68 ㎝である。柱間隔は東西が 3.8～4.0m、南北が 3.8～3.9m である。

[周溝] カマド部分・北西隅・東壁側の一部を除き認められた。幅は 12～16 ㎝、深さは床面から 11～16 ㎝で、断面形は「U」字状を呈している。

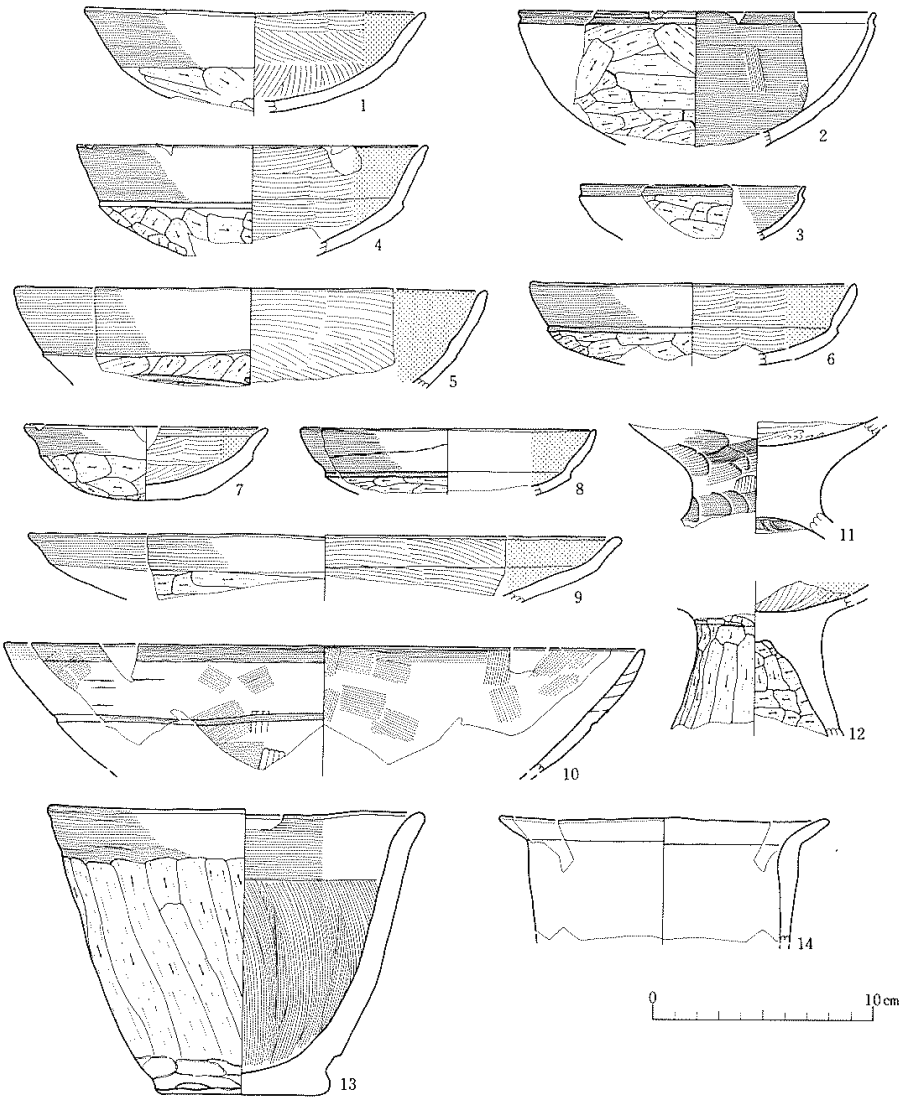
[カマド] 北壁中央部に敷設され、燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は最大幅 1.1m・奥行き 0.6m で、側壁は粘土積上げによって構築され、西側部分はＳD01 によって壊されている。底面は浅い窪み状を呈し、側壁内面とともに堅く赤変している。底面中央部には支脚として使用されたと考えられる土師器甕が逆位に据えられていた。煙道部は約 1m の長さで深さは 4～8 ㎝である。

[貯蔵穴状ピット] カマド右脇に位置している（P5）。長軸 1.3m・短軸 0.7m の楕円形を呈し、深さは 30 ㎝ほどである。堆積土中には焼土・炭化物を多く含み、土師器坏などが底面から出土している。

[その他の施設] 住居東壁のほぼ中央部から東に向かって外延溝が見られる。幅 20～25 ㎝・深さは最大 16 ㎝で、約 20m の長さが検出された。

層No	土色	土性	備考	
1	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト	地山粒を含む。	大別第Ⅰ層 人為的埋土
2	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト	地山ブロックを多量に含む。	
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロックを斑状に含む。	
4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロックを多く含む。	
5	黄褐色 (10YR5/8)	シルト	地山ブロック。	
6	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒をほとんど含まない。	
7	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒を含む。	
8	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	多量の炭化物と僅かの地山粒を含む。	大別第Ⅱ層
9	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロックを多く含む。	周溝内堆積土
10	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト		
11	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	地山粒を僅かに含む。	
12	黒褐色 (10YR3/2)	シルト		
13	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト		

層No	土色	土性	備考	
14	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロックを多く含む。	大別第Ⅳ層 カマド内 堆積土
15	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト		
16	暗赤褐色 (5YR3/2)	シルト	天井崩落ブロック。	
17	暗赤褐色 (5YR2/3)	シルト		
18	暗　色 (7.5YR4/3)	シルト	焼土・炭化物を多量に含む。	
19	暗赤褐色 (5YR3/6)	シルト	焼土を多く含む。	
20	暗赤褐色 (2.5YR2/4)	シルト	焼土・炭化物層。	
21	極暗褐色 (7.5YR2/3)	シルト	炭化物を含む。	
22	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	暗褐色土・多量の地山ブロックと混在	掘り方埋土
a	灰褐色 (7.5YR4/2)	砂質シルト		SD1 堆積土
b	灰褐色 (7.5YR4/2)	砂質シルト	均質土で混入物なし。	SD28 堆積土
c	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト		
d	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	地山ブロックを含み、しまりなし。	撹乱？



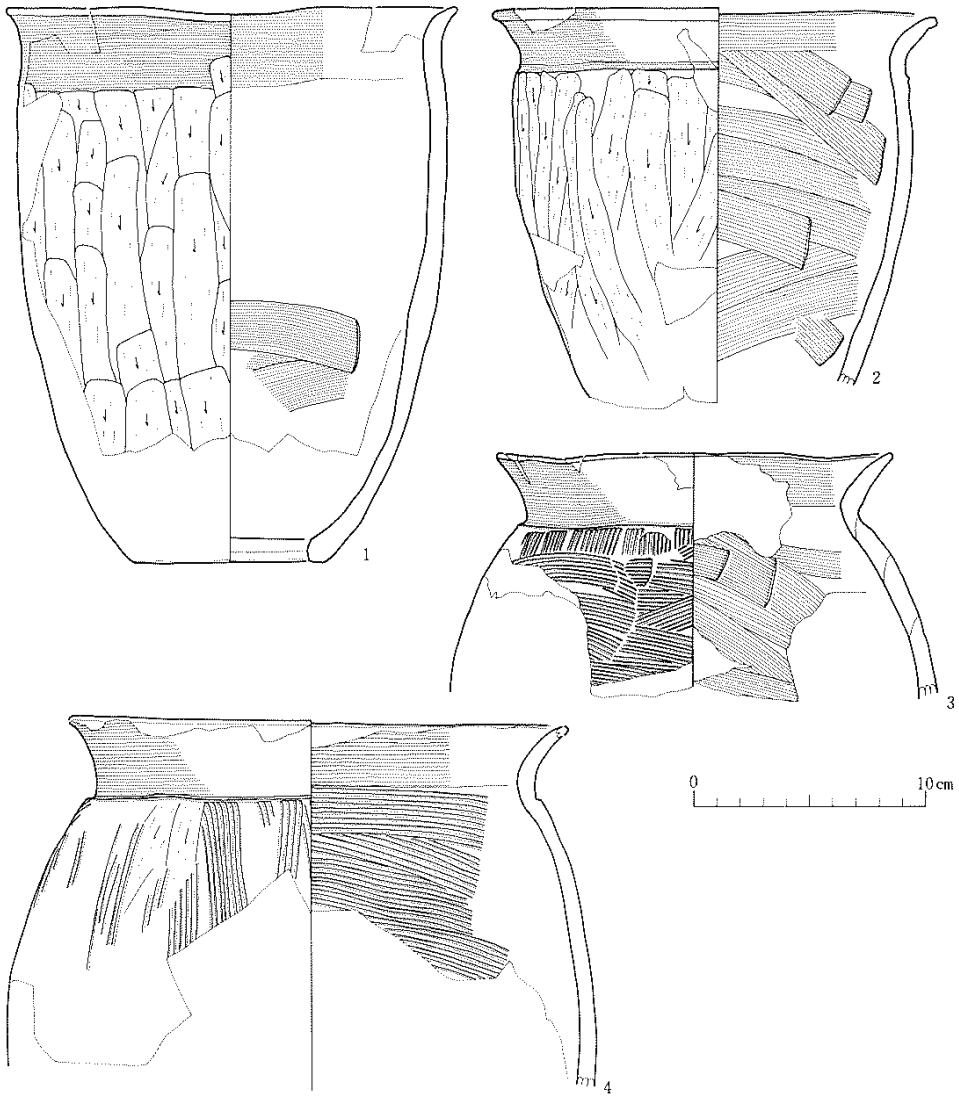
番号	種別	層位	外面	底部	内面	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	登録	図版No
1	土師器 坏	床面	口縁部；横ナデ、体部；ヘラケズリ		ヘラミガキ・黒色処理	154		(47)	17	19-5
2	土師器 坏	床面	口縁部；横ナデ、体部；ヘラケズリ		ナデ	(161)		(61)	18	19-6
3	土師器 坏	床面	口縁部；横ナデ、体部；ヘラケズリ		ナデ			(24)	19	
4	土師器 坏	ピット5	口縁部；横ナデ、体部；ヘラケズリ		ヘラミガキ→黒色処理	158		(52)	20	19-7
5	土師器 坏	ピット5	口縁部；横ナデ、体部；ヘラケズリ		ヘラミガキ→黒色処理	(212)		(45)	21	
6	土師器 坏	周溝	口縁部；横ナデ、体部；ヘラケズリ		ヘラミガキ→黒色処理	147		(38)	22	19-8
7	土師器 坏	掘り方埋	口縁部；横ナデ、体部；ヘラケズリ		ヘラミガキ→黒色処理	110		34	23	19-9
8	土師器 坏	1・2層	口縁部；横ナデ、体部；ヘラケズリ		ヘラミガキ→黒色処理	134		(30)	24	
9	土師器高坏	床面	口縁部；横ナデ、体部；ヘラケズリ		ヘラミガキ→黒色処理	268		(30)	25	
10	土師器高坏	床面直上	口縁部；横ナデ・ナデ、体部；ナデ		ヨコナデ・ナデ				26	19-12
11	土師器高坏	床面	脚部；ナデ		坏；ヘラミガキ・脚；ヘラナデ			(51)	27	19-10
12	土師器高坏	周溝	脚部；ヘラケズリ		坏；ミガキ→黒、脚；ヘラケズリ			172	28	19-11
13	土師器 甕	カマド	口縁部；横ナデ、体部；ヘラケズリ	ヘラケズリ	口縁部；横ナデ、体部；ナデ	172	79	130	29	20-2
14	土師器 甕	床面直上	摩滅のため調整不明		摩滅のため不明	150		(57)	30	20-1

第18図　第11号住居跡出土遺物

[堆積土]21 枚の層が観察され（層Ｎｏ1～21）、Ⅳ層に大別された。Ⅰ層は地山粒・ブロックを含み住居中央部の広い範囲に堆積し、3 層では暗褐色土と混じり斑状になっている。Ⅱ層は床面中央部に部分的に、Ⅲ層は壁沿いや周溝内に、Ⅳ層はカマド内に堆積土している。Ⅰ層は層相から人為的埋土である可能性がある。

[遺物]各住居跡を通じて最も多くの遺物が出土しており、図示できた資料はいづれも非ロクロ土師器で 18 点を数える（第 18・19 図）。第 18 図 1～8 は丸底坏で、1～6 は床面・貯蔵穴状ピット・周溝からの出土であり住居に伴う遺物と考えられる。2・3 を除き器壁の中央部に段（4～6・8）あるいは稜（1・7）を有し、対応する内面にも稜が見られる。内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されている。口縁部は 1・4 が外傾、5・6・8 が内湾気味に外傾、7 が僅かに外反している。法量では 5 が大きく、7・8 が小さい。一方、2・3 は内湾気味に立ち上がる体部に短く外反する薄い口縁部を有するもので、口縁部と体部の境は沈線状に窪んで稜を形成し、対応する内面にも稜が見られる。2 は法量が大きく、3 は小さい。9～11 は高坏でカマド右側の床面あるいは周溝内から出土している。9・10 は坏部である。1～8 の坏に比べて法量は大きいが、器形に大きな違いはない。器面調整は 9 が内黒坏類と同様であり、10 は内外面ともにナデ調整が施されている。11・12 は脚部である。11 は短い中実の柱状部と大きく開く裾部からなり、12 は中空の円錐台状を呈している。9 と 12、10 と 11 はそれぞれ同一個体の可能性がある。13・14・第 19 図 2～4 は甕である。13 はカマドの支脚として使用されたもので、体部が外傾して立ち上がり、口縁部が僅かに外反している。14 は床面の直上から、2～4 はＰ4 周辺の堆積土 1・2 層中からまとまって出土したものである。14・2 は長胴形で口縁部が外反し、3・4 は体部が膨らみ口縁部は「く」字状に屈曲している。1 は床面出土の無底式の甑である。体部は直立気味に立ち上がる長胴形で口縁部が僅かに外反している。

なお、図示できなった遺物として床面出土の須恵器坏破片（体部下半～底部に回転ヘラケズリ再調整あり）と円面硯の脚部と考えられる透かし窓のついた小片がある。



番号	種別	層位	外面	内面	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	登録	図版No
1	土師器 甕	床面	口縁部；横ナデ、体部；ヘラケズリ	口縁部；横ナデ、体部；ヘラナデ	194	82	242	31	20-3
2	土師器 甕	1・2層	口縁部；横ナデ、体部；ヘラケズリ	口縁部；横ナデ、体部；ヘラナデ	192		(175)	32	20-4
3	土師器 甕	1層	口縁部；横ナデ、体部；ハケメ	口縁部；横ナデ、体部；ヘラナデ	171		(105)	33	
4	土師器 甕	1・2層	口縁部；横ナデ、体部；ハケメ後ケズリ	口縁部；横ナデ、体部；ハケメ	(215)		(160)	34	20-5

第19図　第11号住居跡出土遺物

第 12 号住居跡（ＳＩ－12：第 20 図）

[重複]ＳＢ08・21 掘立柱建物跡、ＳＫ101・139・161 土壙、ＳＤ10 溝と重複し、ＳＫ139 を切り、他には切られている。

[平面形・規模]削平により壁は壊され残存しない。残存する床面から推して一辺 5m ほどの隅丸方形を呈するものと考えられる。

[床面]中央部は地山面を床面とし、周縁部では掘り方があり、その埋土上面を床面としている。床面の北壁中央部寄りでは炭化物の分布が見られた。

[柱穴]床面からは 12 個のピット（Ｐ1～12）が検出され、このうち住居平面形の対角線上に方形に位置するＰ1～4 が柱穴と考えられる。平面形は不整楕円形あるいは不整方形で、柱痕跡は径 20 ㎝ほどの円形を呈し、深さは 20～30 ㎝である。柱間隔は東西が 2.4～2.8m、南北が 2.9～3.2m である。

[周溝・カマド・堆積土]検出されなかった。

[遺物]図示資料は床面出土の非ロクロ土師器坏 2 点（1・2）とＰ6 出土の須恵器坏（3）である。1・2 ともに有段で底部は平底気味の丸底である。段の位置は 1 が底部のすぐ上、2 は器面の中央より僅かに下で、段に対応する内面には稜が見られる。1 は口縁部が長く、内湾気味に立ち上がり、2 は外傾している。3 は小形品で体部下端に丸みを持ち、口縁部まで直立気味に外傾している。底部は中央部が僅かに窪んでいる。体部下端～底部には再調整として回転ヘラケズリが施されている。図示資料以外では非ロクロ土師器坏・甕・甑、須恵器甕・蓋・壺の小片が数点出土している。

第 13 号住居跡（ＳＩ－13：第 21 図）

[重複]直接の重複はないが、ＳＢ10 掘立柱建物跡とは近接しており同時存在は考え難い。

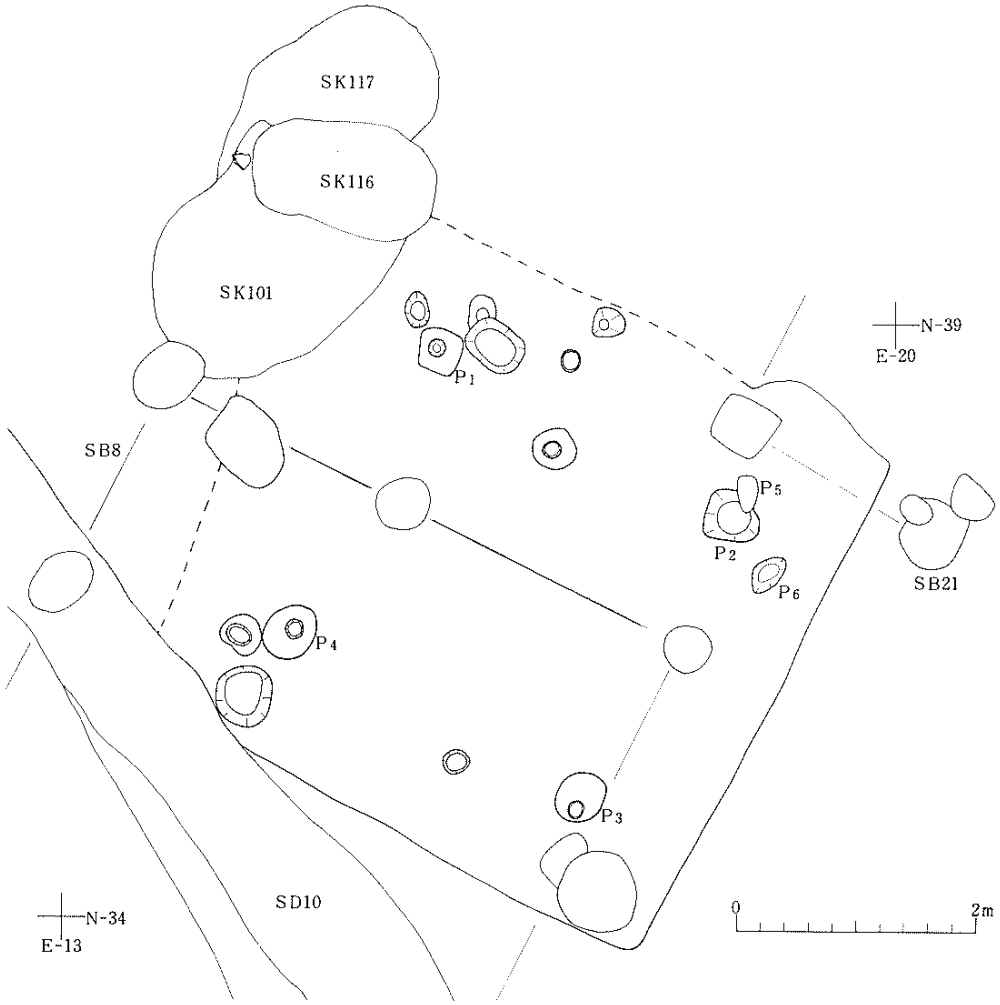
[平面形・規模]全体的に削平が著しく、北半部分の周溝が僅かに残存するだけである。残存部から推して平面形は方形基調と考えられ、規模は北辺が 5.5m で東西辺は 3.4m まで確認される。

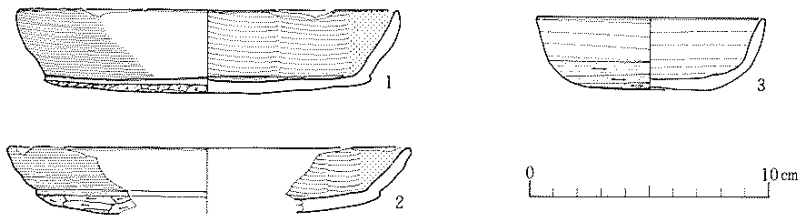
[床面]周溝で囲まれた範囲は小礫混じりの地山面となっており、平坦で東側に僅かに傾斜している。使用時の床面は削平され、掘り方底面が現れている可能性が強い。

[柱穴]床面推定域から 10 個のピット（Ｐ1～10）が検出され、いづれにも柱痕跡は認められていないが、Ｐ1・2 は位置・規模・堆積土に共通性があり柱穴と考えられる。平面形は長軸 35 ㎝ほどの楕円形を呈し、Ｐ1 は 30 ㎝、Ｐ2 は 18 ㎝の深さがあり、柱間隔は 3.1m である。

[周溝]西辺から北辺中央部までと東辺北側で検出された。幅は 20～25 ㎝で底面には凹凸がある。北西隅が最も深く 28 ㎝、東辺では 7～9 ㎝、西辺では 9～12 ㎝である。

[カマド・堆積土]検出されなかった。





番号	種別	層位	外面	底部	内面	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	登録	図版No
1	土師器 坏	床面	口縁部；横ナデ、体部；ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	160	136	35	35	21-2
2	土師器 坏	床面	口縁部；横ナデ、体部；ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	(176)		(28)	36	
3	須恵器 坏	ピット6	ロクロ調整、体下部；回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	ロクロ調整	96	50	30	37	21-1

第20図　第12号住居跡

[遺物]出土しなかった。

第14号住居跡（ＳＩ－14：第22図）

[重複]風倒木痕を切り、ＳＢ18掘立柱建物跡・ＳＤ10・30溝に切られている。

[平面形・規模]東西に長い隅丸長方形で、規模は3.8m×2.7mである。

[壁]地山を掘り込んでおり、残存する壁高は 10～18 cmである。床面からは急角度で立ち上がっている。

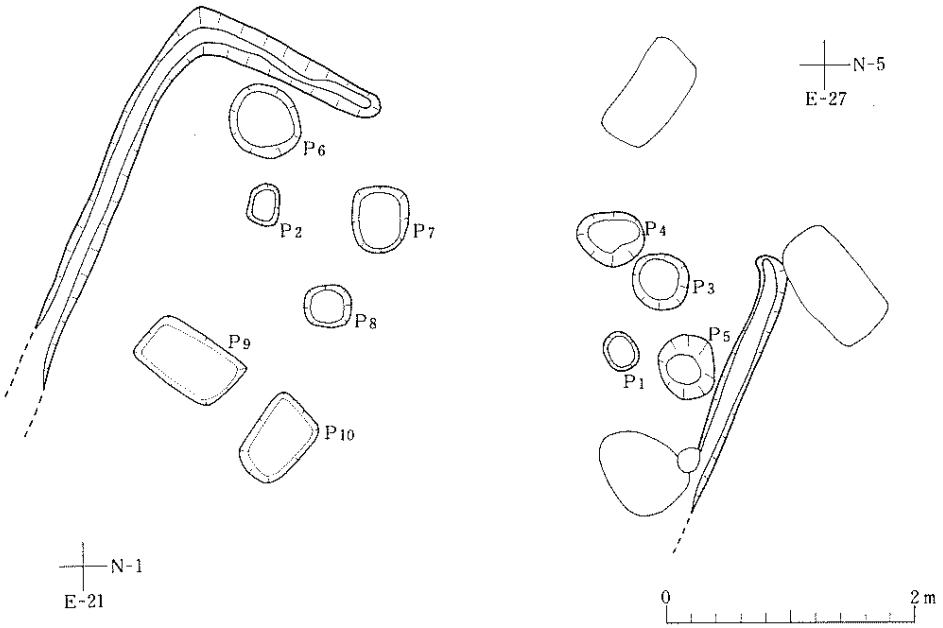
[床面]北東隅の部分は風倒木痕の堆積土を床面としているが、他は地山を床面としている。ほぼ平坦である。

[柱穴]床面から4個のピット（Ｐ1～4）が検出されている。柱痕跡がないこと、配置に規則性がないことから柱穴とは考えられない。

[周溝]南東隅・南西隅で部分的に検出された。幅は10～18cm、深さは床面から1～4cmである。断面形は「U」字状を呈している。

[カマド]東壁の中央部に敷設されており、燃焼部が検出された。燃焼部は最大幅約1m・奥行き40cmで、側壁は粘土積上げで構築されている。燃焼部底面は僅かに窪んでいる。

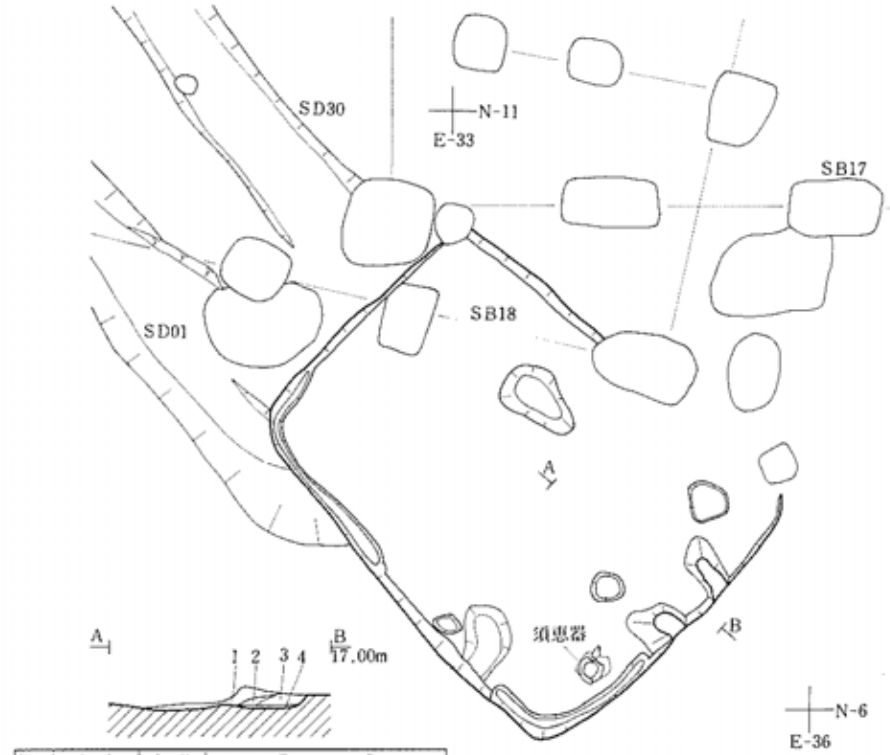
[堆積土]重複するＳＤ10を掘下げる際に住居のプランが未確認だったため、あやまって住居堆積土の大部分を掘り下げてしまった。そのため、堆積状況はカマド周辺を除いて不明瞭で



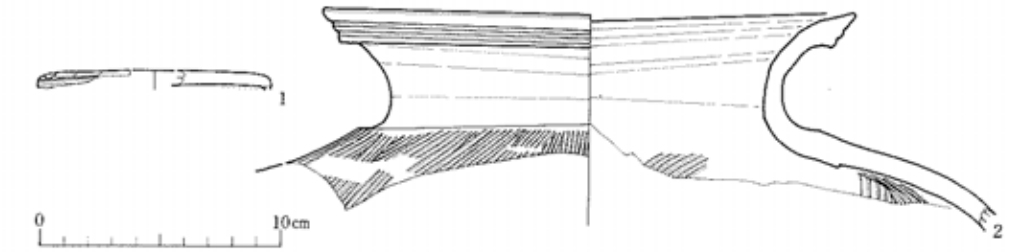
第21図　第13号住居跡

ある。確認された層は4枚（層Ｎｏ1～4）で、1が床面を覆い2～4はカマド内の堆積土である。

[遺物]図示できた資料は床面出土の2点だけである。1は非ロクロ土師器蓋の小片である。天井部はほぼ平坦で短い口縁部が垂下している。2は須恵器甕である。口頸部が外反し、肩部が大きく張り出している。口縁部は縁帯状で2条の沈線が巡っている。他に非ロクロ土師器坏（内黒）・甕・甑の小片、須恵器甕・蓋・壺の小片が出土している。



層No	土色	土性	備考	
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	炭化物を少量含む。やや粘性あり。	
2	暗色(10YR4/4)	シルト	焼土を含む。	
3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	焼土・炭化物を含む。	カマド内堆積土
4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒を含む。	



番号	種別	層位	外面	底部	内面	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	登録	図版No
1	土師器 蓋	床面	口縁部：横ナデ、天井部：ヘラケズリ		ヘラミガキ→黒色処理	(76)		(31)	38	
2	須恵器 甕	床面	口縁部：ロクロ調整、体部：平行タタキ		体部：平行タタキ	220		(91)	39	21-3

第22図　第14号住居跡

第 15 号住居跡（ＳＩ－15：第 23 図）

[重複]ＳＢ25 掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。また、ＳＢ20 掘立柱建物跡とは近接しており、同時存在はない。

[平面形・規模]全体に削平を受けており、壁は残存しない。また、南半部分は調査区外に延びている。周溝および残存する床面から推して平面形は方形基調と考えられる。規模は北辺が 6.1m で西辺は 5.2m まで確認された。

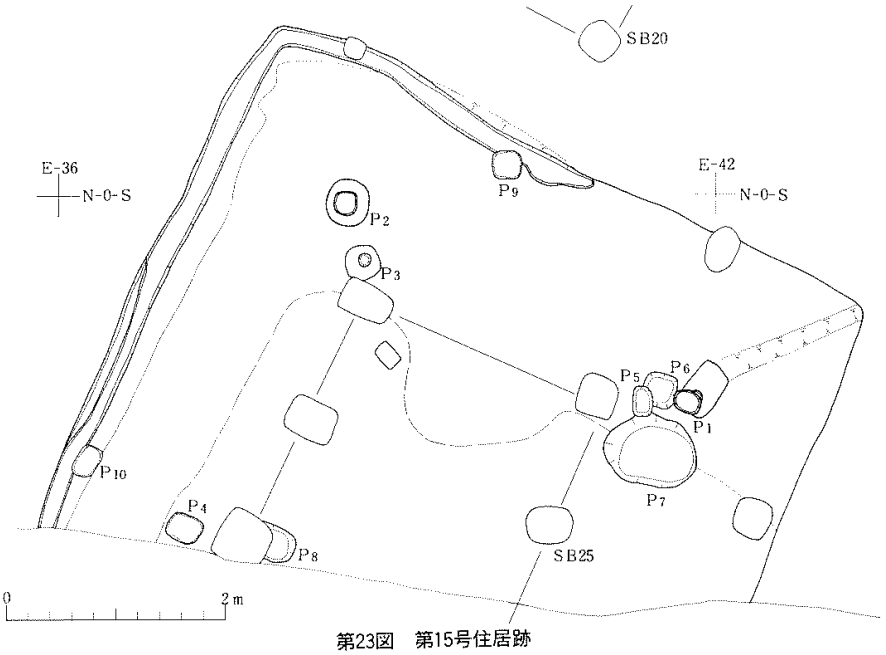
[床面]地山を床面としている。東側は削平がひどく地山面も削られている。

[柱穴]床面から 10 個のピット（Ｐ1～10）が検出され、1～3 に柱痕跡が認められた。1・2 は推定される住居平面形の対角線上に位置し、ともに柱痕跡が径 20 ㎝ほどの略円形で深さが 40～45 ㎝と似ていることから本住居に伴う柱穴と考えられる。3 は 2 に近すぎること、規模が小さく深さも 5 ㎝と浅いことから 1・2 と組み合う柱穴とは考えられない。なお、柱痕跡は検出できなかったもののＰ4 はその位置から 1・2 と組み合う柱穴の可能性が考えられる。柱間隔は 1～2 が 3.6m、2～4 が 3.4m である。

[周溝]北辺中央部から西辺にかけて検出された。幅は 16～24 ㎝、深さは床面から 4～5 ㎝で断面形は「Ｕ」字状を呈している。

[カマド・堆積土]検出されなかった。

[遺物]出土しなかった。

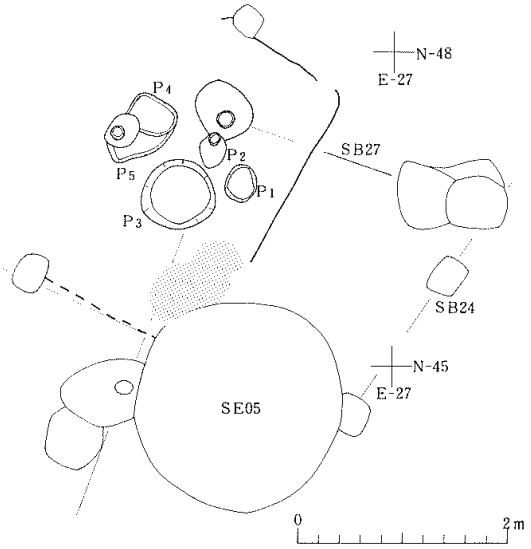


第23図　第15号住居跡

第 16 号住居跡（ＳＩ－16：第 24 図）

[重複] ＳB24・26 掘立柱建物跡、ＳE05 井戸と重複している。ＳB26・ＳE05 に切られているが、ＳB24 とは直接の切り合い関係がなく新旧関係は不明である。

[平面形・規模]全体に削平を受けており壁は残存せず、北東隅を含む住居東側床面の一部を残すだけである。残存部から推して平面形は方形基調と考えられるが、規模については東辺が 3m ほど検出されただけであり、不明である。



第24図　第16号住居跡

[床面]検出された部分では住居掘り方埋土の上面を床面としている。ＳE06 に切られている東辺寄りでは焼土・炭化物の分布と焼け面が見られた。

[柱穴]住居内で 6 個のピット（P1～6）が検出され、2 では柱痕跡が認められているが、他に組みあうピットもなく、柱穴は不明である。

[周溝・カマド・堆積土]検出されなかった。

[遺物]出土しなかった。

第 17 号住居跡（ＳＩ－17：第 25 図）

[重複] ＳB26 掘立柱建物跡・ＳK102 土壙と重複し、前者を切り後考に切られている。

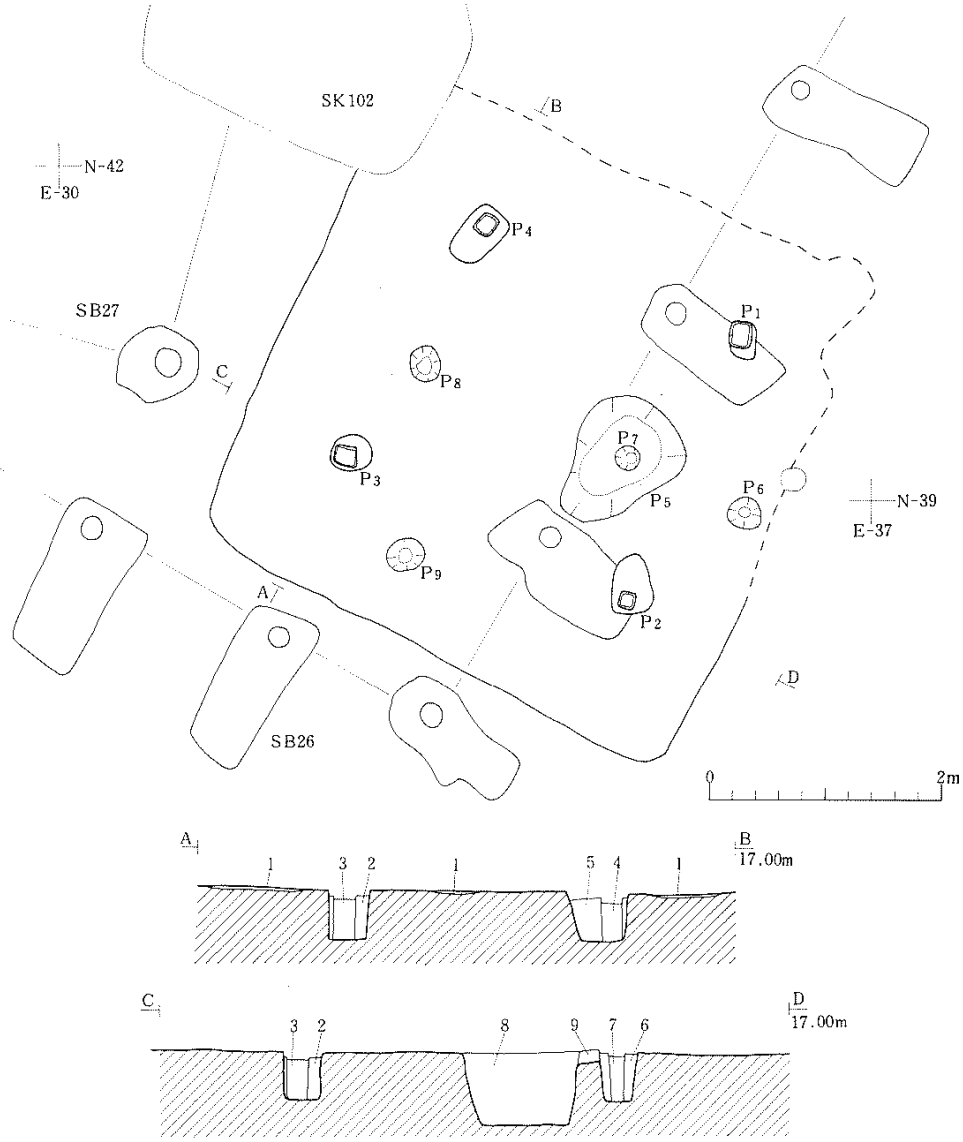
[平面形・規模]全体に削平を受けており、壁は残存せず床面の一部を残すだけである。残存部から推して一辺 4.4m ほどの正方形を呈するものと考えられる。

[床面]部分的に住居掘り方の埋土が残っており、その上面を床面にしたものと考えられる。

[柱穴]住居内で 9 個のピット（P1～9）が検出されている。このうち住居平面形の対角線上に方形に位置する P1～4 が柱穴と考えられる。平面形は不整円形あるいは楕円形で長軸が 30～50 ㎝である。柱痕跡は径 20 ㎝ほどの円形を呈し、深さは 30～40 ㎝である。柱間隔は東西が 2.4～2.6m、南北が 2.3～2.4m である。

[周溝・カマド・堆積土]検出されなかった。

[遺物]非ロクロ土師器甕の体部破片が数点出土しているだけである。



層No	土色	土性	備考	
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒を含む。	住居掘り方埋土
2	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	地山ブロックを多く含む。	ピット3埋土
3	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	焼土・炭化物・地山粒を含む。粘性あり	ピット3柱痕跡埋土
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒を多く含む。	ピット4埋土
5	暗褐色(10YR3/3)	シルト		ピット4柱痕跡埋土
6	黒褐色(10YR3/2)	シルト		ピット2埋土
7	暗褐色(10YR3/3)	シルト		ピット2柱痕跡埋土
8	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒を多く含む。	SB26柱穴埋土
9	黒褐色(10YR3/2)	シルト	パサパサしている。	

第25図　第17号住居跡

第 18 号住居跡（ＳＩ－18：第 26 図）

[重複]ＳＢ07 掘立柱建物跡・ＳＫ18 土壙と重複し、後者には切られるが前者との新旧関係は明らかではない。また、直接の重複関係はないがＳＩ03・04・11 住居跡とは近接しており、同時存在はないと考えられる。

[平面形・規模]全体に削平を受けており壁は残存しない。僅かに残る周溝から推して平面形は方形基調と考えられる。規模は南辺が約 4m で東辺は約 4.5m まで確認された。

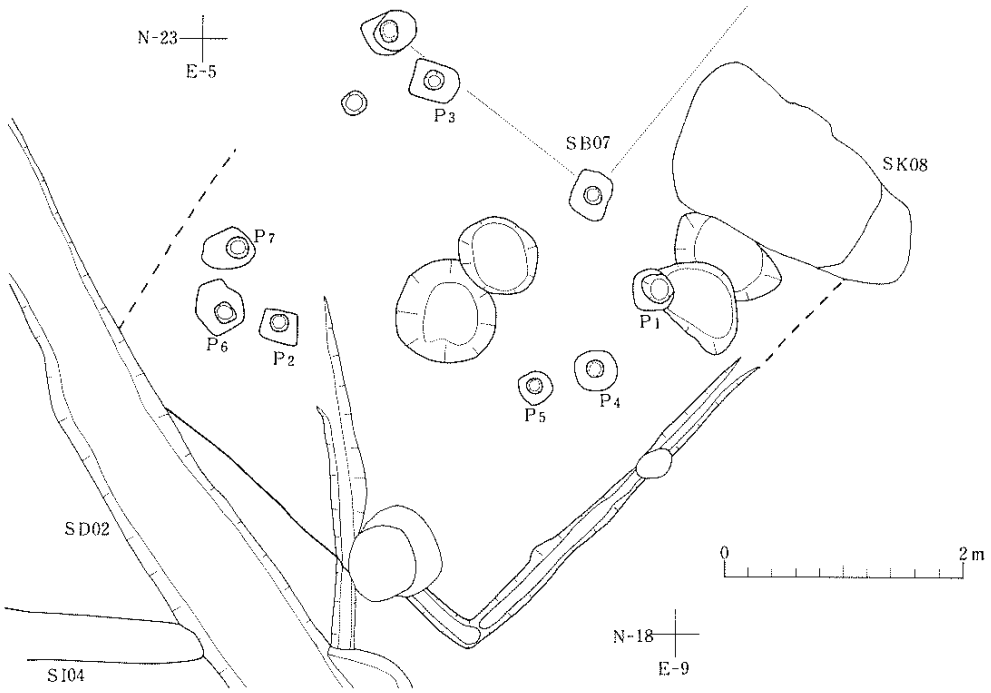
[床面]住居北側は地山面であり、南辺とした部分には僅かに掘り方埋土と思われる暗褐色土と地山の混じった土が認められた。北側では掘り方までも削平されている可能性がある。

[柱穴]住居床面と推測される範囲から柱痕跡を持つピットが 7 個（P1～7）検出されている。このうち住居平面形の対角線上に位置する 1～3 が柱穴と考えられ、南東部分の対応するであろうピットは検出できなかった。平面形は方形基調であり、柱痕跡は径 18 ㎝ほどの円形で深さは 32～39 ㎝である。柱間隔は東西が 2.6m で南北は 2.4m である。

[周溝]東辺～南辺にかけて検出された。幅は 20 ㎝ほどで深さは床面から 2～6 ㎝である。断面形は「U」字状を呈している。

[カマド・堆積土]検出されなかった。

[遺物]出土しなかった。



第26図　第18号住居跡

(2) 掘立柱建物跡と出土遺物

掘立柱建物跡は 31 棟が検出されている。これらは調査区の南側に集中しており、相互にあるいは他の遺構と重複するものが多い。以下に 7 ブロックに分けて説明を行う。

ＳＢ01・02・03・04・07・08 掘立柱建物跡（第 27・28 図）

調査区西側の建物群でこれらの建物跡には以下のような重複関係がある。

ＳＩ01・ＳK03→**ＳＢ01**→ＳＤ05、ＳK16→**ＳＢ02**→ＳＤ02

ＳＢ03→**ＳＢ04、ＳＢ03**→ＳK05→ＳＤ01

ＳＩ03→**ＳＢ07**→ＳＤ05、**ＳＢ07**←→ＳＩ18

ＳＩ12→ＳK101→**ＳＢ08**→ＳＤ01→ＳＤ10

[ＳＢ01 掘立柱建物跡]桁行 3 間、梁行 2 間の東西棟である。建物総長は桁行 6.95m・梁行 4.35m で、柱間は桁行が両側で 2.1m であるが、中央は 2.7m と長く、梁行は 2.2m 等間である。建物の方向は東妻でＮ－3°－Ｅである。柱穴は一辺 30～50 cmの方形を基調としており、埋土は地山（明黄褐色粘土質シルト）混じりの黒褐色土で堅くしまっている。柱痕跡は径 16～22 cmの円形あるいは不整円形で、深さは 38～87 cmである。西妻南隅の柱穴から非ロクロ土師器甕の体部破片が出土している。

[ＳＢ02 掘立柱建物跡]現存で東西 2 間、南北 1 間の建物跡である。ＳＤ02 溝が南北に分断するように伸びており、南北を繋ぐ柱穴 2 本がＳＤ02 溝によって壊されている可能性も否定できない。建物総長は東柱列で南北 3.6m、西柱列で南北 3.9m、南柱列で東西 4.0m、北柱列で東西 3.6m である。建物の方向は東柱列でＮ－24°－Ｅである。柱穴は径 25～31 cmの円形で、埋土は地山混じりの黒褐色土で、堅くしまっている。柱痕跡は径 13～19 cmの円形、深さは 20～31 cmである。

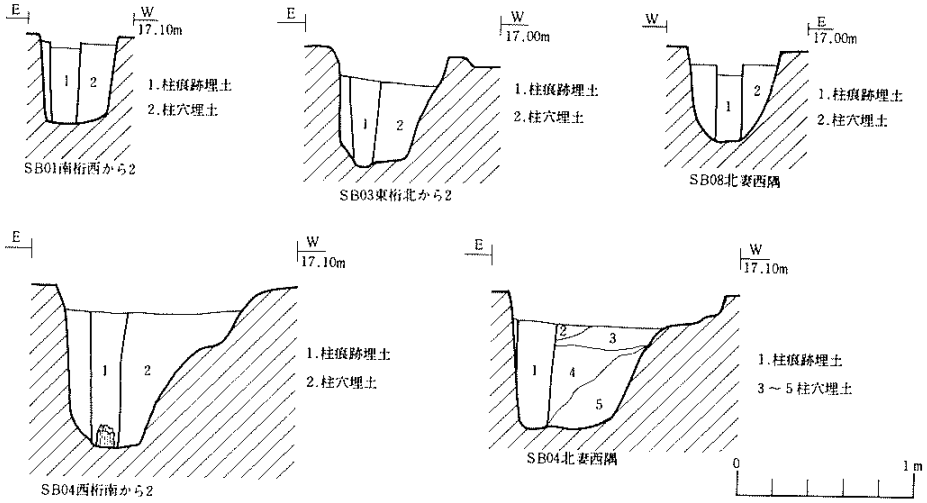
[ＳＢ03 掘立柱建物跡]桁行 3 間、梁行 2 間（北妻は 1 間割り）の南北棟で、西桁中央の柱間に対応して 1m ほどの張出しが付いている。北妻西隅の柱痕跡はＳＢ04 掘立柱建物跡に切られ不明である。建物総長は桁行 7.9m・梁行 3.7m で、柱間は桁行が東側柱列で北から 2.75m・2.3m・2.9m、梁行が南妻で東から 2.0m・1.65m である。建物の方向はＮ－3°－Ｅである。柱穴は長軸あるいは長辺が 50 cmほどの楕円形・不整方形で、深さは 25～30 cmであり、埋土は地山ブロックが混じる黒褐色土である。柱痕跡は直径 15～20 cmの円形である。

[ＳＢ04 掘立柱建物跡]桁行 3 間、梁行 2 間の南北棟で、ＳＢ03 掘立柱建物跡と重複し、これを切っている。建物総長は桁行 6.1m・梁行 4.2m で、柱間は桁行が東側柱列で北から 2.1

m・2.1m・2.0m、梁行が南妻で東から 2.05m・2.15m である。建物の方向はN－4°－Eである。柱穴は長軸が 0.6～1.1m・短軸が 0.5～0.7m の不整楕円形に近いもので、段状に掘り込まれ、建物の内部側が深く、最深部で 70～80 cmである（第 27 図）。埋土は地山ブロックが斑状に混じる黒褐色・暗褐色土である。柱痕跡は直径 15～30 cmの円形である。

[ＳＢ07 掘立柱建物跡]桁行 3 間、梁行 2 間の南北棟である。建物総長は桁行 6.35m・梁行 4.25m で、柱間は桁行が東側柱列で北から 2.05m・2.15m・2.15m、梁行が北妻で東から 2.25m・2m である。建物の方向はN－3°－Eである。柱穴は直径が 40 cmほどの円形基調で、深さは 30 cm ほどである。埋土は地山ブロックが混じる暗褐色土である。柱痕跡は直径 15 cmほどの円形である。

[ＳＢ08 掘立柱建物跡]桁行 4 間、梁行 2 間の南北棟である。建物総長は桁行 8.1m・梁行 4.9m で、柱間は桁行が西側柱列で北から 1.9m・2.1m・2m・2.1m、梁行が両妻とも東から 2.55m・2.35m である。建物の方向はN－0°－Eである。柱穴は直径あるいは長軸が 40～60 cmの円形・楕円形を呈し、深さは 40 cmほどある。埋土は地山ブロックが混じる暗褐色土である。柱痕跡は直径 20 cmほどの円形である。

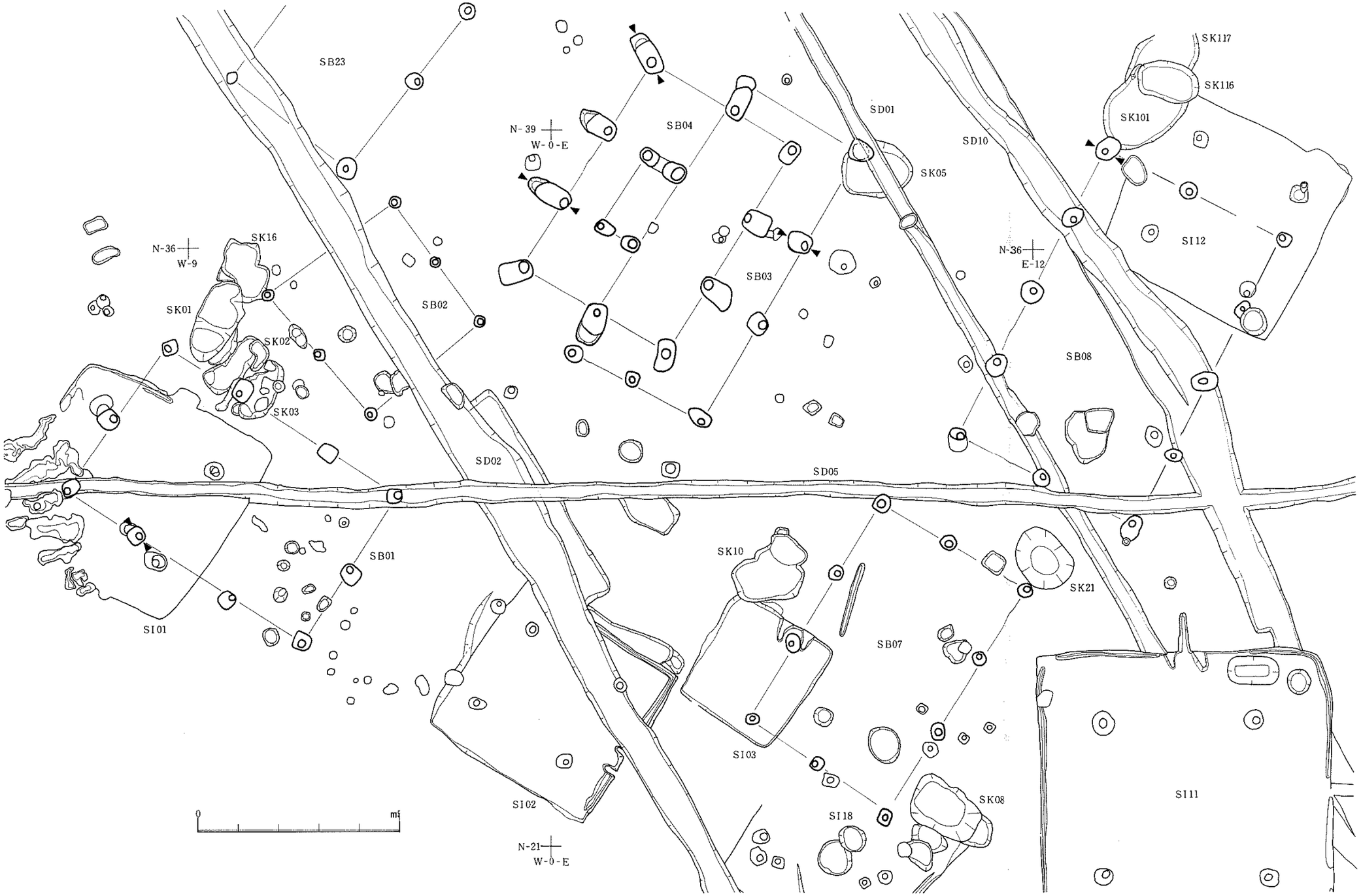


第27図　柱穴断面図（ＳＢ01・04・07・08）

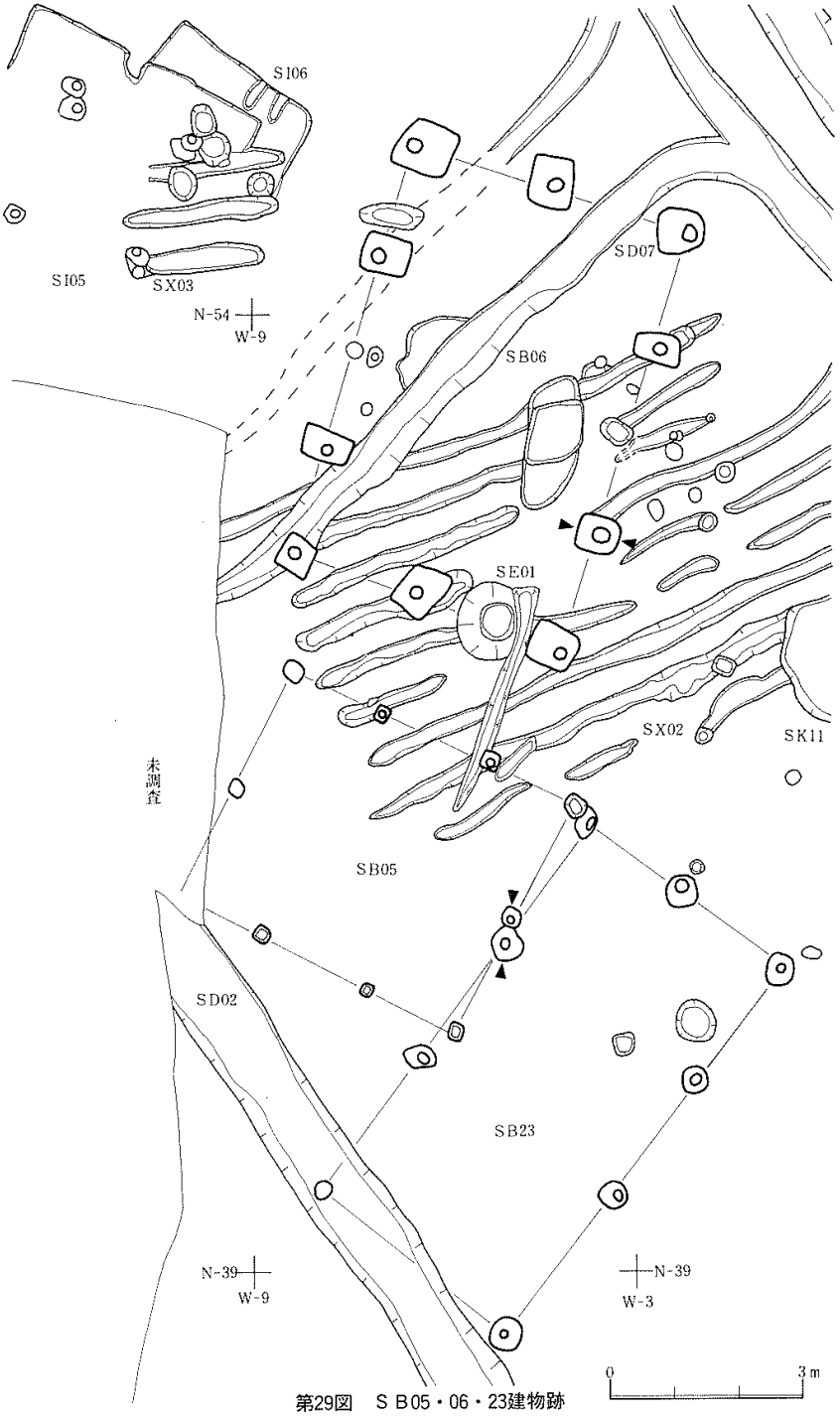
ＳＢ05・06・23 掘立柱建物跡（第 29・30 図）

これらの建物群には以下のような重複関係がある。

ＳＢ23→**ＳＢ05**→ＳＸ02→ＳＤ02、**ＳＢ06**→ＳＸ02→ＳＥ01



第28図　ＳＢ01～04・07・08・建物跡

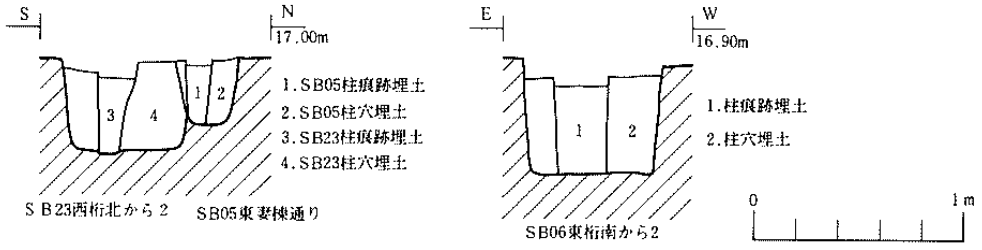


第29図　ＳＢ05・06・23建物跡

[ＳＢ05 掘立柱建物跡]桁行３間、梁行２間の東西棟で、西妻南桁の柱穴は調査区外のため不明である。ＳＢ23 掘立柱建物跡と重複し、これを切っている。建物総長は桁行 4.85m・梁行 4.0m で、柱間は桁行が北側柱列で東から 1.5m・1.85m・1.5m、梁行が東妻で北から 2m の等間隔である。建物の方向は東妻でＮ－10°－Ｗである。柱穴は一辺が 25～40 cmの方形を呈し、深さは 15～40 cmと一定しない。埋土は黒褐色土である。柱痕跡は直径 12～15 cmの円形である。

[ＳＢ06 掘立柱建物跡]桁行３間、梁行２間の南北棟である。建物総長は桁行 6.85m・梁行 4.55m で、柱間は桁行が東側柱列で北から 1.85m・3.0m・1.95m、梁行が南妻で東から 2.45m・2m である。建物の方向は東妻でＮ－10°－Ｗである。柱穴は長辺が 60～80 cmほどの方形を基調とし、深さは 40～50 cmである。埋土は地山ブロックが混じる暗褐色土である。柱痕跡は直径 20 cmほどの円形である。

[ＳＢ23 掘立柱建物跡]桁行３間、梁行２間の南北棟である。建物総長は桁行 7.2m・梁行 3.75m で、柱間は桁行が東側柱列で北から 2.15m・2.2m・2.8m、梁行は北妻で東から 2.0m・1.75m である。桁行では南妻寄りの柱間隔が他に比べ僅かに広くなっている。なお、南妻棟通り柱はＳＤ02 溝によって壊され、不明である。建物の方向はＮ－10°－Ｅである。柱穴は直径が 0.5m ほどの円形を基調とし、深さは 28～40m である。埋土は地山混じりの暗褐色土で、柱痕跡は直径 15 cmほどの円形である。

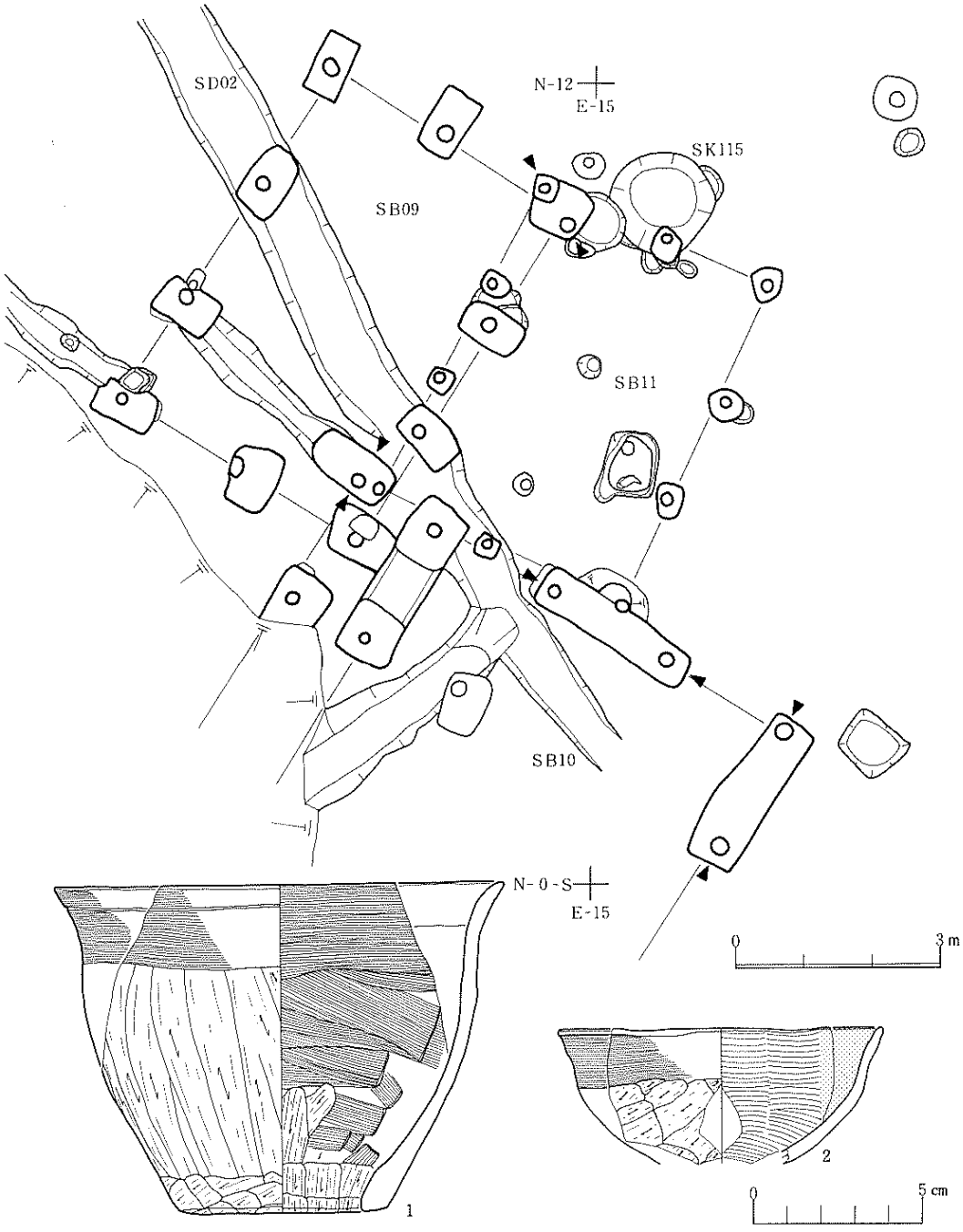


第30図　柱穴断面図（ＳＢ05・06）

ＳＢ09・10・11 掘立柱建物跡（第 31・32 図）

この３棟は重複しており、新旧関係は**ＳＢ09→ＳＢ11→ＳＢ10** である。他にＳＫ115→**ＳＢ11** の重複がある。

[ＳＢ09 掘立柱建物跡]桁行３間、梁行２間の南北棟である。建物総長は桁行 5.8m・梁行 4.25m で、柱間は桁行が東側柱列で 1.9m 等間、西側では北から 2.0m・2.0m・1.8m である。

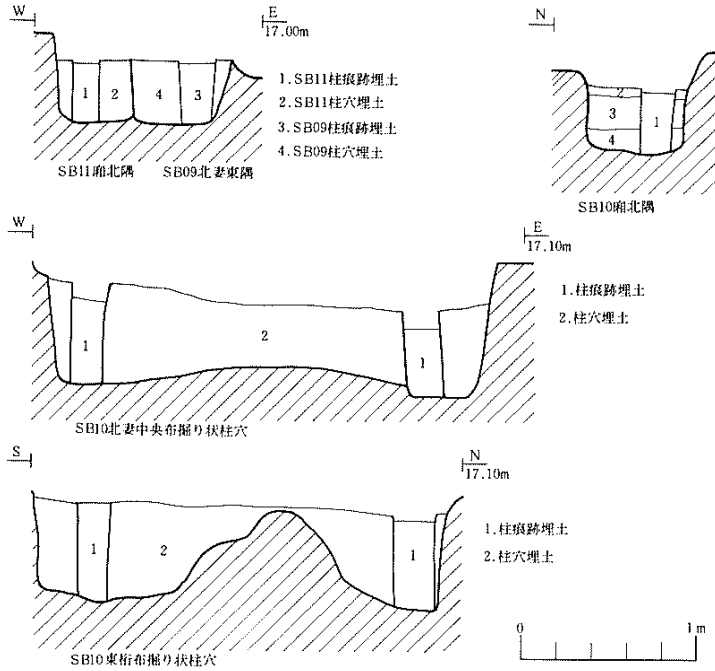


第31図　ＳＢ09・10・11と出土遺物

梁行は南妻で東から2.1m・2.0m、北妻で東から2.25m・2.0mである。建物の方向は西桁でN－5°－Eである。柱穴は長辺が1m前後・短辺が60～80cmほどの長方形を呈するものが多く、深さは50cm前後であり、埋土は小石や地山混じりの暗褐色土である。柱痕跡は直径20cmほどの円形である。

[ＳＢ10掘立柱建物跡]部分的な検出であるが桁行3間以上、梁行3間の南北棟と思われ、西桁側に1間の庇が取り付いている。建物総長は桁行が7m以上・梁行は北妻で身舎6.0m・庇1.3mである。柱間は桁行が東西柱列ともに1.9mで、梁行は北妻で東から2.0m・1.9m・1.9m・1.3mである。建物の方向は西桁でN－3°－Eである。柱穴は身舎では長辺が2.5m前後・短辺が60～80cmほどの長方形を呈し、ほぼ両端に2本の柱が配されている。いわゆる布掘り状の掘り方で、第32図に示すように深さは一様ではなく、柱位置に相当する部分の周辺のみを深く掘り込んでいる（60～75cm）。一方、底部分の柱穴は長辺1.3m・短辺0.7mほどの長方形で、深さは45cmほどである。埋土は身舎・庇ともに小石や地山混じりの暗褐色土で、柱痕跡は直径20cmほどの円形である。東桁柱穴埋土中から第31図2に示した非ロクロ丸底有段の土師器坏が出土し、他にも非ロクロ土師器甕の体部破片が出土している。

[ＳＢ11掘立柱建物跡]桁行3間、梁行2間の南北棟である。建物総長は桁行5.2m・梁行3.6mで、柱間は桁行が東側柱列で北から1.85m・1.65m・1.7m、梁行は北妻で東から1.65



第32図　柱穴断面図（ＳＢ09・10・11）

m・1.95m である。南妻西端の柱穴はＳＢ10 掘立柱建物跡の庇柱穴に切られ、不明である。建物の方向は東桁でＮ－7°－Ｅである。柱穴は長辺が 60 cm前後・短辺が 30～50 cmほどの方形あるいは楕円形を基調とし、深さは 30～60 cmである。埋土は地山混じりの暗褐色土で、柱痕跡は直径 15 cmほどの円形である。なお、東桁沿いの内部には長軸 1.0m・短軸 0.8m・深さ 12 cmほどの方形の落ち込みがあり、第 31 図 1 に示した非ロクロ土師器甑が出土している。

ＳＢ12・13・14・15・16・17・18・19 掘立柱建物跡（第 33・34 図）

このブロックでは以下ような重複が見られる。
ＳＩ11→**ＳＢ12**→ＳＫ104・ＳＤ01→ＳＤ10
ＳＩ11→**ＳＢ13**→**ＳＢ14**→ＳＫ105、ＳＩ11→**ＳＢ19**
ＳＢ17→**ＳＢ18**→**ＳＢ19**→**ＳＢ15**→ＳＫ105
ＳＩ14→**ＳＢ18**→**ＳＢ16、ＳＢ15**←→**ＳＢ16**

[ＳＢ12 掘立柱建物跡]桁行 3 間、梁行 2 間の南北棟である。建物総長は桁行 7.0m・梁行 4.8m で、柱間は桁行が西側柱列で北から 2.0m・3.1m・1.9m、梁行は南妻で東から 2.3m・2.5m である。桁行中央部の柱間が他に比べ広くなっている。建物の方向は東桁でＮ－7°－Ｅである。柱穴は一辺あるいは長軸が 50 cm前後の方形・楕円形を基調とし、深さは 30～50 cmである。埋土は暗褐色土で僅かに地山が混じっている。柱痕跡は直径 15～20 cmの円形である。

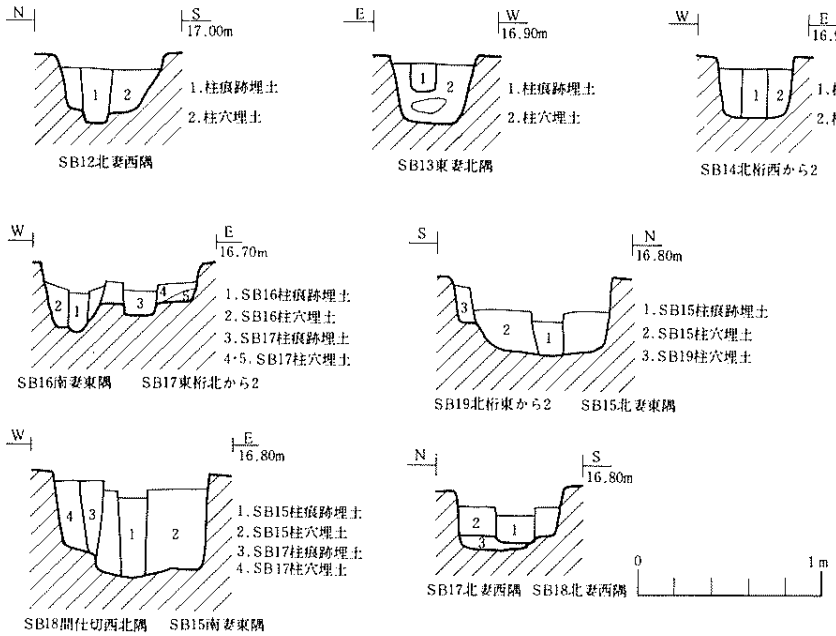
[ＳＢ13 掘立柱建物跡]桁行 3 間・梁行 2 間の東西棟である。建物総長は桁行 4.2m・梁行 4.15m で、柱間は桁行北側柱列で東から 1.3m・1.5m・1.4m、梁行は西妻で北から 2.1m・2.05m である。建物の方向はＮ－8°－Ｅである。柱穴は一辺が 30～50 cmの方形基調で、深さは 10 cm前後しかない。埋土は僅かに地山が混じる暗褐色土で、柱痕跡は直径 15～20 cmの円形である。

[ＳＢ14 掘立柱建物跡]桁行 3 間・梁行 2 間の東西棟である。建物総長は桁行 4.5m・梁行 3.6m で、柱間は桁行北側柱列で東から 1.3m・1.7m・1.5m、梁行は西妻で北から 1.65m・1.95m である。東妻棟通り下の柱穴はＳＫ105 土壙に切られ不明である。建物の方向はＮ－1°－Ｅである。柱穴は一辺が 30～50 cmの方形基調で、深さは 25～35 cmである。埋土は僅かに地山が混じる暗褐色土で、柱痕跡は直径 15～20 cmの円形である。北桁の西から 2 本目の柱穴から非ロクロ土師器甕の体部破片が出土している。

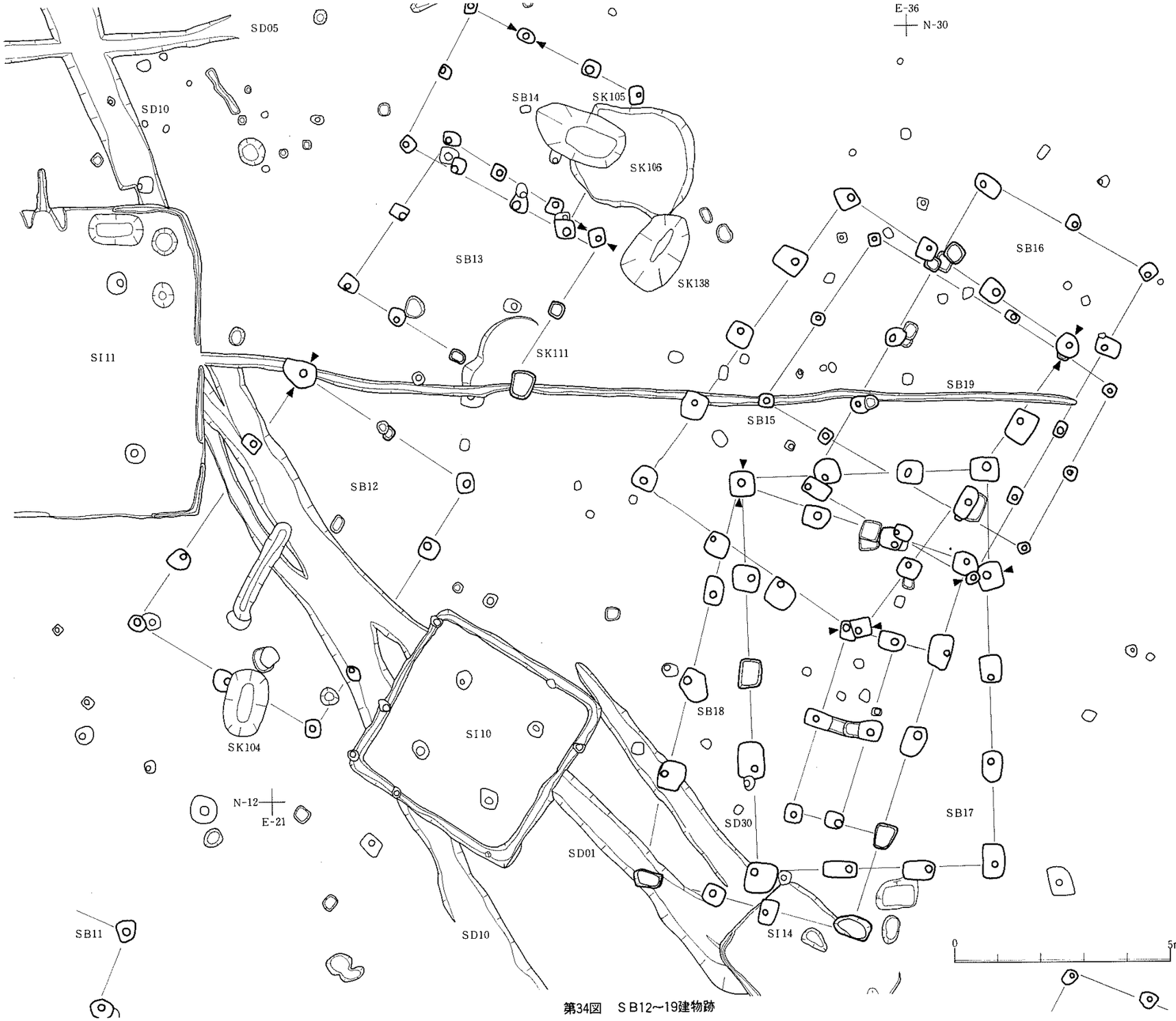
[ＳＢ15 掘立柱建物跡]桁行４間、梁行３間の南北棟である。建物総長は桁行8.3m・梁行6.2mで、柱間は桁行が西側柱列で北から３間が2.0m等間・2.15m、梁行は南妻で東から2.1m・1.9m・2.2mである。建物の方向はＮ－7°－Ｅである。柱穴は長辺が50～70cmの方形を基調とし、深さは50～60cmである。埋土は地山混じりの暗褐色土で、西桁の南４本の埋土には焼土が混在していた。柱穴からは非ロクロ土師器・須恵器壺の小破片が出土している。柱痕跡は直径15～20cmの円形である。

[ＳＢ16 掘立柱建物跡]桁行４間、梁行２間の南北棟である。建物総長は桁行8.2m・梁行4.5mで、柱間は桁行が東側柱列で北から1.95m・2.15m・1.85m・2.1m、梁行は南妻で東から2.15m・2.35m である。西側の桁柱には柱の抜き取り痕が見られる。建物の方向はＮ－3°－Ｅである。柱穴は長辺が40～70cmの方形を基調とし、深さは25～40cmである。埋土は地山混じりの暗褐色土で、柱痕跡は直径15cmほどの円形である。

[ＳＢ17 掘立柱建物跡]桁行４間、梁行３間の南北棟である。建物総長は桁行9.35m・梁行5.75mで、柱間は桁行が東側柱列で北から2.55m・2.4m・2.0m・2.45m、梁行は北妻で東から1.9m・1.95m・1.95m である。建物の方向はＮ－29°－Ｅである。柱穴は長辺が60～80cmの方形を基調とし、深さは25～40cmである。埋土は地山混じりの暗褐色土で、柱痕跡は直径15～20cmの円形である。



第33図　柱穴断面図（ＳＢ12～19）



第34図　ＳＢ12～19建物跡

[ＳＢ18 掘立柱建物跡]桁行４間、梁行３間の南北棟である。南妻両端の柱痕跡が不明であるが、建物総長は桁行 9.5m・梁行 5.5m ほどと推定される。柱間は桁行が西側柱列で北から 2.25m・2.1m・2.0m・不明、梁行は北妻で東から 2.1m・1.9m・1.9m である。なお、東側桁沿いの内部には床束あるいは間仕切りと考えられる柱穴が６個見られる。これらの柱穴は桁方向が 2.2m、梁方向が 1.1～1.2m の間隔で配されている。建物の方向はＮ－1°－Wである。柱穴は長辺が 40～70 cmの方形を基調とし、深さは 20～50 cmである。埋土は地山混じりの暗褐色土で、柱痕跡は直径 15 cmほどの円形である。

[ＳＢ19 掘立柱建物跡]桁行４間、梁行２間の東西棟である。建物総長は桁行 7.0m・梁行 4.5m で、柱間は桁行についてはＳＢ15 掘立柱建物跡との重複によって柱痕跡の不明なものが多く、南桁では西から 1.6m の１間分のみ明らかである。梁行は西妻で 2.25m 等間である。建物の方向はＮ－7°－Ｅである。柱穴は一辺が 30 cmほどの方形を基調とし、深さは 15～30 cmである。埋土は暗褐色土で、柱痕跡は直径 15 cmほどの円形である。

ＳＢ20・25 掘立柱建物跡（第 35・36 図）

ＳＢ25 はＳＩ15 と重複しているが、新旧関係は不明である。

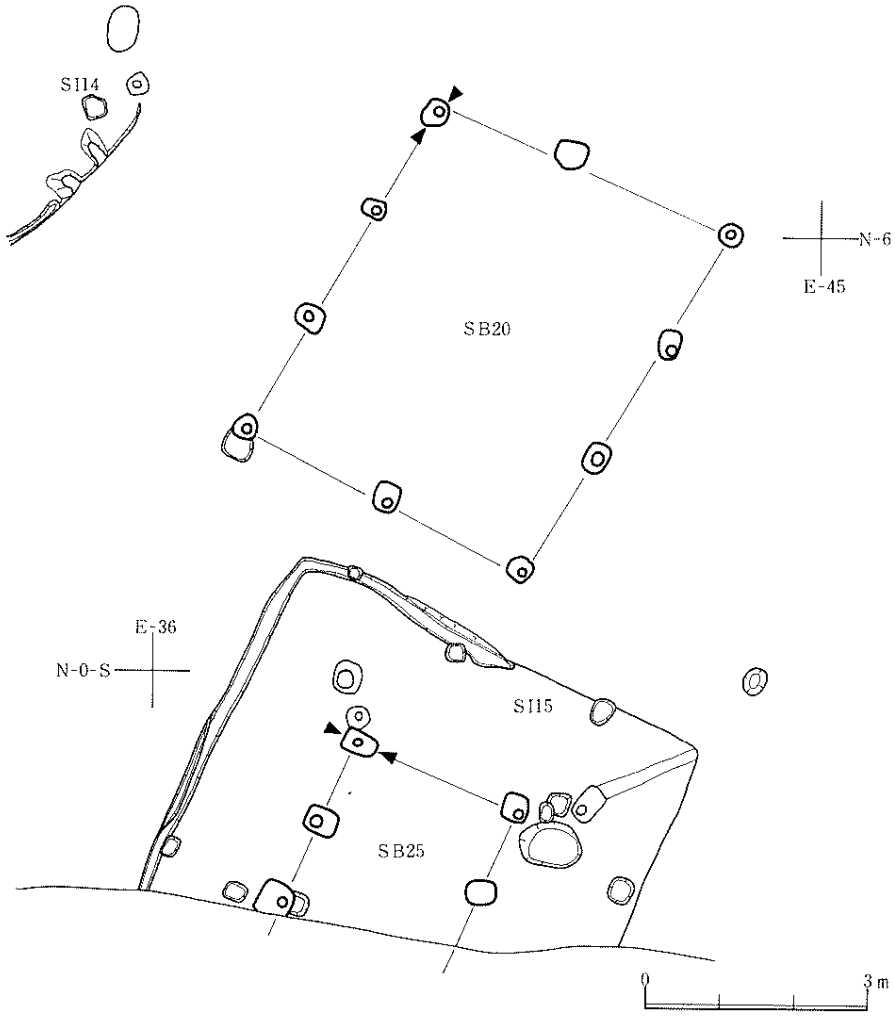
[ＳＢ20 掘立柱建物跡]桁行３間、梁行２間の南北棟である。建物総長は桁行 5.25m・梁行 4.3m で、柱間は桁行が東側柱列で北から 1.8m・1.8m・1.9m、梁行は北妻で東から 2.4m・1.9m である。建物の方向はＮ－3°－Ｅである。柱穴は一辺が 30～40 cmの方形を基調とし、深さは 15 cmほどである。埋土は地山混じりの暗褐色土で、柱痕跡は直径 15～20 cmの円形である。

[ＳＢ25 掘立柱建物跡]桁行２間以上、梁行１間の南北棟である。南側が調査区外に延びているため全体の規模については不明である。検出された規模は桁行 2.4m・梁行 2.4m で、柱間は桁行が東西柱列とも 1.2m 等間である。建物の方向はＮ－3°－Wである。柱穴は長辺が 50 cmほどの長方形を基調とし、深さは 40～80 cmである。埋土は地山と黒褐色土の互層である。柱痕跡は直径 15 cmほどの円形である。

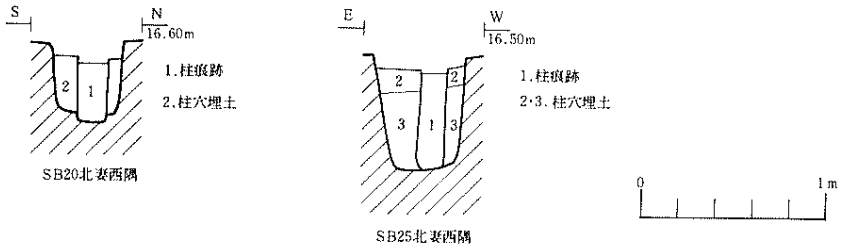
ＳＢ21・22・24・26・27 掘立柱建物跡（第 37・38 図）

ＳＢ22 以外の建物跡に次のような重複関係が見られる。

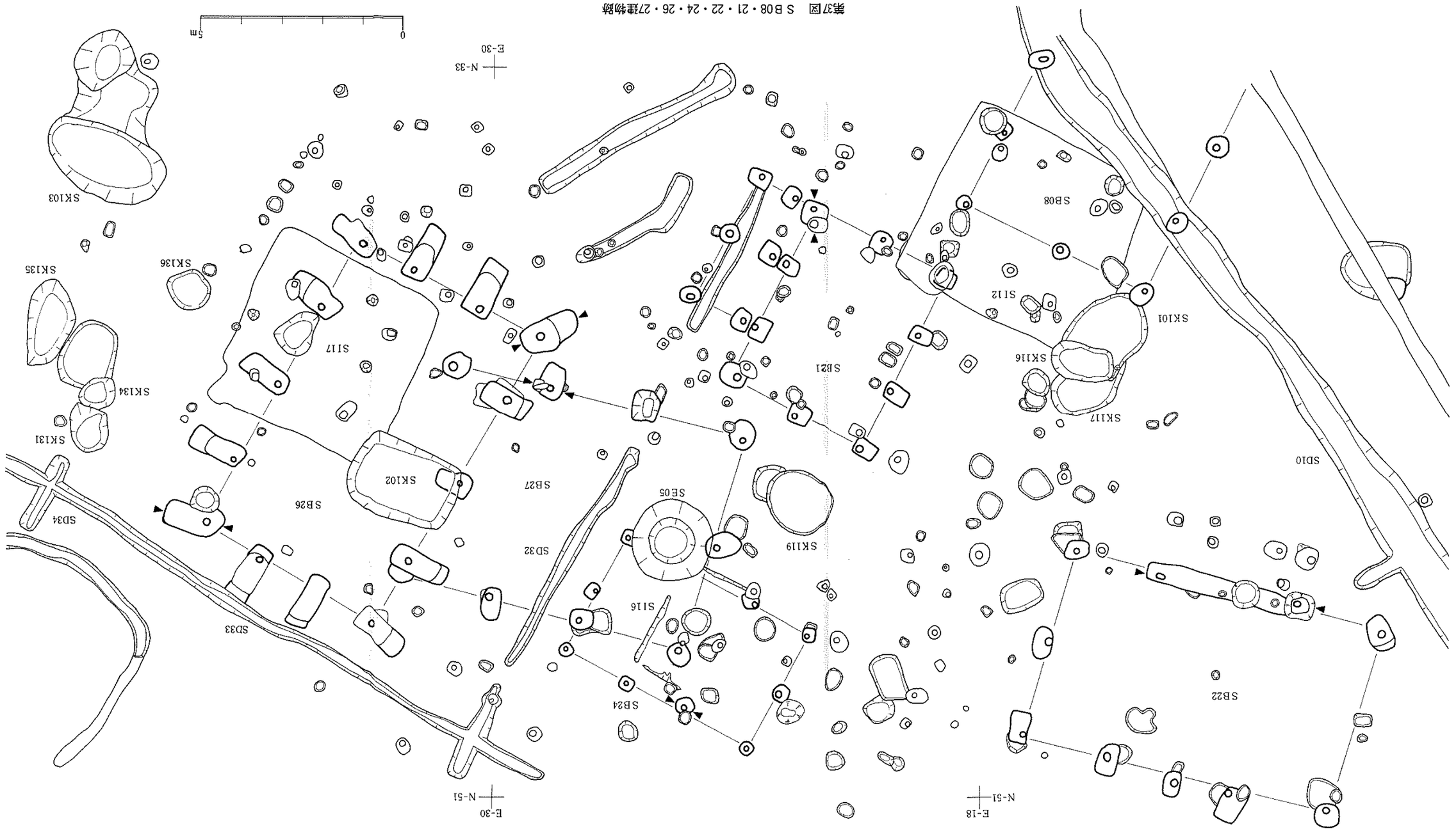
ＳＩ12→**ＳＢ21**→ＳＤ32、**ＳＢ24・ＳＢ27**→ＳＥ06



第35図　ＳＢ20・25掘立柱建物跡



第36図　柱穴断面図（ＳＢ20・25）

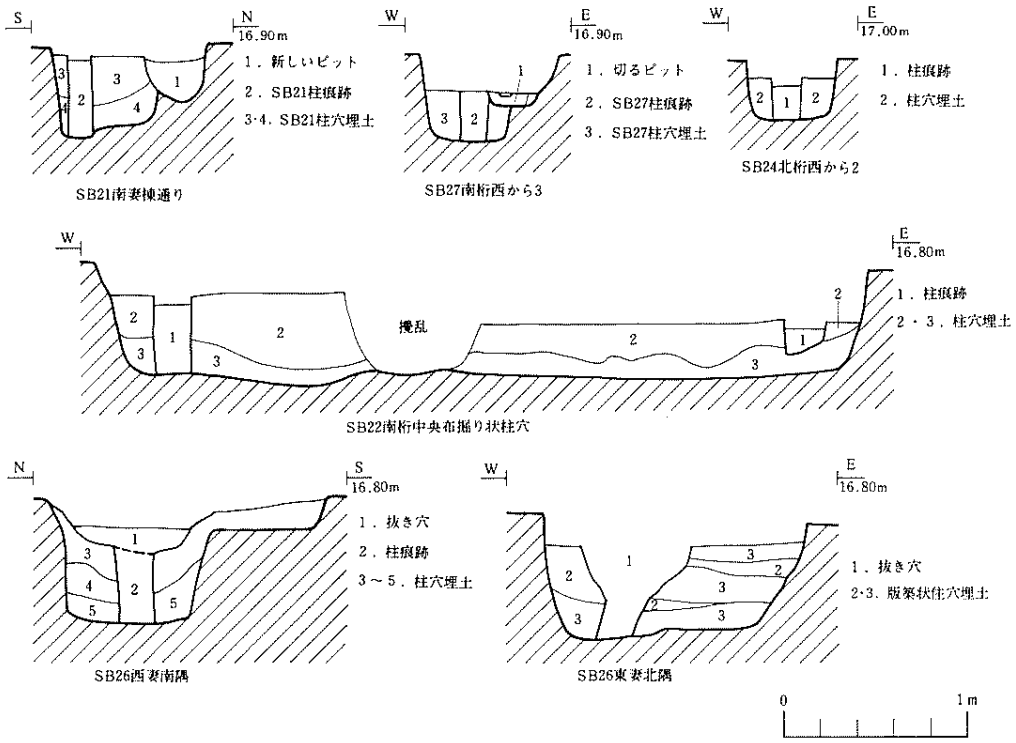


第37図　S B08・21・22・24・26・27建物跡

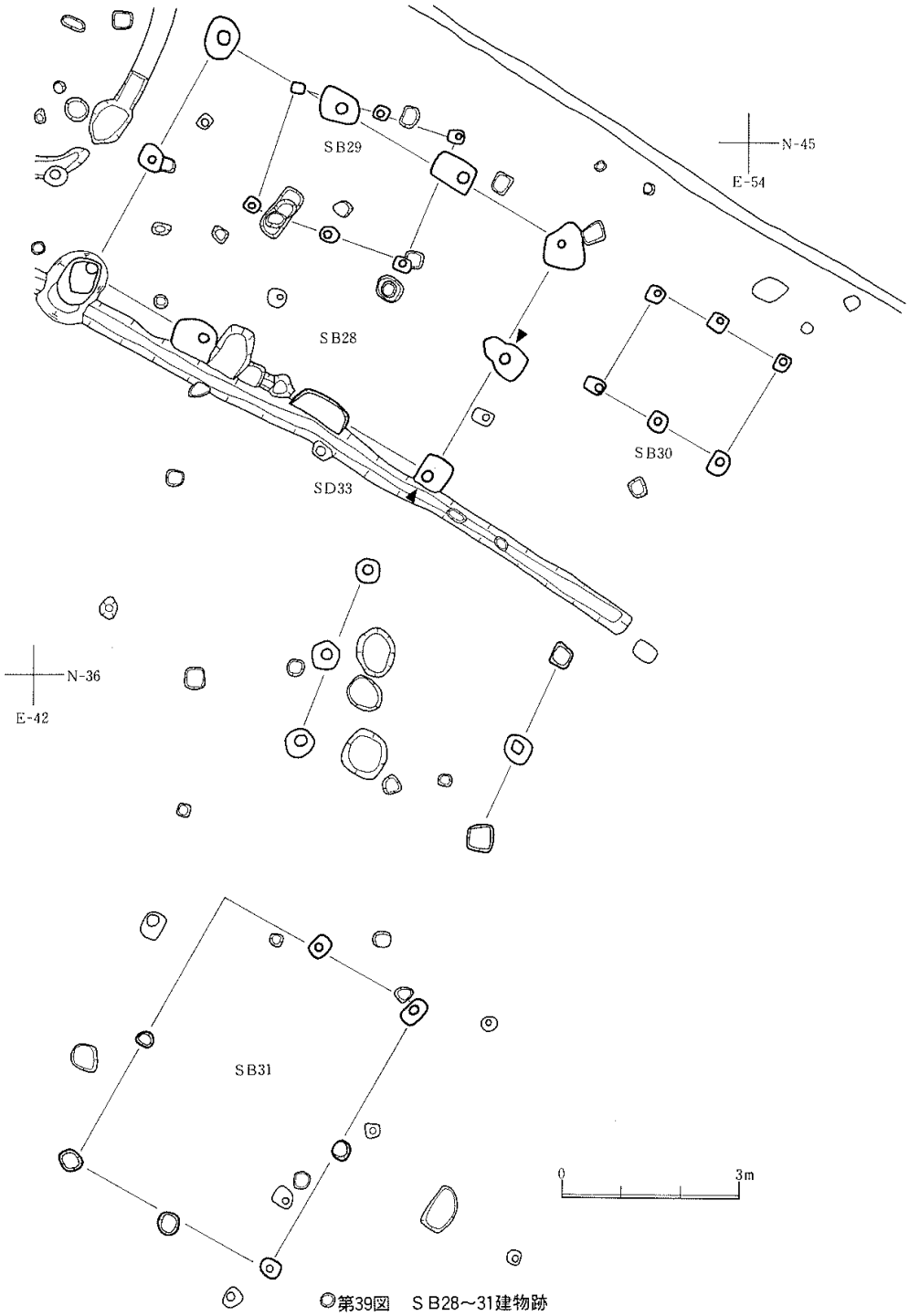
ＳＩ16→**ＳＢ27**→**ＳＢ26**→ＳＩ17→ＳＫ102、**ＳＢ26**→ＳＤ33・ＳＫ137
ＳＩ16・ＳＢ24の新旧関係は不明

[ＳＢ21掘立柱建物跡]桁行3間、梁行2間の南北棟で、東桁の南妻から2間分に柱間2間の庇が付いている。建物総長は桁行4.8m・梁行3.7mで庇部分の出は1.6mである。柱間は桁行が西側柱列で北から1.65m・1.55m・1.6m、梁行は南妻で西から1.9m・1.8m・0.5m・1.1mである。建物の方向はＮ－2°－Ｗである。柱穴は一辺が 40～70 cmの方形を基調とし、深さは 32～50 cmである。埋土は地山ブロックを多量に含む暗褐色土や黒褐色土である。柱痕跡は直径15 cmほどの円形である。

[ＳＢ22掘立柱建物跡]桁行4間（南桁は3間割り）、梁行2間の東西棟である。建物総長は桁行7.8m・梁行4.7mで、柱間は桁行が北側柱列で東から2.1m・1.7m・1.4m・2.4m、梁行は東妻で北から 2.4m・2.3m である。建物の方向はＮ－11°－Ｗである。柱穴は長辺あるいは長軸が60～85 cmの長方形や楕円形であるが、南桁の両妻柱を除く2本の柱穴は第38図に示すような布掘り状の掘り方になっている。深さは25～60 cmで南桁側が深くなっている。埋土は地山ブロックを多量に含む黒褐色土で斑状になっている。柱痕跡は直径15～20 cm



第38図　柱穴断面図（ＳＢ21・22・24・26・27）



◎第39図　ＳＢ28～31建物跡

の円形である。

[ＳＢ24 掘立柱建物跡]桁行３間、梁行２間の東西棟と思われるが、さらに１間分西側に広がり桁行４間になる可能性も考えられる。建物総長は桁行 5.0m（4 間では 8.05m）・梁行 3.1m で、柱間は桁行が北側柱列で東から 1.7m・1.5m・1.8m・（3.05m）、梁行は両妻ともにほぼ 1.55m 等間である。建物の方向はＮ－3°－Ｅである。柱穴は一辺あるいは直径が 30～42 cmの方形や円形であるが、南桁の東妻から２本目の柱穴はＳＥ05 に切られ不明である。深さは 20～30 cm である。埋土は地山ブロックを僅かに含む黒褐色土、柱痕跡は直径 10～15 cmの円形である。柱穴からは土師器甕の体部破片が出土している。

[ＳＢ26 掘立柱建物跡]桁行４間、梁行３間の南北棟である。建物総長は桁行 8.2m・梁行 5.0m で、柱間は桁行が西側柱列で北から 1.8m・2.3m・2.3m・1.8m、梁行は南妻で東から 1.6m・1.6m・1.8m である。建物の方向はＮ－3°－Ｅである。柱穴は長辺が 0.9～1.5m・短辺が 54～70 cmの長方形で建物跡の内部側が深くなるように段状に掘られている。深さは 64～78 cmである。大部分の柱穴に柱の抜き取り穴が見られ、柱の切り取りと思われるものもある（第 39 図）。柱穴の埋土は地山と暗褐色土・黒褐色土を互層にするものや両者が斑状に混じるものである。柱痕跡は直径 16～20 cmの円形である。南妻西隅の柱穴から非ロクロ土師器甕の口頸部破片が出土している。

[ＳＢ27 掘立柱建物跡]桁行３間、梁行２間の東西棟である。建物総長は桁行 7.4m・梁行 5.4m で、柱間は桁行が南側柱列で 2.5m 等間、梁行は西妻で 2.7m 等間である。東妻棟通り下の柱穴はＳＫ102 土壙に切られ不明である。建物の方向はＮ－9°－Ｗである。柱穴は長辺が 56～84 cm・短辺が 50～70 cmの不整円形で、深さは 16～48 cmである。南桁側の柱穴に深いものが多い。埋土は地山ブロックを多く含む黒褐色土、柱痕跡は直径 14～20 cmの円形である。

ＳＢ28・29・30・31 掘立柱建物跡（第 39・40 図）

ＳＢ28・29 が重複しているが新旧関係は不明である。他にＳＢ28→ＳＤ33。

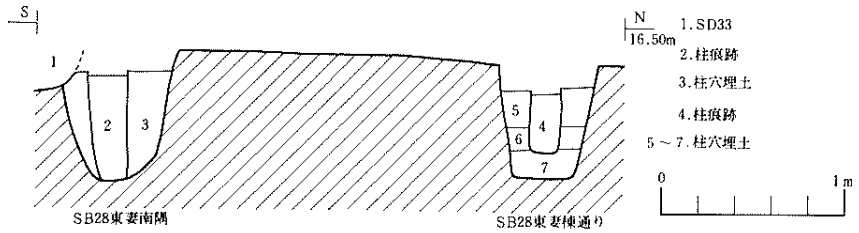
[ＳＢ28 掘立柱建物跡]桁行３間、梁行２間の総柱の東西棟である。建物総長は桁行 6.7m・梁行 4.5m で、柱間は桁行が北側柱列で東から 2.0m・2.3m・2.3m、梁行は西妻で北から 2.3m・2.2m、南桁の東妻から２本の柱穴では柱痕跡が不明である。建物の方向はＮ－3°－Ｅである。柱穴は長辺が 60～89 cm・短辺が 40～64 cmの方形基調であるが、東妻を除く西妻棟通り下の柱穴はやや小さく一辺 40 cmほどである。深さは 56～76 cmである。埋土は

地山ブロックを含む黒褐色土・暗褐色土で、柱痕跡は直径16～21㎝の円形である。また、西妻棟通り下の柱穴からは非ロクロ土師器甕の体部破片が出土している。

[ＳＢ29掘立柱建物跡]桁行2間、梁符1間の東西棟である。建物総長は桁行2.8m・梁行2.34mで、柱間は桁行がほぼ1.4m等間である。建物の方向はＮ－3°－Ｗである。柱穴は一辺が17～32㎝の方形基調で、深さは24～32㎝、埋土は地山混じりの少ない黒褐色土である。柱痕跡は直径12～14㎝の円形である。

[ＳＢ30掘立柱建物跡]桁行2間、梁行1間の東西棟である。建物総長は桁行2.4m・梁行2.0mで、柱間は桁行が北側柱列で東から1.15m・1.25mである。建物の方向はＮ－5°－Ｅである。柱穴は一辺が24～34㎝の方形基調で、深さは17～26㎝、埋土は地山混じりの少ない黒褐色土である。柱痕跡は直径12～14㎝の円形である。

[ＳＢ31掘立柱建物跡]桁行2間、梁行2間の南北棟である。建物総長は桁行5.0m・梁行3.8mで、北妻西隅の柱穴は確認できなかった。柱間は柱痕跡が北妻の2本と南妻東端の柱穴で確認されているだけであり、各点の芯々でとると桁行が東側柱列で北から2.7m・2.3m、梁行は南妻で東から1.9m・2.4mである。建物の方向はＮ－1°－Ｅである。柱穴は一辺が28～46mの方形基調のものが多く、深さは5～13㎝、埋土は地山混じりの少ない黒褐色土である。柱痕跡は直径14㎝の円形である。



第40図　柱穴断面図

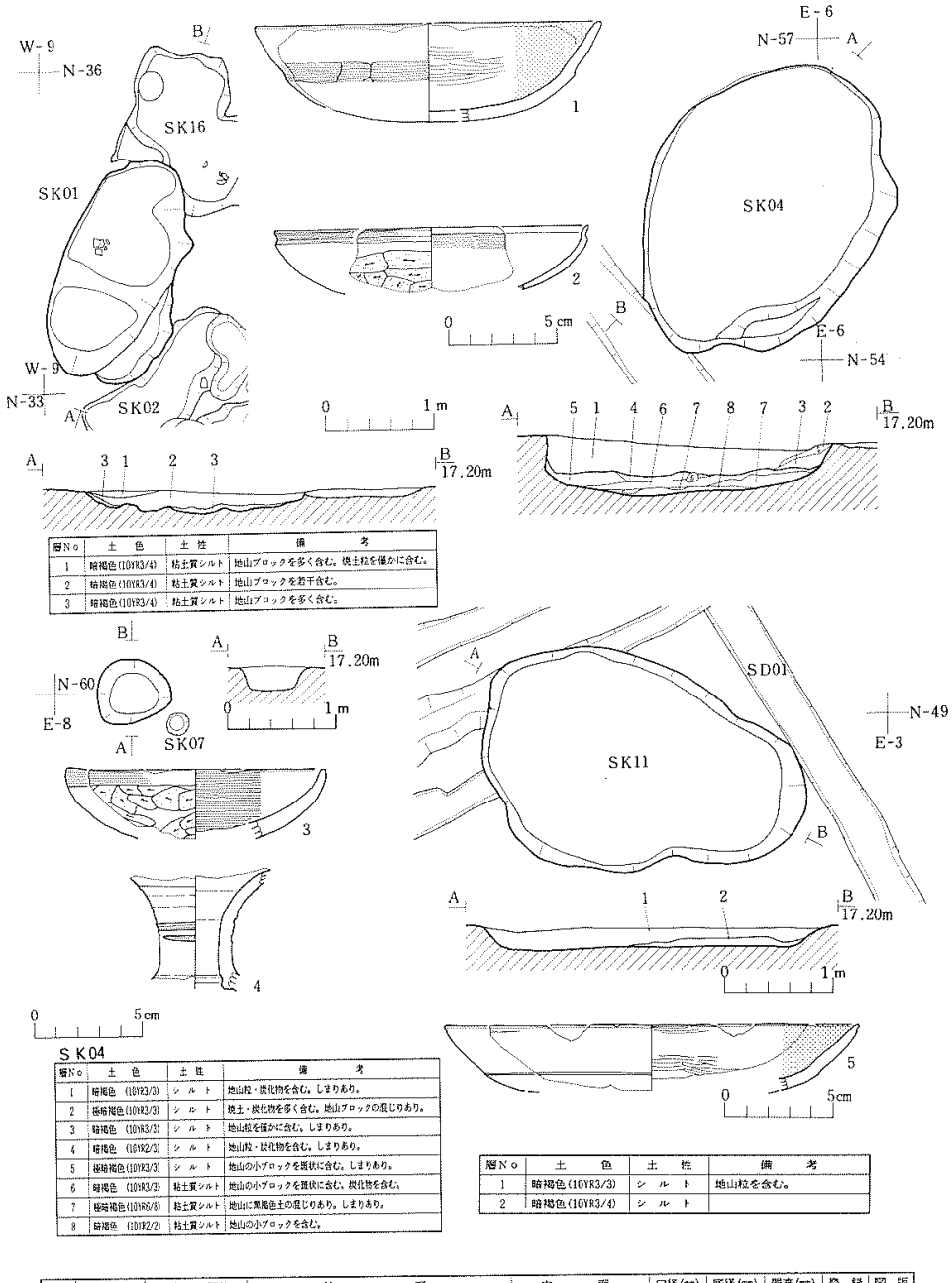
(3) 土壙と出土遺物

Ｃ－1区で40基、Ｃ－5区で5基、Ｃ－6区で268基、総数313基の土壙が検出されている。このうちＣ－1区22基、Ｃ－5区4基、Ｃ－6区13基から遺物が出土している。これらの遺物は破片で出土するものが多く、図化できたものは以下に示す11基から出土したものである。

なお、Ｃ－6区で検出された土壙の多くは堆積土の状況から人為的に埋められたと考えられるものであり、その例として第52号土壙の平・断面図を掲載した。

第01号土壙（ＳＫ－01：第41図上左）

ＳＫ02・16土壙と重複し、それらを切っている。平面形は南北方向に長い不整楕円形を呈し、南東部はテラス状に25㎝ほど張り出し、底面はかなりの凹凸が見られる。規模は長軸2.1m・短軸1.0mである。堆積土は3層あり、いずれも自然堆積土である。



層No	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む。焼土粒を僅かに含む。
2	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	地山ブロックを若干含む。
3	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む。

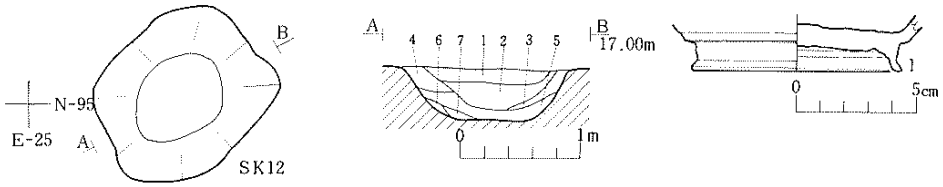
SK04

層No	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒・炭化物を含む。しまりあり。
2	極暗褐色(10YR2/3)	シルト	焼土・炭化物を多く含む。地山ブロックの混じりあり。
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒を僅かに含む。しまりあり。
4	暗褐色 (10YR2/3)	シルト	地山粒・炭化物を含む。しまりあり。
5	極暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山の小ブロックを斑状に含む。しまりあり。
6	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	地山の小ブロックを斑状に含む。炭化物を含む。
7	極暗褐色(10YR6/8)	粘土質シルト	地山に黒褐色土の混じりあり。しまりあり。
8	暗褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	地山の小ブロックを含む。

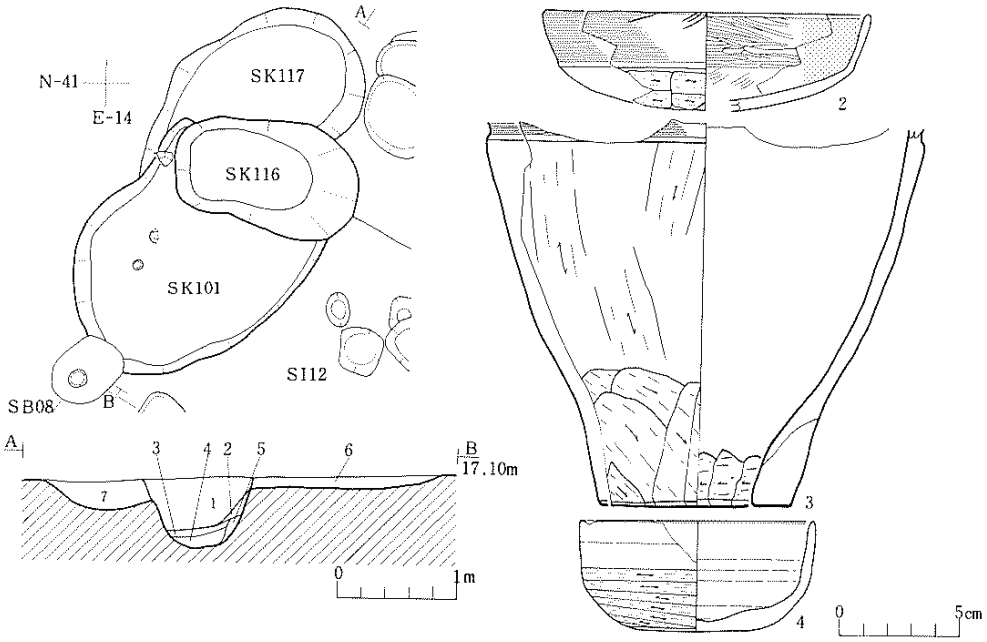
層No	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒を含む。
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	

番号	種別	遺構名と層位	外面	内面	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	登録	図版
1	土師器 坏	SK01－2層	口縁部：摩滅、体上：ナデ、体下：ヘラケズリ？	ヘラミガキ→黒色処理	160		(46)	40	21-7
2	土師器 坏	SK04－2層	口縁部：横ナデ、体部：ヘラケズリ	横ナデ	(145)		(30)	41	
3	土師器 坏	SK07－1層	口縁部：横ナデ、体部：ヘラケズリ	横ナデ	120		(32)	42	
4	須恵器 甕	SK07－1層	ロクロ調整	ロクロ調整			(58)	43	
5	土師器 坏	SK11－1層		ヘラミガキ→黒色処理	(192)		(31)	44	

第41図　土壙と出土遺物(1)



層No	土色	土性	備考
1	灰褐色(7.5YR4/2)	シルト	しまりあり。
2	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	灰白色火山灰を含む。
3	灰褐色(7.5YR4/2)	シルト	地山粒を含む。
4	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	地山崩壊土が多量に混入。
5	黒褐色(7.5YR2/2)	シルト	粘性あり。一部グライ化。
6	黄褐色(10YR5/8)	クレイ	地山崩壊土。
7	黄褐色(10YR5/8)	クレイ	地山崩壊土。



層 No.	土色	土性	備考	
1	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	焼土・炭化物を含む。やや粘性あり。	SK116
2	黄褐色(10YR5/6)	シルト	地山の崩れ。	
3	黒褐色(10YR2/2)	シルト	炭化物を含む。粘性あり。	
4	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロックを含む。	
5	黄褐色(10YR5/6)	シルト	地山の崩れ。	
6	黒褐色(10YR2/2)	シルト	焼土・炭化物・地山粒を含む。堅くしまっている。	SK101
7	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロックを含む。	SK117

番号	種別	遺構名と層位	外面	内面	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	登録	図版
1	須恵器 坏	SK12－底面	ロクロ調整	ロクロ調整		(88)	(19)	45	
2	土師器 坏	SK116－2層	口縁部；横ナデ、体部；ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	(137)		(41)	46	
3	土師器 甑	SK101－ 層	口縁部；横ナデ、体～底部；ヘラケズリ	体下部；ヘラケズリ		82	(141)	47	
4	須恵器 坏	SK101－ 層	ロクロ調整、体下部～底部；回転ヘラケズリ	ロクロ調整	98	50	46	48	21-8

第42図　土壙と出土遺物(2)

[出土遺物]第 2 層から非ロクロ丸底土師器坏が出土している（第 41 図 1）。口縁部は外傾し、口縁部と体部の境に沈線状の屈曲がつく。屈曲に対応する内面には稜が見られる。外面の器面調整は摩滅がひどく不明瞭である。内面は黒色処理されている。他に非ロクロ土師器甕の体部破片が出土している。

第 04 号土壙（ＳＫ－04：第 41 図上右）

最近掘られた新しい溝に切られている。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 2.9m・短軸 2.2m、深さは最も深い中央部で約 40 ㎝である。北側は僅かにオーバーハングし、南側は一部テラス状に段が付いている。堆積土は 8 層あり、人為的に埋められた層と思われる。

[出土遺物]第 2 層から非ロクロ土師器坏が出土している（第 41 図 2）。口縁部は短く外反し体部との境は段がつく。底部から体部にかけては内湾気味に立ち上がり、底部は丸底状である。内面に黒色処理は施されていない。他に非ロクロ土師器坏（内黒）・甕の体部破片が出土している。

第 07 号土壙（ＳＫ－07：第 41 図下左）

平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 70 ㎝・短軸 60 ㎝、深さ 20 ㎝である。堆積土は 1 層である。

[出土遺物]3 の非ロクロ土師器坏と 4 の須恵器長頸壺が出土している（第 41 図）。3 は底部から丸みをもって立ち上がり、口縁部は直立気味になる。内面に黒色処理は施されていない。4 は外反気味に立ち上がり、頚部に 2 本の沈線が平行に巡っている。他に非ロクロ土師器坏（内黒）・甕の体部破片が出土している。

第 11 号土壙（ＳＫ－11：第 41 図下右）

ＳＤ01 溝に切られ、ＳＸ02 小溝状遺構を切っている。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸 3m・短軸 2m で最も深いところで約 12 ㎝である。壁の立ち上がりは東側が緩く、他は比較的を急である。

[出土遺物]非ロクロ土師器坏が出土している（第 41 図 5）。底部は平底風の丸底で口縁部と体部の境には軽い段が見られる。段に対応する内面には稜が巡り、黒色処理が施されている。他に非ロクロ土師器甕の体部破片が出土している。

第 12 号土壙（ＳＫ－12：第 42 図上）

平面形は不整円形を呈し、規模は長軸 1.4m・短軸 1.2m、深さ 40 ㎝である。壁は緩やかに立ち上がり、平坦な底面をしている。堆積土は 7 層確認され、第 2 層には灰白色火山灰が混入している。

[出土遺物]須恵器高台付坏が底面から出土している（第 42 図 1）。底部切り離しはヘラ切りで、高台端部がやや外に開いている。他に出土遺物はない。

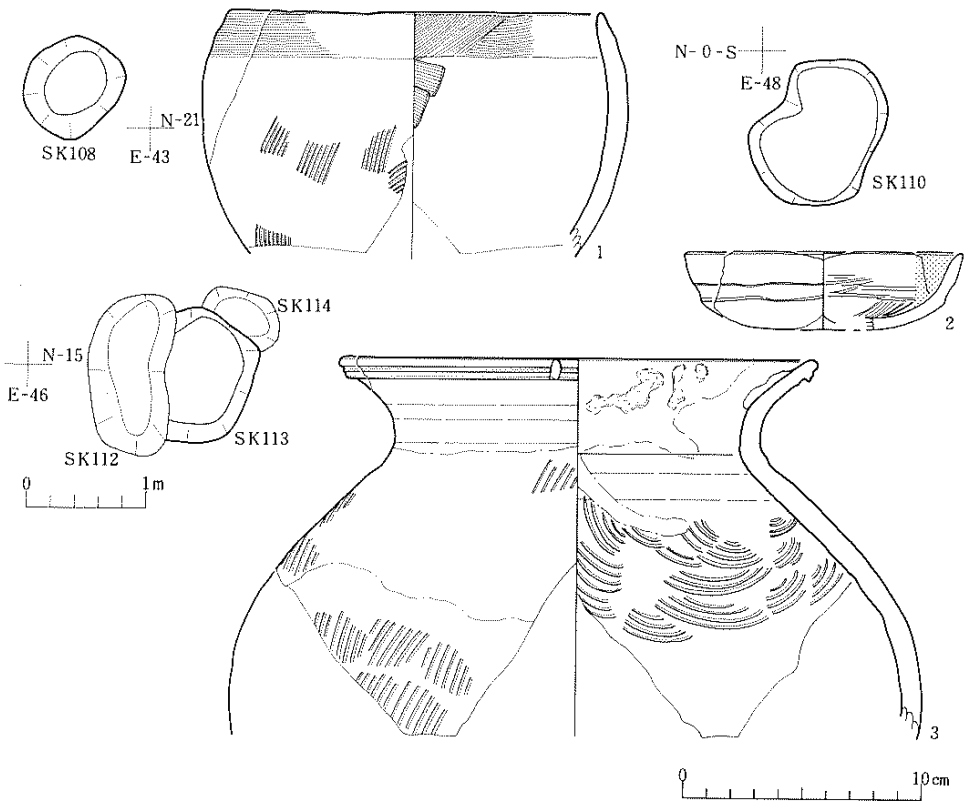
第101号土壙（ＳＫ－101：第42図下）

ＳＩ12住居跡・ＳK117土壙を切り、ＳB08建物跡・ＳK116土壙に切られている。平面形は不整楕円形を呈すると思われ、推定規模は長軸2.1m・短軸1.6m、深さは約10㎝である。堆積土は1層だけで底面全体に炭化物の付着が確認されている。

[出土遺物]第42図3は非ロクロ土師器の甕、4は小形の須恵器坏である。3は無底式で体部はやや内湾気味に外傾し、口縁部と体部の境に段がつく。4は下端部が丸みを帯び、体部から口縁部にかけてはほぼ直立している。体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリ再調整が施されている。その他に、細片のため図化できなかったが、土師器では内面黒色処理の坏・甕・甑、須恵器坏・甕など多量の遺物が出土している。

第116号土壙（ＳＫ－116：第42図下）

ＳＩ12住居跡、ＳK101・117土壙を切っている。平面形は長楕円形を呈し、規模は



番号	種別	遺構名と層位	外面	内面	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	登録	図版
1	土師器 椀	ＳＫ１０８－１層	口縁部：横ナデ、体部：ハケメ	口縁部：ナデ、体部：ヘラナデ	(155)		(102)	49	
2	土師器 坏	ＳＫ１１０	摩滅不明	ヘラミガキ→黒色処理	(116)		(32)	50	
3	須恵器 甕	ＳＫ１１３	ロクロ調整、体部：平行タタキ	ロクロ調整、体部：青海波オサエ	150		(159)	51	21-9

第43図　土壙と出土遺物（3）

長軸1.6m・短軸0.9m、深さ約60cmである。東側の壁がやや緩やかに立ち上がっている。堆積土は5層確認され、Ⅱ層に大別された。Ⅰ層には焼土・炭化物が多く含まれている。

[出土遺物]非ロクロ丸底土師器坏が出土している（第42図2）。口縁部と体部の境に段がつき、口縁部は直立気味に外傾する。内面には黒色処理が施される。その他に図示できなかったが、非ロクロ土師器の甕、須恵器坏・甕などの破片が多く出土している。

第108号土壙（ＳＫ－108：第43図上左）

平面形は不整円形を呈し、規模は長軸80cm・短軸75cm、深さは約23cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

[出土遺物]第43図1は非ロクロ土師器の碗である。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は内傾している。その他には非ロクロ土師器内面黒色処理の坏、甕、須恵器坏・甕などの破片が多く出土している。

第110号土壙（ＳＫ－110：第43図上右）

平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸1.3m・短軸0.9m、深さは10～16cmである。底面には凹凸が見られ東側がやや落ち込んでいる。

[出土遺物]第43図2は非ロクロ丸底土師器坏で、口縁部と体部の境に沈線をもつ。底部から丸みをもって立ち上がり、口縁部は外傾している。他には非ロクロ土師器甕、須恵器坏・甕・壺などの破片が出土している。

第113号土壙（ＳＫ－113：第43図下）

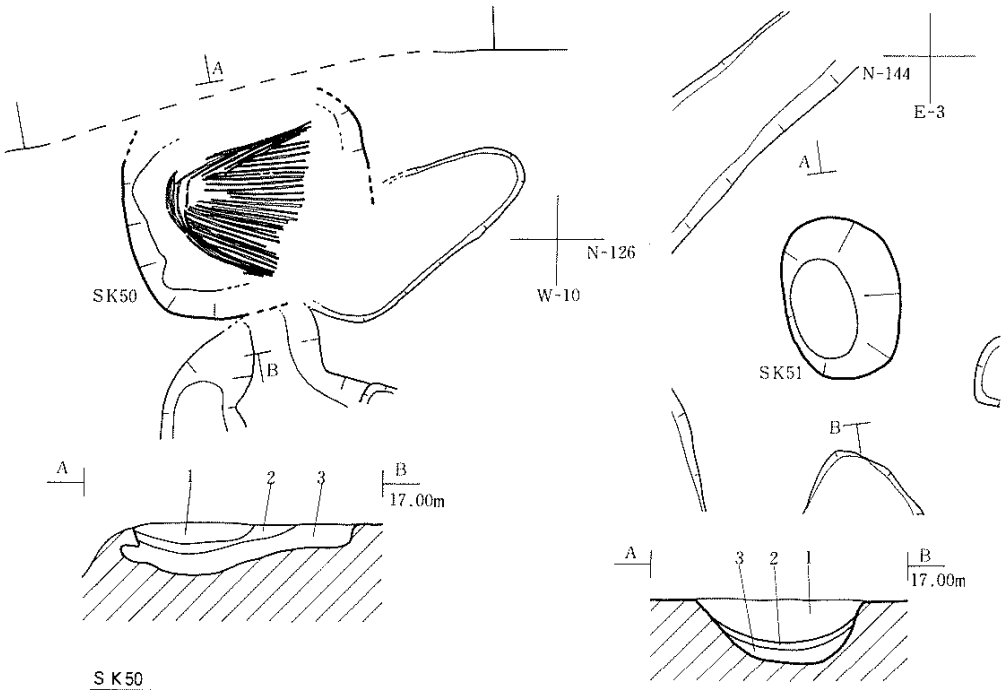
ＳK112土壙に切られ、ＳK114土壙を切っている。平面形は不整円形を呈すると思われ、規模は長軸1.1m・短軸0.7mで深さ約17cmである。北側を除き壁は緩やかに立ち上がる。

[出土遺物]第43図3は縁帯状の口縁部をもつ須恵器の甕である。口頸部は短く、大きく外反し、体部は球形をしている。他には非ロクロ土師器内面黒色処理の坏、甕の破片が出土している。

第50号土壙（ＳＫ－50：第44図上左）

ＳD09土壙と重複し、切られている。平面形は不整楕円形を呈すると思われ、残存する規模は長軸1.6m・短軸1.4m、深さ22cmほどである。堆積土は3層確認された。壁は急に立ち上がり一部にオーバーハングしているところもある。

[出土遺物]底面から萱製？の箕のようなものが出土している。枠は束ねられているが、中は2cmほどの間隔をおいて縦方向に茎を並べただけで、横方向の編み込は見られなかった。横方向は紐あるいは細縄で編んだものと思われ、朽ちてしまったものと思われる。「堆肥ダシ」・「コエザル・エビザル」と呼ばれる農具に類似している（写真図版15－上）。

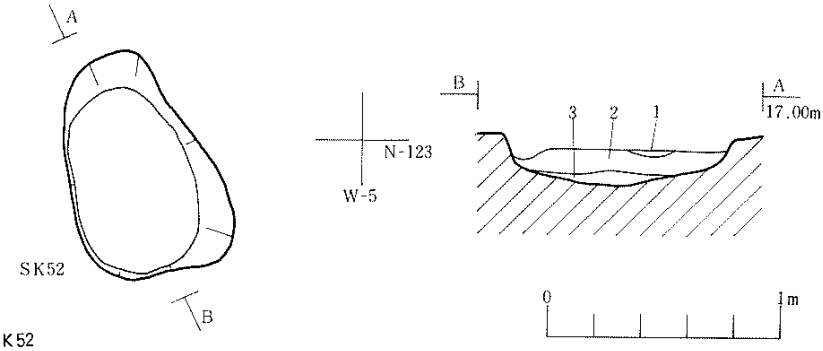


S K50

層 No.	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色(10YR3/2)	シ ル ト	酸化鉄を少量含む。小礫・地山ブロックを僅かに含む。しまりあり。粘性あり。
2	灰褐色(7.5YR4/2)	シ ル ト	酸化鉄を微量含む。粘性あり。
3	暗褐色(10YR3/3)	シ ル ト	酸化鉄を斑状に含む。小礫を少量含む。ややしまりあり。粘性なし。

S K51

層 No.	土　色	土　性	備　考
1	暗褐色(10YR3/3)	シ ル ト	地山粒をほとんど含まない。ややしまりあり。
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	地山粒を含まない。しまりなし。粘性大。
3	灰黄褐色(10YR4/2)	シ ル ト	地山粒を多量に含む。炭化物を含む。ややしまりあり。



S K52

層 No.	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色(10YR3/2)	シ ル ト	地山粒を含む。しまりなし。
2	褐　色(10YR4/6)	シ ル ト	地山ブロックを多量に含む。ややしまりあり。
3	暗褐色(10YR3/3)	シ ル ト	地山ブロックを含む。しまりなし。粘性大。

第44図　土壙と出土遺物(4)

第 51 号土壙（ＳＫ－51：第 44 図上右）

平面形は楕円形を呈し、規模は長軸 70 ㎝・短軸 50 ㎝、深さ 26 ㎝ほどである。堆積土は 3 層あり、2 層上面には藁状のものが敷き詰められた状態で確認された（写真図版 15－中）。

第 52 号土壙（ＳＫ－52：第 44 図下）

Ｃ－6 区における人為的に埋められた土壙の 1 つである。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸 88 ㎝･短軸 60 ㎝､深さ 20 ㎝ほどである｡壁は西側が急に立ち上がり底面は平坦である。堆積土は 3 層確認された。

(4) 井戸と出土遺物

4 基検出されており、内訳はＣ－1 区で 3 基（ＳＥ01・02・05）、Ｃ－5 区で 1 基（ＳＥ04）である。

第 01 号井戸（ＳＥ－01：第 45 図上左）

東側上部が攪乱を受けている。ＳＸ02 小溝状遺構と重複し、それを切っている。平面形は円形を呈すると思われ、残存する規模は長径 1.2m・短径 0.9m、深さ 1.1m ほどである。開口部からすり鉢状に窪み、その後ほぼ垂直に落ち込んでいる。底面は平坦で、断面形は「バチ状」を呈している。堆積土は 11 層確認され、Ⅲ層に大別された。

[出土遺物]不明鉄製品が埋土下層から 1 点出土している。

第 02 号井戸（ＳＥ－02：第 45 図上中）

平面形は円形を呈し、規模は直径 70 ㎝ほどで深さは 1.2m ある。開口部からほぼ垂直に落ち込んでいる。底面は平坦である。

[出土遺物]中世陶器の甕の破片が出土している（第 45 図 1）。頸部が内傾し、口縁部は直立気味に立ち上がり受け口状になる。色調は外面が明赤褐色、内面がにぶい赤褐色で、胎土には粗い砂粒を含んでいる。

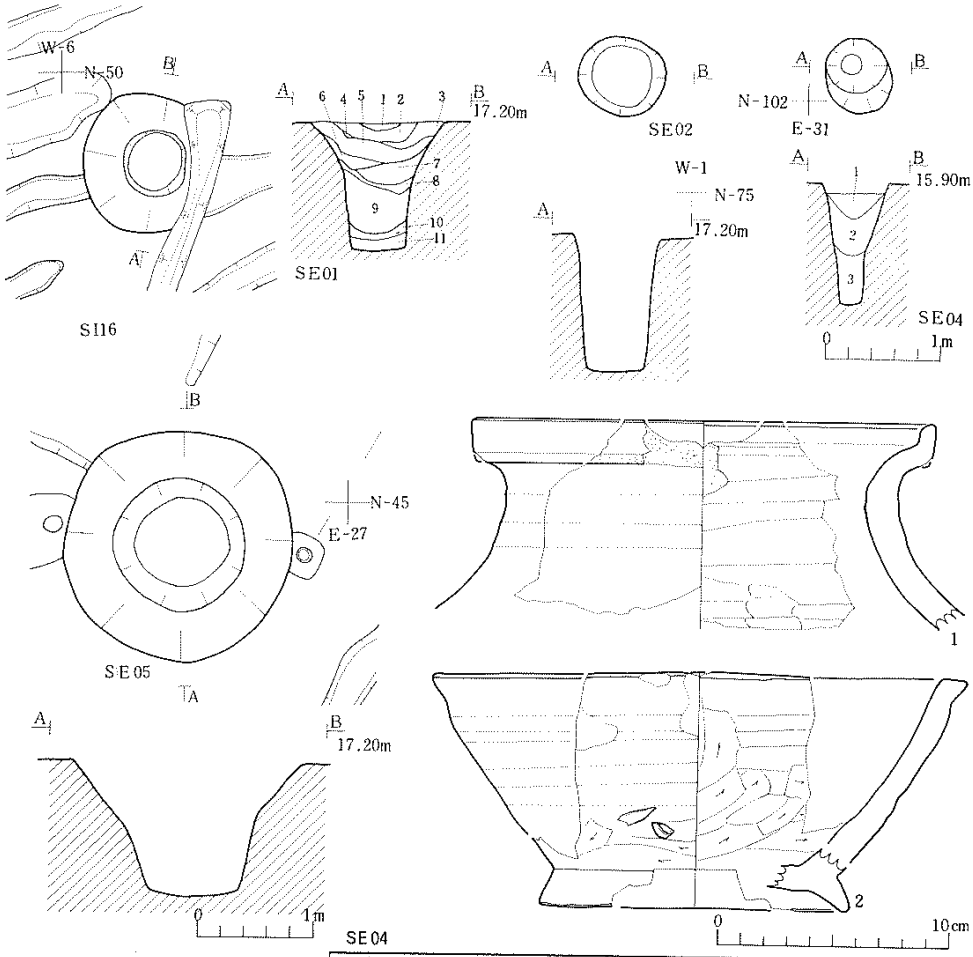
第 04 号井戸（ＳＥ－04：第 45 図上右）

平面形は円形を呈し、規模は直径 56 ㎝で深さは 1.1m である。底面は平坦で、壁は急角度で立ち上がっている。堆積土は 3 層認められ、いずれも自然堆積層である。

第 05 号井戸（ＳＥ－05：第 45 図下）

ＳＩ16 住居跡・ＳＢ24・27 建物跡を切っている。平面形は円形を呈し、規模は直径 2.0m ほどで深さは 1.1m ある。形態はＳＥ01 井戸と類似している。

[出土遺物]中世陶器の鉢が出土している（第 45 図 2）。張り出した高台をもち、体部から口縁部にかけて外傾している。口唇部は平坦になっている。色調は外面がにぶい橙色、内面が灰褐色で、胎土には白っぽい砂粒を含んでいる。



SE04

番号	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒・炭化物の混じりあり。
2	暗褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックの混じりあり。粘性強い。
3	黒色(10YR2/1)	シルト	小レキの混じりあり。粘性強い。

SE01

層No	土色	土性	備考	
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒を少し含む。しまりあり。	大別第Ⅰ層 自然堆積層
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物を含む。しまりあり。	
3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒を多く含む。	
4	褐色(10YR4/4)	シルト		
5	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山粒を少し含む。粘性あり。	
6	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒を少し含む。粘性あり。	
7	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト	地山粒を含む。粘性あり。	大別第Ⅱ層 人為的埋土
8	黄褐色(10YR5/8)	粘土質シルト	黒褐色土の混じりあり。	
9	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト	地山ブロックを含む。	
10	明褐色(7.5YR5/8)	クレイ		大別第Ⅲ層
11	灰褐色(10YR4/2)	クレイ	砂を多量に含む。	

番号	種別	遺構名と層位	外面	底部	内面	口径(m)	底径(m)	器高(m)	登録	図版No.
1	中世陶器 甕	SE02	ロクロ調整		ロクロ調整	(200)		(93)	52	23-6
2	中世陶器	SE05	ロクロ調整		体上部：ロクロナデ、体下部：ナデ	(230)	(17.4)	(103)	53	

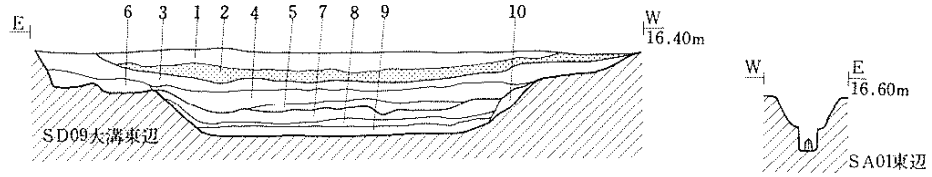
第45図　井戸と出土遺物

(5) 溝と出土遺物

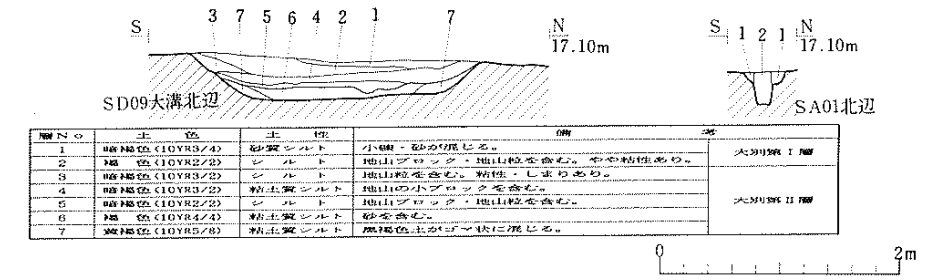
C地区からは総数27条の溝が検出された。内訳はC－1区から16条、C－5区からは8条、C－6区からは4条（うち1条はC－5区と同一のもの）である。遺物が出土したのは、C－1区では第01・02・04～07・10・40号溝、C－5区では第09・17～19号溝、C－6区では第08・09号溝である。出土した遺物のほとんどは奈良時代の土師器・須恵器の小破片で、多くは二次的な堆積によるものと思われる。これらのうち遺物が比較的多く出土している第 10・17・19号溝、竪穴住居跡や掘立柱建物跡と関連すると思われる第09・32・33号溝についてのみ説明する。

第09号溝（ＳＤ－09：第4・5・46～48図）

この溝は昭和 63 年度の調査で部分的に確認されていたもので、C区の集落を区画すると推定された大溝である。今回の調査でもC－5・6区で検出され、北辺および東辺の状況がほぼ明らかとなったが、両辺を繋ぐコーナー部分は旧用水路に切られており、明らかにできなかった。東辺で確認された長さは約150m、北辺が約100mである。



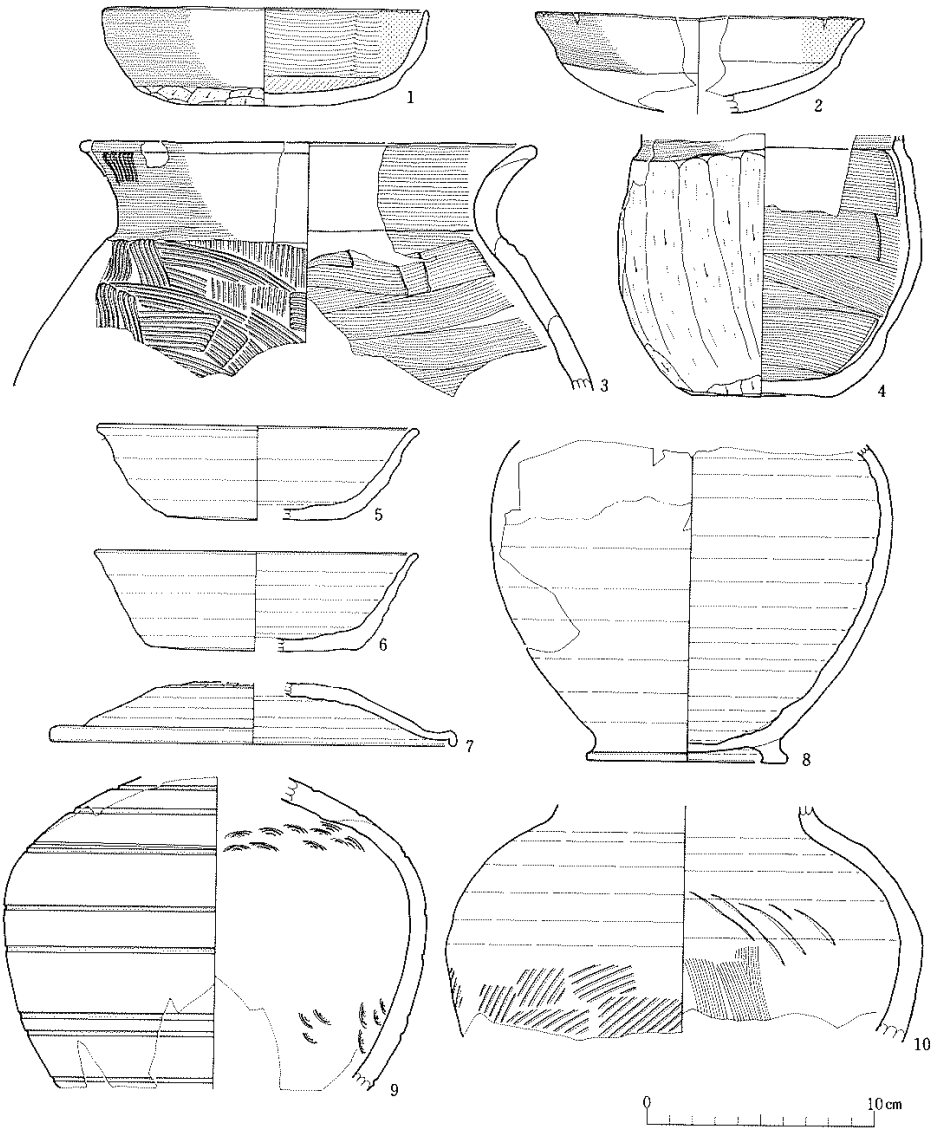
層No	土色	土性	備考	
1	黒色(10YR2/1)	シルト	酸化鉄が筋状にはいる。	大別第Ⅰ層
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	灰白色火山灰を含む。	
3	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	酸化鉄を多量に含む。	大別第Ⅱ層
4	褐灰色(10YR4/1)	シルト	炭化物・小礫を少量含む。	
5	褐灰色(10YR4/1)	シルト	地山ブロックを僅かに含む。	
6	褐灰色(10YR4/1)	粘土質シルト	地山粒・砂を含む。	
7	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	酸化鉄を小量含む。スクモ混じり。	大別第Ⅲ層
8	黒褐色(10YR3/1)	シルト	酸化鉄を微量に含む。	
9	黒色(10YR2/1)	シルト	酸化鉄を小量含む。	
10	黄褐色(10YR5/8)	粘土質シルト	地山崩壊土	



層No	土色	土性	備考	
1	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	小礫・砂が混じる。	大別第Ⅰ層
2	褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロック・地山粒を含む。やや粘性あり。	
3	暗褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒を含む。粘性・しまりあり。	大別第Ⅱ層
4	暗褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	地山の小ブロックを含む。	
5	暗褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロック・地山粒を含む。	
6	褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	砂を含む。	
7	黄褐色(10YR5/8)	粘土質シルト	黒褐色土がブロック状に混じる。	

層No	土色	土性	備考	
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山の粘土を多く含む。	布掘り埋土
2	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	地山粒を少し含む。	柱痕跡埋土

第46図　第01号一本柱列



番号	種別	層位	外面	底部	内面	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	登録	図版No
1	土師器 坏	北4層上	口縁部；横ナデ、体部；ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	143	70	43	54	22-9
2	土師器 坏	北4層上	口縁部；横ナデ、体部；ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	144		(43)	55	
3	土師器 甕	北4層上	口縁部；ハケメ→横ナデ		口縁部；横ナデ、体部；ヘラナデ	(290)		(115)	56	23-1
4	土師器 甕	北4層上	口縁部；横ナデ、体上部；ヘラケズリ	ヘラケズリ	口縁部；横ナデ、体部；ヘラナデ		60	(115)	57	22-8
5	須恵器 坏	北4層上	ロクロ調整	ヘラ切り	ロクロ調整	141	78	41	58	
6	須恵器 坏	北4層上	ロクロ調整	ヘラ切り	ロクロ調整	142	92	44	59	
7	須恵器 蓋	北4層上	ロクロ調整、天井部；回転ヘラケズリ		ロクロ調整	178		(28)	61	22-10
8	須恵器 壺	北4層上	体部；ロクロ調整		ロクロ調整		88	(140)	60	
9	須恵器 壺	北4層上	体部；ロクロ調整・平行沈線		体部；青海波オサエ			(143)	62	22-11
10	須恵器 壺	北4層上	体部；ロクロ調整・平行タタキ		体部；ナデ			(103)	63	

第47図　第09号溝出土遺物

Ｃ－5 区では東辺の一部、長さ約 16m を精査した。溝はＮ－50°－Ｅの方向に延び、上幅 3.6～4.5m・下幅 2.1～2.8m・深さ 66～72 ㎝である。溝には部分的に幅 13～34 ㎝の段が見られるが、断面形は概ね逆台形である。遺物は非ロクロ土師器・須恵器の小破片が何点か出土したのみで、ほかに加工痕を持つ木材片数点がある。堆積土は 10 層で、Ⅲ層に大別できる。2 層は灰白色火山灰層である。また、先に述べた木製品はⅢ層から出土しており、木の根などの有機物も出土している。

Ｃ－6 区では北辺の一部、長さ約 23m を精査した。溝はＮ－60°－Ｅの方向に延び、上幅 2.4～2.9m・下幅 1.7～2.0m・深さ 29～39 ㎝で、断面形は東辺部とほぼ同じである。Ｃ－5 区に比べて浅く、削平を受けているものと思われる。堆積土は 7 層に分けられ、Ⅱ層に大別できる。遺物はⅡ層上面からまとまって出土している。

[出土遺物]図示したのはＣ－6 区で出土した土器である。第 47 図 1・2 は内黒の非ロクロ土師器坏で、1 は口縁部が長く内彎気味に立ち上がり、底部は平底風の丸底である。2 は口縁部がゆるやかに外反し、底部は丸底である。3・4 は非ロクロ土師器甕である。3 は体部が球状を呈するもので、頸部と体部の境に段を有し、口縁部は大きく外反する。4 は小形のもので、体部は軽く膨らみ、頸部と体部の境に稜を持つ。5・6 は底部切り離しがヘラ切りの須恵器坏で、5 は体下部が丸味を持ち、6 は直線気味に立ち上がる。7 は須恵器蓋で口縁部が屈曲して短く垂下しており、天井部外面には回転ヘラケズリが施されている。8・9 は須恵器長頸壺で、いづれも体部は球形である。8 は底部にやや外に張りだす高台を持ち、外面に自然釉が見られ、9 は体部に平行沈線が巡る。10 は須恵器小形甕で、体部は球形を呈し、体部下半にタタキを有する。第 48 図 1 は須恵器中形甕で、頸部が「く」の字形に外反している。2 は須恵器鉢で、口縁部が強く屈曲して縁帯を形成している。他に非ロクロ土師器の内黒坏破片、非ロクロ土師器甑の底部破片などが出土している。

第 10 号溝（ＳＤ－10：第 3・48 図）

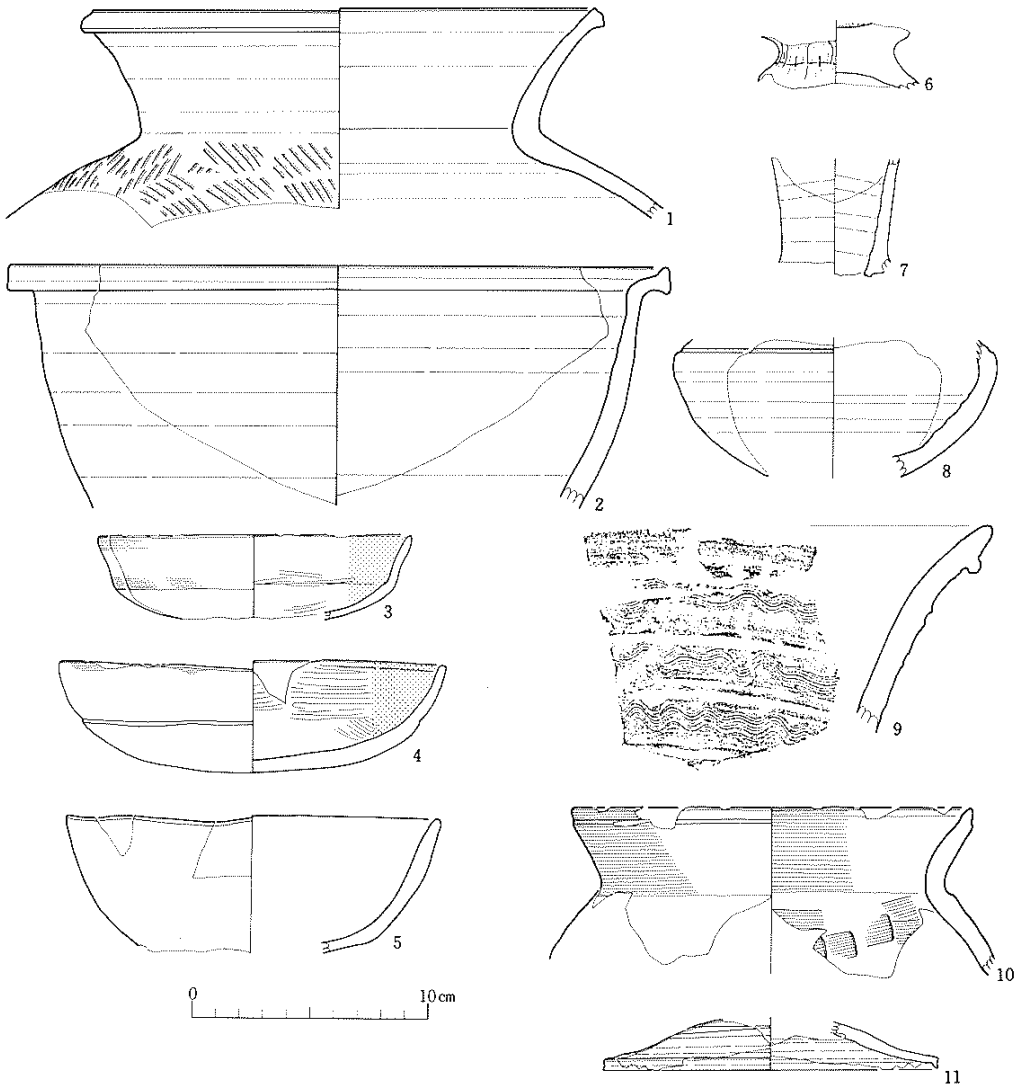
ＳＤ07 溝、ＳＩ11・12 住居跡と重複し、前者に切られ、後者を切っている。

[出土遺物]第 48 図に示した 1・2・3 はいづれも非ロクロ土師器である。1 は頸部と体部の境に稜線、2 は段を有し、3 は体部が内彎気味にゆるやかに立ち上がるものである。他の遺物として土師器甕・須恵器甕・中世陶器の破片が出土している。

第 17 号溝（ＳＤ－17：第 5・48 図）

Ｃ－5 区のＳＤ09 溝に平行して延びるＳＡ01 一本柱列のすぐ横を走る溝である。ＳＤ16 溝と重複し、これを切っている。

[出土遺物]第 48 図 10 に示したものは非ロクロ土師器甕で、口縁部が短く立ち上がっており、沈線状のものが巡る。他に須恵器坏・甕の破片が出土している。



番号	種別	遺構名－層位	外面	内面	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	登録	図版No
1	須恵器 甕	SD09－4上	ロクロ調整、体部；平行タタキ	ロクロ調整	221		89	64	23-2
2	須恵器 鉢		ロクロ調整	ロクロ調整	280		103	65	
3	土師器 坏	SD10	口縁部；横ナデ、体部；摩滅不明	ヘラミガキ→黒色処理	(132)		(37)	66	
4	土師器 坏		口縁部；横ナデ、体部；摩滅不明	ヘラミガキ→黒色処理	164		48	67	23-3
5	土師器 坏		摩滅不明	摩滅不明	159		(61)	68	23-4
6	土師器高坏	SX02小溝跡	脚部；ヘラケズリ	坏部；ヘラミガキ→黒色処理			(28)	69	
7	須恵器 蓋		ロクロ調整	ロクロ調整			(50)	70	
8	須恵器平瓶		ロクロ調整	ロクロ調整			(58)	71	
9	須恵器 甕		ロクロ調整、口縁部；櫛描波状紋・平行沈線	ロクロ調整	?		?	72	24-2
10	土師器 甕	SD17	口縁部；横ナデ、体部；摩滅不明	口縁部；横ナデ、体部；ヘラナデ	170		(71)	73	
11	須恵器 蓋	SD19	ロクロ調整	ロクロ調整	142		(21)	74	

第48図　各溝跡出土遺物

第 19 号溝（ＳＤ－19：第 5・48 図）

Ｃ－5 区の東端、旧用水路の西側にある。

[出土遺物]出土遺物は比較的多いがすべて破片で、土師器坏・甕、須恵器坏・高台付坏・甕・蓋が出土している。第 48 図 11 に図示したものは須恵器蓋で、口縁部が屈曲して短く垂下しており、天井部には回転ヘラケズリが施されている。須恵器坏には底部切り離しがヘラ切りのものの他に、回転糸切りのものがある。

第 32・33 号溝（ＳＤ－32・33：第 3 図）

Ｃ－1 区北東側で検出された。ＳＢ26・28 掘立柱建物跡およびＳＤ34 溝と重複しており、これらを切っている。ＳＤ32 溝が幅 23～50 ㎝・深さ 5～14 ㎝、ＳＤ33 溝が幅 19～54 ㎝・深さ 17～35 ㎝で、ＳＤ33 溝の方が深いようである。ＳＤ32 溝とＳＤ33 溝は切り合い関係が明確に捉えられなかったものの、方向がＳＤ32 溝はＮ－9°－Ｅ、ＳＤ33 溝はＮ－75°－Ｗと、ほぼ直角に交わっており、またＳＢ26 掘立柱建物跡などとも方向が一致している。

以上のことから、これらは一連のもので、居住域を区切る溝の可能性がある。ＳＤ34 溝もこれに関係するものと思われる。遺物は出土していない。

(6) その他の遺構と出土遺物

その他の遺構としては、Ｃ－5 区で検出した竪穴状遺構（ＳＸ－01）とＣ－1 区西側で検出した小溝状遺構（ＳＸ－02・03）、Ｃ－5・6 区で検出した一本柱列（ＳＡ－01）の 4 つがある。

第 01 号竪穴状遺構（ＳＸ－01：第 5 図）

平面形はほぼ隅丸の長方形を呈し、規模は長軸 6.8m・短軸 4.2～4.6m・深さ 4～13 ㎝で、底面は若干の凹凸が見られた。遺物は出土していない。時期・正確は不明である。

第 02 号小溝状遺構（ＳＸ－02：第 3・48 図）

9 条の溝がほぼ平行して延びている。途切れているものもあるが、本来は続いており、底面は凹凸があるため、削平されて現在の状況になったものと思われる。ＳＢ05・06 掘立柱建物跡、ＳＤ07 溝、ＳＥ01 井戸と重複しており、ＳＢ06 掘立柱建物跡を切り、ＳＢ05 掘立柱建物跡・ＳＤ07 溝・ＳＥ01 井戸に切られている。長さは 1.0～10.5m、幅は 16～46 ㎝、溝の中央間の距離は 66～80 ㎝である。深さは 1～15 ㎝と区々である。方向はほとんどがＮ－42°－Ｅを向いている。底面の一部に農耕具を使用した際の痕跡と思われる段が認められ、形状などから、畑跡の可能性が考えられる。

[出土遺物]第 48 図 6 は非ロクロ土師器高坏の脚部破片である。7 は須恵器壺の頸部破片で、直線気味にやや外傾しながら立ち上がるものである。8 は須恵器平瓶の体部破片で、体上部で屈曲し沈線を巡らすものである。9 は須恵器甕口頸部破片で、櫛描波状文を数条巡らしている。ほかの遺物としては、土師器坏・甕、須恵器甕・壺の破片が比較的多く見つかっている。

第 03 号小溝状遺構（ＳＸ－03：第 3 図）

6 条の溝が平行して延びている。ＳＩ05・06 住居跡と重複し、これらを切っている。長さは 1.5～3.4m、幅は 23～40 cm、溝の中央間の距離は 66～76 cmである。方向はＮ－68°－Ｅを向いている。ＳX02 小溝状遺構と形態において類似しており、畑跡の可能性がある。遺物は出土していない。

第 01 号一本柱列（ＳＡ－01：第 4・5・46 図）

ＳD09 溝に平行して延びるもので、Ｃ－5 区とＣ－6 区で検出した。溝状の掘込みに柱列が伴うものである。

Ｃ－5 区ではＳK16 土壙と重複し、これに切られている。ＳD09 溝中央から約 7.5m 西側を平行して延びており、掘り方は上幅 40～70 cm・下幅 28～39 cm・深さ 17～23 cm、柱痕跡は平面形が円形または楕円形で、径 12～17 cm、深さは 23～45 cmである。柱間隔は 24～42 cmで、柱が検出できなかったと思われる箇所が 2 箇所ある。出土遺物には柱痕跡部分から木片と木の実が出土している。

Ｃ－6 区では第 08 号溝と重複しているが、切り合い関係は不明である。ＳD09 溝中央から約 7.5m 南側をほぼ平行して延びており、Ｃ－5 区と方向は違うものの同じ状況である。掘り方は上幅 23～42 cm・下幅 12～26 cm・深さ 4～15 cm、柱痕跡は平面形が円形・楕円形・不整円形で、径 10～21 cm、長径 26～40 cm・短径 11～22 cm、深さ 8～30 cmである。柱間隔は接しているものから 1.0m ほど離れているものまでさまざまである。出土遺物はない。

形態や第 09 号溝との関係から、Ｃ－5 区とＣ－6 区で検出した一本柱列は一連のもので、集落を区画すると思われるＳD09 溝に付属する塀跡と考えられる。

なお、図示しなかったが、縄文土器 6 点、石匙 1 点、石鏃 2 点が出土している。いづれも遺構の堆積土中から出土しており、二次的な堆積によるものと思われる[写真図版 24　出土遺物（6）3～11]。3～8 は縄文土器で、このうち時期が特定できるのは 4 と 8 である。4 は体部破片で沈線により方形を描くもので、後期前半頃のものと推定される。8 は口縁部破片で、口縁部が短く屈曲して内・外面に沈線を巡らすものである。晩期のものと思われる。9 は石匙、10 は有柄、11 は無柄の石鏃である。10 の柄部にはアスファルトが付着している。

2. B地区で発見された遺構と遺物

今回の調査区は昨年度調査区の東側水田部分にあたり、C－6 区から用水路を挟んだ北側に位置し、標高は 17m ほどである。水田耕作土下に 30 cmほどの黒色土層があり、掘立柱建物跡はこの層中から掘り込まれていたが、最終的には地山面で検出している。

発見された遺構は掘立柱建物跡 6 棟（ＳＢ32～37）・土壙 2 基（ＳＫ19・20）・溝 4 条（ＳＤ40～43）・ピットである。

(1) 掘立柱建物跡（第 49・50 図）

検出された 6 棟の掘立柱建物跡には次のような重複関係が見られる。

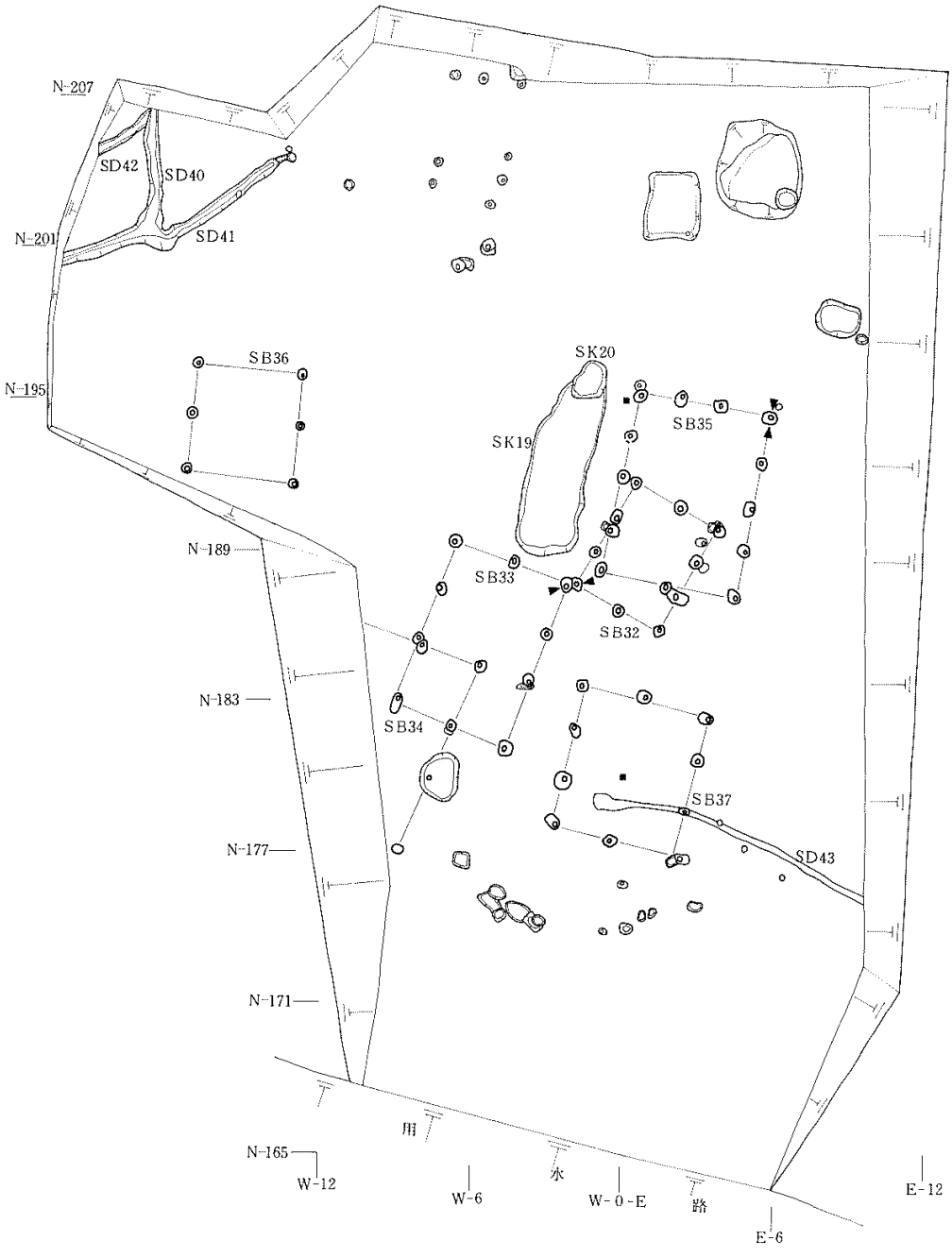
ＳＢ32→ＳＢ33→ＳＢ34、ＳＢ32→ＳＢ35、ＳＢ37→ＳＤ43

[ＳＢ32 掘立柱建物跡]桁行 3 間、梁行 2 間の南北棟である。建物総長は桁行 4.8m・梁行 3.8m で、柱間は桁行が西側柱列で北から 1.5m・1.6m・1.6m、梁行は南妻で西から 2.0m・1.8m である。建物の方向はＮ－3°－Ｅである。柱穴は長軸 50 cmほどの不整方形で、深さは 45～50 cm であり、埋土は地山ブロックが混じる黒褐色土である。柱痕跡は直径 16～20 cmの円形である。

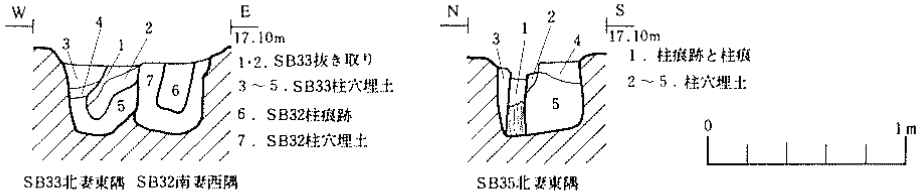
[ＳＢ33 掘立柱建物跡]桁行 3 間、梁行 2 間の南北棟である。建物総長は桁行 6.95m・梁行 4.9m で柱間は桁行が西側柱列で北から 2.5m・2.2m・2.0m、梁行は南妻で 2.5m・2.31m である。建物の方向はＮ－3°－Ｗである。柱穴は長軸 50～76 cmほどの楕円形あるいは不整方形で、深さは 45～50 cmであり、埋土は地山ブロックが混じる黒褐色土である。柱痕跡は直径 16 cmほどの円形である。柱穴から非ロクロ土師器甕・内面に自然釉の掛かる須恵器壺の破片が出土している。

[ＳＢ34 掘立柱建物跡]桁行 3 間以上、梁行 1 間以上の南北棟で、北妻と東桁の一部を除いて調査区外に延びている。検出された範囲での建物総長は桁行 8.0m・梁行は 1 間分 2.4m で、柱間は桁行が東側柱列で北から 3.0m・2.35m・2.65m である。建物の方向はＮ－15°－Ｗである。柱穴は長軸 50 cmほどの楕円形で、深さは 50 cmほどであり、埋土は地山ブロックが混じる淡黄色粘土である。柱痕跡は直径 15 cmほどの円形である。

[ＳＢ35 掘立柱建物跡]桁行 4 間、梁行は北妻が 3 間・南妻が 2 間の南北棟である。建物総長は桁行 7.2m・梁行 5.2m で柱間は桁行が東側柱列は 1.8m の等間であり、梁行は北妻で 1.6m・1.6m・2.0m である。建物の方向はＮ－15°－Ｅである。柱穴は長軸 45～56 cmほどの楕円形あるいは不整方形で、深さは 40 cmほどであり、埋土は赤黒色土が斑状に混じる淡黄色粘土



第49図　B地区遺構配置図



第50図　柱穴断面図（ＳＢ32・33・35）

である。柱痕跡は直後12～20㎝ほどの円形である。

[ＳＢ36掘立柱建物跡]桁行2間、梁行1間の南北棟である。建物総長は桁行・梁行とも4.3mで、柱間は桁行が東側柱列で 2.3m・2.0m である。建物の方向はＮ－21°－Ｗである。柱穴は長軸30～48㎝ほどの楕円形で、深さは20㎝ほどであり、埋土は黒色腐食土である。柱痕跡は直径18～24㎝ほどの円形である。

[ＳＢ37掘立柱建物跡]桁行3間、梁行2間の南北棟である。建物総長は桁行5.7m・梁行5.1mで、柱間は桁行が西側柱列で 1.8m・2.1m・1.7m、梁行は北妻で 2.5m・2.6m である。建物の方向はＮ－13°－Ｗである。柱穴は長軸45～55㎝ほどの不整方形で、深さは20～30㎝ほどであり、埋土は褐灰色土が混じる淡黄色粘土である。柱痕跡は直径12～20㎝ほどの円形である。

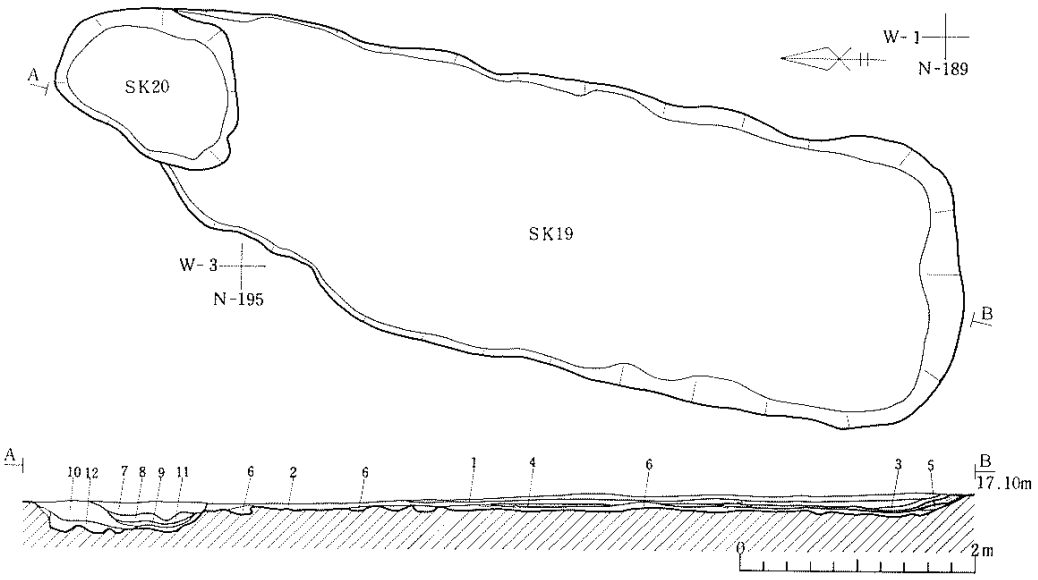
(2) 土壙と出土遺物

土壙は2基検出されている（ＳＫ19・20）。これらは互いに重複しており、ＳＫ19土壙をＳＫ20土壙が切っている（第51・52図）。

[ＳＫ19土壙]

平面形は南北方向に長い隅丸長方形状を呈し、北端部分では丸みを帯びている。規模は長軸6.9m×短軸2.2mで、底面には凹凸があり、深さは6～20㎝である。堆積土は6層確認され、4層には炭化物・焼土が多く含まれている。遺物は2層～4層上面から多く出土している。

[出土遺物]図化できた遺物は13点あり、第52図に示している。1～3は土師器、4～13は須恵器である。1 はロクロ使用の坏で体部下端～底部にかけて回転ヘラケズリ再調整がなされ、底部の切り離しは不明である。内面は黒色処理されている。2 は体部上半が直立気味に立ち上がり口縁部が外反する甕である。3はロクロ使用の小形甕で口縁部が縁帯状である。4～8は坏、9～11は高台付坏、12は蓋、13は甕である。4・5は底部切り離しがヘラ切りで体部～口縁部が直線的に外傾し、6は口縁部が僅かに外反している。7は体部に稜をもち口縁部が外反している。8は体部中央に把手が付く。9は体部～口縁部が直線的に外傾し、10は体部下端が丸みを持つ。内面底部が摩滅しており、かつ墨痕が見られることから硯として使用されたもの



層No	土色	土性	備考	
1	黒褐色 (5YR3/1)	砂質シルト	炭化物を含む。しまりあり。	ＳＫ１９堆積土
2	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	炭化物・灰を含む。	
3	褐灰色 (7.5YR4/1)	砂質シルト	炭化物・灰を含む。	
4	黒褐色 (7.5YR3/1)	シルト	焼土・炭化物・灰を若干含む。	
5	黒褐色 (7.5YR3/1)	シルト	砂が混じる。	
6	褐灰色 (10YR4/1)	シルト	粘性あり。	
7	黒褐色 (2.5YR3/1)	砂質シルト	炭化物を含む。	ＳＫ２０堆積土
8	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	炭化物を微量に含む。粘性が強い。	
9	暗赤褐色(5YR3/3)	シルト	屑金質。	
10	黒褐色 (5YR2/1)	シルト	粘性が強い。	
11	黒褐色 (7.5YR2/1)	シルト	灰を微量に含む。粘性が強い。	
12	黒色(5YR1.7/1)	シルト		

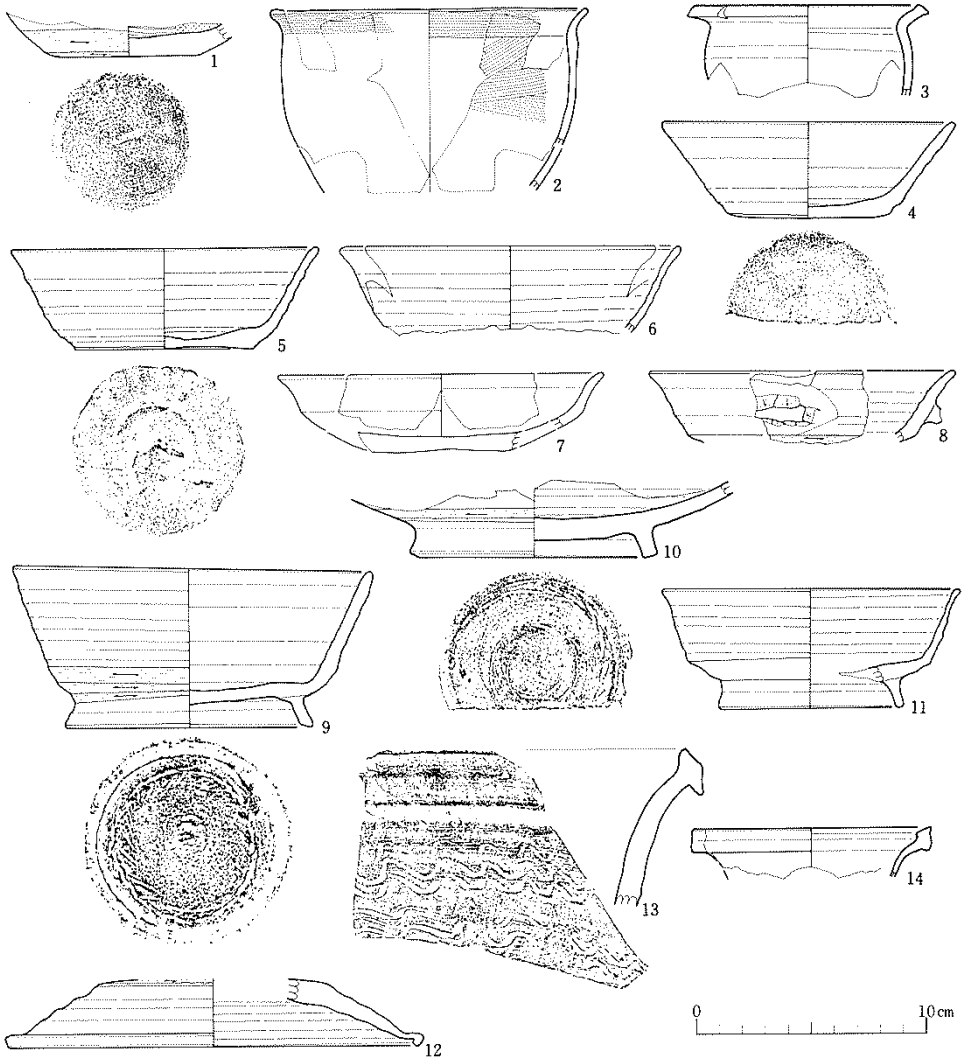
第51図　第19・20号土壙

と考えられる。9・10は体部下端～底部に回転ヘラケズリ再調整が施されている。11は体部下位に稜を持つものである。12は口縁部が内反気味に折れ、天井部には回転ヘラケズリ再調整が施されている。13は口縁部が縁帯状で頸部に櫛描波状文が施されている。

[ＳＫ20土壙]

平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸1.6m・短軸1.2mで深さは20～26cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸が見られる。堆積土は6層確認され、いずれも自然堆積土と思われる。

[出土遺物]土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壺が出土しているが、いずれも細片であり、図化できたものは第53図4の須恵器長頸壺1点だけである。頸部が外反して立ち上がり、口縁部は縁帯状を呈し、内面口唇部は削れたように平坦になっている。



番号	種別	層位	外面	底部	内面	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	登録	図版No
1	土師器 坏	底面	体下部：回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理		61	(20)	75	
2	土師器 甕	2層上	口縁部：横ナデ、体部：磨滅不明		口縁部：横ナデ、体部：ヘラナデ	138		(81)	76	
3	土師器 甕	X	ロクロ調整		ロクロ調整	105		(40)	77	22-1
4	須恵器 坏	底面	ロクロ調整	ヘラ切り	ロクロ調整	127	71	42	78	
5	須恵器 坏	1層上	ロクロ調整	ヘラ切り	ロクロ調整	134	79	44	79	22-2
6	須恵器 坏	X	ロクロ調整		ロクロ調整	(148)		(38)	80	
7	須恵器 坏	X	ロクロ調整	手持ちケズリ？	ロクロ調整	(141)	60	34	81	
8	須恵器 坏	2層上	ロクロ調整、把手部分：ヘラケズリ		ロクロ調整			(33)	82	
9	須恵器台坏	2層上	ロクロ調整、体下部：回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	ロクロ調整	156	108	70	83	22-4
10	須恵器台坏	2層上	ロクロ調整、体下部：回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	ロクロ調整		108	(33)	84	
11	須恵器台坏	2 層	ロクロ調整		ロクロ調整	130	81	52	85	22-3
12	須恵器 蓋	2層上	ロクロ調整、天井部：回転ヘラケズリ		ロクロ調整	182		(30)	86	
13	須恵器 甕	2 層	ロクロ調整、頸部：横描波状紋		ロクロ調整			(71)	87	21-5
14	須恵器 蓋	X	ロクロ調整		ロクロ調整	104		(22)	88	

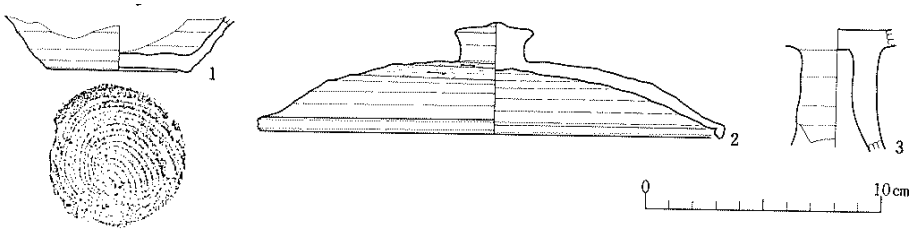
第52図　第19・20号土壙出土遺物(No.14のみ20号土壙)

(3) 溝（第 49 図）

溝は 4 条検出されている（ＳＤ40～43）。いずれも削平がひどく残存する深さは 3～17 ㎝と浅い。ＳＤ40～42 溝は重複しており、ＳＤ42 溝がＳＤ40 溝に切られている。ＳＤ41 溝との新旧関係については明らかにできなかった。

(4) その他の出土遺物

遺構以外から出土し図化できた遺物について簡単に述べる（第 53 図）。3 点とも出土層位不明で、いずれも須恵器である。1 は坏で体部下端が直立気味に立ち上がり、底部切り離しは回転糸切りである。2 ば蓋で偏平な宝珠状のつまみをもち、口縁部は内反気味に折れ、天井部には回転ヘラケズリ再調整が施されている。3 は高坏脚部である。上半は柱状を呈し、下半がやや開くものである。



番号	種別	層位	外面	底部	内面	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	登録	図版No
1	須恵器 坏	X－X	ロクロ調整	回転糸切り	ロクロ調整		62	(24)	89	
2	須恵器 蓋	X－X	ロクロ調整、天井部；回転ヘラケズリ		ロクロ調整	199		48	90	
3	須恵器高坏	X－X	脚部；ロクロ調整		ロクロ調整			(50)	91	

第53図　Ｂ地区遺構外出土遺物

(5) 出土遺物と遺構の年代

Ｂ地区で検出された遺構・遺物は上記の通りで、遺物はＳＫ19・20 土壙から出土しただけである。出土遺物を基に各遺構の年代について検討してみる。

ＳＫ19 土壙では底面からロクロ使用で底部切り離しが不明の土師器坏（体部下端～底部に回転ヘラケズリ再調整）と底部切り離しがヘラ切りで体部から口縁部が直立気味に外傾する須恵器坏が共伴出土している。このような共伴例は志波姫町御駒堂遺跡第 17 号住居跡（小井川・小川；1982）などで見られ、9 世紀でも古い段階の土器と考えられている。

また、2 層上面から出土した須恵器坏・高台付坏は底部がヘラ切りで、後者では体部から底部に回転ヘラケズリ再調整が施されるものが多い。類似の資料は 8 世紀の後半から 9 世紀後半までのものと考えられている大衡村亀岡遺跡第 1 号住居跡（金谷・中嶋；1977）に見られるが、底面出土のものと大きな違いはなく、8 世紀後半から 9 世紀でも古い段階までのものと考えられる。

次に、ＳＫ20 土壙出土遺物であるが、ロクロ使用の土師器坏や底部切り離しがヘラ切りの

須恵器坏が出土していることから、ＳK19 土壙出土遺物とほぼ同時期のものと考えられる。

以上のことからＳK19 土壙は 9 世紀前半頃までの遺構と考えられ、ＳK20 土壙についてもＳK19 土壙よりは後出であるものの近接した時期の遺構と考えられる。

掘立柱建物跡では柱穴から非ロクロ土師器甕の体部破片と須恵器壺の破片が出土しているだけであり、その帰属年代を明確にし得ない部分が多いが、周辺から出土する遺物はいずれも 9 世紀前半までのものであることなどから、建物跡の年代も遺物と近接した時期である可能性が考えられる。

掘立柱建物跡は重複関係から最低でも 3 段階の変遷が考えられる。柱筋を揃えるＳB35 建物跡とＳB36 建物跡には同時に存在した可能性もあり、9 世紀前半ころまでに数棟ずつが存在したものであろう。

なお、Ｂ地区では昨年度の調査でも平安時代と考えられる掘立柱建物跡が検出されており、今回発見された建物跡のいずれかと組み合う時期のものと考えられる。周辺域の調査によってより具体的な集落構成が明らかにされるものと考える。

3. Ｅ地区で発見された遺構と遺物

Ｅ地区はＣ－5 区から用水路を挟んだ東側に位置しており、東側が高く西側に緩やかに傾斜している（第 2 図）。発見された遺構は、竪穴住居跡 1 軒（ＳＩ－09）・土壙 3 基（ＳＫ－21～23）・井戸 1 基（ＳＥ－03）・溝 13 条（ＳＤ－20～27・44～48）・ピットで、いづれも地山面で検出した。住居跡は北東側の高所に位置し、Ｃ－1 区とほぼ同じ標高である。遺構の多くは上部を削られており、斜面の下部に集中して検出された（第 5 図）。

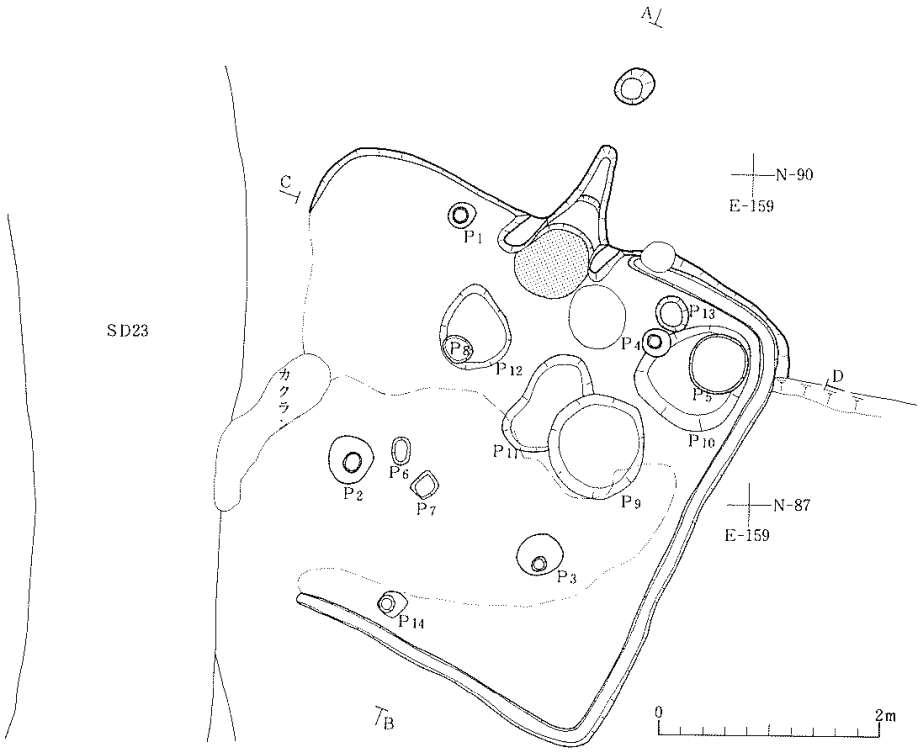
(1) 竪穴住居跡と出土遺物

第 09 住居跡（ＳＩ－09：第 54・55 図）

[重複] ＳD23 溝と重複していたと考えられるが、西側と南側が削平されており前後関係は不明である。第 2 次調査においてＳD23 溝を検出しているが、その際、堆積土下部から近世磁器が出土しており、住居跡が切られていると思われる。

[平面形・規模]平面形はほぼ隅丸方形で、規模は現状で南北軸 4.12m、東西軸 4.48m あり、やや東西に長い。

[壁]壁は地山で、検出できたのは北壁と東・西壁の北寄りの一部である。壁の残存高は東壁で 24 ㎝、西壁で 5～7 ㎝、北壁で 10～24 ㎝である。立ち上がりは西・北壁が比較的急で、東壁でゆるい。



層No.	土色	土性	備考	
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	焼土・炭化物を多く含む。地山粒を含む。しまりあり。	大別第Ⅰ層 住居内堆積土1
2	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	焼土・炭化物を多く含む。地山粒・灰白色火山灰を含む。	
3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒を含む。	大別第Ⅱ層 住居内堆積土2
4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	焼土粒・地山粒を含む。しまりあり。	
5	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロックを含む。	
6	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロックを多く含む。	
7	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	焼土粒・焼土塊・炭化物を多く含む。	大別第Ⅲ層 住居内堆積土3
8	暗褐色(10YR3/4)	シルト	焼土を含む。	ピット6堆積土
9	暗褐色(10YR3/4)	シルト	焼土を含む。ややしまりあり。	大別第Ⅳ層 カマド内堆積土
10	暗赤褐色(5YR2/3)	シルト	焼土を主体とする。	
11	暗褐色(7.5YR3/4)	シルト	焼土塊・灰を含む。	
12	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	地山粒を多く含む。固くしまっている。	
13	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒を多く含む。しまりあり。	大別第Ⅴ層 煙道部先端ピット 堆積土
14	褐色(10YR4/6)	砂質シルト	地山粒を多く含む。	
15	赤褐色(5YR4/8)	シルト	焼き固まっている。	
16	赤褐色(5YR3/6)	シルト	焼土・炭化物を多く含む。	掘り方埋土
17	褐色(10YR4/4)	シルト	焼土・炭化物を多く含む。	
18	褐色(7.5YR4/4)	シルト	地山小ブロック・小礫を含む。	
19	褐色(7.5YR4/4)	シルト	焼土・炭化物・地山粒を含む。やや粘性あり。	

第54図　第09号住居跡

[床面]住居掘り方埋土上面を床面としている。全体の5分の3が削平されており、残存部を見るとほぼ平坦となっている。

[柱穴]柱穴と推定されるのはP1・P2・P3・P13の4個で、P1・P13は北寄りのカマド脇からやや離れたところに位置し、P2・P3はそれぞれ住居平面形の対角線上に位置している。調査当初、P4が柱穴と思われたが、位置がP1に比べて住居内に入り込んでいること、浅く柱痕跡も認められなかったことから、後に検出したP13を柱穴と考えた。掘り方の平面形は円形を基調とし、P2・3がやや小さく径22～33㎝、P3・13が35～42㎝で比較的大きい。柱痕跡は11～18㎝の円形で、深さは確認面から20～29㎝ある。柱間は南北が2.4～2.6m、東西が1.95～2.15mである。なお、P13の柱痕跡は確認しないまま掘り下げたため、不明である。

[周溝]東壁と南・北壁の東半分で検出した。断面形は底面の平坦な「U」字状を呈し、幅12～17㎝、深さ5～10㎝である。

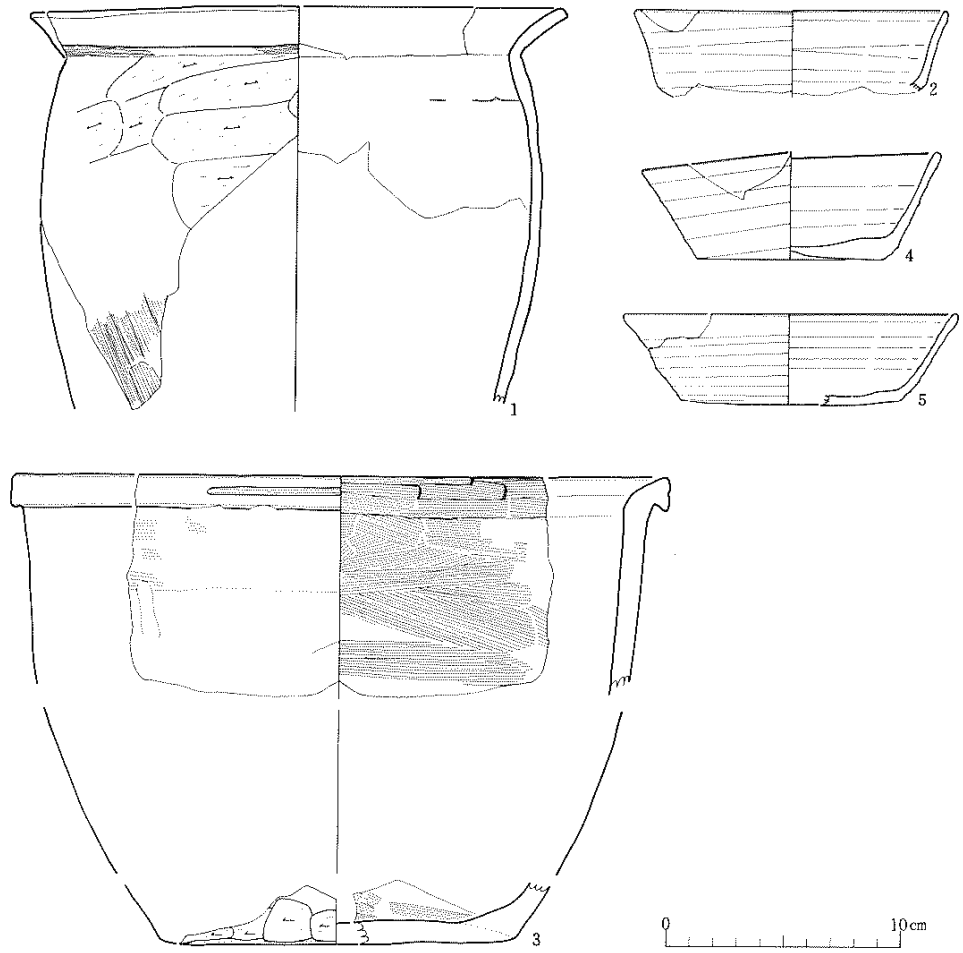
[カマド]カマドは北壁のほぼ中央に設置され、燃焼部と煙道部からなる。全長1.97mで、燃焼部は奥行40㎝、幅105㎝ある。両側壁は粘土積み上げによって構築されており、内側が赤褐色に焼けている。煙道部は溝状部分とピット状部分からなり、長さは1.57mある。溝状部分の長さは80㎝、幅15～60㎝、深さ6～9㎝である。煙道部端に近くなるほど幅・深さとも小さくなる。ピット状部分は長径36㎝、短径29㎝、深さ11㎝である。なお、燃焼部と煙道部の境は高さ6㎝ほどの段となっている。煙道部にも燃焼部寄りに約6㎝の段が認められる。

[その他の施設]住居内で検出したピットは10個ある。削平された地山面で検出したピットはP7・P8の2個、床面で検出したものはP4・P5・P9の3個、掘り方を掘り下げた段階で確認したものがP10・11・12・13・15の5個である。P9は長径95㎝・短径87㎝、深さ10～19㎝の不整円形で、カマドの右脇に位置し、住居跡に伴う貯蔵穴の可能性がある。他のピットの性格は不明である。

[堆積土]住居内の堆積土は19層に細分され、V層に大別できた。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層が住居内の自然堆積土、Ⅳ層がカマド内堆積土、V層がカマド煙道部先端のピット状部分の堆積土である。なお、大別Ⅰ層の1・2層の細分は東西ベルト東半分では明瞭であったが、東西ベルト西半分と南北ベルトでは細分できなかった。

[遺物]図示した資料は5点である。住居跡に伴う遺物は煙道部先端のピット状部分から出土した1の非ロクロ土師器甕のみである。これは頸部が「く」の字状に屈曲する長胴の甕と思われ、遺存状態は悪い。2は須恵器の高台付坏と思われるもので、堆積土から出土している。体部下端に稜線が巡り、体部は直立気味に外傾している。3～5は住居掘り方埋土から出土した

ものである。3 は鉢状の土師器甕で、摩滅しているが口縁部の形態からロクロを使用しているものと思われる。口縁部が強く屈曲し縁帯が巡り、縁帯部には沈線が一条施されている。4・5は須恵器坏で、ともに体部は直線気味に外傾し、底部切り離しはヘラ切りである。ほかに、床面から須恵器坏と須恵器蓋つまみ部（扁平な宝珠つまみ）の破片が出土しており、カマド燃焼部からは非ロクロ土師器甕の体・底部破片がまとまって出土している。また、堆積土中から須恵器坏破片と高台付坏の高台部破片と非ロクロ土師器甕の破片、掘り方埋土から須恵器坏破片



番号	種別	層位	外面	底部	内面	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	登録	図版
1	土師器 甕	12・13層	口縁部：横ナデか?、体上：ケズリ、体下：ナデ		口縁部：ナデ、体部：ナデか?	(229)		(172)	92	
2	須恵器 台坏	4 層	ロクロ調整		ロクロ調整	133		(37)	93	
3	土師器 甕	掘り方埋土	ロクロ調整、体最下部：ケズリ		ロクロ調整	(280)	(151)		94	21-4
4	須恵器 坏	掘り方埋土	ロクロ調整	ヘラ切り	ロクロ調整	(127)	(79)	47	95	21-5
5	須恵器 坏	掘り方埋土	ロクロ調整	ヘラ切り	ロクロ調整	(142)	(93)	39	96	21-6

第55図　第09号住居跡出土遺物

数点と高台付坏と思われる破片が出土している。

(2) 土壙と出土遺物

E区からは 3 基の土壙（第 21～23 号土壙）が検出されている。各土壙から遺物が出土しているが、ここでは器形を復元することができた遺物を出土している第 21・22 号土壙について説明する。

第 21 号土壙（ＳＫ－21：第 5・56 図）

ＳＤ27 溝に切られている。平面形は楕円形を呈するものと思われ、規模は東西方向の長軸が 2.5m 以上、南北方向の短軸が 1.7m、深さは 28 cmである。底面はほぼ平坦で、壁の立ちあがりは緩やかである。堆積土は 7 層で、Ⅲ層に大別できた。いづれも自然堆積土である。

[出土遺物]図化できた資料は 2 点で、堆積土中からの出土である。1 は非ロクロ土師器坏で、内面は黒色処理されていない。器壁は薄く、口縁部が短く屈曲して直立し、口縁下部に稜を持つ。体・底部は丸底状を呈するものと思われる。2 はヘラ切りの須恵器坏で、体部は直線気味に外傾し、底部は上げ底風となっている。器壁が厚く、ロクロ目は明瞭でない。他に、非ロクロ土師器甕の破片多数と焼け石が出土している。

第 22 号土壙（ＳＫ－22：第 5・56 図）

ＳK21 土壙と同様にＳＤ27 溝に切られている。平面形は不整円形を呈し、規模は現状で東西方向の長軸が 2.1m、南北方向の短軸が 1.4m、深さが 24 cmである。堆積土は 5 層でいづれも自然堆積土と考えられる。

[出土遺物]第 56 図 3 に図示したものは、須恵器甕の口頸部破片で、頸部に櫛描波状文を数条巡らしている。他に、非ロクロ土師器甕の体部破片が僅かに出土している。いづれも堆積土中から出土している。

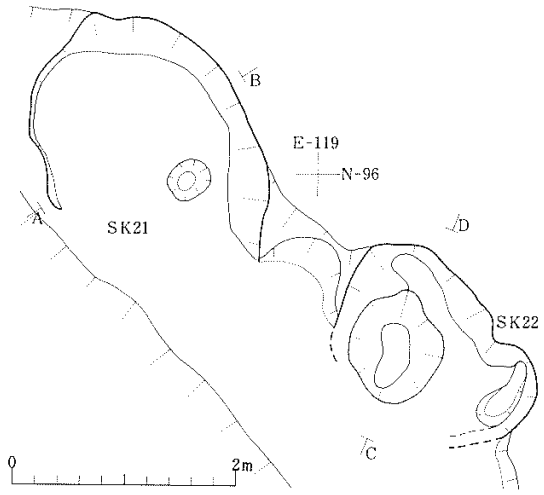
(3) 井戸と出土遺物

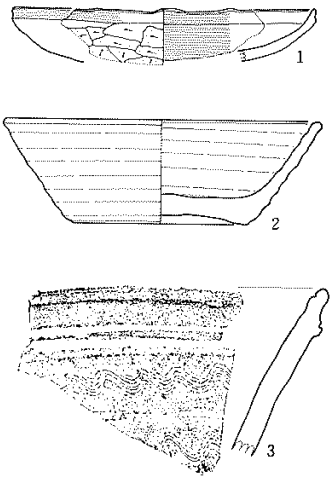
ＳＩ09 住居跡の南西側で 1 基検出した。上部は削平されていると思われる。

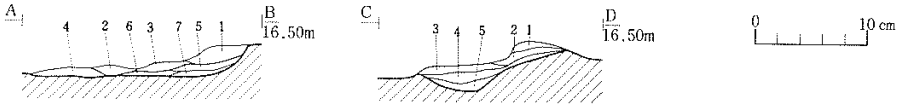
第 03 号井戸（ＳＥ－03：第 3・56 図）

確認面での平面形は長径 2.1m・短径 1.9m の不整円形で、深さは約 80 cmである。深さ 30 cm前後まで摺り鉢状に窪み、それ以下は傾斜が急となる。壁面と底面、特に西側の壁面には凹凸がある。堆積土は 8 層に分けられ、いづれも自然堆積土と思われる。

[出土遺物]須恵器坏・甕の破片が数点出土している。甕の破片は体部のもので、外面タタキ・内面ナデのものと内・外面タタキの後ナデのものがある。







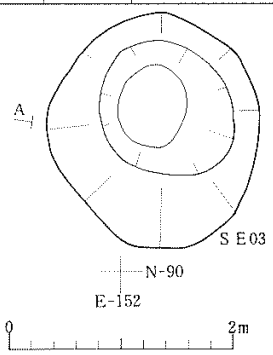
SK21

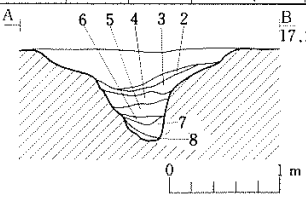
層No	土色	土性	備考	
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	しまり・粘性あり。	大別第Ⅰ層
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	粘性あり。	
3	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	しまり・粘性あり。	
4	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	しまり・粘性あり。	大別第Ⅱ層
5	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	しまり・粘性あり。	大別第Ⅲ層
6	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	しまり・粘性あり。地山ブロックを含む	
7	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	しまり・粘性あり。	

SK22

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	黄褐色の粗い粒を多く含む。しまり・粘性あり。
2	黒褐色(10YR2/3)	シルト	黄褐色の粗い粒を含む。しまり・粘性あり。
3	黒褐色(10YR2/3)	シルト	多量の黄褐色の粗い粒・地山ブロックを含む。しまり・粘性あり
4	黒褐色(7.5YR2/2)	シルト	黄褐色の粗い粒を少量含む。しまり・粘性あり。
5	黒褐色(10YR2/2)	シルト	黄褐色の粗い粒を少量含む。粘性が強く、しまりがない。

番号	種別	遺構名と層位	外面	底部	内面	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	登録	図版No
1	土師器 坏	SK21	口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラケズリ		ヨコナデ	(136)		(24)	97	
2	須恵器 坏	SK21	ロクロ調整	ヘラ切り	ロクロ調整	(141)	(78)	47	98	22-6
3	須恵器 甕	SK22	ロクロ調整、口頸部：櫛描波状文・平行沈線		ロクロ調整				99	22-7





層No	土色	土性	備考
1	黒褐色 (7.5YR2/2)	シルト	地山粒を少し含む。
2	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	地山粒を多く含む。しまりあり。
3	黒褐色 (7.5YR2/2)	シルト	
4	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	地山ブロックを多く含む。
5	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト	砂を含む。
6	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	砂を含む。
7	褐色(7.5YR4/3)	クレイ	地山崩壊土か？
8	黒褐色 (7.5YR3/2)	砂質シルト	地山ブロックを含む。粘性あり。

第56図　土壙・井戸と出土遺物

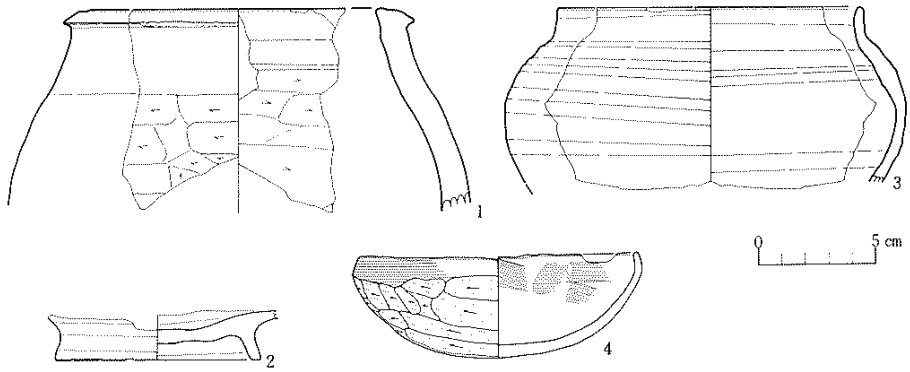
(4) 溝と出土遺物

13条（第20～27・44～48号溝）の溝を検出した。このうちＳＤ23溝は第2次調査で検出された第2号溝とＳＤ25溝は第8号溝と同一のものである。遺物が出土したものはＳＤ20～24・26・27溝の7条であるが、ここでは以下の4条について説明する。

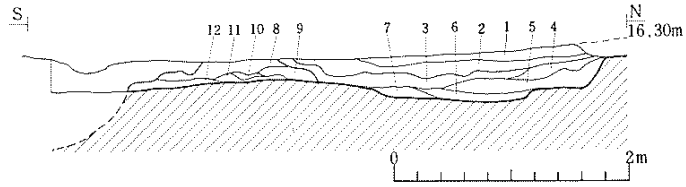
第22号溝（ＳＤ－22：第5・57図）

ＳＤ24・44・45溝と重複しており、切り合いが明確なものはＳＤ24溝のみで、これに切られている。一部削平により途切れている部分がある。

[出土遺物]第57図1に示す中世陶器壺が出土している。体部は膨らみ、頸部は口縁部まで内



番号	種別	遺構名と層位	外面	底部	内面	口径(cm)	底径(mm)	器高(mm)	登録	図版No
1	中世陶器 壺	ＳＤ22	口縁部：ロクロナデ、体部：ナデ		口頸部：ロクロナデ、体部：ナデ	(148)		(86)	100	
2	須恵器 壺	ＳＤ24	ロクロ調整		ロクロ調整	(129)		(74)	101	
3	須恵器 台坏	ＳＤ26	ロクロ調整	ヘラ切り→ナデ	ロクロ調整		87	(21)	102	23-5
4	土師器 坏	ＳＤ27－6層	口縁部：横ナデ、体部：ケズリ	ケズリ	口縁部・体部：ナデ	118		44	103	23-7



SD27

層No	土色	土性	備考	
1	暗褐色(10YR3/3)	砂質シルト	酸化鉄・礫を含み、しまりあり。	大別第Ⅰ層
2	黒褐色(10YR2/3)	シルト	小礫を多く含み、地山ブロックを含む。	
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト	小礫・炭化物粒を少し含む。	
4	黒褐色(10YR3/1)	シルト	小礫を多く含む。	
5	黒色(7.5YR2/1)	シルト	地山ブロック・炭化物粒を含む。粘性強い	
6	黒色(7.5YR2/1)	シルト	地山粒を少し含む。	
7	黒色(10YR2/1)	シルト	地山小ブロックを含む。5層より少ない。	
8	黒褐色(10YR2/3)	砂質シルト	小礫・地山ブロックを含む。	大別第Ⅱ層
9	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山小ブロック・炭化物粒を含む。	
10	黒褐色(10YR2/2)	シルト	小礫を少し含む。	
11	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒を多く含む。	
12	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山粒・小礫を含む。	

第57図　Ｅ地区溝出土遺物と第27号溝断面図

傾して立ち上がる。口縁外端部は鋭く突出している。他に、堆積土中から非ロクロ土師器坏・甕、須恵器坏・甕・高台付坏、近世磁器碗の破片が出土している。

第 24 号溝（ＳＤ－24：第 5・57 図）

ＳＤ22・44・45 溝と重複しており、切り合いが明確にわかるものはＳＤ22 溝のみで、これを切っている。西側が削平されている。

[出土遺物]第 57 図 2 は須恵器高台付坏の底部破片で、高台部はやや裾が広がっている。他には須恵器坏・蓋・甕の破片があり、蓋は扁平な宝珠状のつまみを有する。いづれも堆積土中出土である。

第 26 号溝（ＳＤ－26：第 5・57 図）

ＳＤ27 溝と重複し、これを切っている。南側へ延びていたものと思われるが、最近まで使用されていた用水路に切られている。

[出土遺物]第 57 図 3 に示した須恵器短頸壺のみが出土した。体部がゆるやかに内彎し、口頸部が短く立ち上がるもので、堆積土中から出土している。

第 27 号溝（ＳＤ－27：第 5・57 図）

Ｅ区を囲むように最も低いところを巡っており、ＳＫ21・22 土壙、ＳＤ20・25・26 溝と重複し、前者を切り、後者に切られている。旧用水路によって多くの部分を壊されており、幅は不明である。深さは検出できた最も深いところで 42 ㎝であった。堆積土は 12 層に分かれ、Ⅱ層に大別できた。Ⅰ層は自然堆積と考えられ、Ⅱ層は地山ブロックを含むことから人為的に埋められたものと思われる。西側の一部では、これが土手状に延びる状況が認められたが、その範囲は正確につかめなかった。なお、東側の拡張区でもこの溝の一部が検出され、上層に灰白色火山灰の堆積が認められた。

[出土遺物]第 57 図 4 は半球状の非ロクロ土師器坏で、堆積土第 6 層の上面から出土している。内面は黒色処理されていない。器壁は薄く、口縁部は短く内傾し、口縁外面には稜が形成されている。他に、非ロクロ土師器坏・甕と須恵器坏の破片が出土しており、土師器坏には内黒のものがある。

(5) 出土遺物と遺構の年代

出土遺物をもとに各遺構ごとにその年代を見て行きたい。

ＳＩ09 住居跡に伴う遺物は、カマド煙道部先端のピット状部分から出土した非ロクロ土師器甕だけであり、年代を特定することはできない。しかし、掘り方埋土出土の資料は、土師器坏の出土がないものの、その特徴が亘理町宮前遺跡第 20 号住居跡出土の資料（丹羽：1984）に類似していることから、8Ｃ末～9Ｃ初頭の年代が与えられる。また、住居内堆積土第 2 層には

灰白色火山灰が認められることから、住居が 10 世紀前半には廃絶されていたことが明らかである。さらに、堆積土から出土した須恵器坏は底部切り離しがヘラ切りであることから、9C後半まで下る資料とは考えられず、これらのことから第 9 号住居跡の年代は 9Cでも前半に位置付けられよう。

ＳK21 土壙からは非ロクロ土師器甕・関東系の非ロクロ土師器坏と須恵器坏が出土している。関東系の土師器坏は志波姫町御駒堂遺跡出土土師器坏ＢⅢ2ｂ類（小井川・小川：1982）、色麻町色麻古墳群出土土師器坏ＢⅡ類（古川：1983、1985）などに比定でき、8 世紀初頭のものと思われる。ＳK21 土壙で出土した須恵器坏は底部切り離しがヘラ切りで、底径も比較的大きい。また、ロクロ目が不明瞭であることや器高もやや高いことから、8C中頃～後半の年代があてはまるものと思われる。以上のことから、ＳK21 土壙の年代は 8C代に位置付けられる。ＳK22 土壙は出土資料からはっきりした年代は導きだせないが、ＳK21・22 土壙とＳD27 溝の重複関係から、ＳK21 土壙とほぼ同じ年代と推定される。また、ＳD27 溝で出土した関東系の非ロクロ土師器坏は御駒堂遺跡出土土師器坏ＢⅡ1 類（前掲書）と類似し、8 世紀前半頃のものと思われる。ＳD27 溝は、ＳK21 土壙を切っていることから、8C後半以降に掘られたもので、ＳＩ09 住居跡と並存する可能性がある。

なお、他の遺構については二次的な堆積によるものであるため、時期を特定することはできない。

Ｅ地区では、昭和 63 年度の調査でもＳＩ09 住居跡の北西側で 8C末～9C初頭の住居跡が発見されており、後述するＣ地区の遺構群の時期より新しい時期の集落が営まれていたものと思われる。ＳD27 溝は発見された住居跡と時期的にも近接しており、集落と何らかの関わりを持っていたものと思われる。

Ⅲ．考察

1．出土遺物と遺構の年代

本項では、初めにＣ地区で発見された遺物について検討し、次に検出された遺構の年代について考えていく。

Ｃ地区で検出された各遺構出土土器には非ロクロ土師器（坏・高坏・蓋・碗・甕・甑）・須恵器（坏・高台付坏・高坏・蓋・長頸壺・平瓶・甕・円面硯）・中世陶器（鉢・甕）があり、土師器が主体を占めている。これらは破片として出土するものが多く、図化できたものは堆積層から出土のものを含め総数　点にすぎない。遺構は前述のように削平されているものが多く、特に住居跡ではＳＩ11で比較的まとまった量の土器が出土した以外、ほとんどが一・二器種（土師器坏が多い）数点の出土か皆無であり、住居相互における土器組成をはじめ、住居の年代についても比較検討する材料が極めて少ないと言える。しかし、各遺構から出土した土器の中で量的に多い土師器はその特徴が類似したものであり、住居跡等の遺構の年代もある程度の幅の中でその変遷を捉えることが可能と考えられる。

初めに出土土器の簡単な分類を行い、次に器種も豊富なＳＩ11住居跡での共伴関係を通して各遺構出土遺物の年代について考えていくことにする。

(1) 分類

土師器の分類

出土した土師器はいずれも製作にロクロを使用していない。器種には坏・高坏・蓋・碗・甕・甑があり、量的には坏が多い。

[坏]黒色処理の有無で大きくＡ・Ｂ類に分類され、さらに器形細部の特徴によって細分される。

Ａ類：内面に黒色処理が施されるもの。器面調整は外面口縁部が横ナデ、体部～底部がヘラケズリ、内面はヘラミガキである。口縁部が（ａ）外反するもの、（ｂ）外傾するもの、（ｃ）内湾気味になるものがある。

Ⅰ．外面の中央部あるいは下部に稜または段をもって屈曲し、対応する内面にも軽い段や稜をもつもの。器高が高く底部が丸底の（1）と器高が低く底部が平底風の丸底である（2）に細分される。口縁部形態には（ａ）・（ｂ）・（ｃ）がある。

Ⅱ．内外面に屈曲をもたないもの。底部は丸底で、口縁部形態は（ｂ）である。

Ｂ類：内面に黒色処理が施されないもので底部は半球状に近い。器面調整は外面はＡ類同様であるが、内面はナデ調整されている。器形の特徴からⅠ・Ⅱ類に細分される。

Ⅰ．外面の上部に段または稜をもって屈曲し、対応する内面にも稜を持つもの。口縁部形態には（ａ）・（ｂ）がある。

Ⅱ．内外面に屈曲をもたないもの。口縁部形態は（ｃ）である。

[高坏]3 点だけの出土であるが各々が異なる特徴をもっている。

A類：坏部が内黒のもの。器の大小でⅠ・Ⅱ類に細分される。

Ⅰ．大形のもの。坏部は坏ＡⅠ2 類の特徴に近く、脚部は中空の円錐台状である。

Ⅱ．小形のもの。坏部は欠損している。脚部は短い中実の柱状部と裾部から成る。

B類：坏部が内黒でないもの。法量はＡⅠ類同様に大きい。坏部は器外面中央部に沈線が巡り、口縁部は内湾気味に外傾している。脚部はＡⅡ類同様の器形である。器面には内外面ともにナデ調整が施されている。

[蓋]天井部が低平で、口縁端部が短く屈曲するもの。

[碗]体部が丸みを持ち、口縁部が内傾するもの。

[甕]最大径の位置によりＡ・Ｂ類に分類され、Ｂ類はさらにⅠ・Ⅱ類に細分される。

A類：最大径が体部中央に位置するもの。口縁部は「く」字状に外反あるいは外傾し、体部は紡錘形または球形状を呈する。外面の器面調整にハケメを施すもの（ａ）とヘラケズリを施すもの（ｂ）があり、前者が多い。

B類：最大径が口縁部に位置するもの。

Ⅰ．長胴形のもの。頸部に段がつき口縁部は外反している。A類同様にａ・ｂの器面調整がある。

Ⅱ．鉢形のもの。体部から直線的に外傾し口縁部が僅かに外反している。器面調整はｂである。

[甑の分類]器形の違いからＡ・Ｂ類に分類される。いずれも無底式で、器面調整はヘラケズリである。

A類：最大径が口縁部に位置する長胴形のもの。口縁部は端部のみ外反している。

B類：最大径が口縁部に位置する鉢形のもの。口縁部は緩やかに外反している。内面体下部の開口部分に丁寧なヘラケズリが施されている。

須恵器の分類

器種には坏・高台付坏・蓋・長頸壺・平瓶・甕がある。いずれも出土量は少ない。

[坏]いずれも平底で、底部切り離しはヘラ切りである。Ａ～Ｃ類に分類される。

A類：口縁部が直立気味になる小形のもの。体下部～底部に回転ヘラケズリ再調整が施される。

B類：体下部が丸味を持ち、口縁部が外反するもの。再調整なし。

C類：体部～口縁部まで直線的に立ち上がるもの。再調整なし。（1）流線文が施されるもの、（2）無文のものがある。

[高台付坏]ヘラ切り無調整で、高台の高いもの。

[蓋]天井部が丸く、口縁端部が短く屈曲するもの。

[長頸壺]肩部の丸味が強いもので（1）沈線文の施されるもの、（2）無文のものがある。

[平瓶]体下部が丸味を帯び、肩部下に沈線が巡るもの。

[甕]法量の違いからA・B類に分類される。

A類：大形のもので頸部に櫛描き波状文。

B類：中形のもので頸部は無文。（1）縁帯部に平行沈線文が巡るもの、（2）巡らないものがある。

(2) 共伴関係と遺構・遺物の年代

前項で分類された各類の出土状況を図示資料から見ると第1表のようになる。○印が共伴資料を表し、△印は堆積土中の資料を表している。各遺構での各類型の共伴関係がＳＩ11を除くと究めて貧弱であることが一目瞭然であろう。各遺構を通して出土量の多いのは土師器坏で

第1表　出土遺物の共伴関係（○印は遺構に伴う遺物・△印は堆積土出土）

			SI01A	SI01B	SI02	SI04	SI05	SI07	SI10	SI11	SI12	SI14	SK12	SB10	SK01	SK04	SK07	SK11	SK101	SK108	SK110	SK113	SK116	SD09	SD10	SX03
土師器	坏	A1a					○			△				△										△	△	
		A1b								○					△			△			△		△			
		A1c								○														△	△	
		A2b			△						○															
		A2c							○		○															
		A II							△																△	
		B1a				○				○																
		B1c				○																				
		B II															△									
	高坏	A I								○																
		A II																								△
		B								○																
	壺											○														
	碗																									
	甕	A a		△						△														△		
		A b								△														△		
		B1a		△																						
		B1b	○							△												△				
		B II								○																
	鉢	A		△						○									△							
		B								△																
須恵器	坏	A									○								△							
		B						○																△		
		C						○																△		
	高台付坏																									
	蓋																							△		
	長頸壺	1											△											△		
		2																						△		
	平瓶																									△
	甕	A																								△
		B1										○														
		B2																						△		△
	鉢																							△		

あり、これらは器形・器面調整などに極めて共通した特徴を示している。以下では、比較的器種類型が揃っているＳＩ11住居跡での共伴資料を検討し、その後にセット関係の希薄な各類型について検討してみたい。

ＳＩ11住居跡からは外面に横ナデ・ヘラケズリ調整が施され、丸底で器高の高い土師器坏ＡＩ1（ｂ・ｃ）類・同高坏ＡＩ類と非内黒坏ＢＩａ類・高坏Ｂ類が共伴し、これと組み合う甕は鉢形でヘラケズリの施されたＢⅡｂ類であり、甑はヘラケズリを施した長胴形のＡｂ類である。また、小片のため図示しできなかったが底部に回転ヘラケズリ再調整の施された平底須恵器坏片も床面から出土しており、共伴資料と考えられる。遺物の主体は土師器であり、須恵器は極めて少ない。

類似資料は蔵王町塩沢北遺跡第１号住居跡一括資料（小川：1980）、仙台市郡山遺跡外郭大溝第１層土器群（木村・青沼・長島：1981他）、名取市清水遺跡第Ⅴ群土器（丹羽・小野寺・阿部：1981）、志波姫町御駒堂遺跡第１群土器（小井川・小川：1982）などで報告されている。塩沢北遺跡では本遺跡の土師器坏ＡＩ1ｂ類・ＡＩ2ｂ類・同甕Ａａ・ＢＩａ類・須恵器坏A類類似資料が共伴し、郡山遺跡では土師器坏ＡＩ1（ｂ・ｃ）類・ＢＩ・Ⅱ類・高坏ＡＩ類の他に須恵器坏A類類似資料が共伴しているが、土師器甕については記載がなく不明である。また、清水遺跡第（6）群土器組成には土師器坏ＡＩ1（ｂ・ｃ）類・B類、甕ＢＩ・Ⅱ類、甑B類などが見られ、須恵器坏A類類似資料をはじめ多くの須恵器が含まれている。一方、御駒堂遺跡第１群土器では土師器坏ＢＩ類類似資料、土師器坏ＡＩ1類と器形的には類似しているが器面調整にヘラミガキを施すもの、土師器甕では頚部に段をもち、体部にハケメやミガキ調整を施すものが住居内で共伴しているが、須恵器は組成に含まれていない。

塩沢北遺跡の場合は土師器坏A類に類似点が多いものの甕ではハケメ調整が主体であるなどの差異がある。また、郡山・清水両遺跡の場合、溝跡あるいは遺物包含層出土資料を基礎資料としているため、厳密な意味では細分される可能性のある器種類型を含んでいることを考慮しても、その組成に本住居跡出土遺物との差異は少ない。しかし、御駒堂遺跡の場合は土師器坏ＢＩ類では共通するものの他の器種組成(器面調整を含めた)には大きな差異が認められる。この差異について御駒堂遺跡報文中では宮城県北部と南部での地域性であり“土器圏”の違いであるとしている。

内黒土師器坏A類はいわゆる在地系の土器であり、非内黒土師器坏B類は関東系の土器（鬼高末期～真間式期）とされるものである（小井川・小川：前掲）。在地系の土器だけで構成される塩沢北遺跡の甕と本住居跡・清水遺跡などの関東系坏を共伴する遺跡の甕に見られる調整の差異は坏以外の器種にも関東地方の系統化にあるものが存在することを想定させるものである。

これらの土器群には双方の土器研究の成果から概ね 7 世紀末～8 世紀初頭の年代が考えられている。したがって、ＳＩ11 出土土器にも同様の年代が与えられ、前述のような清水遺跡・郡山遺跡出土在地系土器との類似性からは地域的に宮城県南部の土器圏に含まれる土器であると言えよう。

次に、ＳＩ12 住居跡で共伴した土師器坏ＡＩ2ｂ・ｃ類と須恵器坏A類について検討を加えてゆく。土師器坏ＡＩ2 類はＡＩ1 類に比べ低平で、平底風のものである。類似の資料は先に述べた塩沢北遺跡第 1 号住居跡一括土器－ＡＩ2ｂ類のみ－、御駒堂遺跡第 2 群土器や高清水町観音沢遺跡第 4・12 号住居跡－ＡＩ2ｂ・ｃ類がある－（加藤・阿部：1980）で見られ、後 2 遺跡では共伴する他の器種・類型との検討から 8 世紀前半の年代が与えられている。また、須恵器坏A類類似の小形坏はＳＩ11 住居跡出土遺物の記載でも述べた郡山・清水・塩沢北遺跡や八幡崎Ｂ遺跡第（4）層一括土器（庄子：1988）などでは 7 世紀末～8 世紀初頭の遺物と共伴しているが、これらは、底部が丸底気味であったり（清水・八幡崎Ｂ）、体部に段が巡る（清水・塩沢北）など器形細部では違いがある。一方、涌谷町追戸横穴古墳群Ｂ地区第 1 号墳（佐々木：1973）、村田町北日ノ崎窯跡第 1 号窯跡（鈴木・真山：1988）では 8 世紀初頭から前半に位置付けられている涌谷町長根窯跡群（佐々木・桑原：1971 ほか）や田尻町木戸窯跡群（岡田・桑原：1974 ほか）出土資料に類似する須恵器と共伴している。これらは体部下端から底部が手持ちヘラケズリ再調整されているものであるが、器形的には本遺跡の須恵器A類に最も近いものである。

以上のことから、ＳＩ12 住居跡出土遺物は土師器坏では年代にやや幅があるが、須恵器坏との総体として見た場合は 8 世紀前半でも早い段階の資料と見ることが可能と考えられる。土師器坏について言えば、ＡＩ2ｂ類型は年代幅が広いものであり、次第にＡＩ2ｃ類型に変化することを示し、さらにＡＩ2ｂ類の在り方は器種・類型のみから捉える年代観の限界性を示すものと理解することができよう。

最後にセット関係の希薄な各類型について検討してみる。土師器ではＳＩ05 住居跡出土の坏ＡＩ1ａ類・ＳＩ10 住居跡出土の坏A（3）類、ＳＩ14 住居跡出土の蓋、ＳＩ01Ｂ住居跡出土の甕A類・ＢＩ類がある。坏ＡＩ1ａ類はＳＩ11 住居跡の掘り方埋土からも出土しており、住居跡出土遺物より古い段階の遺物と考えられる。また、坏A（3）類・甕A類・ＢＩ類については先に述べた 7 世紀末～8 世紀前半頃の各遺跡で出土しており、その年代を特定することは難しい。7 世紀末～8 世紀前半頃の土器として大きく捉えておきたい。蓋については類似資料を見つけることができなかったが、他の土師器と年代的に大きく違うものではないと考えられる。

また、須恵器では坏A類を除く各類型がある。ＳＩ07 住居跡出土の坏Ｂ・Ｃ類はヘラ切り

無調整のものであり、志波姫町糠塚遺跡（小井川・手塚：1978）、瀬峰町大境山遺跡（阿部・赤沢：1983）などの 8 世紀中葉～9 世紀初頭頃の住居跡から出土している。本遺跡では土師器にロクロ使用のものがなく、また 8 世紀後半まで下る資料も見られないことから 8 世紀中葉頃のものと考えたい。また、同様の年代はＳＫ12 土壙出土の高台付坏やＳＤ09 溝出土の蓋にも考えられる。一方、ＳＤ09 出土の長頸壺であるが、いずれも口頸部を欠損しており胴部器形での比較しかできない。類似の資料は 8 世紀前半の年代が与えられている村田町北日ノ崎窯跡第 2 号窯跡で見られ、甕Ａ類・Ｂ2 類の共伴も見られる。なお、ＳＩ14 住居跡出土の縁帯部に並行沈線の巡る甕Ｂ1 類については類似資料を見つけることができず、その年代については明らかにし得ないところがあるが、他の遺物との関係から 7 世紀末～8 世紀前半頃の土器として大きく捉えておきたい。

以上、検討してきた出土遺物の年代から推定される各遺構の年代は以下のようになり、7 世紀後半～8 世紀中葉にかけてほぼ連続する集落であり、その中心は 8 世紀前半にあったと考えられる。

Ａ段階：7 世紀後半～7 世紀末：ＳＩ05？
Ｂ段階：7 世紀末～8 世紀初頭：ＳＩ04・ＳＩ11・ＳＤ09
Ｃ段階：8 世紀初頭～8 世紀前半：ＳＩ12・ＳＩ01Ａ？・ＳＤ09
Ｄ段階：8 世紀前半：ＳＩ01Ｂ？・ＳＩ02・ＳＩ10
Ｅ段階：8 世紀中葉：ＳＩ07・ＳＫ12

なお、上記以外の遺構について見ると、出土遺物の年代はＡ～Ｅ段階に相当するものであるが、いずれも堆積層中からの出土であり、遺構の年代については明らかにできない。溝・土壙の多くは住居跡・掘立柱建物跡を切っており、また、中世の遺物などを含むものもあることからＡ～Ｅ段階以降の年代に位置付けられる可能性が高い。

2．遺構の特徴と変遷

今回の調査ではＢ・Ｃ・Ｅの各地区から竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土壙・溝など多くの遺構が検出された。中でもＣ地区では大溝（ＳＤ09）とその内側に並行して築かれた塀跡（ＳＡ01）で区画された中に、竪穴住居跡17軒・掘立柱建物跡31棟などの遺構が検出され、出土遺物の検討から多くの遺構が7世紀末～8世紀中頃までのもので、重複関係などから数回の変遷が考えられた。溝で区画された面積は15,000㎡以上に及び、これまで調査している面積は南側を主に全体の四分の一程度に過ぎない。

本項では初めに検出された竪穴住居跡・掘立柱建物跡の特徴について述べ、次に現段階で考えられる遺構の共存関係および変遷等について考えてみたい。

(1) 竪穴住居跡の特徴（ＳＩ01～08・ＳＩ10～18）

Ｃ地区からは17軒の竪穴住居跡が検出されており、その概要は第2表に示す通りである。これらにはカマドの作り替えの見られるもの（ＳＩ04）、ほぼ同位置での改築と考えられるもの（ＳＩ01Ａ・Ｂ）、相互に重複するもの（ＳＩ05・06）あるいは近接しており同時存在が不可能なもの（ＳＩ02と03、ＳＩ03と18、ＳＩ04と18）などがあるが、出土遺物からはいずれも7世紀末～8世紀中頃までの遺構と考えられるものである。

まず、その規模について見てみると（削平が著しいＳＩ06・16は除く）、

8～15㎡－ＳＩ03・08・14

15～40㎡－ＳＩ01Ａ・01Ｂ・02・05・07・10・12・13・15・17・18

50㎡以上－ＳＩ04・11

となり、50㎡以上の大形住居、15～40㎡の中形住居、15㎡以下の小形住居の3タイプに大別す

第2表　竪穴住居跡一覧

遺構番号	平面形	規模(m)	面積(㎡)	主軸	カマド	柱穴	周溝	貯蔵穴	主な重複関係(旧→新)	時期	備考
ＳＩ01Ａ	長方形	5.23×3.94	20.60	N-4°-E	不明	4?	一部	3?	ＳＩ01Ａ→ＳＩ01Ｂ→ＳＢ01	８Ｃ前半	
ＳＩ01Ｂ	隅丸方形	5.28×5.15	27.19	N-4°-E	北壁中央	4	一部	なし	ＳＩ01Ａ→ＳＩ01Ｂ→ＳＢ01	８Ｃ前半	
ＳＩ02	正方形	4.75×4.40	20.90	E-10°S	東壁中央	4	一部	なし	ＳＩ02→ＳＤ02	８Ｃ前半	
ＳＩ03	正方形	3.00×2.70	8.10	N-3°-E	北壁中央	不明	なし	なし	ＳＩ03→ＳＢ07・ＳＫ10	８Ｃ前半以降	人為的に埋められている。
ＳＩ04	正方形	8.20×8.00	65.60	N-23°-W	北壁中央	4	全周	1	ＳＩ04→ＳＤ02～04	７Ｃ末～８Ｃ初	人為的に埋められている。
ＳＩ05	方形基調	(4.00×3.70)	(14.80)	N-4°-E	不明	4	なし	1	ＳＩ05→ＳＩ06→ＳＸ03	７Ｃ末	人為的に埋められている。
ＳＩ06	方形基調	(2.75×1.20)	(3.30)	N-10°-E	北壁中央	不明	なし	不明	ＳＩ05→ＳＩ06→ＳＸ03		
ＳＩ07	正方形	(4.50×4.50)	(20.25)	N-7°-E	不明	4	なし	なし		８Ｃ中葉	
ＳＩ08	正方形	(3.00×3.00)	(9.00)	N-7°-E	不明	不明	なし	なし	ＳＩ08→ＳＤ15		
ＳＩ09	隅丸方形	4.48×4.12	18.45	N-2°-W	北壁中央	4	全周?	1	ＳＩ09→ＳＤ23	９Ｃ前半	堆積土に灰白色火山灰含む。
ＳＩ10	隅丸方形	4.60×4.40	20.24	N-3°-E	不明	4+壁穴	全周	なし	ＳＩ10→ＳＤ01・10・30	８Ｃ前半	人為的に埋められている。
ＳＩ11	正方形	7.25×7.20	52.20	N-27°-W	北壁中央	4	杯全周	1	ＳＩ11→ＳＢ12・13・15他	７Ｃ末～８Ｃ初	人為的に埋められている。
ＳＩ12	隅丸方形	(5.00×5.00)	(25.00)	N-2°-W	不明	4	なし	なし	ＳＫ139→ＳＩ12→ＳＢ08・21	８Ｃ初頭～前半	
ＳＩ13	方形基調	(5.50×3.40)	(18.70)	N-2°-W	不明	4?	一部	不明			
ＳＩ14	隅丸方形	3.80×2.70	10.26	E-21°-S	東壁中央	不明	一部	なし	ＳＩ14→ＳＢ18、ＳＤ10・30	７Ｃ末	
ＳＩ15	方形基調	(6.10×5.20)	(31.72)	N-0°-W	不明	4	一部	不明	ＳＩ15→→ＳＢ25		
ＳＩ16	方形基調	(3.00 ×?)		N-2°-W	不明	不明	なし	なし	ＳＩ16→ＳＢ26→ＳＥ05		
ＳＩ17	正方形	(4.40×4.25)	(18.70)	N-14°-W	不明	4	なし	なし	ＳＢ26→ＳＩ17→ＳＫ102	８Ｃ中葉	
ＳＩ18	方形基調	(4.50×4.00)	(18.00)	——	不明	4?	一部	不明	ＳＢ07→→ＳＩ18→ＳＫ18		

ることができる。中形のものが約7割と最も多く、中でも一辺4～5.5m、面積20～30㎡の規模のものが多い。

次に、住居の方向（カマドのあるものについてはカマドの軸線を、他は住居長辺を軸線としている）について見ると、大部分の住居が真北方向を中心とした方向に軸をもって構築されているが、ＳＩ04・11の2軒は真北から西に20°以上振れ、またＳＩ02・14の2軒は南東を向いて構築されているなど、他の住居の方向とはやや異なった在り方を示している。

カマドは6軒の住居跡で検出されており、ＳＩ02とＳＩ04の古い段階、ＳＩ14の3軒が東壁中央部に、ＳＩ01Ｂ・03とＳＩ04の新しい段階、ＳＩ06・11では北壁中央部に位置している。

以上について簡単にまとめると、本遺跡の竪穴住居跡の多くは規模が一辺約 4m～5.5m で、ほぼ真北方向を向いて構築されているなどの共通性が窺える。ただし、ＳＩ04・11の2軒は規模・方向が全体の傾向から大きくはずれ、さらにこの2軒の住居跡のみが関東系の土師器を出土しているなど、遺物からも他の住居跡とは異なる傾向が見られる。

ここで同時期の集落跡である志波姫町御駒堂遺跡（小井川・小川：1982）で検出されている竪穴住居跡と簡単な比較を行うと、住居跡の規模・カマドの方向などには共通する点が見られた。御駒堂遺跡では7世紀末～8世紀初頭段階の住居跡のカマドは真北から14～34°西に振れ、8 世紀の前半ではほぼ真北か真東の方向に変わることが指摘され、特に真北を向くものが多いことが報告されている。本遺跡の場合、7世紀末～8世紀初頭段階の住居跡としてはＳＩ04・11の2軒があり、カマドの軸方向はそれぞれ15°・27°西に振れている。さらに8世紀前半段階の住居跡と考えられるＳＩ01Ｂ・02では真東あるいは真北方向への変化が見られる。両遺跡ともに 7 世紀末～8 世紀初頭の住居跡は在地系の土器を主に小量の関東系の土器を出土するものであり、遺跡の立地条件以外にも住居構築に際して何らかの規制があったことが想定され、その後の方向の転換も規制の枠の中での現象と捉えることができよう。

（2）掘立柱建物跡の特徴（ＳＢ01～31）

掘立柱建物跡は 31 棟が検出されている。これらは集落のほぼ中央部に集中し、相互に重複するものが多い。各建物跡の概要は第3表に示す通りであり、以下では方向・建物の規模・柱間隔・重複関係について検討してみたい。

建物の方向について見るとＳＢ171棟のみが真北から西に29°振れ、ＳＢ06・18・22・27の4棟が真北から西に約10°振れている。また、ＳＢ02は東に約24°振れ、その他の建物跡は真北から西に2°、東に8°の振れの中に収まっている（ＳＢ21・25が真北から西に振れている）。すなわち、建物の方向としては大きく四方向に大別して捉えることができる。

規模は、桁行4間×梁行3間が5棟（ＳＢ10・15・17・18・26）、桁行4間×梁行

第3表　掘立柱建物跡一覧

遺構番号	規　模	総　長（m）	面積（㎡）	建物の方向		重　複（旧→新）	備　考
ＳＢ０１	3間×2間	6.95×4.35	30.23	東西棟	N－5°－E	ＳＩ０１→ＳＢ０１→ＳＤ０５	
ＳＢ０２	2間×(2)間	3.95×3.85	15.20	東西棟	N－24°－E	ＳＢ０２→ＳＤ０２	
ＳＢ０３	3間×2間	7.90×3.70	29.23	南北棟	N－3°－E	ＳＢ０３→ＳＢ０４、ＳＢ０３→ＳＫ０５→ＳＤ０１	
ＳＢ０４	3間×2間	6.10×4.20	25.62	南北棟	N－4°－E	ＳＢ０３→ＳＢ０４	掘り方が段掘り
ＳＢ０５	3間×2間	4.85×4.00	19.40	東西棟	N－2°－E	ＳＢ２３→ＳＢ０５→ＳＸ０２→ＳＤ０２	
ＳＢ０６	3間×2間	6.85×4.55	31.16	南北棟	N－10°－W	ＳＢ０６→ＳＸ０２→ＳＥ０１	
ＳＢ０７	3間×2間	6.35×4.25	26.98	南北棟	N－3°－E	ＳＩ０３→ＳＢ０７→ＳＤ０５、ＳＢ０７←→ＳＩ１８	
ＳＢ０８	4間×2間	8.10×4.90	39.69	南北棟	N－0°－E	ＳＩ１２→ＳＫ１０１→ＳＢ０８→ＳＤ０１→ＳＤ１０	
ＳＢ０９	3間×2間	5.80×4.25	24.65	南北棟	N－5°－E	ＳＢ０９→ＳＢ１１→ＳＢ１０	
ＳＢ１０	3間以上×3間	(7.00)×6.00	(42.00)	南北棟	N－3°－E	ＳＢ０９→ＳＢ１１→ＳＢ１０	掘り方が段掘り・西桁に雨
ＳＢ１１	3間×2間	5.20×3.60	18.72	南北棟	N－3°－E	ＳＢ０９→ＳＢ１１→ＳＢ１０、ＳＫ１１５→ＳＢ１１	
ＳＢ１２	3間×2間	7.00×4.80	33.60	南北棟	N－7°－E	ＳＩ１１→ＳＢ１２→ＳＫ１０４、ＳＩ１１→ＳＢ１２→ＳＤ０１・ＳＤ１０	
ＳＢ１３	3間×2間	4.20×4.15	17.43	東西棟	N－8°－E	ＳＩ１１→ＳＢ１３→ＳＢ１４→ＳＫ１０５、ＳＢ１３←→ＳＫ１１１	
ＳＢ１４	3間×2間	4.50×3.60	16.20	東西棟	N－10°－E	ＳＩ１１→ＳＢ１３→ＳＢ１４→ＳＫ１０５	
ＳＢ１５	4間×3間	8.30×6.15	51.04	南北棟	N－7°－E	ＳＢ１７→ＳＢ１８→ＳＢ１９→ＳＢ１５→ＳＫ１０５、ＳＢ１５←→ＳＢ１６	
ＳＢ１６	4間×2間	8.20×4.50	36.90	南北棟	N－3°－E	ＳＢ１７→ＳＢ１８→ＳＢ１６、ＳＢ１６←→ＳＢ１５	両桁に抜き取り痕
ＳＢ１７	4間×3間	9.35×5.75	53.76	南北棟	N－29°－W	ＳＢ１７→ＳＢ１８→ＳＢ１９→ＳＢ１５→ＳＫ１０５	
ＳＢ１８	4間×3間	9.50×5.50	52.25	南北棟	N－10°－W	ＳＢ１８→ＳＢ１９→ＳＢ１５→ＳＫ１０５、ＳＩ１４→ＳＢ１８→ＳＢ１６	間仕切り
ＳＢ１９	4間×2間	7.00×4.50	31.50	東西棟	N－7°－E	ＳＢ１７→ＳＢ１８→ＳＢ１９→ＳＢ１５→ＳＫ１０５	
ＳＢ２０	3間×2間	5.25×4.30	22.57	南北棟	N－3°－E	ＳＢ２０←→ＳＩ１５	
ＳＢ２１	3間×2間	4.80×3.70	17.76	南北棟	N－2°－W	ＳＩ１２→ＳＢ２１→ＳＤ３２	東桁に雨
ＳＢ２２	4間×2間	7.80×4.70	36.66	東西棟	N－11°－W		南桁の一部に布掘り
ＳＢ２３	3間×2間	7.20×3.75	27.00	南北棟	N－5°－E	ＳＢ２３→ＳＢ０５→ＳＸ０２→ＳＤ０２	
ＳＢ２４	3間×2間	5.00×3.10	15.50	東西棟	N－3°－E	ＳＢ２４←→ＳＢ２７→ＳＥ０６、ＳＢ２４←→ＳＩ１６	間仕切り？
ＳＢ２５	2間以上×1間	(2.40)×2.40	(5.76)	南北棟	N－3°－W	ＳＢ２５←→ＳＩ１５	
ＳＢ２６	4間×3間	8.20×4.90	40.18	南北棟	N－3°－E	ＳＢ２６→ＳＩ１７→ＳＫ１０２、ＳＩ１６→ＳＢ２６→ＳＤ３３・ＳＫ１３７	掘り方が段掘り・抜き取り痕
ＳＢ２７	3間×2間	7.40×5.40	39.96	東西棟	N－9°－W	ＳＩ１６→ＳＢ２７→ＳＢ２６→ＳＩ１７→ＳＫ１０２	総柱建物跡
ＳＢ２８	3間×2間	6.70×4.50	30.15	東西棟	N－3°－E	ＳＢ２８←→ＳＢ２９、ＳＢ２８→ＳＤ３３	
ＳＢ２９	2間×1間	2.80×2.34	6.55	東西棟	N－3°－W	ＳＢ２９←→ＳＢ２８	
ＳＢ３０	2間×1間	2.40×2.00	4.80	東西棟	N－5°－E		抜き取り痕
ＳＢ３１	2間×2間	5.00×3.80	19.00	南北棟	N－2°－E		
ＳＢ３２	3間×2間	4.65×3.70	17.20	南北棟	N－3°－E	ＳＢ３２→ＳＢ３３→ＳＢ３４、ＳＢ３２→ＳＢ３５	
ＳＢ３３	3間×2間	6.95×4.90	34.05	南北棟	N－5°－W	ＳＢ３２→ＳＢ３３→ＳＢ３４	
ＳＢ３４	3間？×1間	2.30×(8.00)	(18.40)	南北棟	N－2°－W	ＳＢ３２→ＳＢ３３→ＳＢ３４→ＳＫ２７	
ＳＢ３５	4間×3間	7.30×5.40	39.42	南北棟	N－17°－W	ＳＢ３２→ＳＢ３５	
ＳＢ３６	2間×1間	4.30×4.30	18.49	南北棟	N－21°－W		
ＳＢ３７	3間×2間	5.70×5.20	29.64	南北棟	N－13°－W		

2 間が 4 棟（ＳＢ08・16・19・22）、桁行 3 間×梁行 2 間が 17 棟（ＳＢ01・03～07・09・11～14・20・21・23・24・27・28）、桁行 2 間×梁行 2 間が 2 棟（ＳＢ02・31）・桁行 2 間×梁行 1 間が 2 棟（ＳＢ29・30）、不明 1 棟（ＳＢ25）で、桁行 3 間×梁行 2 間の建物が全体の約 6 割弱を占めている。

柱間隔は桁行を見た場合、4 軒×3 軒の建物ではＳＢ17 が 2.0～2.55m と広いが他は 1.8～2.1m である。4 軒×2 軒の建物では 1.8～2.1m 前後、3 軒×2 軒の建物ではＳＢ01・03・06・12・27 の柱間隔が 2m 以上と広いが、他については 1.3～2.0m とばらつきがある。他に 2 間×2 間のＳＢ31 では 2.3m・2.7m と広く、2 間×1 間では 1.2～1.4m とかなり狭くなっている。

なお、ＳＢ03 には張り出し部が、ＳＢ10・21 には廂が、ＳＢ18・24 には間仕切りがあり、ＳＢ28 は総柱である。

柱穴は掘り方が方形基調のものが多く、長辺が 0.6～1m 前後と大形のものが 11 軒（ＳＢ04・06・09・10・15・17・18・22・26～28）で、他は一辺が 30～50 ㎝ほどの小形のものである。前者の中には掘り方の内側が深くなるように、段状に掘りこまれた掘り方をもつ建物（ＳＢ04・26）、掘り方が布掘り状のもの（ＳＢ10・22）がある。その他には柱穴に柱抜き取り穴が見られ柱の再利用がなされたと考えられるもの（ＳＢ26）もある。後者においても柱穴に柱抜き取り穴が見られるものがある（ＳＢ16・30）。また、ＳＢ02・05・29・30 については、掘り方・柱痕跡とも規模が小さく、他の建物とやや異なった様相を呈している。中世の井戸跡（ＳＥ02・05）も検出されていることから、中世の掘立柱建物跡の可能性が考えられる。

最後に主な重複関係は第 3 表に示した通りであるが、その中で 5 棟が重複するＳＢ15～19 について見るとＳＢ17→ＳＢ18→ＳＢ19→ＳＢ15・16、ＳＢ15≠ＳＢ16 となり、単純に見ても 5 段階の変遷が考えられる。

以上のことをふまえて、上記の掘立柱建物跡の変遷と各段階の特徴をまとめると

〈A段階〉＝ＳＢ17

方向が西に約 30 ° 振れ、規模が 4 間×3 間の建物跡である。柱間隔は約 2.0～2.55m と広く、柱穴掘り方も大きい。

〈B段階〉＝ＳＢ06・18・22・27

方向が西に約 10 ° 振れる建物群である。規模は 4 間×3 間・4 間×2 間が各 1 棟、3 間×2 間が 2 棟である。柱間隔は比較的広く、柱穴掘り方もＡ段階同様に大きい。建物群はＳＢ06 北妻とＳＢ22・27 の北桁行の柱筋が通り、ＳＢ18 を含む 4 棟は遺構集中地点を囲むように逆「Ｌ」字状に配置されている。

〈C～E段階〉＝SB01・03・04・07～16・19～21・23～26・28・31

方向がほぼ真北を向く建物群である。第1・2段階に比して3間×2間の建物跡が多くなり、柱間隔も2m以下のものが多く、面積は小規模なものとなる。

〈F段階〉＝SB02・05・29・30

方向が異なったり、柱間隔・掘り方・柱痕跡が小さく、中世の建物群と思われる。

なお、掘立柱建物跡C～E段階についてはSB01・07・12のように規模が3軒×2軒で柱間隔も広く、SB01とSB12では桁行中央が広くなるなどの共通点が見られ、かつSB01北桁行、SB07南妻とSB12南妻の柱筋が通り、建物の間隔も一定することから同時存在の可能性が考えられるものもあるが、不明な部分も多く一括してまとめた。

C－1区から検出された掘立柱建物跡はA～Fの6段階に分れ、A～E段階では建物方向は新しく立て替えるに従って真北を向く規則性が窺える。また、A・B段階は大形の建物跡で構成され、C段階以降の規模は桁行3間×梁行2間で間尺は2m以下の建物が一般的となる。

(3) 竪穴住居跡と掘立柱建物跡の変遷

前項までに竪穴住居跡・掘立柱建物跡の主な特徴について述べ、前者は5段階の、後者は6段階の変遷が考えられた。本項では前項までにその年代的位置づけができなかった竪穴住居跡について、重複関係・近接状況などを基にその段階を考え、竪穴住居跡と掘立柱建物跡の同時存在およびその共存から成る集落の変遷などについて簡単にまとめてみたい。

竪穴住居跡は出土遺物から見ると、SI05（7世紀末）→SI04・11（7世紀末～8世紀初頭）→SI12（8世紀初頭～前半）→SI01B・02・10（8世紀前半）→SI07（8世紀中葉）の変遷が考えられた。そこで、他の竪穴住居跡に関して住居跡相互や掘立柱建物跡との関係を上記した観点から見てみると、まず竪穴住居跡では同位置での改築があるSI01A・01B、相互に重複するSI05・06、近接するSI02・03、SI03・18、SI04・18に同時存在は有り得ない。さらに掘立柱建物跡との関係ではSI01・03・12・15は掘立柱建物跡C～E段階のいずれかに属する建物跡に切られていることから、掘立柱建物跡E段階よりは古く、SI14はSB18に切られ、近接するSB17とは同時存在は考られず、掘立柱建物跡A段階より古いか、A段階とB段階の間に位置する。しかし、遺構での傾向から推して竪穴住居跡のみの時期は考え難く、掘立柱建物跡A段階より古いとみたほうが自然と思われる。SI16はSB27に切られていることから、掘立柱建物跡B段階より古い。SI17は掘立柱建物跡C～E段階のいずれかに属するSB26を切っていることから、掘立柱建物跡C段階よりは新しい。また、SI04・11とSB17は方向的に真北から約30°西に振れ、それぞれ竪穴住居跡・掘立柱建物跡のなかでは規模が大きく、かつ古い段階に位

置するなどの共通点が見られ、同時存在した可能性が考えられる。

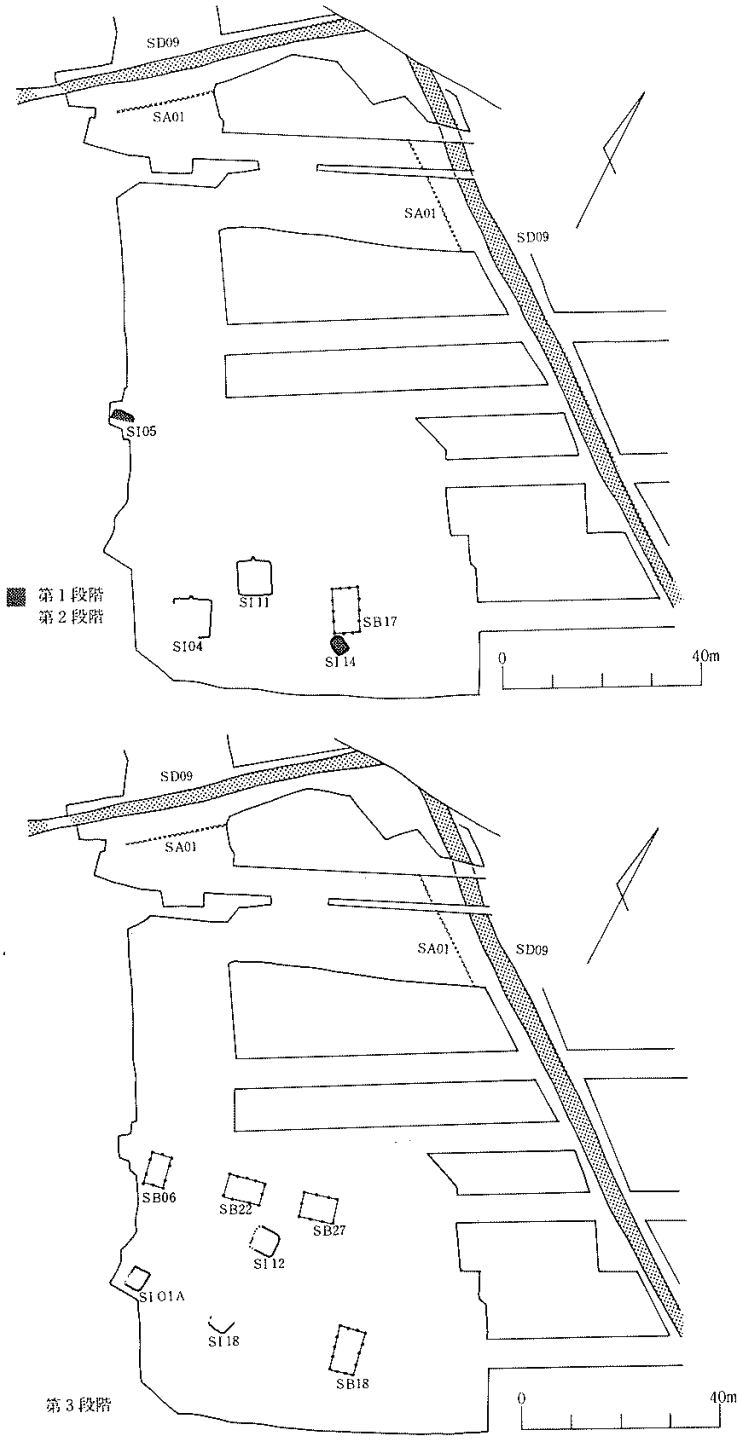
以上を基に、時期や変遷が明確な竪穴住居跡と掘立柱建物跡との関係をまとめると、下記のようになる。

	【掘立柱建物跡】	【竪穴住居跡】					
第1段階（7末）		ＳＩ05	ＳＩ14		↑	↑	↑
					｜	｜	｜
第2段階（7末～8初）		ＳＩ04・11		↑	｜	ＳＩ03	｜
	ＳＢ17			｜	ＳＩ16	｜	｜
				｜	｜	｜	｜
				ＳＩ06	↓	｜	ＳＩ15
第3段階（8初～前）	ＳＢ06・18	ＳＩ01A・12		｜		｜	｜
	22・27		（ＳＩ18）	｜		｜	｜
				｜		↓	｜
第4段階（8前）	ＳＢ01・03・04	ＳＩ01B・02・10		｜			｜
	07～16			｜		↑	｜
第5段階（8中）	19～21	ＳＩ07・17		｜		ＳＩ03	↓
	23～26	｜		｜		｜	
第6段階（8中）	28・31	↓		↓		↓	
第7段階（中世）	ＳＢ02・05・29・30						

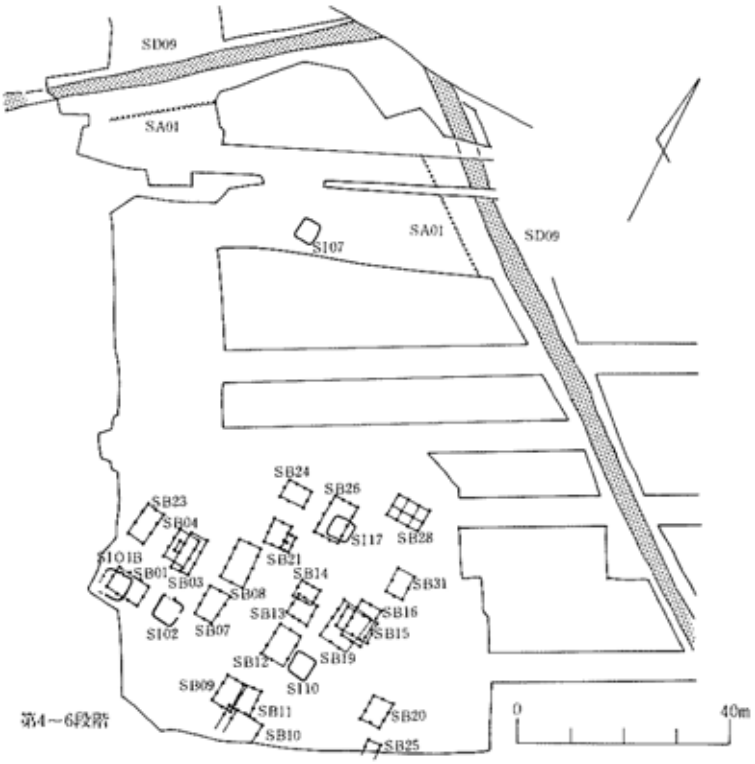
最後に、C地区から検出された竪穴住居跡・掘立柱建物跡について簡単にまとめる。

①7世紀末から8世紀中葉頃までの短期間の中で5段階の変遷があり、7世紀末～8世紀初頭頃には竪穴住居と掘立柱建物が共存していたと考えられる。奈良時代における竪穴住居と掘立柱建物の共存は官衙遺跡を除いて県内では利府町郷楽遺跡第1・2次調査（斎藤・菅原；1987）で8世紀中葉～後半、同3次調査（菊地・吉田；1990）で8世紀末、多賀城市山王遺跡（赤沢；1990）において8世紀代（詳細は未整理のため不明）の検出例があるものの、本遺跡のような例は初見である。

②ＳＩ04・11から少量ではあるが関東系土器が出土している。同じく関東系土器が出土した志波姫町御駒堂遺跡（前掲）においては、同遺跡の性格を「すでに7世紀代から直接的な移住を含めて、この地方には関東地方からの強い影響が存在していたとみることができ、それらは律令体制にもとずく陸奥開拓のための一連の流れの中に位置付けられるべきものである」としている。また、今泉隆雄氏は「霊亀元年（715）千戸、養老六年（722）千人の第二次の大量



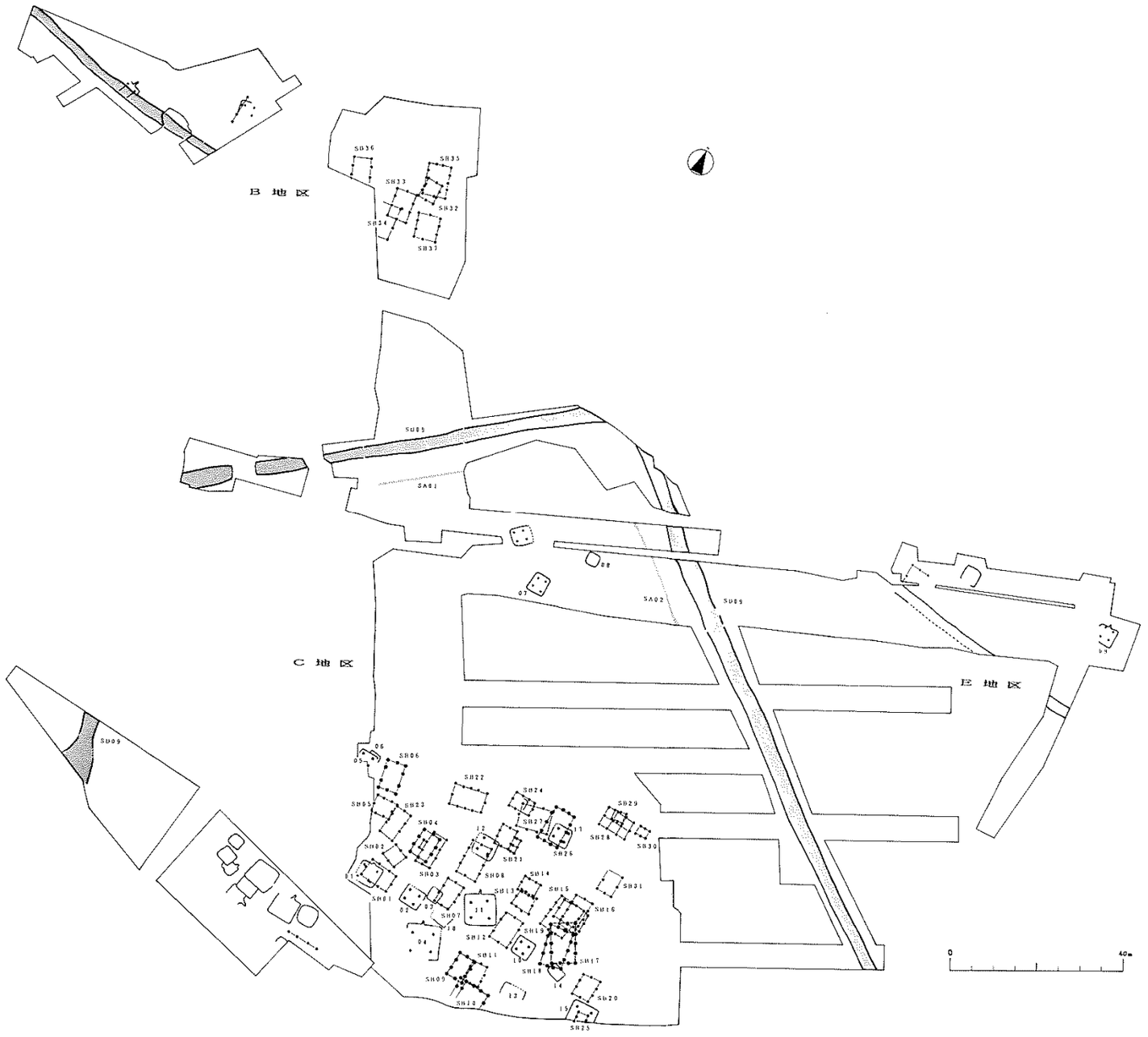
第58図　C－1区遺構変遷図



第59図　C－1区遺構変遷図

移民によって黒川以北十郡がいっせいに建郡された。」とし、関東系土器が出土した古川市名生館遺跡（多賀城跡調査研究所；1980～85，鈴木・柴原 1986～88）・色麻町色麻古墳群（古川；1983～5）・富谷町原前南遺跡（千葉；1982）・田尻町日向前横穴古墳群（早坂；1981）等と続日本紀に記載されている「移民」との関連を指唆している。本遺跡についても、関東系土器の出土と環濠およびその内側の塀に囲まれた掘立柱建物跡を伴う特殊な集落であることを考え合わせると、目的が黒川以北十郡の建郡のためなのかは現段階では不明であるが、何らかの形で7 世紀末～8 世紀初頭にかけて移住させられた人々の村の可能性があり、8 世紀後半以降中世まで竪穴住居・掘立柱建物が存在しなくなるという事実は、何らかの目的が達せられ、他の場所に移動したものとも考えられよう。

③今回の調査でC地区から検出された環濠集落は、古代史における重要な問題の一つである郷里制に基づく集落の住居数やエリアに関する貴重な資料であり、今後の調査による成果が期待されるものである。



第60図　大和町一里塚遺跡遺構配置図

引用・参考文献（五十音順）

阿部・赤沢（1983）：「大境山遺跡」《瀬峰町文化財調査報告書》第4集　瀬峰町教育委員会

今泉隆雄（1989）：「八世紀前半以前の陸奥国と坂東」《地方史研究》第221集　PP,37～45

氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」《歴史》第14輯　PP,1～14　東北史学会

氏家和典（1980）：「古墳時代と亀井横穴古墳」《松山町史》　PP,19～56

岡田・桑原（1974）：「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」《研究紀要》Ⅰ　PP,65～92　多賀城跡調査研究所

小川淳一（1980）：「塩沢北遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ－」《宮城県文化財調査報告書》第67集　PP,279～347　宮城県教育委員会他

加藤・阿部（1980）：「観音沢遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ－」《宮城県文化財調査報告書》第72集　PP,131～349　宮城県教育委員会他

菊地・吉田他（1990）：「郷楽遺跡Ⅱ」《宮城県文化財調査報告書》第134集　宮城県教育委員会

木村・青沼・長島（1981）：「郡山遺跡Ⅰ」《仙台市文化財調査報告書》第29集　仙台市教育委員会

小井川・小川（1982）：「御駒堂遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ－」《宮城県文化財調査報告書》第83集　PP,307～584　宮城県教育委員会他

小井川・手塚（1978）：「糠塚遺跡－宮城県文化財調査略報－」《宮城県文化財調査報告書》第53集　PP,44～198　宮城県教育委員会

斎藤・菅原（1987）：「利府町郷楽遺跡」《宮城県文化財調査報告書》第123集　PP,16～85　宮城県教育委員会

佐藤・赤沢他（1990）：「山王遺跡」《宮城県文化財調査報告書》第138集　宮城県教育委員会

佐々木・氏家（1973）:「追戸・中野横穴群」《宮城県遠田郡涌谷町文化財調査報告書》涌谷町教育委員会

佐々木・桑原（1971）：「宮城県遠田部涌谷町小里長根窯跡」　涌谷町教育委員会

庄司　敦（1988）：「八幡崎Ｂ遺跡」《利府町文化財調査報告書》第4集　利府町教育委員会

鈴木・真山（1988）：「北日ノ崎窯跡」《文化財調査報告書》第6集　村田町教育委員会

千葉宗久（1982）：「原前南遺跡－東北自動道遺跡調査報告書Ⅵ－」《宮城県文化財調査報告書》　第83集　PP,7～41　宮城県教育委員会

辻　秀人（1984）：「宮城県の横穴と須恵器」《宮城の研究》1　PP,355～424　静文堂

手塚・加藤（1989）：「一里塚遺跡」《宮城県文化財調査報告書》第131集　PP,107～161　宮城県教育委員会

東北学院大考研部（1979）：「亀岡遺跡発掘調査報告」《温故》第12集　PP,1～124

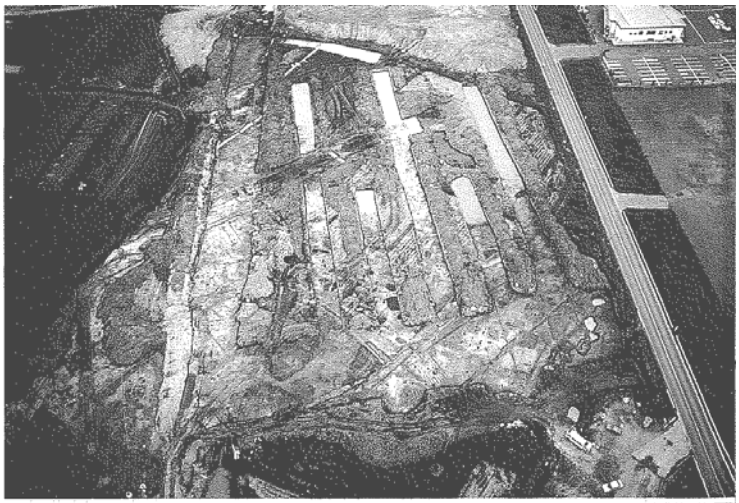
丹羽・小野寺・阿部（1981）：「清水遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ－」《宮城県文化財調査報告書》第77集　PP,3～540　宮城県教育委員会他

丹羽　茂（1983）：「宮前遺跡」《宮城県文化財調査報告書》第96集　PP,71～213　宮城県教育委員会

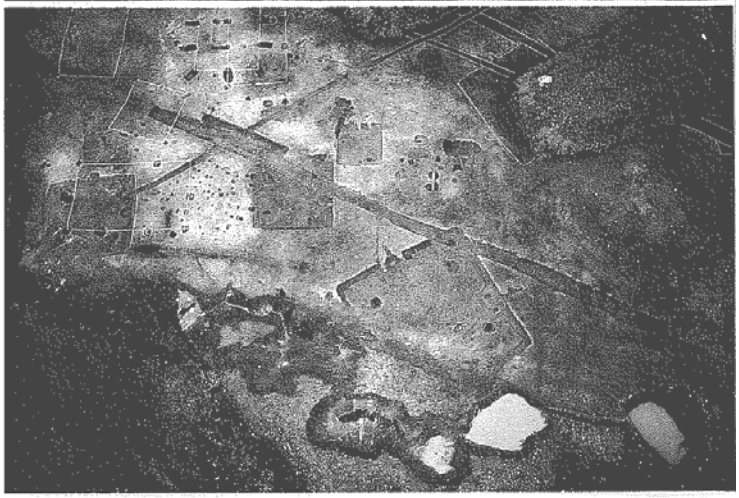
早坂春一（1981）：「日向前横穴古墳群－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ－」《宮城県文化財調査報告書》第77集　PP,555～581　宮城県教育委員会
平川　南（1978）：「古代東北城柵の特質について－建郡との関連を中心として－」《東北歴史資料館研究紀要》4　PP,37～56　東北歴史資料館
古川一明（1983他）：「色麻古墳群」《宮城県文化財調査報告書》第95集　PP,3～166　宮城県教育委員会
宮城県教委（1986）：「宮城県遺跡地図・地名表」《宮城県文化財調査報告書》第125集　宮城県教育委員会
宮城県多賀城調査研究所（1981他）：「名生館遺跡」《多賀城関連遺跡発掘調査報告書》第6冊他
鈴木・芝原（1987）：「名生館遺跡Ⅶ」《古川市文化財調査報告書》第6集他　古川市教育委員会

写　真　図　版

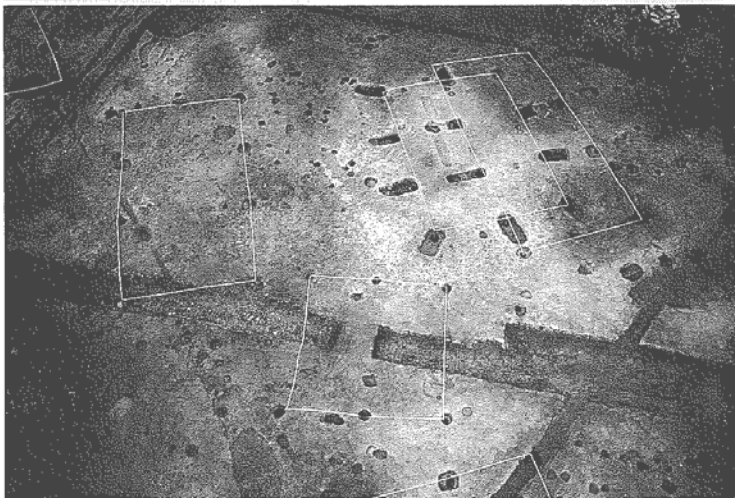
C・E区調査区全景
（空撮　西から）

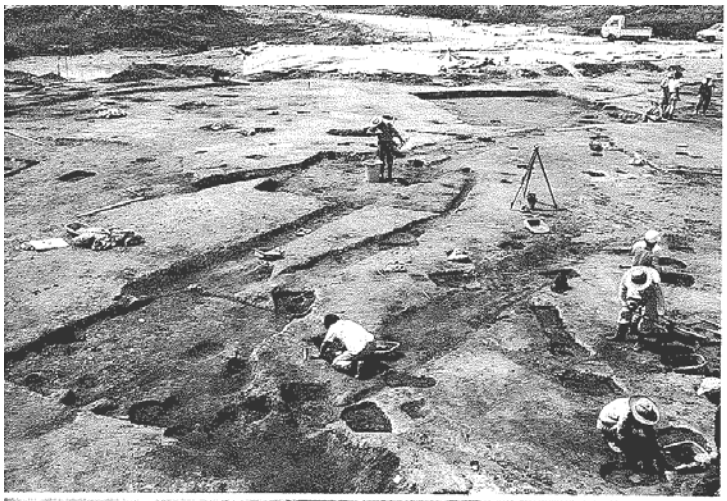


C-1区南西側調査区
（空撮　南から）

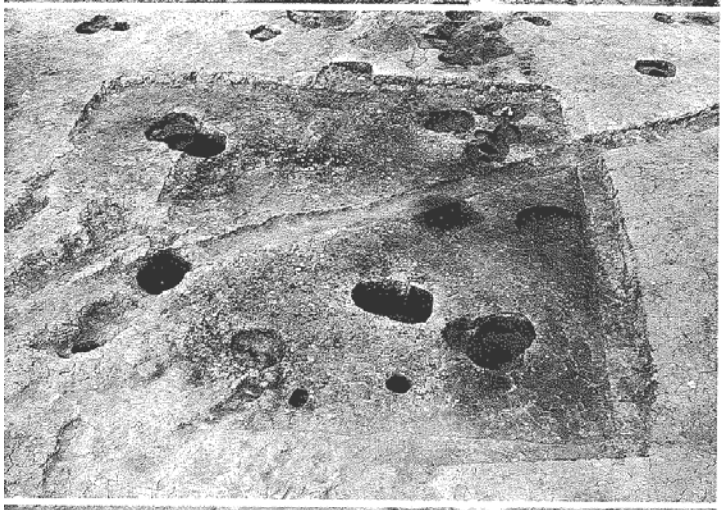


C-1区西側調査区
（空撮　南から）

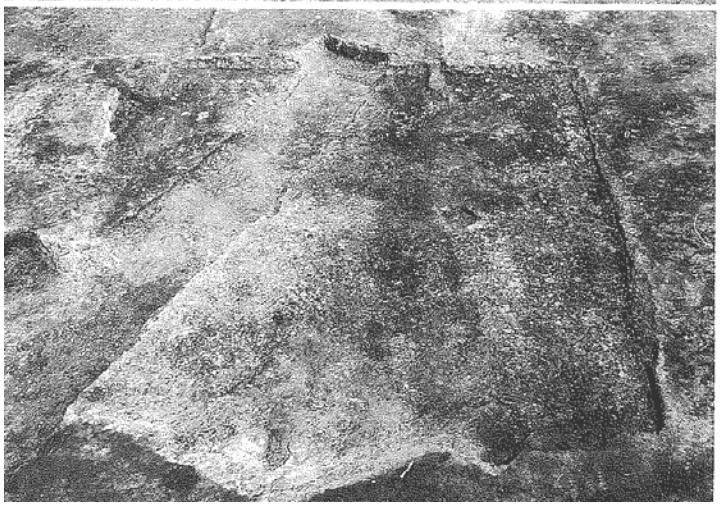




C-1区　調査風景



C-1区第01A・B号住居跡
（南から）



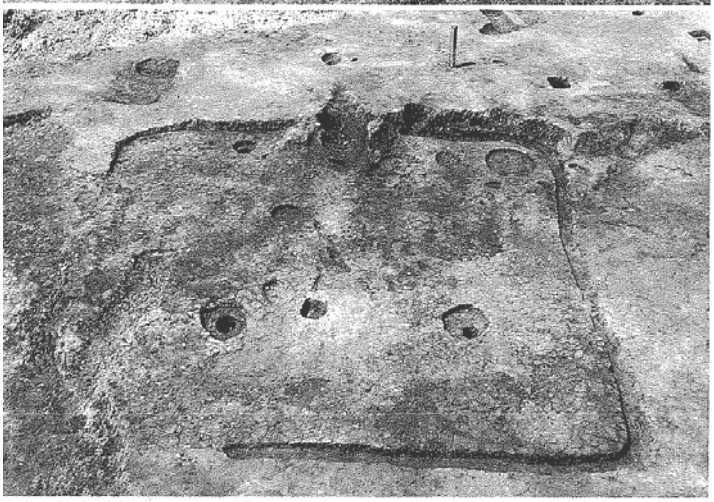
C-1区第02号住居跡
（西から）

C-1区第03号住居跡
（南から）

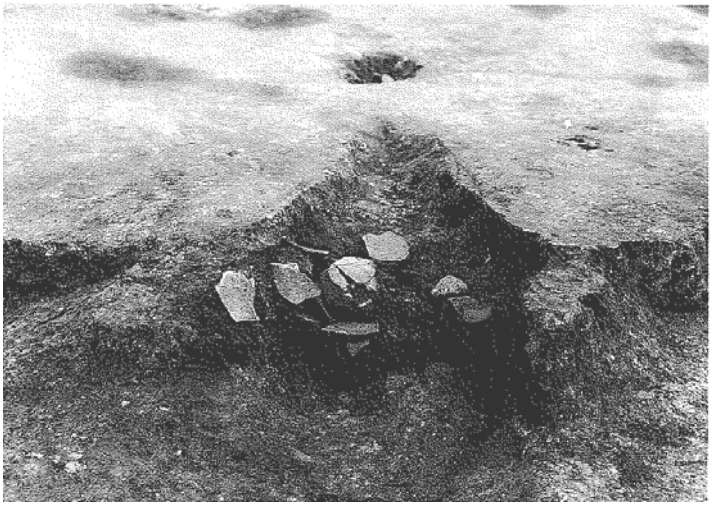
C-1区第04号住居跡
（南東から）

C-1区第05・06号住居跡
（南から）

C-5区第08号住居跡
（南から）

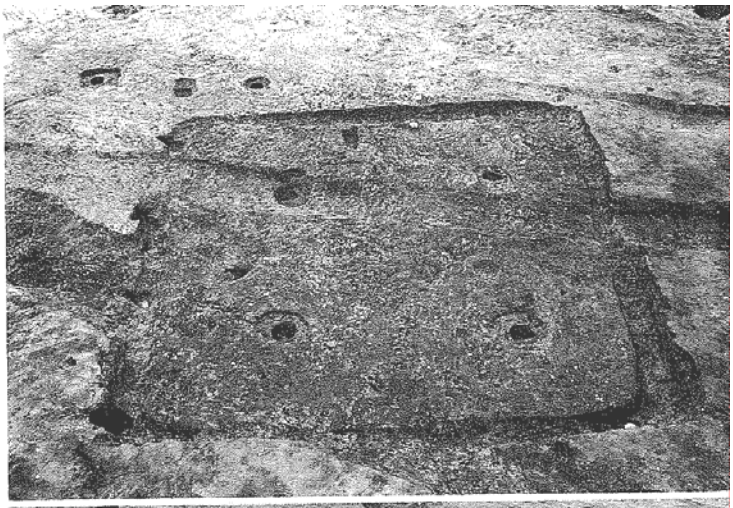


E区第09号住居跡
（南から）



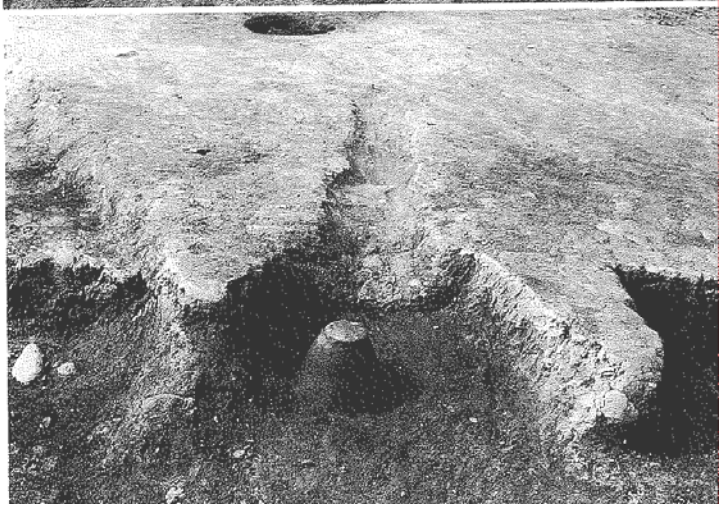
E区第09号住居跡
遺物出土状況
（南から）

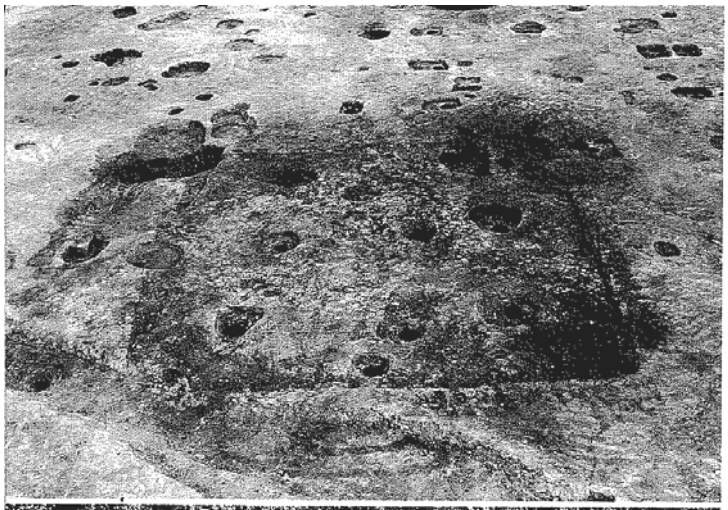
C-1区第10号住居跡
（南から）



C-1区第11号住居跡
（南東から）

C-1区第11号住居跡
カマド（南東から）





C-1区第12号住居跡
（南から）

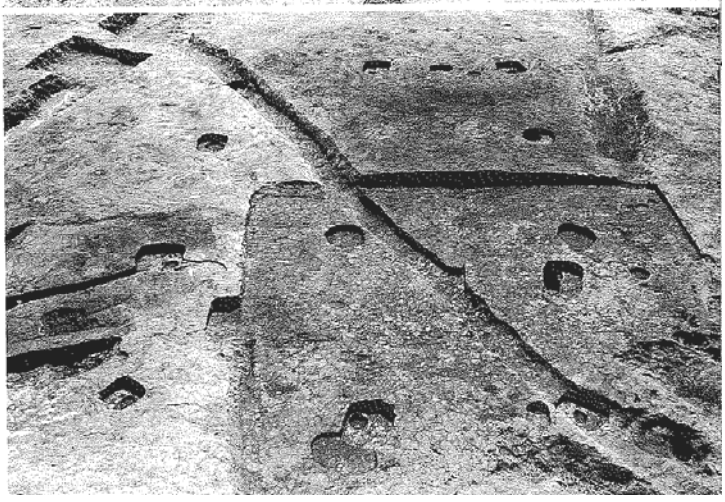
C-1区第13号住居跡
（北から）

C-1区第14号住居跡
（西から）

C-1区第14号住居跡
カマド（西から）

C-1区第15号住居跡
（北から）

C-1区第01B号住居跡
第01号掘立柱建物跡
（西から）



C-1区第02号掘立柱建物跡
第02号溝(西から)

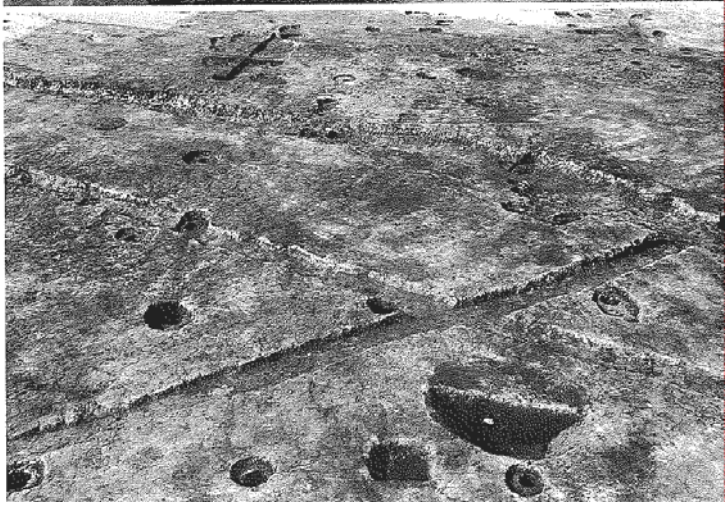
C-1区第03号掘立柱建物跡
第04号掘立柱建物跡
(西から)

C-1区第05号掘立柱建物跡
第23号掘立柱建物跡
(南から)

C-1区第06号掘立柱建物跡
第01号井戸
小溝状遺構（ＳＸ02）
（南から）

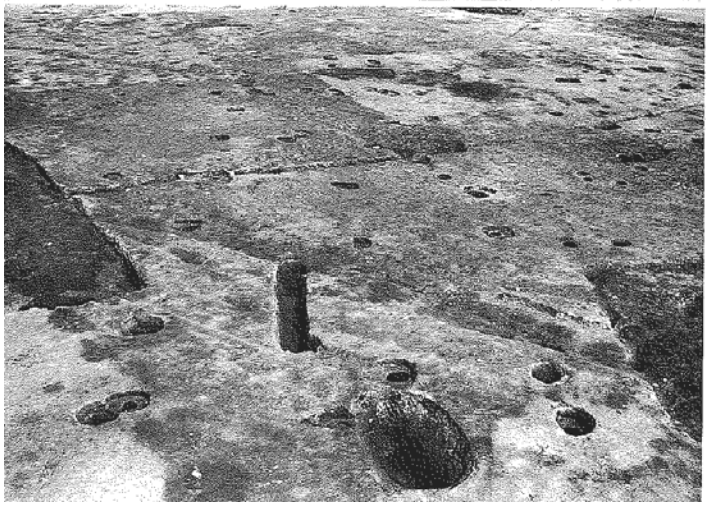
C-1区第18号住居跡
第07号掘立柱建物跡
（南から）

C-1区第12号住居跡
第08号掘立柱建物跡
（南から）



C-1区第09・10・11号
掘立柱建物跡
（南から）

C-1区第10号掘立柱建物跡
（北から）

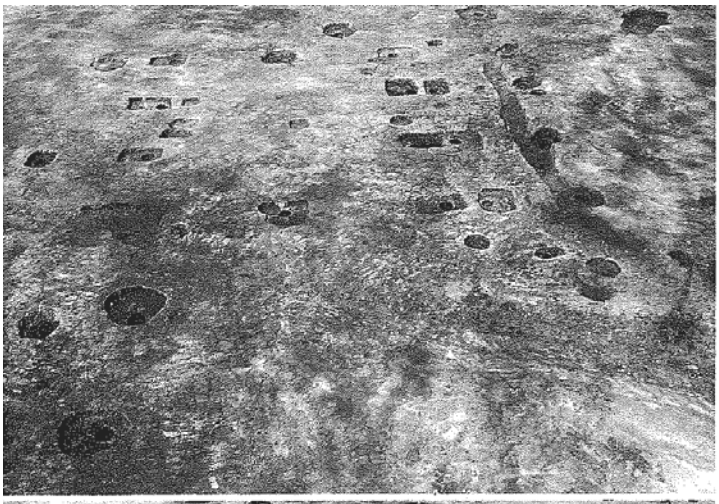


C-1区第12・13号掘立柱建物跡
（南から）

C-1区第15・17・18号
掘立柱建物跡
（南東から）

C-1区第15・16・19号
掘立柱建物跡
（南から）

C-1区第15号住居跡
第20・25号掘立柱建物跡
（北から）



C-1区第21号掘立柱建物跡
（南から）

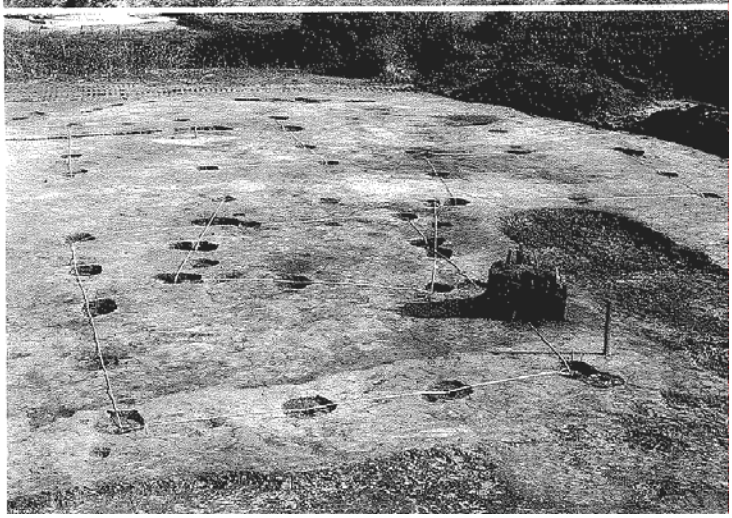
C-1区第22号掘立柱建物跡
（西から）

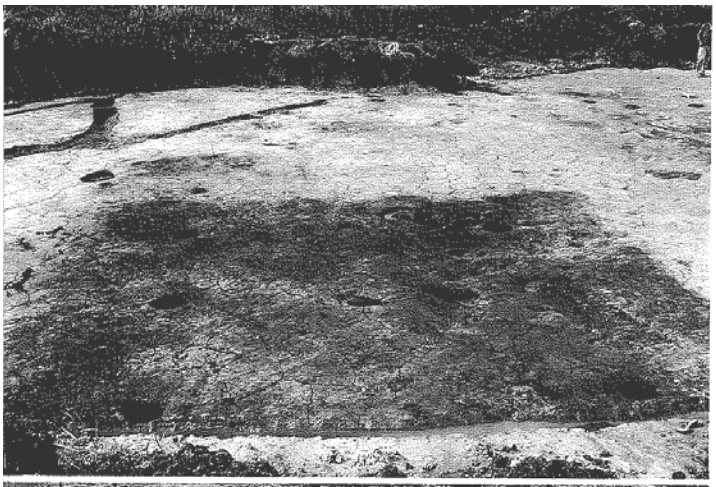
C-1区第17号住居跡
第26号掘立柱建物跡
第102号土壙
（南から）

C-1区第27号掘立柱建物跡
第102号土壙
第05号井戸(南から)

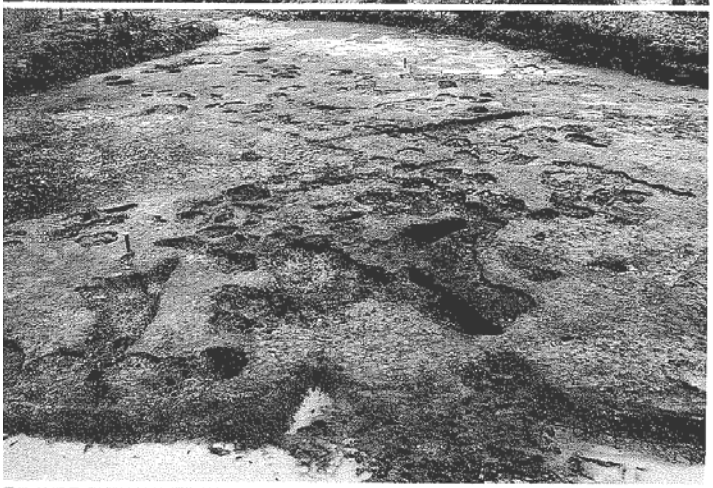
C-1区第28・29号掘立柱建物跡
(南から)

B区掘立柱建物跡群
(南から)

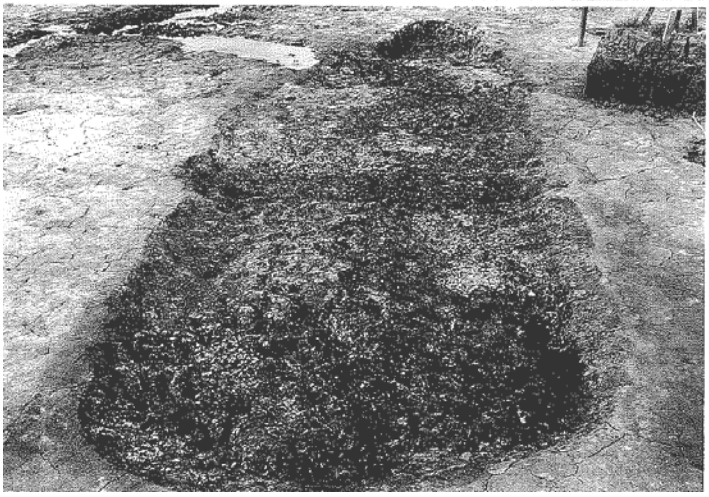




B区第33号掘立柱建物跡
（西から）

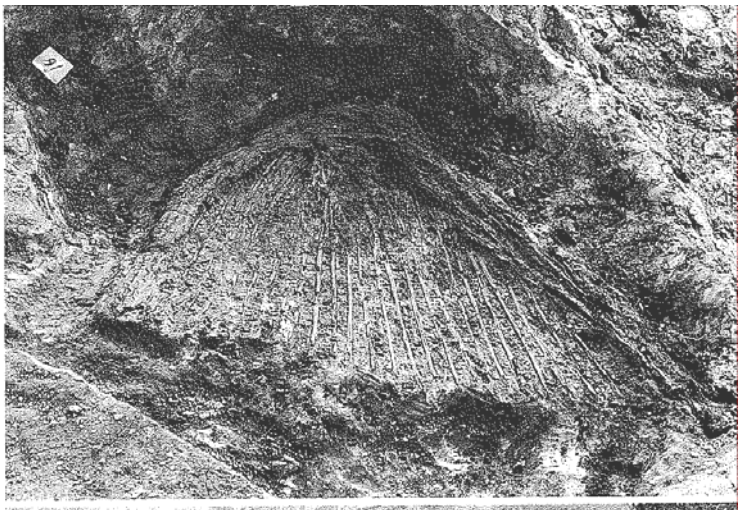


C-6区土壙群
（南から）

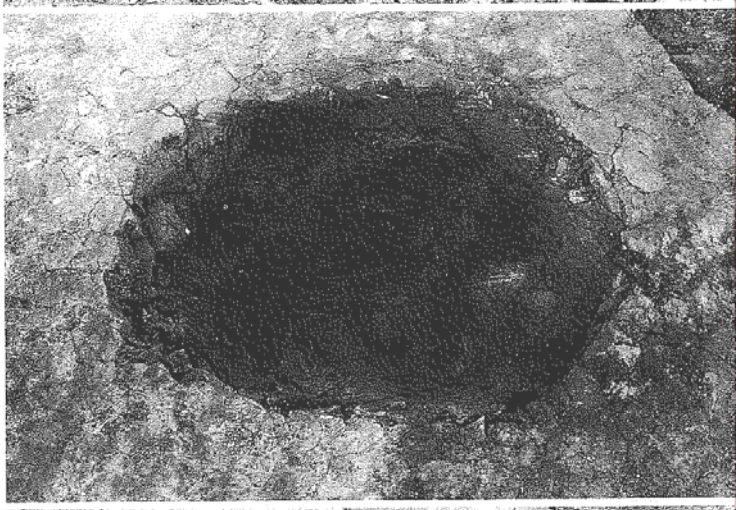


B区第19・20号土壙
（南から）

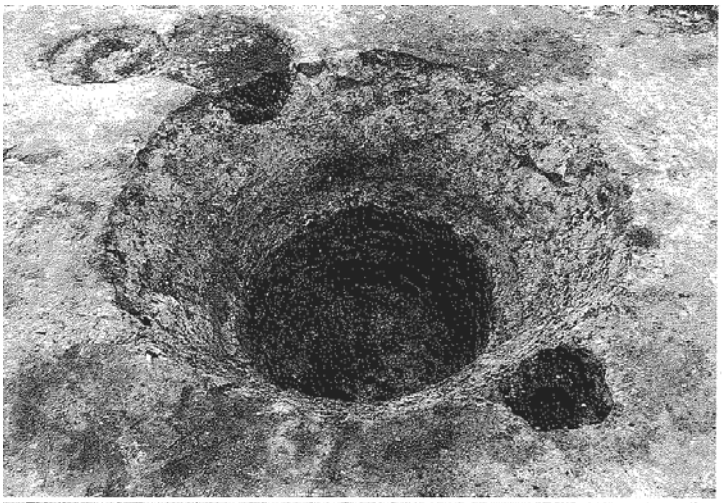
C-6区第50号土壙
遺物出土状況
（東から）



C-6区第51号土壙
（西から）



C-1区第01号井戸
（東から）



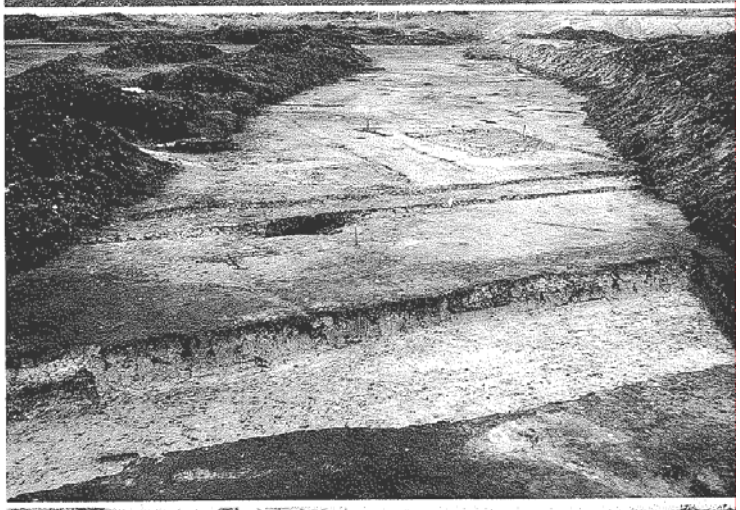
C-1区第05号井戸
（南から）

C-1区第01号井戸
小溝状遺構（ＳＸ02）
（南西から）

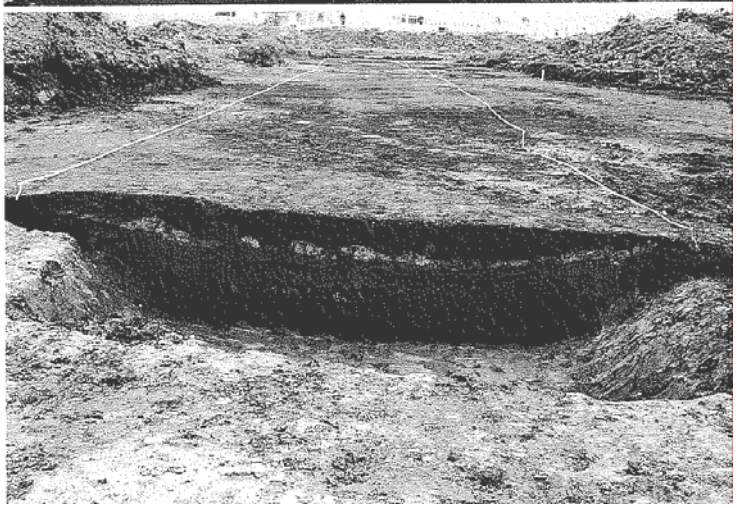
C-6区南側遺構全景
（空撮　西から）

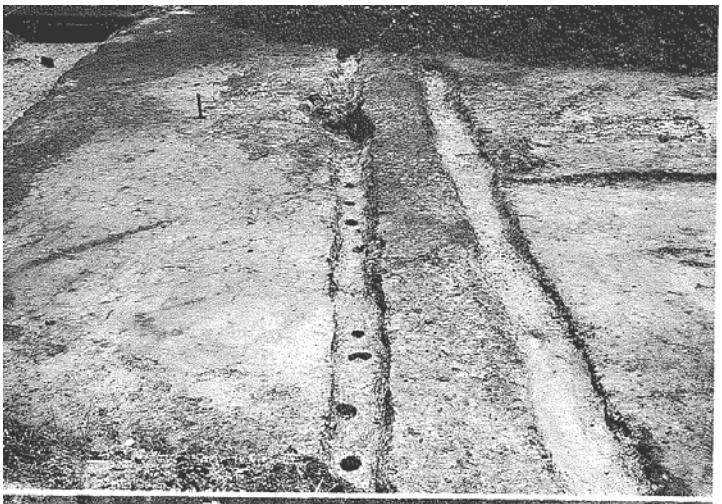
C-6区第09号溝
一本柱列(S A01)
(北辺　西から)

C-5区第09号溝
一本柱列(S A01)
(東辺　東から)



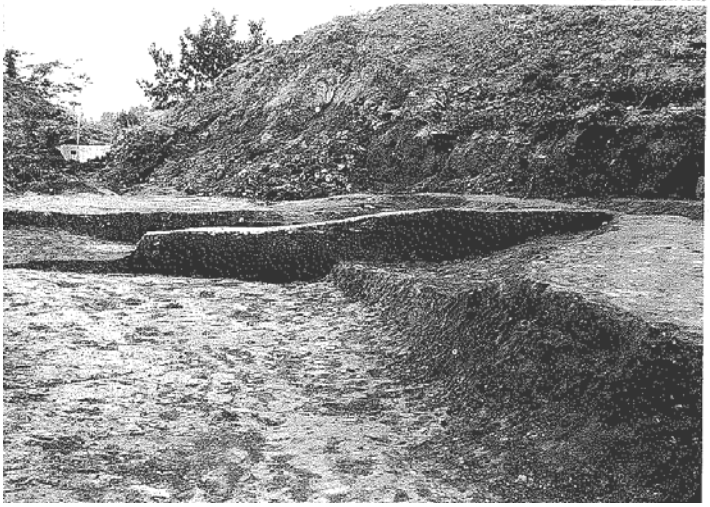
C-5区第09号溝断面
(北から)



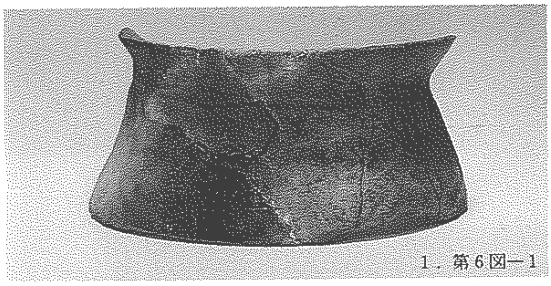


C-5区一本柱列（S A01）
第17号溝
（北から）

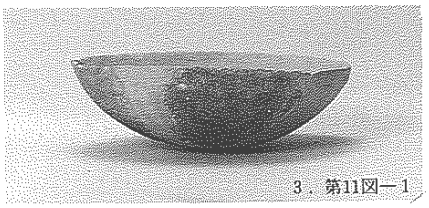
E区第21・22号土壙
第27号溝他
（北西から）



E区第27号溝・第21号土壙断面
（東から）

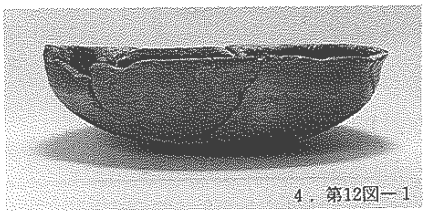


1．第6図―1

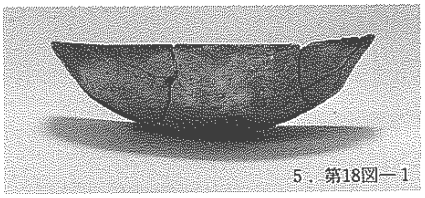


3．第11図―1

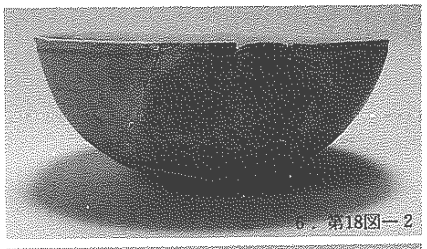
2．第8図―1



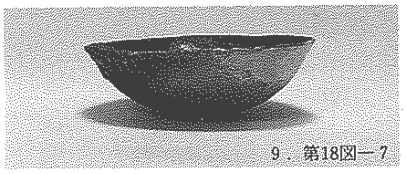
4．第12図―1



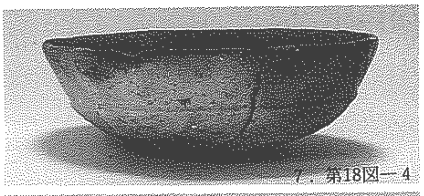
5．第18図―1



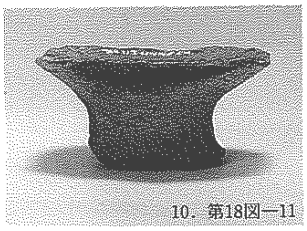
6．第18図―2



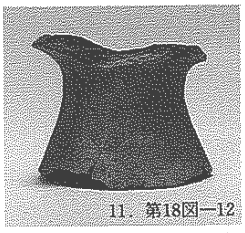
9．第18図―7



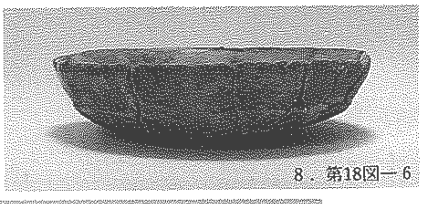
7．第18図―4



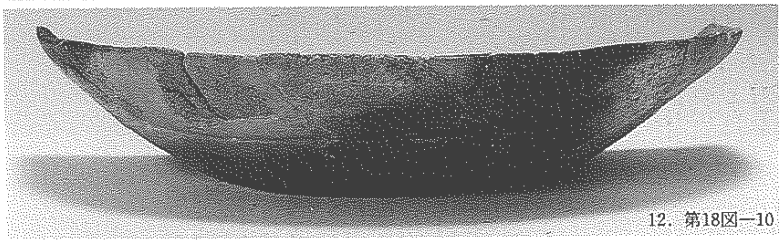
10．第18図―11



11．第18図―12



8．第18図―6

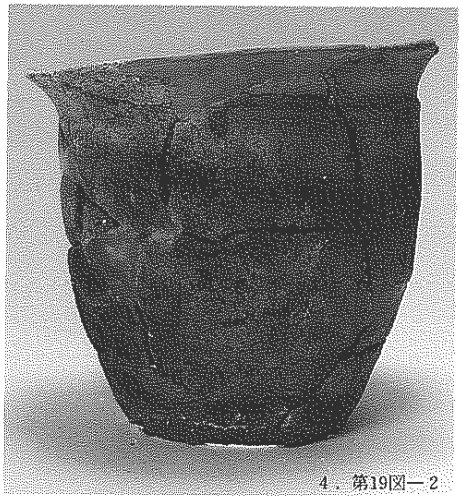


12．第18図―10

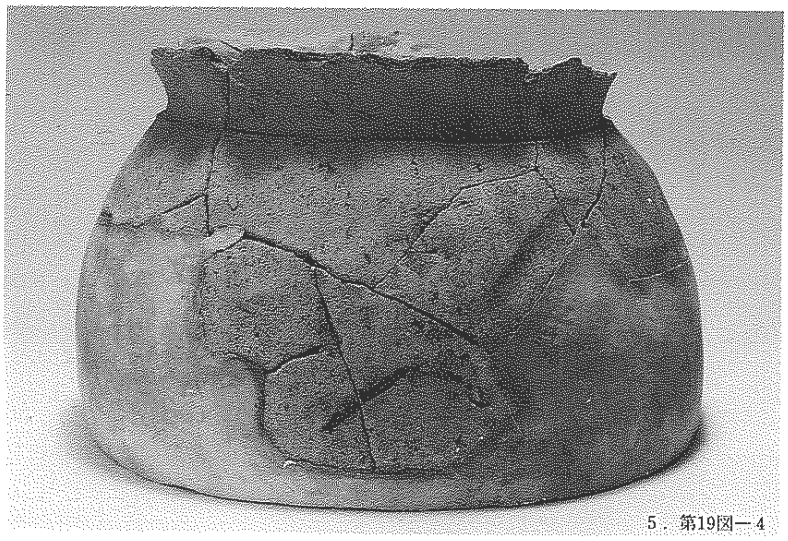
1．第18図―14

2．第18図―13

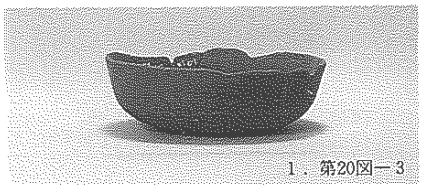
3．第19図―1



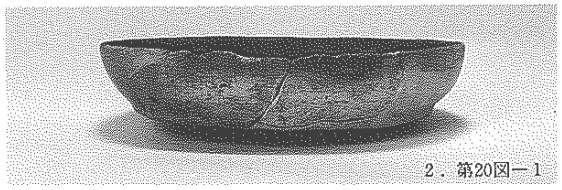
4．第19図―2



5．第19図―4

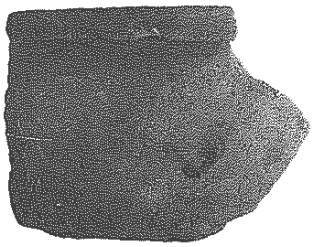


1．第20図―3

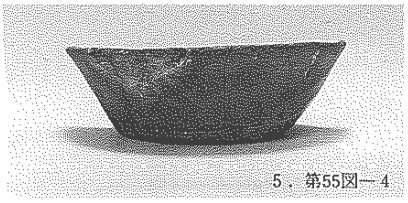


2．第20図―1

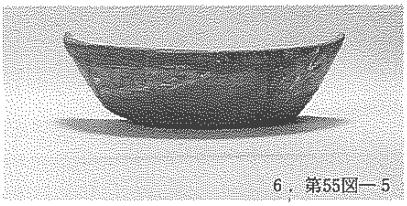
3．第22図―2



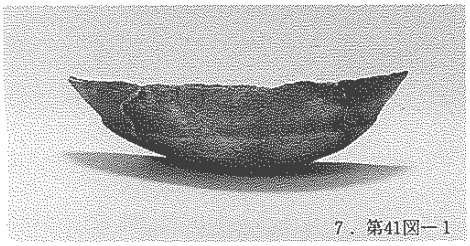
4．第55図―3



5．第55図―4



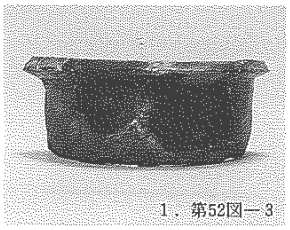
6．第55図―5



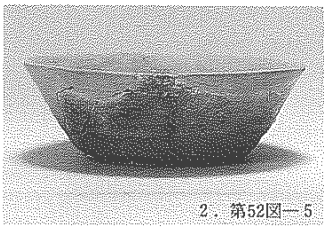
7．第41図―1

8．第42図―4

9．第43図―3

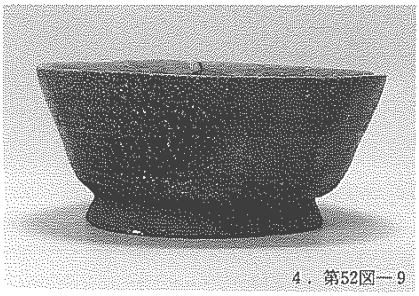


1．第52図―3

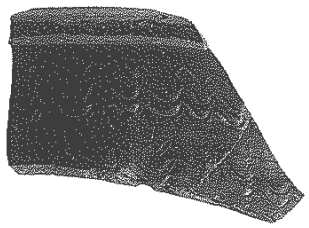


2．第52図―5

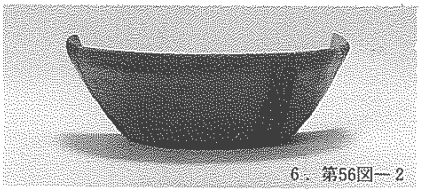
3．第52図―11



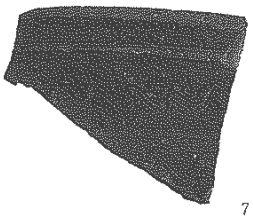
4．第52図―9



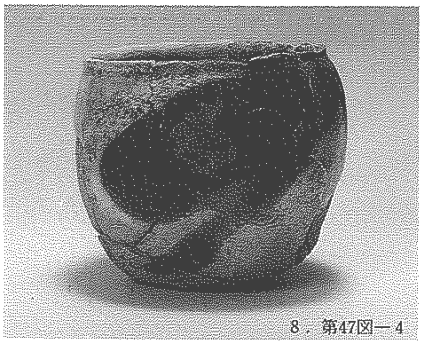
5．第52図―13



6．第56図―2

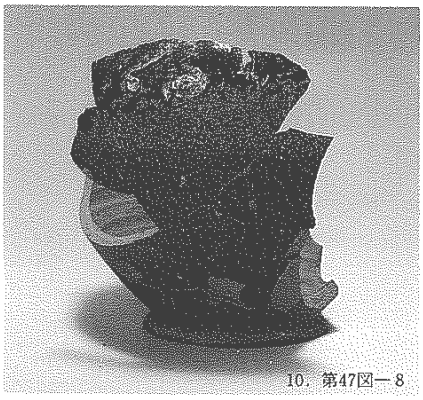


7．第56図―3



8．第47図―4

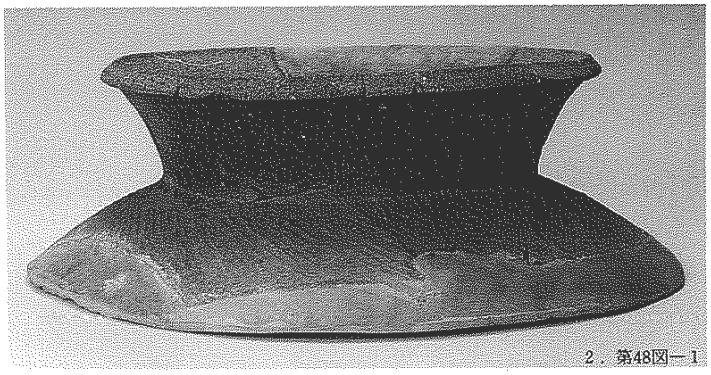
9．第47図―1



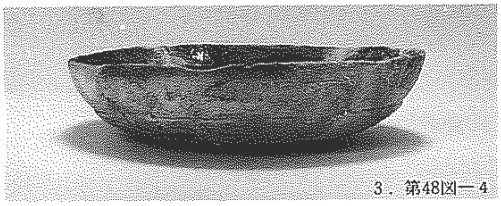
10．第47図―8

11．第47図―9

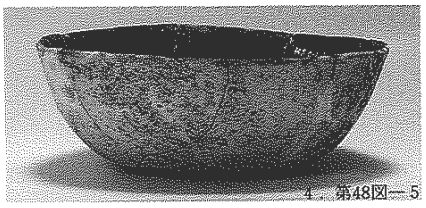
1．第47図－3



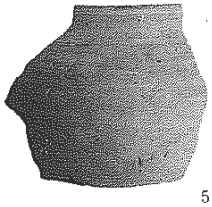
2．第48図－1



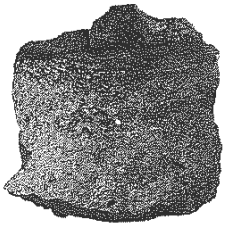
3．第48図－4



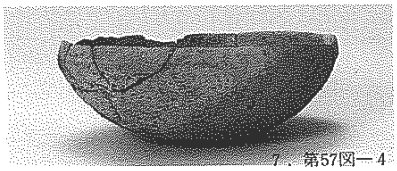
4．第48図－5



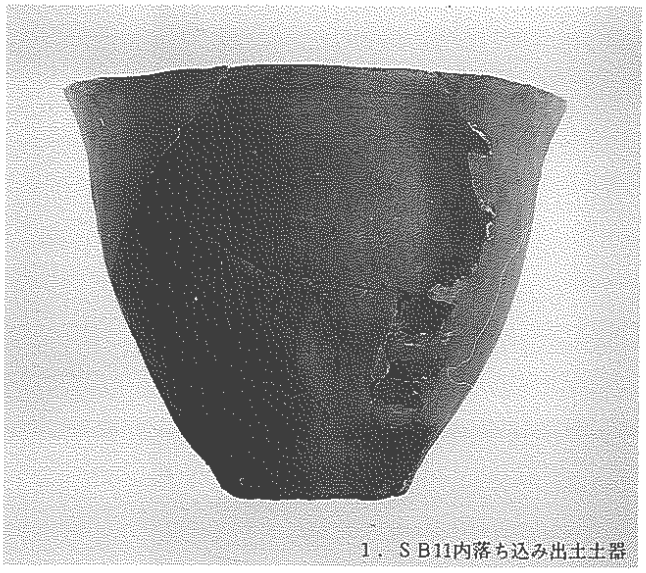
5．第57図－3



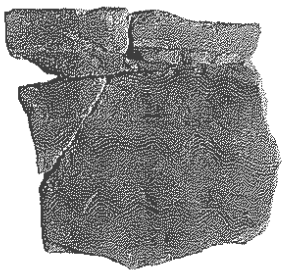
6．第45図－1



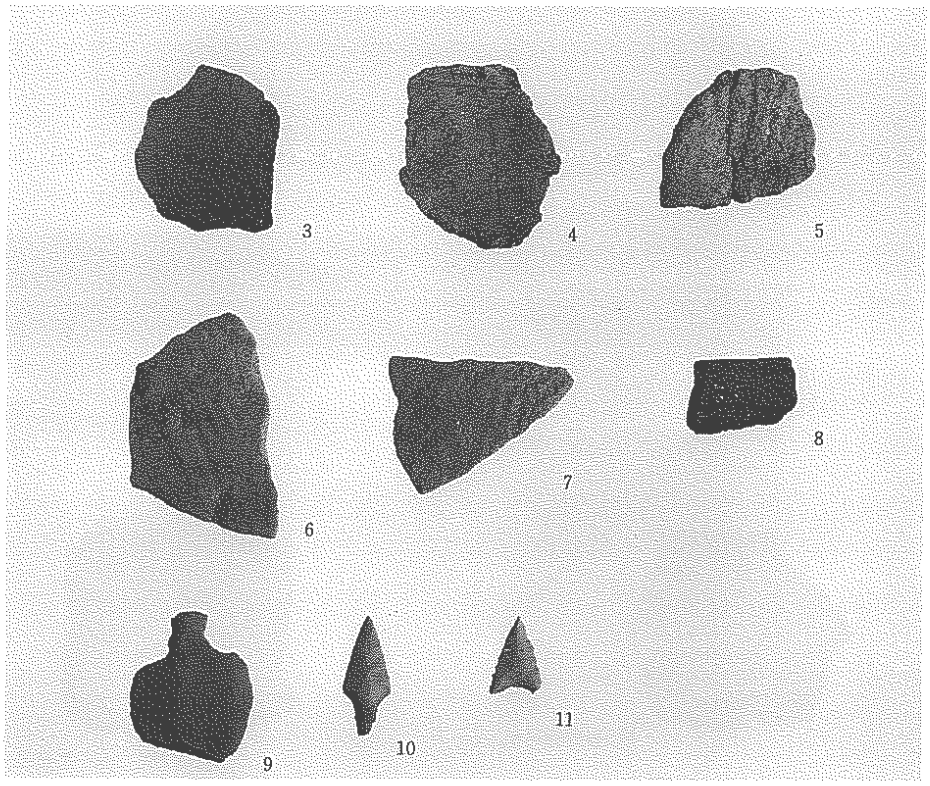
7．第57図－4



1．ＳＢ11内落ち込み出土土器



2．第48図―９



３～11　その他の遺物

天皇寺遺跡（てんのうじいせき）

目　　次

1. はじめに…… 169
2. 発見された遺構と遺物…… 169
3. まとめ…… 183

調 査 要 項

遺 跡 名：天皇寺遺跡
遺跡記号：ＮＡ
所 在 地：大和町吉岡字天皇寺
発掘面積：4200 ㎡
発掘期間：平成元年 8 月 8～12 日・28～31 日　9 月 1・2 日
調査主体：大和町教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：進藤秋輝・白鳥良一・真山悟・斉藤吉弘・阿部恵
調査協力：大和町吉岡南土地区画整理組合

天皇寺遺跡（てんのうじいせき）

1．はじめに

天皇寺遺跡は宮城県大和町吉岡字天皇寺に所在し、町役場の南約 600m、西下蔵地区から天皇寺地区に向かってやや南に張り出した吉田川北岸の河岸段丘低位面（標高 21～23m）に立地している（第 1 図）。この面は南に向かって緩やかに傾斜し、遺跡の南側は一段低い最低位段丘面に続いている（北村・中川：1983）。

今回の調査は土地区画整理事業計画に伴うものである。計画地は安永 3 年に記された「黒川郡今村天皇寺書上」（宮城県史 24 所収）によると、江戸時代初期の元和 2 年（1616）に伊達政宗の三男である伊達宗清が下草村から移転したとされている天皇寺に隣接しており、事業が計画された段階で行った遺物の分布調査では寺の南側にある狭い畑地部分から少量の土師器が、西側の杉林部分から須恵器の破片が採集され、寺の周辺に古代～近世にかけての遺跡の存在が予想された。

発掘調査は寺の西側を南北に延びる都市計画道路部分を中心に、その東西の道路予定地を対象として遺構の確認調査から開始した。その結果、各調査区からピット・溝跡・土壙などが検出され、調査区外の事業計画地までも遺構が広がることが明らかになった（第 2 図）。その後大和町教育委員会・企画課・区画整理組合と協議し、調査期間の制約から今回は都市計画道路（高田中町線）については精査を行い、東西道路部分については遺構確認だけに止めることとした。

2．発見された遺構と遺物

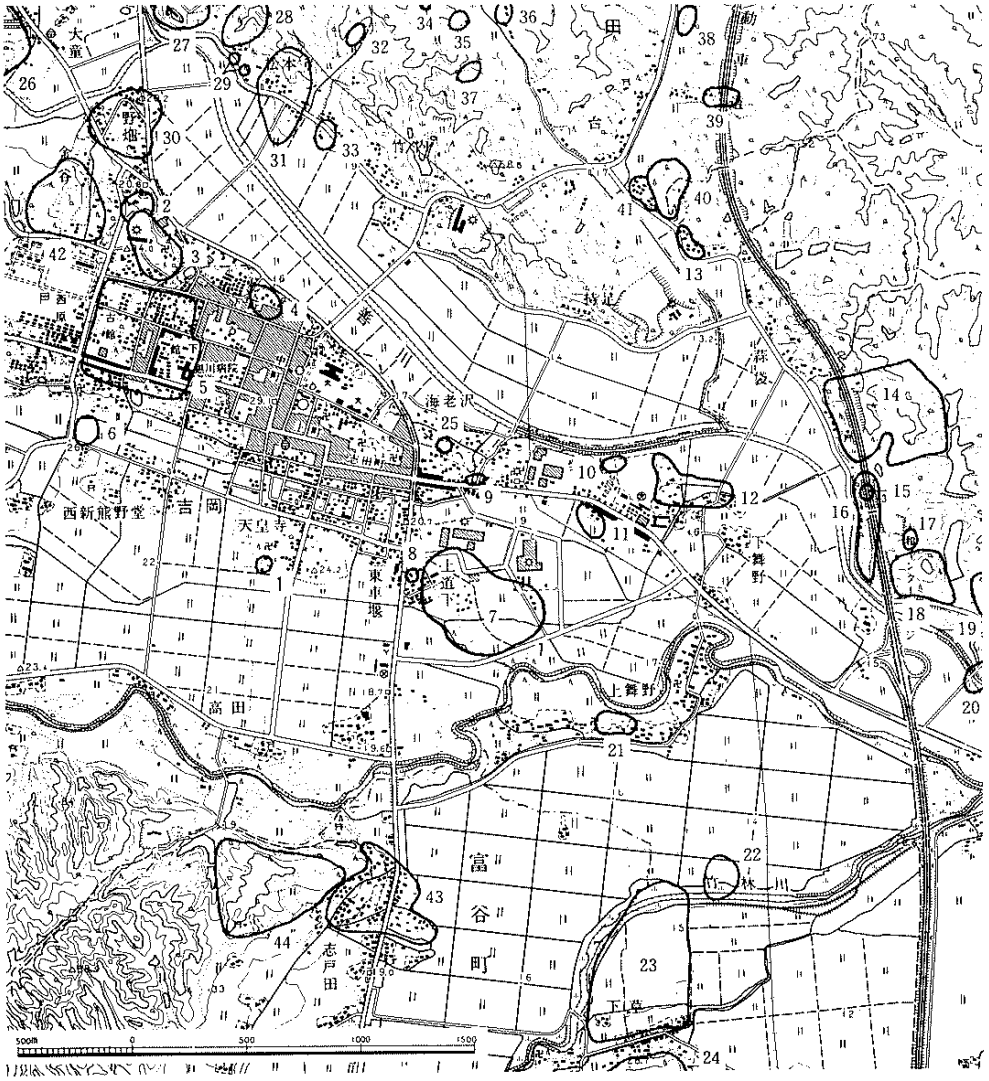
ここでは精査した遺構とその出土遺物について述べてゆく。表土を除去した結果、調査区の地形は中央部が最も高く、北と南に緩やかに傾斜していることが明らかになった。検出された遺構は掘立柱建物跡 6 棟・井戸跡 2 基・製鉄遺構 2 基・土壙 6 基・溝跡 19 条・ピットなどで、掘立柱建物跡・井戸跡・土壙は調査区の北寄りに、製鉄遺構・溝跡は調査区の南寄りに位置している（第 2・9 図）。

(1) 掘立柱建物跡（ＳＢ1～6）

掘立柱建物跡は 6 棟が検出された。ＳＢ2～4・6 の 4 棟に重複が見られ、最低でも 3 段階の変遷が考えられる。しかし、柱穴相互に切り合いがなく新旧関係は不明である（第 3 図）。

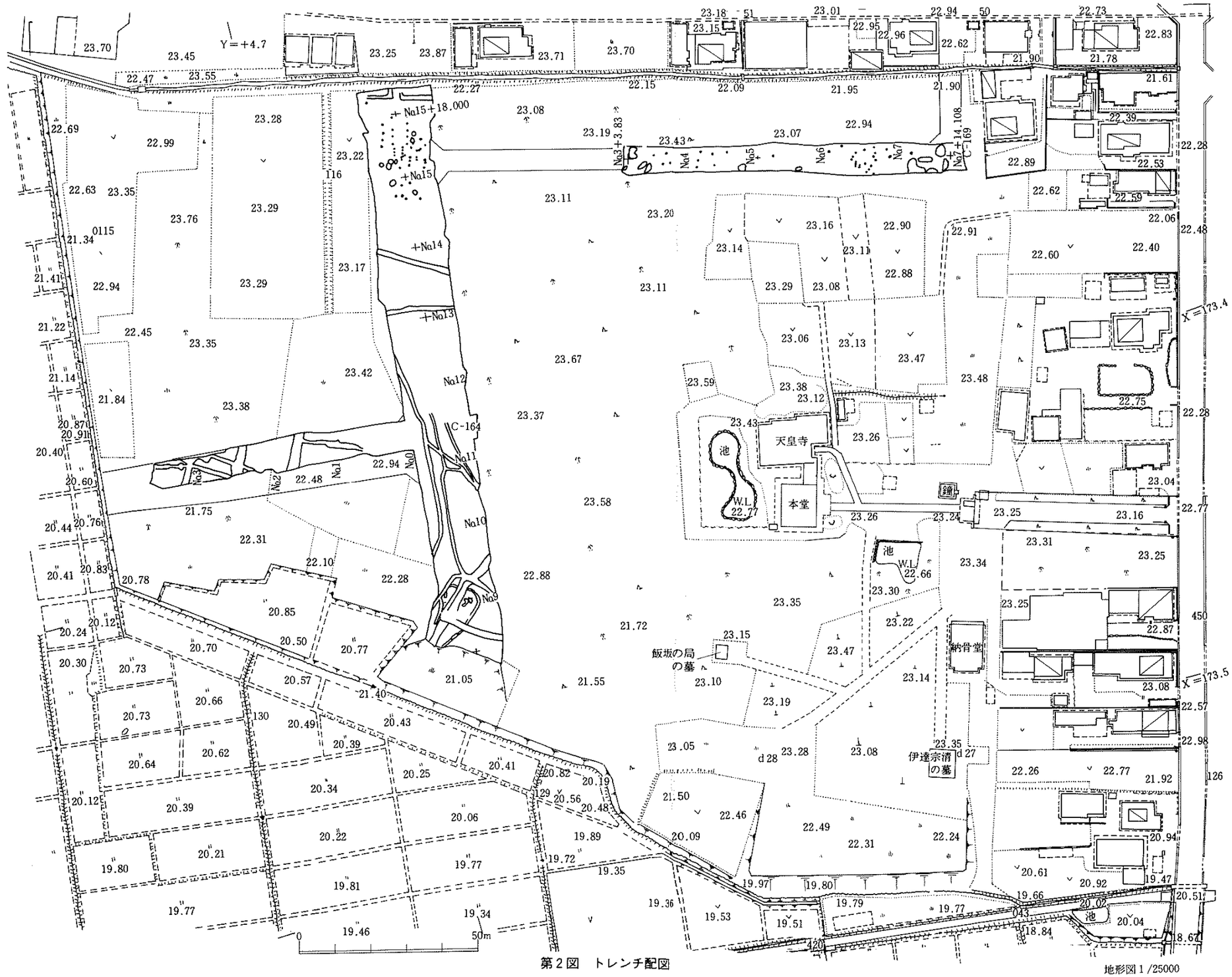
第 1 号掘立柱建物跡（ＳＢ1）

桁行 4 間（西桁は 3 間割り）・梁行 1 間の南北棟である。建物総長は桁行 7.9m・梁行 4.0m、



番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	天皇寺遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	16	八谷館跡	城跡	中世	31	松本遺跡	包含地	縄文、古代
2	石神沢遺跡	包含地	旧石、縄文晩、平安	17	新田古墳 3号	古墳	古墳後	32	寺沢遺跡	包含地	古代
3	中興寺遺跡	包含地	縄文晩	18	八谷古城跡	城跡	中世	33	要害遺跡	包含地	古代
4	安楽院遺跡	包含地	縄文中・後	19	大沢遺跡	包含地	古代	34	前原囲B遺跡	五輪塔	
5	吉岡城跡	城館	江戸	20	相川堤防遺跡	包含地	縄文、古代	35	前原囲A遺跡	包含地	縄文、古代
6	単遺跡	包含地	古代	21	上舞野B遺跡	包含地	古代	36	五十沢遺跡	包含地	縄文、古代
7	一里塚遺跡	包含地	平安	22	上舞野A遺跡	包含地	縄文、古代	37	苗代沢遺跡	包含地	縄文、古代
8	一里塚	一里塚	江戸	23	下草古城跡	城跡	中世	38	荒屋敷遺跡	包含地	古代
9	糸繰遺跡	包含地	縄文、古代	24	鶴巣館跡	城跡	中世	39	大蛸遺跡	包含地	平安
10	西浦田遺跡	包含地	平安	25	海老沢遺跡	包含地	縄文中	40	舘館跡	城跡	中世
11	柴崎遺跡	包含地	奈良	26	亀岡遺跡	包含地	縄文中・晩、古代	41	下屋敷遺跡	包含地	古代
12	古川遺跡	包含地	古代	27	大衝城跡	包含地、城跡	縄文、中世	42	金谷遺跡	包含地	旧石器、縄文中～晩
13	岩下遺跡	包含地	古代	28	古城館跡	城跡	中世	43	三ヶ森遺跡	包含地	奈良・平安
14	御所館跡	城館	中世	29	松本B・C遺跡	包含地	古代	44	馳取遺跡	城跡	中世
15	新田古墳 1・2	古墳	古墳後	30	大衝役場前遺跡	包含地	縄文、古代				

第1図　天皇寺遺跡の位置と周辺の遺跡



第２図　トレンチ配図

地形図１/25000

建物方向は東側桁列でN－24°－Eである。柱間は東桁で北から 2.05－1.9－2.05－1.9m、西桁で北から 4.05－1.95－1.95m である。柱穴は円形基調で大きさは 20～30 cm、柱痕跡は径 13 cmほどの円形で深さは 20～30 cmである。

第 2 号掘立柱建物跡（ＳＢ2）

ＳＢ4・6 と重複している。桁行 2 間（北桁は 1 間割り）・梁行 1 間の東西棟で、建物総長は桁行 4.3m・梁行 2.8m、建物方向は北側桁列でＥ－24°－Ｓである。柱間は南桁が 2.05m 等間であり、北桁が幾分広くなっている。柱穴は楕円形で大きさは 20～30 cm、柱痕跡は径 13～15 cmの円形で深さは 15～20 cmである。

第 3 号掘立柱建物跡（ＳＢ3）

ＳＢ4、第 4 号土壙（ＳＫ4）と重複し、後者を切っている。桁行 1 間・梁行 1 間の南北棟で、建物方向は東側桁列でN－28°－Eである。柱間は桁行が 3.0m、梁行が北列で 2.6m、南列で 2.35m である。柱穴は方形と円形基調のものがあり、大きさは 20～30 cmである。柱痕跡は方形で一辺が 10～15 cm、深さは 20～25 cmである。

第 4 号掘立柱建物跡（ＳＢ4）

ＳＢ2・3、ＳＫ4 と重複し、後者を切っている。桁行 2 間・梁行 1 間の南北棟で、建物総長は桁行 6.1m・梁行 4.0m、建物方向は東側桁列でN－29°－Eである。柱間は東桁で北から 3.55－2.45m、西桁で北から 3.9－2.2m である。柱穴は方形基調・円形基調のものがあり大きさは 20～30 cm、柱痕跡は径 10～15 cmほどの円形で、深さは 20～25 cmである。内部中央北寄りに間仕切りと考えられる柱穴が 2.45m の間隔で認められている。

第 5 号掘立柱建物跡（ＳＢ5）

4 個の柱穴が南北方向（N－24°－E）に並ぶもので掘立柱建物跡と考えられる。柱間は北から 2.15－2.2－1.8m である。柱穴は円形で大きさは 20～30 cm、柱痕跡は径 13 cmほどの円形で深さは 25～30 cmである。

第 6 号掘立柱建物跡（ＳＢ6）

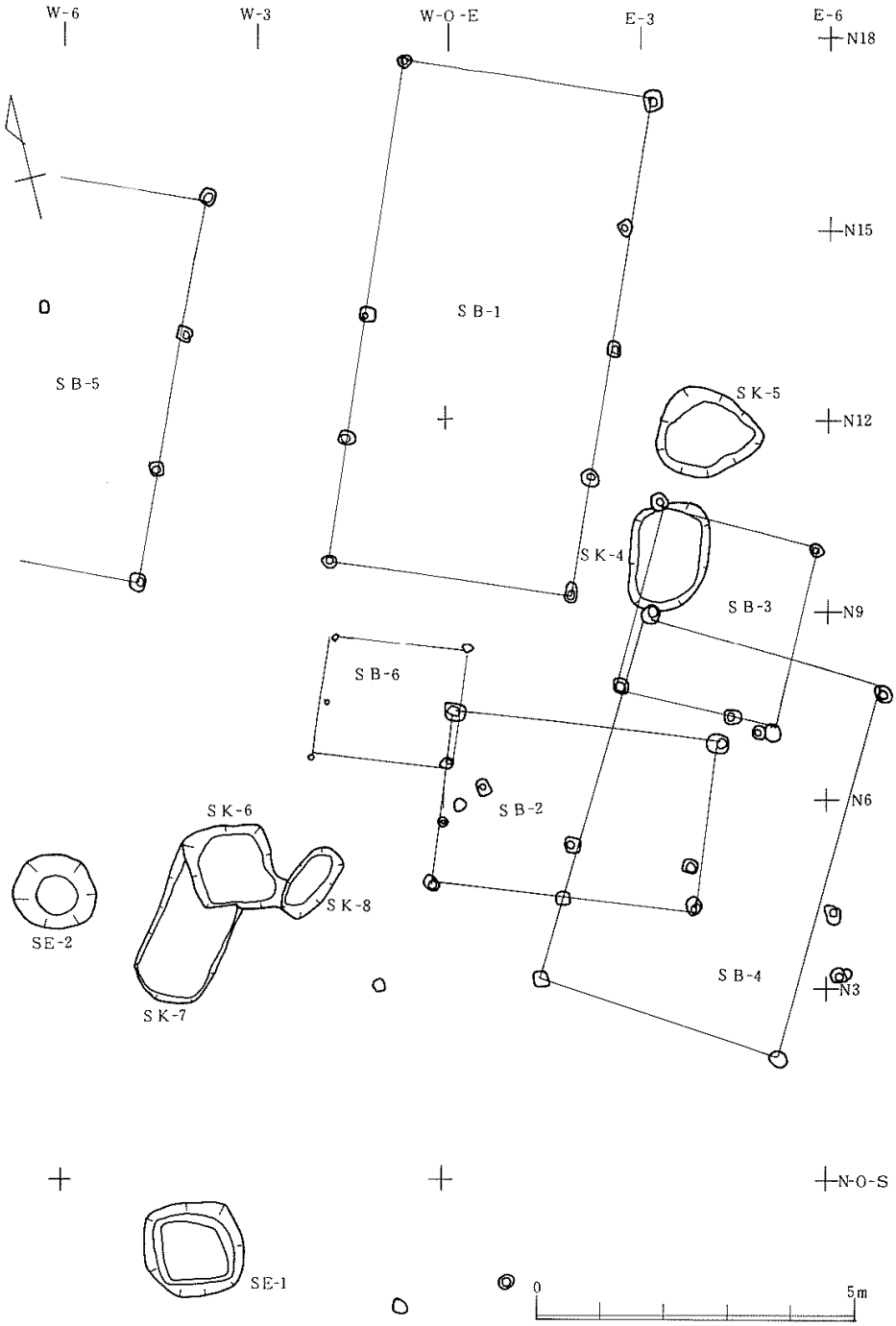
ＳＢ2 と重複している。大部分が柱痕跡のみを僅かに残す 1 間・1 間のほぼ方形の建物跡で（柱間は約 2m）、建物方向は東側柱列でN－22°－Eである。柱穴は円形基調で大きさは約 20 cm、柱痕跡は径 10 cmほどの円形で、深さは 10～15 cmである。

(2) 井戸跡（ＳＥ1・2）

掘立柱建物跡群の南側で素掘りの井戸が 2 基検出された（第 3・4 図）。

第 1 号井戸（ＳＥ1）

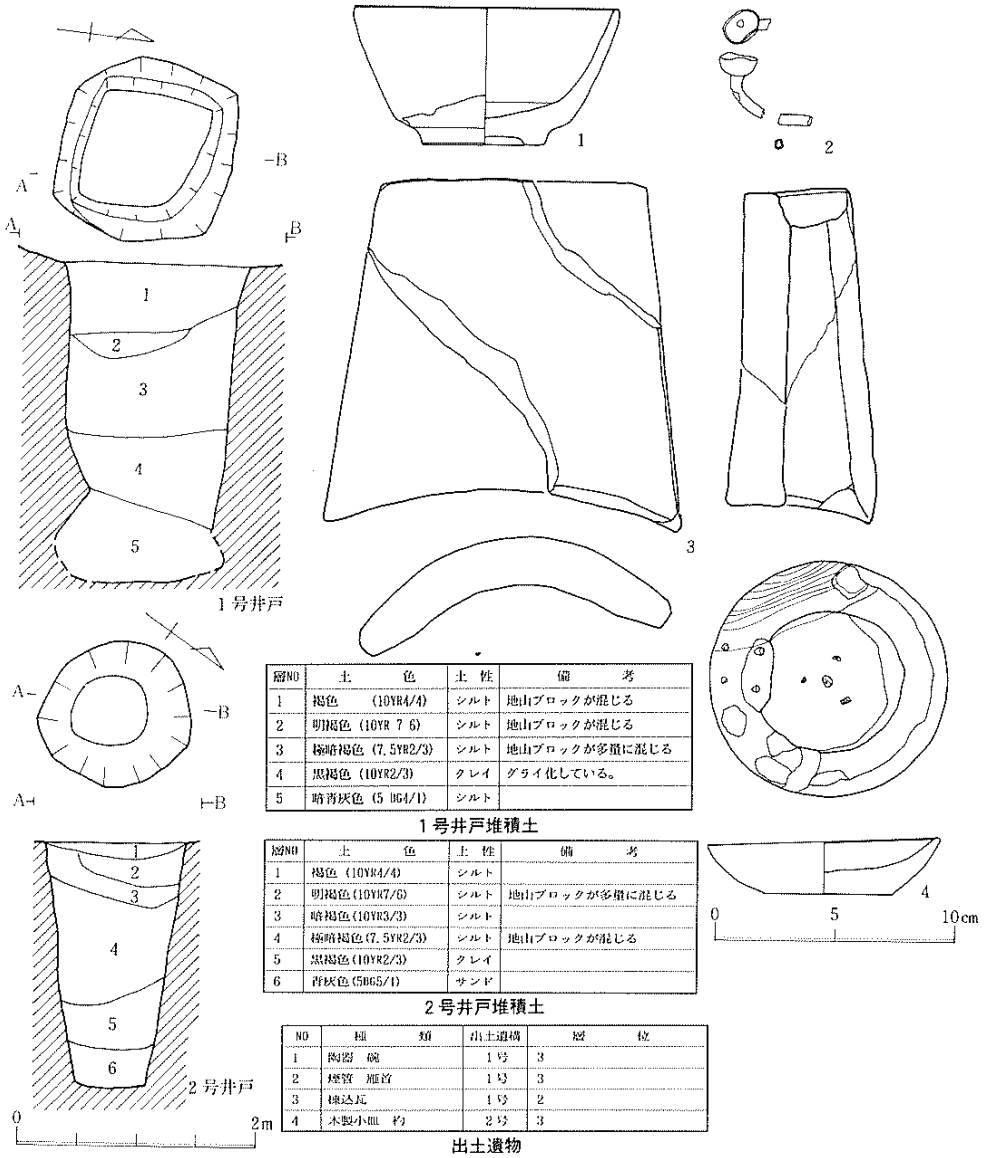
上端の平面形は一辺 1.5m ほどの不整方形で、底面は一辺 0.9m ほどの不整方形で皿状になっている。深さは 2.7m で、壁は上端から 2m まではほぼ垂直であるが、下端では外側に抉れて



第３図　南北道路北側遺構配置図

いる。堆積土は 5 層に分かれ、地山ブロックが混じる 1〜3 層は人為的埋土と思われ、4・5 層は自然流入土である。2 層から棟込瓦が、3 層から陶器碗と煙管の雁首が出土している。

碗（第 4 図 1）：体部は直線的に外傾し、口縁部はやや丸味をもつ。内外面ともに緑灰色に発色した釉が掛かり、下端には白い釉溜りがある。口径は 11.2 ㎝、器高は 5.8 ㎝である。形態・釉の特徴から瀬戸美濃産で 17 世紀初め頃のものと考えられる。



層NO	土色	土性	備考
1	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山ブロックが混じる
2	明褐色 (10YR 7 6)	シルト	地山ブロックが混じる
3	極暗褐色 (7.5YR2/3)	シルト	地山ブロックが多量に混じる
4	黒褐色 (10YR2/3)	クレイ	グライ化している。
5	暗青灰色 (5 BG4/1)	シルト	

層NO	土色	土性	備考
1	褐色 (10YR4/4)	シルト	
2	明褐色(10YR7/6)	シルト	地山ブロックが多量に混じる
3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
4	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	地山ブロックが混じる
5	黒褐色(10YR2/3)	クレイ	
6	青灰色(5BG5/1)	サンド	

NO	種類	出土遺構	層位
1	陶器 碗	1 号	3
2	煙管 雁首	1 号	3
3	棟込瓦	1 号	2
4	木製小皿 ？	2 号	3

出土遺物

第 4 図　井戸跡と出土遺物

煙管（第 4 図 2）：銅製で長さは 4 ㎝、雁首付け根径は 0.5 ㎝、火皿は径 1.5 ㎝・深さ 1 ㎝である。このような形態の煙管は「河骨形」とよばれ、古泉弘氏の研究によると 18 世紀前半頃のものとされている（古泉；1983）。

棟込瓦（第 4 図 3）：長さ 13.6 ㎝・広端幅 15 ㎝・狭端幅 11 ㎝で、凸面には横方向のナデ、凹面には布目痕の上に横方向のヘラナデが施されている。各辺は面取りされている。利府町大沢窯跡瓦捨場出土のもの（宮教委；1987）に似ており、江戸時代前半期のものと思われる。

第 2 号井戸（ＳＥ2）

上端・底面ともに平面形はほぼ円形で、規模は上端が径 1.3m、底面が径 0.6m である。深さは 2.1m で、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。堆積土は 6 層に分かれ、褐色ロームブロックが混じる 2 層は人為的埋土と思われる。他の層は自然流入土で、3 層から体側に 4 孔の穿たれた杓の身と思われる円形の木製小皿が出土している。

木製小皿（第 4 図 4）：ロクロ挽きのものである。平底で体部は外傾し、口縁端部は平坦である。口径 10 ㎝・底径 5.5 ㎝・深さ 1.2 ㎝である。体側の孔は径 4 ㎜で 2 個対になっており、杓の柄を付けた際の痕跡と思われる。年代は明らかではない。

(3) 製鉄遺構

南斜面で 2 基検出された。円筒形の炉本体とそれを凹字状に取り囲む土壙から成る製鉄遺構の一部と考えられるものである（第 5～7 図）。

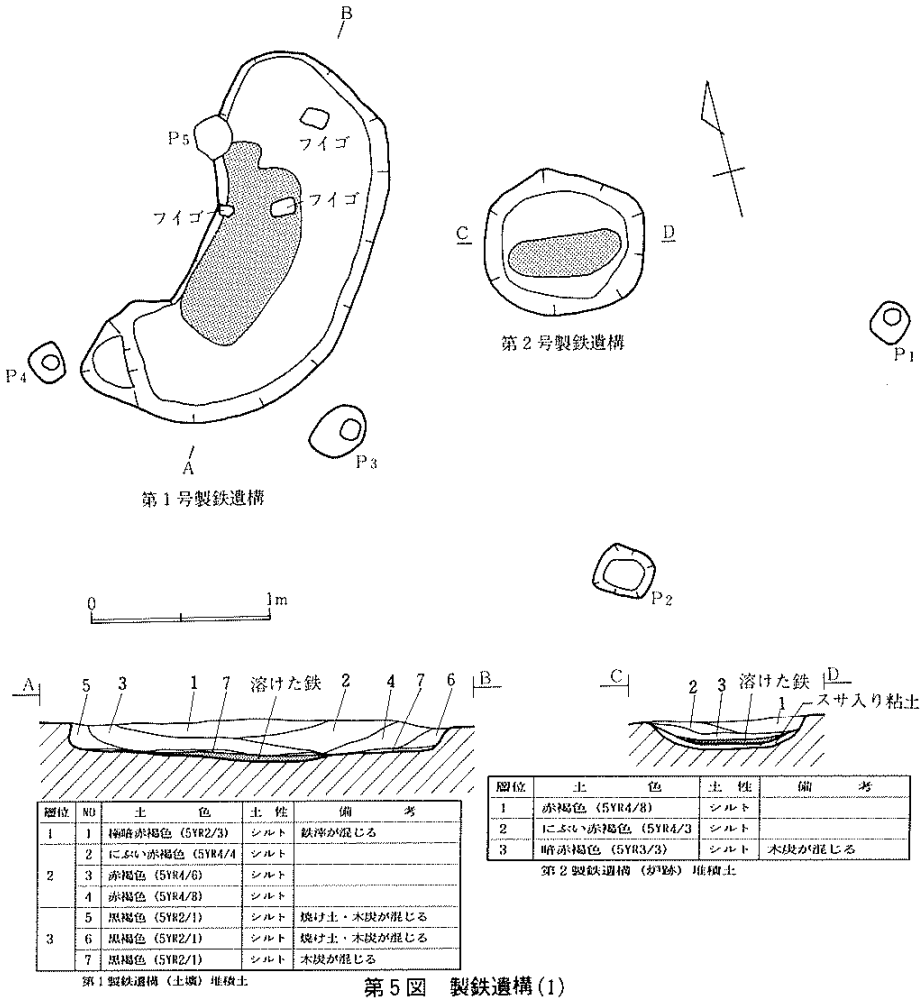
第 1 号製鉄遺構

炉の本体が壊され、それを凹状に取り囲む土壙だけが残ったものと思われる。土壙は隅丸長方形の一方の長辺の中央が窪んだ「凹」字形で、長辺は 2.15m・幅 0.9m・深さ 20 ㎝ほどである。壁は急角度で立ち上がり、底面はほぼ平坦で中央部が僅かに窪んでいる。西辺側の窪み部分の壁面から底面のほぼ中央部にかけて飴状に溶けた鉄が楕円形状に付着している。堆積土は 7 枚あり、Ⅲ層に大別される。Ⅰ 層は鉄滓が混じる極暗赤褐色土、Ⅱ層は赤褐色土、Ⅲ層は焼土・木炭粒・鉄滓が混じる黒褐色土である。Ⅲ層中からフイゴの羽口が 2 点出土している（第 7 図 2・3）。

第 2 号製鉄遺構

炉の本体が壊され、底部だけが残ったものと思われる。炉底部は径 0.9m・深さ 16 ㎝ほどの不整円形の掘り方の底にスサ入り粘土を 4 ㎝ほどの厚さで貼り作られている。底面中央部には飴状に溶けた鉄が長楕円形状に付着している。堆積土は赤褐色土・暗赤褐色土など 3 枚が認められ、3 層中には木炭が混じっている。炉底面からはフイゴの羽口が出土している（第 7 図 1）。

なお、これらの製鉄遺構を囲むように幅 40 ㎝・深さ 20～30 ㎝の溝が 1 条巡っている（第 1



層位	NO	土色	土性	備考
1	1	極暗赤褐色（5YR2/3）	シルト	鉄滓が混じる
2	2	にぶい赤褐色（5YR4/4	シルト	
	3	赤褐色（5YR4/6）	シルト	
	4	赤褐色（5YR4/8）	シルト	
3	5	黒褐色（5YR2/1）	シルト	焼け土・木炭が混じる
	6	黒褐色（5YR2/1）	シルト	焼け土・木炭が混じる
	7	黒褐色（5YR2/1）	シルト	木炭が混じる

第1製鉄遺構（土壙）堆積土

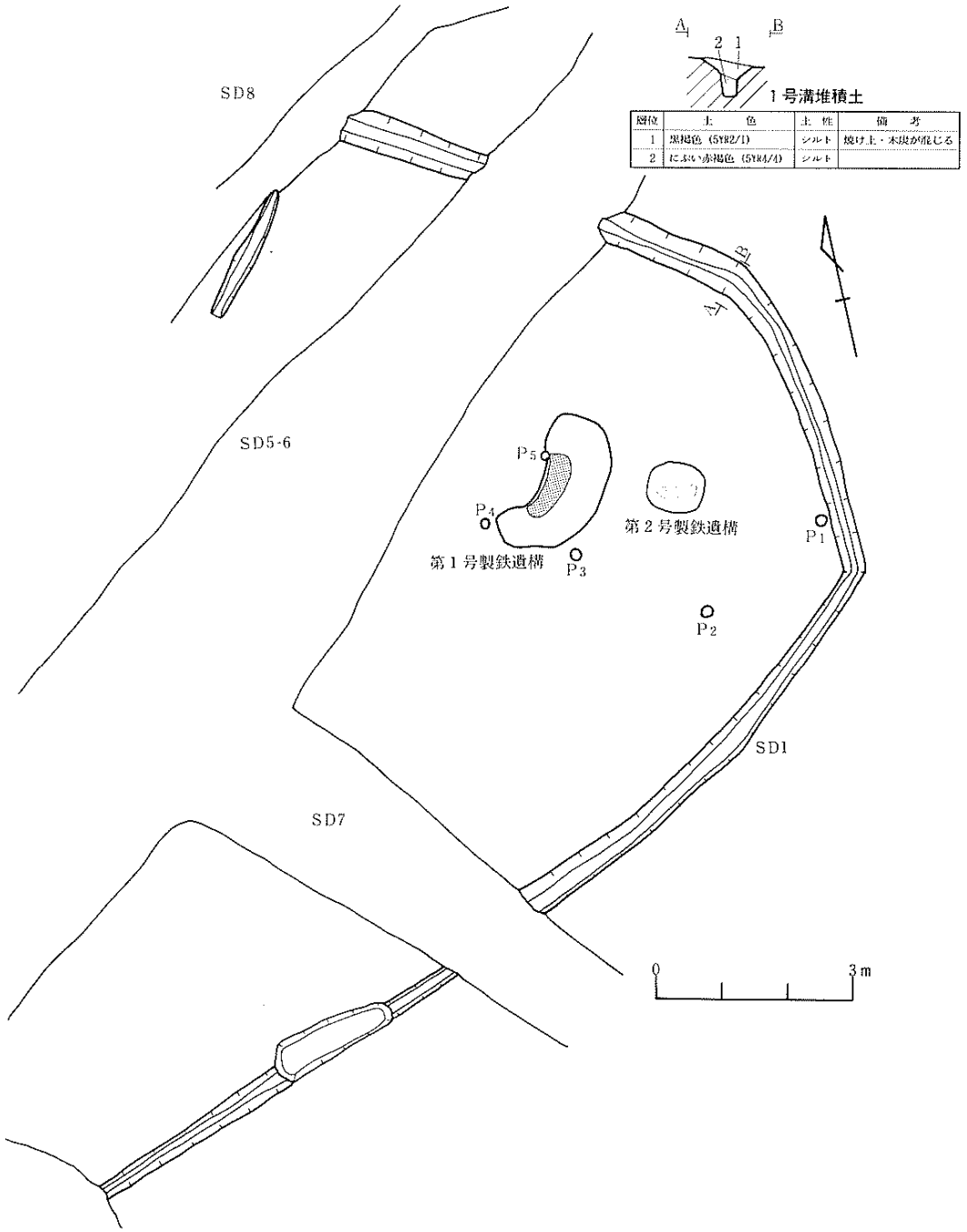
層位	土色	土性	備考
1	赤褐色（5YR4/8）	シルト	
2	にぶい赤褐色（5YR4/3	シルト	
3	暗赤褐色（5YR3/3）	シルト	木炭が混じる

第2製鉄遺構（炉跡）堆積土

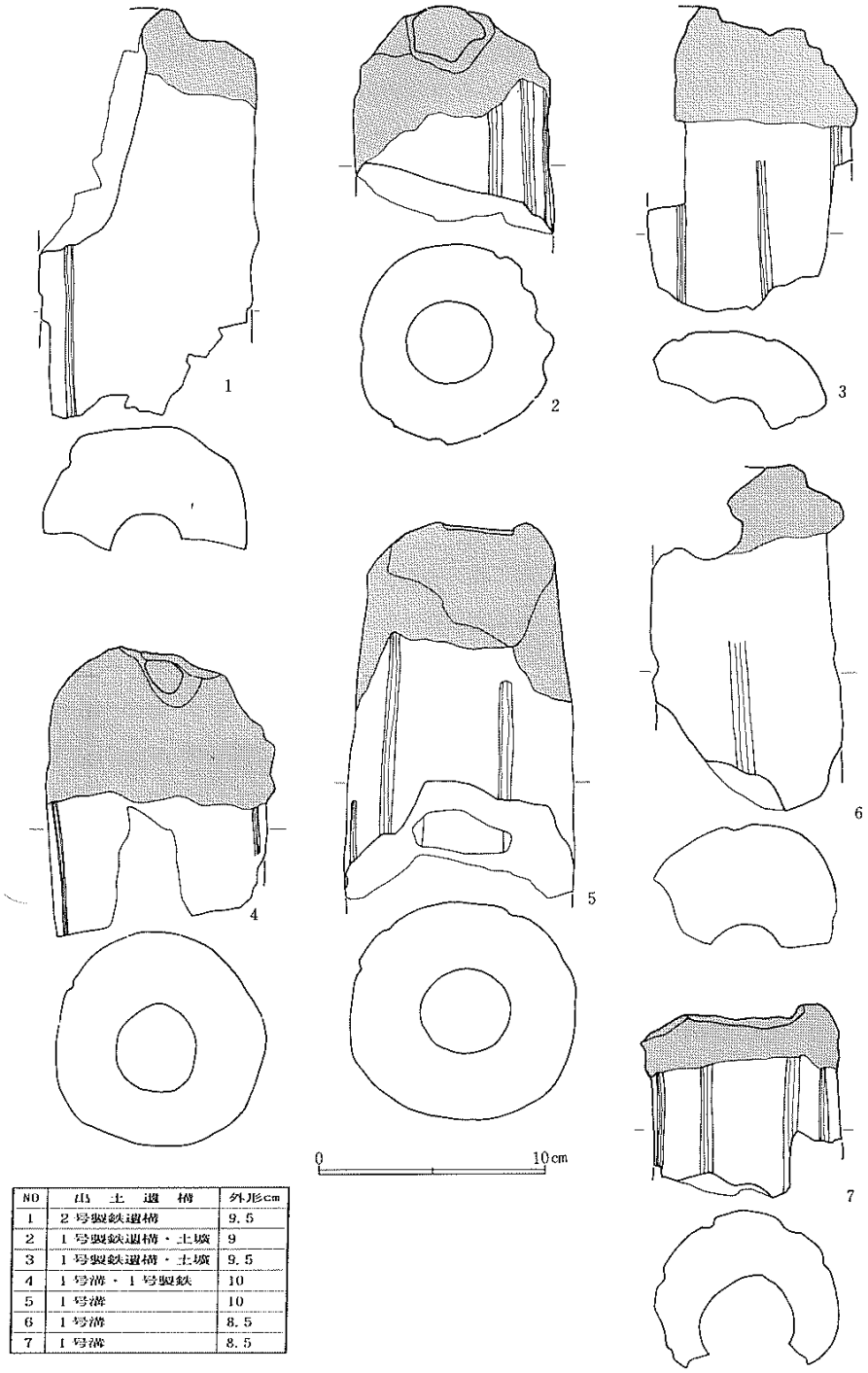
第5図　製鉄遺構(1)

号溝：ＳＤ1）。ＳＤ1の断面は下半部が垂直に立ち上がり上半部が開く形状で、溝は標高の高い北東側が広い逆円錐形状に巡り、溝で囲まれる範囲は最大長が16m以上・最大幅が約11mである。製鉄遺構内への水の侵入を防ぐための施設と思われる。堆積土は焼土・木炭粒を含む暗赤褐色土で、東辺側の堆積土からフイゴの羽口が3点出土している（第7図5～7）。

また、第2号製鉄遺構の南側にはこれを取り囲むようにやや歪んだ「コ」字形に配された一辺が20～40cmの方形基調柱穴が5個検出されている。これらの柱穴は位置関係および柱穴の1個（P5）が第1号製鉄遺構を切っていることから第2号製鉄遺構に伴う上屋状の遺構と思われる。


SD8
SD5-6
SD7
SD1
第1号製鉄遺構
第2号製鉄遺構
P1
P2
P3
P4
P5
A
B
2
1
1号溝堆積土
層位 | 土色 | 土性 | 備考
1 | 黒褐色（5YR2/1） | シルト | 焼け土・木炭が混じる
2 | にぶい赤褐色（5YR4/4） | シルト |
0
3m

第6図　製鉄遺構（2）



NO	出　土　遺　構	外形cm
1	2 号製鉄遺構	9.5
2	1 号製鉄遺構・土壙	9
3	1 号製鉄遺構・土壙	9.5
4	1 号溝・1 号製鉄	10
5	1 号溝	10
6	1 号溝	8.5
7	1 号溝	8.5

第 7 図　羽口実測図

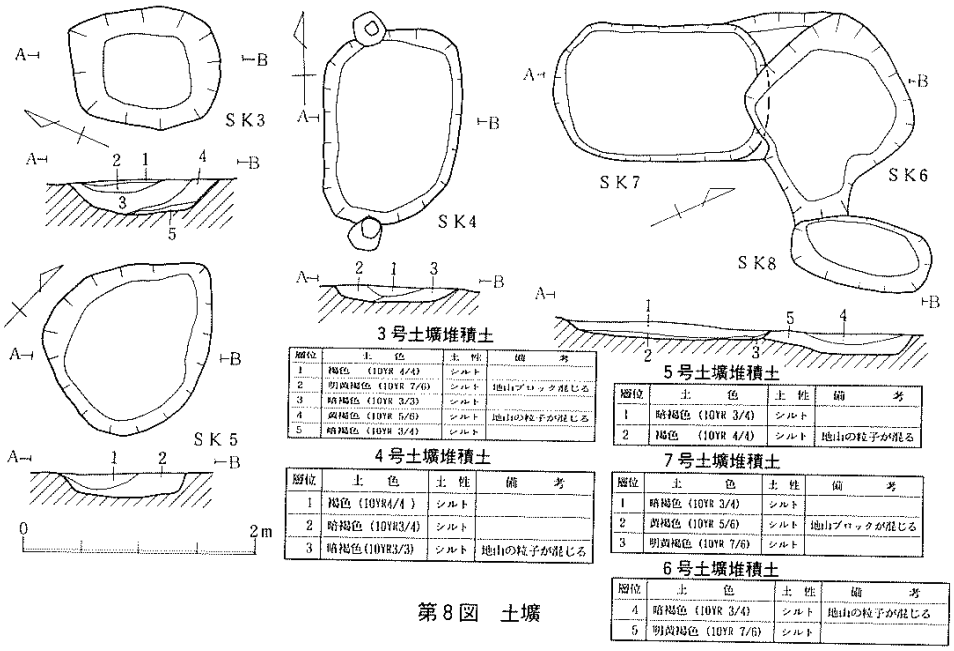
羽口（第７図1～7）：いずれも半欠品である。スサ入り粘土で作られ、外面には縦方向に走る数条の溝が見られる。両端部がやや細まる円筒形状のものと思われ、外径が8.5～10㎝・孔径が3.5～4㎝の大形のものである。先端の表面には飴状に溶けた鉄の付着が見られる。

以上のような特徴を持つ製鉄遺構は大和町摺萩遺跡（佐藤：1990）や仙台市嶺山Ｃ遺跡（佐藤ほか：1983）、松島町山下遺跡（菊地：1982）などで検出されており、出土遺物の検討から平安時代の精練炉と考えられている。本遺跡の２例ともに炉の一部分のみの検出であるが、第１号製鉄遺構はは摺萩遺跡第２号製鉄遺構の炉本体に隣接する土壙（鉄滓等を掻きだした場所）と形態の特徴が極めて類似するものであり、炉本体は削平されたものと考えられる。年代の明らかな出土遺物はないものの概ね平安時代の精練炉として捉えておきたい。また、第２号製鉄遺構は重複関係から第１号製鉄遺構よりも年代の新しいものであるが、炉底部の構築に際してスサ入り粘土を使用するなど先に揚げた３遺跡での構築方法と共通する特徴を持つことから第１号製鉄遺構の構築時期と大きな差のない時期の遺構と考えられる。

(4) 土壙（ＳＫ3～6）

北斜面で６基検出された（第３・８図）。このうちＳＫ4はＳＢ3・4に切られ、ＳＫ6はＳＫ7・8と重複し、ＳＫ6→ＳＫ7・8の新旧関係がある（旧→新）。

土壙の平面形には隅丸長方形・楕円形・不整円形・方形などがあり、規模は長軸が1.3～1.7m・短軸が0.6～1.4m・深さ13～30㎝である。底面は平坦なものが多い。堆積土は褐色・暗褐色土が多く、部分的に地山ブロックが混じっている。ＳＫ7 の堆積土中から江戸時代のものと考えられる飾り瓦の破片が出土している（写真図版２－6）。



3号土壙堆積土

層位	土色	土性	備考
1	褐色 (10YR 4/4)	シルト	
2	明黄褐色 (10YR 7/6)	シルト	地山ブロック混じる
3	暗褐色 (10YR 3/3)	シルト	
4	黄褐色 (10YR 5/6)	シルト	地山の粒子が混じる
5	暗褐色 (10YR 3/4)	シルト	

4号土壙堆積土

層位	土色	土性	備考
1	褐色 (10YR4/4)	シルト	
2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	
3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山の粒子が混じる

5号土壙堆積土

層位	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR 3/4)	シルト	
2	褐色 (10YR 4/4)	シルト	地山の粒子が混る

7号土壙堆積土

層位	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR 3/4)	シルト	
2	黄褐色 (10YR 5/6)	シルト	地山ブロックが混じる
3	明黄褐色 (10YR 7/6)	シルト	

6号土壙堆積土

層位	土色	土性	備考
4	暗褐色 (10YR 3/4)	シルト	地山の粒子が混じる
5	明黄褐色 (10YR 7/6)	シルト	

第８図　土壙

(5) 溝跡（ＳＤ1～19）

溝跡は北斜面で 1 条（ＳＤ19）、中央部で 2 条（ＳＤ2・3）、南斜面で 16 条（ＳＤ1・4～18）の計 19 条が検出された（第 9・10 図）。いずれも調査区外に延びているため長さは不明である。また、南斜面で検出された溝は相互に重複するものが多く、新旧関係の明らかなものはＳＤ1→ＳＤ6→ＳＤ7→ＳＤ5、ＳＤ1→8、ＳＤ11→ＳＤ10→ＳＤ9 である。ＳＤ1～9 の 9 条については精査を行なったが、他は確認あるいは一部の掘り下げで止めている。ＳＤ1 については先に述べているので、ここではＳＤ2～9 について説明をする。

第 2・3 号溝（ＳＤ2・3）

東西方向に走る溝で、ともに幅約 1m・深さ 30～40 ㎝である。底面はＳＤ2 では平坦であるが、ＳＤ3 では凹凸がある。ともに堆積土中には地山ブロックが混じり、ＳＤ3 からは底部外面に回転糸切り痕を残し、内面が摩滅している土師質の擂鉢底部破片が出土している（第 9 図 1）。

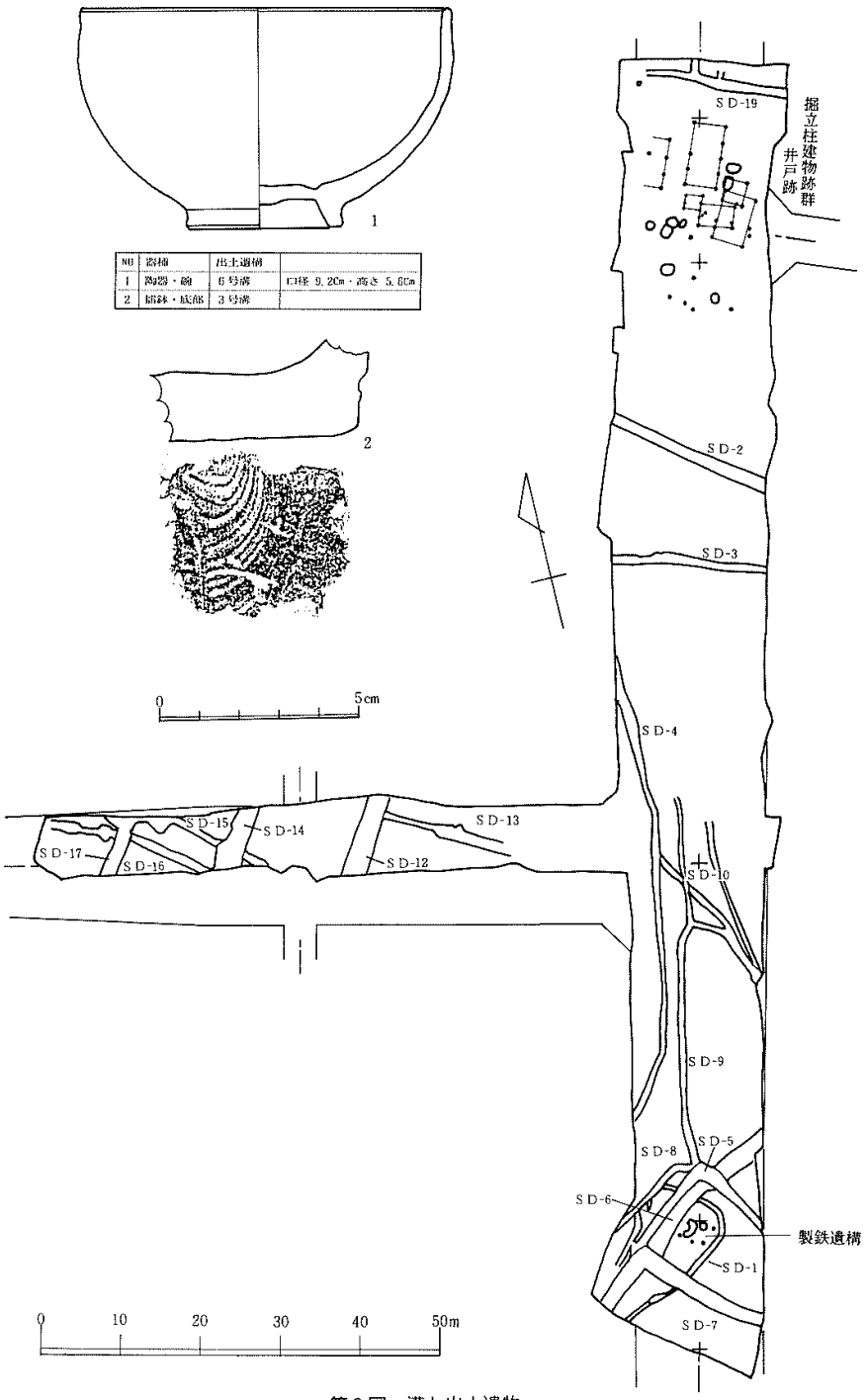
第 4 号溝（ＳＤ4）

南北方向に緩い弧を描いて走る溝で、規模は幅約 50 ㎝・深さ約 20 ㎝である。堆積土は暗褐色土で遺物の出土はない。

第 5～11 号溝（ＳＤ5～11）

ＳＤ5・8 は南東～北西方向に走り、南西方向に直角に折れている。ＳＤ6 は北東～南西方向に、ＳＤ7・10 は南東～北西方向に、ＳＤ9・11 はほぼ南北方向に延びている。溝の幅はＳＤ6・7 が約 1.5m で他は約 1m、深さは 30～50 ㎝である。堆積土はＳＤ5～7 で 2 層が見られ、2 層は黒褐色土、1 層は褐色土で地山ブロックの混じりが見られた。1 層は人為的に埋められた土の可能性がある。また、ＳＤ8～11 の堆積土は 1 層だけで、8・9 が黒褐色土、10・11 が暗褐色土である。ＳＤ6 の 2 層から陶器碗が、底面および堆積土中から羽口の破片が出土している。

碗（第 9 図 2）：体下部は丸味が強く、中位から口縁部にかけては僅かに内湾している。高台裏～畳付けを除いて灰緑色に発色した釉が掛けられ、細かな貫入が見られる。口径は 9.2 ㎝、器高 5.6 ㎝である形態・釉の特徴から 17 世紀末～18 世紀代頃の大堀相馬焼と考えられる。



NO	器種	出土遺構	
1	陶器・碗	6号溝	口径 9.2Cm・高さ 5.6Cm
2	擂鉢・底部	3号溝	

第9図　溝と出土遺物

3．まとめ

（1）天皇寺遺跡は吉田川北岸に形成された河岸段丘の低位面に立地している。

（2）発見された遺構は製鉄遺構 2 基・掘立柱建物跡 6 棟・井戸跡 2 基・土壙 6 基・溝跡 19 条などである。

（3）製鉄遺構は南斜面で検出され、摺萩遺跡などで検出されている平安時代の製鉄遺構と構築方法・形態の特徴が類似するものであり、概ね平安時代の遺構と考えられる。

（4）掘立柱建物跡・井戸跡・土壙は北斜面で近接して検出され、掘立柱建物跡には最低でも 3 段階の変遷がある。北斜面で発見された遺構からの出土遺物は 17 世紀初め～18 世紀代のものであり、遺構の多くはこの年代幅の中で変遷した可能性がある。

（5）溝跡は中央部の高所から南斜面に集中している。部分的に検出されたものが多く、その性格については不明である。

（6）調査区は文政 6 年（1823）の絵図で見ると天皇寺の北西寺域にあたり、北斜面で検出された遺構は寺に関係した建物群と考えられる。

（7）今回は確認調査だけで止めた北側の東西道路部分にも多くの柱穴が検出されており、近世の遺構は北側斜面を主に調査区外にも広く存在することは明らかである。また、西側道路部分には幅の広い溝が 10～12m ほどの間隔を置いて並行して北東～南西方向に走り、これと直交する幅の狭い溝も確認されている。さらに広い範囲での確認調査を行い、遺跡の範囲を確定させることが必要であると考える。

引用参考文献

菊地逸夫（1982）：「山下遺跡－松島有料道路関連調査報告書」『宮城県文化財調査報告書』第87集

北村信・中川久夫（1983）：「地形分類図」『吉岡地域の地質』

古泉弘（1983）：『江戸を掘る』

古泉弘（1985）：「江戸の街の出土遺物」『季刊　考古学』第13号

佐藤甲二（1983）：「嶺山Ｃ遺跡－茂庭」『仙台市文化財調査報告書』第45集

佐藤則之（1990）：「西地区調査の成果－摺萩遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第132集

仙台叢書刊行会編：「伊達世臣家譜　巻之一」『仙台叢書』2巻

高橋富雄監修（1977）：『大和町史－下巻』

宮城県史編纂委員会（1962）：「風土記御用書上」『宮城県史』24

宮城県教育委員会（1986）：「宮城県遺跡地図・地名表」『宮城県文化財調査報告書』第115集

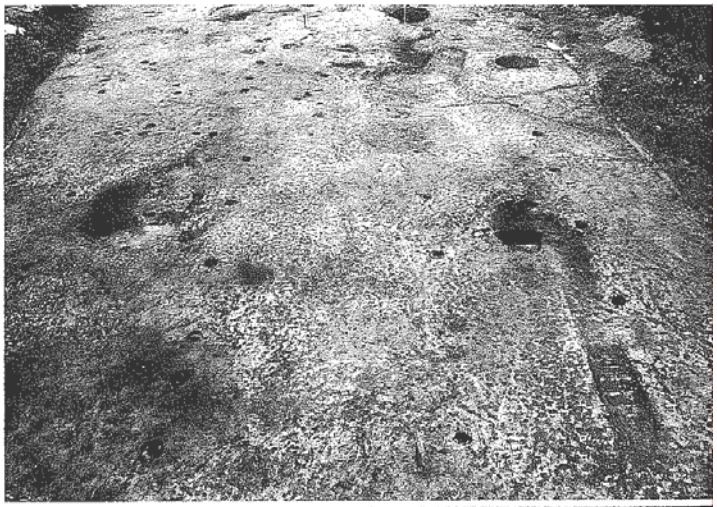
宮城県教育委員会（1987）：「硯沢・大沢窯跡ほか」『宮城県文化財調査報告書』第116集

福島県教育委員会（1989）：「中平遺跡」『福島県文化財調査報告書』第208集

満岡忠成・樽崎彰一他編（1980）：「日本やきもの集成3、瀬戸・美濃・飛騨」平凡社

写　真　図　版

①掘立柱建物跡



②製鉄遺構

③1号，2号製鉄遺構

写真図版1

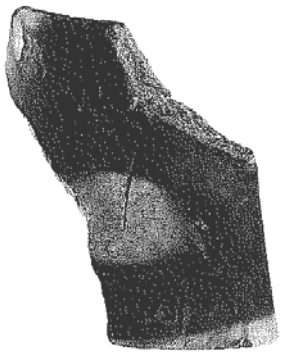
1

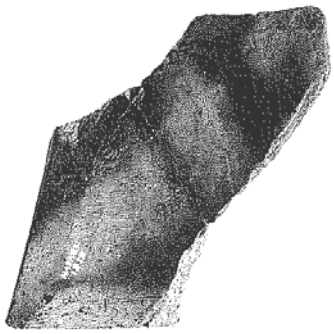
2

陶器（1.2）

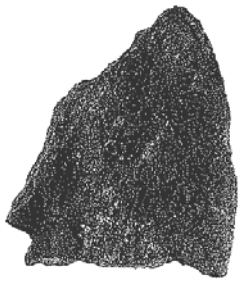
3　須恵器坏

4　擂鉢



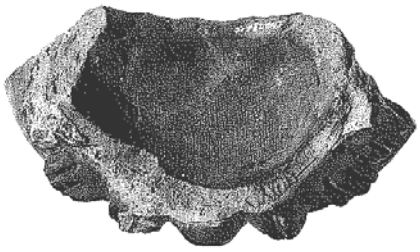


5　瓦



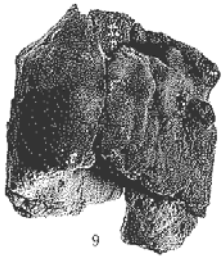
10　石白

6　瓦



7　羽口（7～9）

8



9

写真図版 2　　出土遺物

廻立古墳群（まわりたてこふんぐん）

目　　次

1. はじめに …… 191
2. 調査の経過 …… 192
3. 調査の概要 …… 195
4. 遺構について …… 197

調 査 要 項

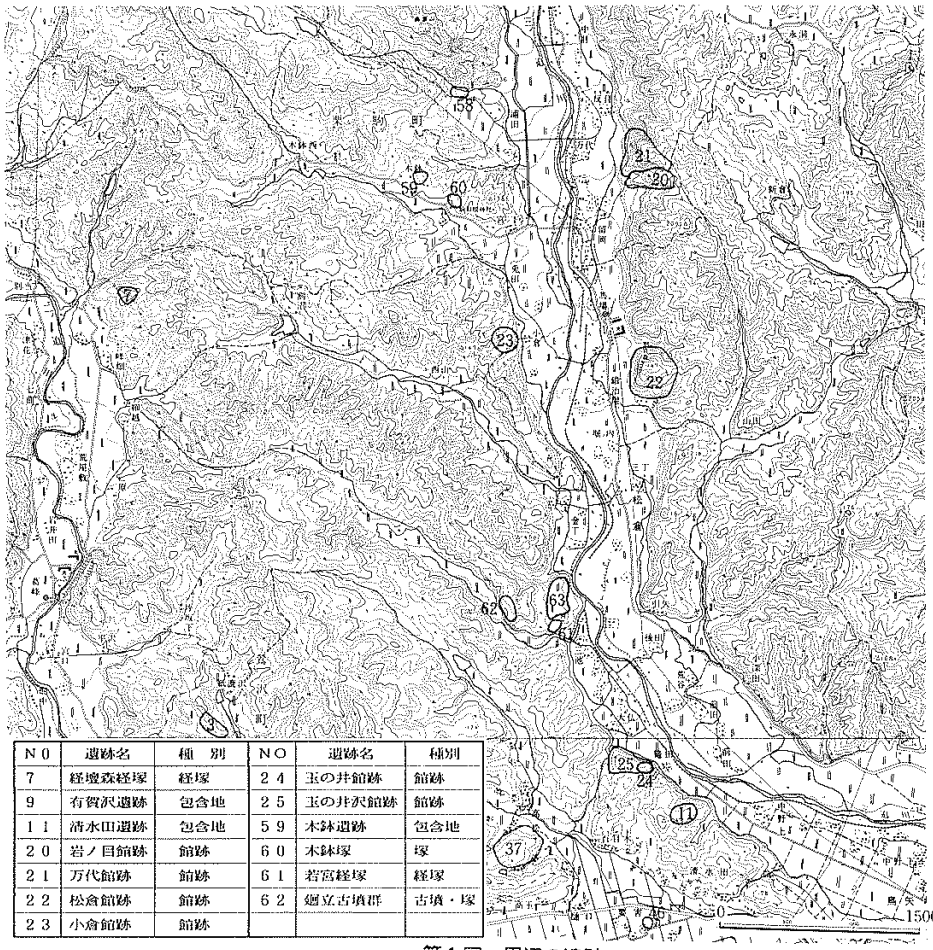
遺 跡 名：廻立古墳群
遺跡記号：MO
所 在 地：栗駒町中野廻立 22－2
発掘面積：65 ㎡
調査期間：平成元年 7 月 18～31 日
調査主体：栗駒町教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：進藤秋輝・斉藤吉弘・阿部恵
調査協力：千葉影一・佐藤広史

廻立古墳群（まわりたて こ ふんぐん）

1、はじめに

廻立古墳群は栗駒町中野廻立 22－2 に所在し、栗駒町役場の北西約 3.8 ㎞に位置する。

栗駒町西部の地形を見ると、奥羽山脈から築館丘陵が東に延びてきており、この丘陵を開析し二ノ迫川・三ノ迫川などが東流している。築館丘陵の一つに両河川の間を明神森から鳥矢崎に向かって南に延びる丘陵がある。この丘陵の東側には若宮地区と廻立地区から北西に入る沢の間に標高約 120m の小丘陵がある。遺跡はこの小丘陵東端の南の廻立地区から入る沢（滝沢）に面した斜面に立地している。遺構としては中野八幡神社西側の標高 72～62m の南斜面に塚が 10 基分布している。



NO	遺跡名	種　別	NO	遺跡名	種別
7	経塚森経塚	経塚	24	玉の井館跡	館跡
9	有賀沢遺跡	包含地	25	玉の井沢館跡	館跡
11	清水田遺跡	包含地	59	木鉢遺跡	包含地
20	岩ノ目館跡	館跡	60	木鉢塚	塚
21	万代館跡	館跡	61	若宮経塚	経塚
22	松倉館跡	館跡	62	廻立古墳群	古墳・塚
23	小倉館跡	館跡			

第 1 図　周辺の遺跡

（周辺の遺跡）

町内には縄文時代から近世まで 63 ヶ所の遺跡があり、中野地区周辺には経塚・館跡・塚・包含地などがみられる（第１図）。

経塚は２ヶ所で、若宮地区の丘陵上に若宮山経塚、文字峰畑地区の丘陵上に経壇森経塚がある。若宮山経塚からは三筋壷の破片が、経壇森経塚からは一字一石経が発見されている。

館跡は三ノ迫川西岸の丘陵上に小倉館跡・玉ノ井館跡・玉ノ井沢館跡、東岸に岩ノ目館・万代館跡・松倉館跡などがあり、いずれも江戸時代初期～中頃の「古城書上」・「風土記書出」に古館として記載が見られる。

塚としては宮下地区の駒形根神社（里宮）の西側丘陵に木鉢塚がある。

包含地には三ノ迫川西岸の丘陵斜面に有賀沢遺跡（縄文晩期）・清水田遺跡（弥生）などがみられる。なお、本遺跡が立地する小丘陵の南斜面から北側斜面にかけて縄文時代（前期・晩期）の土器片・剥片石器が散布している。

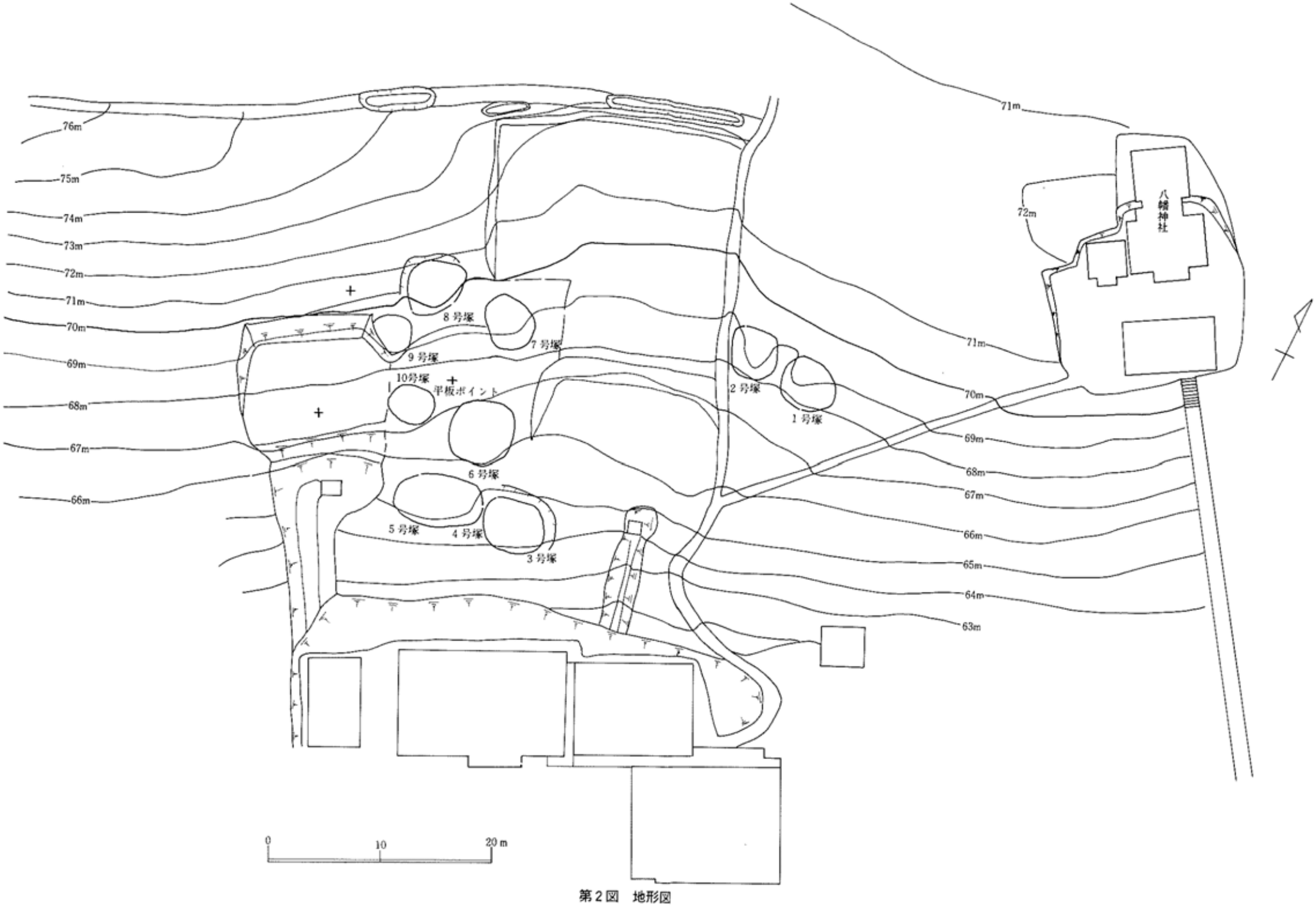
2、調査の経過

本遺跡は昭和 63 年に栗駒町教育委員会によって発見されたもので 10 基の塚からなる。踏査の時点では末期古墳の可能性が考えられた。今回の調査の目的は塚１基の発掘調査と周辺の地形測量を行って遺構の性格、遺跡の範囲を知ることである。

塚の発掘調査は６号塚を対象として行い、まず表土を除去して積み土と周溝を確認し、1/50 の平板図を作成した。ついで、中央に土層観察のベルトを十字に残して１層づつ積み土を掘り下げた。積み土を掘り下げる途中では遺構は認められなかった。積み土中からは土師質土器片、縄文土器片、剥片石器、礫石器などが出土した。積み土を取り除いたところ旧表土下の地山面でピットが検出された。最後に調査と並行して周辺の塚を含めた 1/200 の地形図を作成した。

第１表　塚計測表

塚・NO	長　軸	短　軸	高　さ	平面形	備考
１号塚	5.5	4.6	1.4	楕円形	
２号塚	4.5	4.5	1.5	隅丸方形	
３号塚	6.2	4.5	0.9	隅丸方形	周溝
４号塚	5.0	4.0	1.4	隅丸方形	
５号塚	4.0	4.0	1.0	隅丸方形	
６号塚	6.0	5.5	1.0	隅丸方形	周溝
７号塚	5.0	4.5	1.3	楕円形	
８号塚	5.1	5.0	1.4	隅丸方形	
９号塚	4.5	3.5	0.7	隅丸方形	周溝
１０号塚	4.0	3.2	1.0	円形	


76m
75m
74m
73m
72m
71m
70m
69m
68m
67m
66m
71m
72m
八幡神社
71m
70m
69m
68m
67m
66m
65m
64m
63m
8号塚
7号塚
9号塚
10号塚
平板ポイント
2号塚
1号塚
6号塚
5号塚
4号塚
3号塚
0
10
20 m

第2図　地形図

3、調査の概要

〔現況〕

塚群は滝沢に面した斜面の標高 72～62m の間にあり、東西 25m・南北 15m の範囲に 2～3 基づつ近接しながら 10 基分布している。これらの塚には発見時に町教委が東から 1 号～10 号の番号を付してある（第 2 図）。

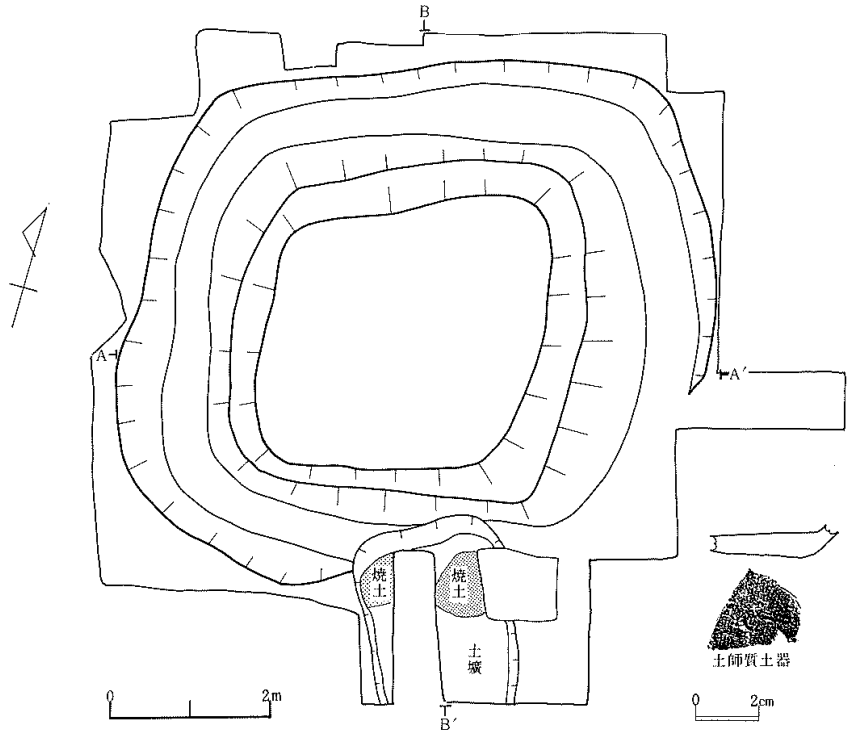
現況での規模・形態は第 1 表に示したが、植林・耕作などで本来の形態が失われているものもある。塚の平面形は隅丸方形・長方形・楕円形などで、周溝状の窪みがみられるものもある。頂部は平坦で、現況での高さは 0.5～1.5m である（第 1 表）。

〔6 号塚の調査〕

この塚は標高 66m の斜面にあり、塚全体の中では中心付近に位置している。

（塚の形態と規模）

表土を除去した後の平面形は四隅が丸みをもつ長方形である。規模は周溝内側下端で東西 5.4m、南北 5m である。周溝外側上端で東西 7m・南北 6.6m である。頂部は平坦で、南北 3.4m、東西 3.3m の方形をなす。積み土の高さは基底面から 0.5m である。

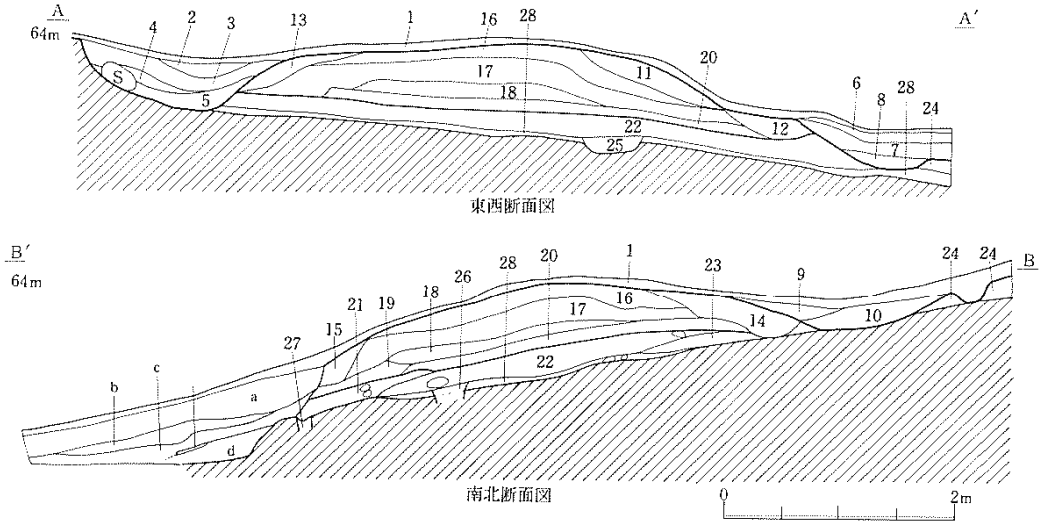


第 3 図　6 号塚平面図

（積み土）

旧表土（黒褐色土）の上に積んでいる。積み土は 5 層に大別され、褐色土、暗褐色土、極暗褐色土などである。1 層は 2〜4 層の側面に、2〜5 層はほぼ水平に積まれている。積み土中からは土師質土器、縄文土器片、剥片石器、礫石器が出土している（写真図版 2）。

土師質土器は坏の底部である。体部の立ち上がりは緩やかで、底部外面に回転糸切り痕が残る。胎土は緻密である。器形や胎土の特徴から見て 13 世紀以降のかわらけの一種と思われる。縄文土器には口縁・体部・底部などの破片があり、いずれも地文として縄文が施されている。胎土に繊維の入るものと入らないものがある。繊維の入る土器は前期の初頭頃、他は後期〜晩期頃のものと思われる。



層No.	土　色	土　性	備　考	層No.	土　色	土　性	備　考
1	暗褐色(7.5YR3/4)	シ　ル　ト	表土	17	極暗褐色(7.5YR2/3)	シ　ル　ト	積土3
2	にぶい褐色(7.5YR5/3)	シ　ル　ト	周溝堆積土	18	褐色(7.5YR4/4)	シ　ル　ト	積土4
3	暗褐色(7.5YR3/4)	シ　ル　ト	周溝堆積土	19	明褐色(7.5YR5/6)	シ　ル　ト	積土4
4	褐色(7.5YR3/4)	シ　ル　ト	周溝堆積土	20	にぶい褐色(7.5YR5/3)	シ　ル　ト	しまりあり　積土5
5	暗褐色(7.5YR3/4)	シ　ル　ト	周溝堆積土	21	黒褐色(10YR3/2)	シ　ル　ト	塚構築以前の堆積層
6	暗褐色(7.5YR3/4)	シ　ル　ト	周溝堆積土	22	黒褐色(7.5YR2/2)	シ　ル　ト	塚構築以前の堆積層
7	黒褐色(7.5YR2/2)	シ　ル　ト	しまりあり　周溝堆積土	23	暗褐色(7.5YR3/4)	シ　ル　ト	塚構築以前の堆積層
8	極暗褐色(7.5YR2/3)	シ　ル　ト	周溝堆積土	24	極暗褐色(7.5YR2/3)	シ　ル　ト	塚構築以前の堆積層
9	褐色(7.5YR4/6)	シ　ル　ト	周溝堆積土	25	褐色(7.5YR3/3)	シ　ル　ト	ピット埋土
10	暗褐色(7.5YR3/4)	シ　ル　ト	周溝堆積土	26	黒褐色(7.5YR2/3)	シ　ル　ト	ピット埋土
11	暗褐色(7.5YR3/4)	シ　ル　ト	積土1	27	黒褐色(7.5YR2/3)	シ　ル　ト	ピット埋土
12	暗褐色(7.5YR3/4)	シ　ル　ト	積土1	28	暗褐色(7.5YR3/4)	シ　ル　ト	漸移層
13	暗褐色(7.5YR3/4)	シ　ル　ト	積土1	a	暗褐色(7.5YR3/4)	シ　ル　ト	新しい掘り込み堆積層
14	にぶい褐色(7.5YR5/3)	シ　ル　ト	積土1	b	褐色(7.5YR3/3)	シ　ル　ト	新しい掘り込み堆積層
15	褐色(7.5YR4/4)	シ　ル　ト	積土1	c	暗褐色(7.5YR3/4)	シ　ル　ト	木炭を含む　新しい掘り込み堆積層
16	暗褐色(7.5YR3/4)	シ　ル　ト	積土2	d	黒褐色(7.5YR2/2)	シ　ル　ト	焼土・木炭を含む　新しい掘り込み堆積層

第 4 図　6 号塚断面図

（周溝）

旧表土上面で外郭線が確認できた。南側の立ち上がりが土壙に切られ、一部削平を受けているが、ほぼ全周していたものと思われる。幅は確認面で 1.2～1.8m、深さは 30～50 cmである。底面は平坦で、立ち上がりは緩やかである。堆積土は褐色土・暗褐色・黒褐色土である。堆積土は積み土に類似しており、大部分は塚の崩壊土と思われる。

（その他）

積み土下および周溝の側壁・底面の地山面で、多数のピットが検出された（P－1～P－11）。これらのうち、旧表土との関係が判るものはいずれも旧表土に覆われている。したがってこれらのピットが塚に伴う可能性は少ない。

4、遺構について

6 号塚は内部に埋葬に関する施設が認められず、しかも 13 世紀以降と見られるかわらけが出土したことから古墳とは考えられない。古墳以外で方形状をした塚の県内での調査例としては、高清水町宮ノ脇遺跡 1～4 号塚、古川市清水側遺跡 1 号塚、大和町日光山遺跡 21 号塚、角田市大久保遺跡、大郷町勢見ガ森古墳などがある。このうち清水側遺跡 1 号塚、大久保遺跡、勢見ケ森古墳では内部主体として土壙やピットをもち、火葬骨や遺物の出土などから中・近世の墓と考えられている。本遺跡 6 号塚のように内部主体を持たない例には宮ノ脇遺跡 4・5 号塚と日光山遺跡 21 号塚がある。宮ノ脇遺跡の例では全形を残す同一形態の 4 基の塚のうち、2 基は土壙を伴う中世末～近世初頭の墓であるが、他の 2 基は内部主体とみられる施設を全く持たないことが報告されている。日光山遺跡の場合も方形の塚は 1 基だけであるが、円形の塚からなる近世の墓と一体となっているものである。2 遺跡の調査例は中・近世の塚を伴う墓の中に内部主体をもたない塚が含まれる場合があったことを示している。

本遺跡の場合、1 基だけの発掘で他の塚に内部主体があるかどうかは不明であるが、数基の塚から成り、内部主体を持たないものを含む点で宮ノ脇遺跡・日光山遺跡と類似した性格のものである可能性が高い。年代的にも特に矛盾はない。

引用参考文献

大郷町教育委員会（1968）：「宮城県黒川郡大郷町古墳発掘調査報告」

高橋守克（1977）：「清水側遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第50集

土岐山武（1980）：「宮ノ脇遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ－」『宮城県文化財調査報告書』第69集

宮城県教育委員会（1977）：「横倉大久保遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第48集

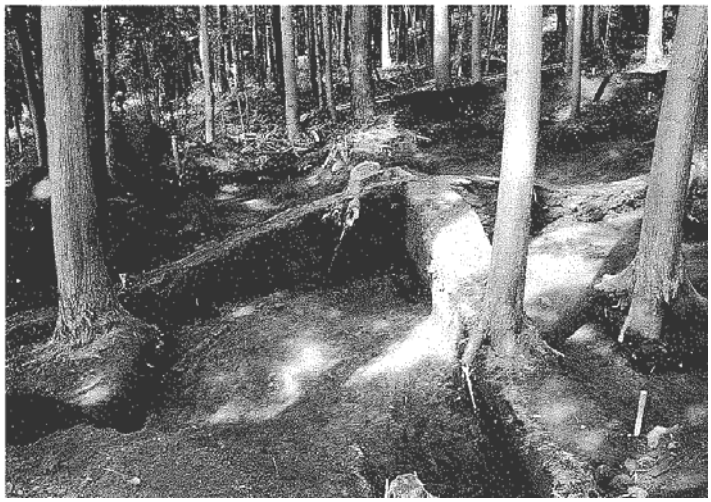
宮城県教育委員会（1981）：「日光山遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第81集

写　真　図　版

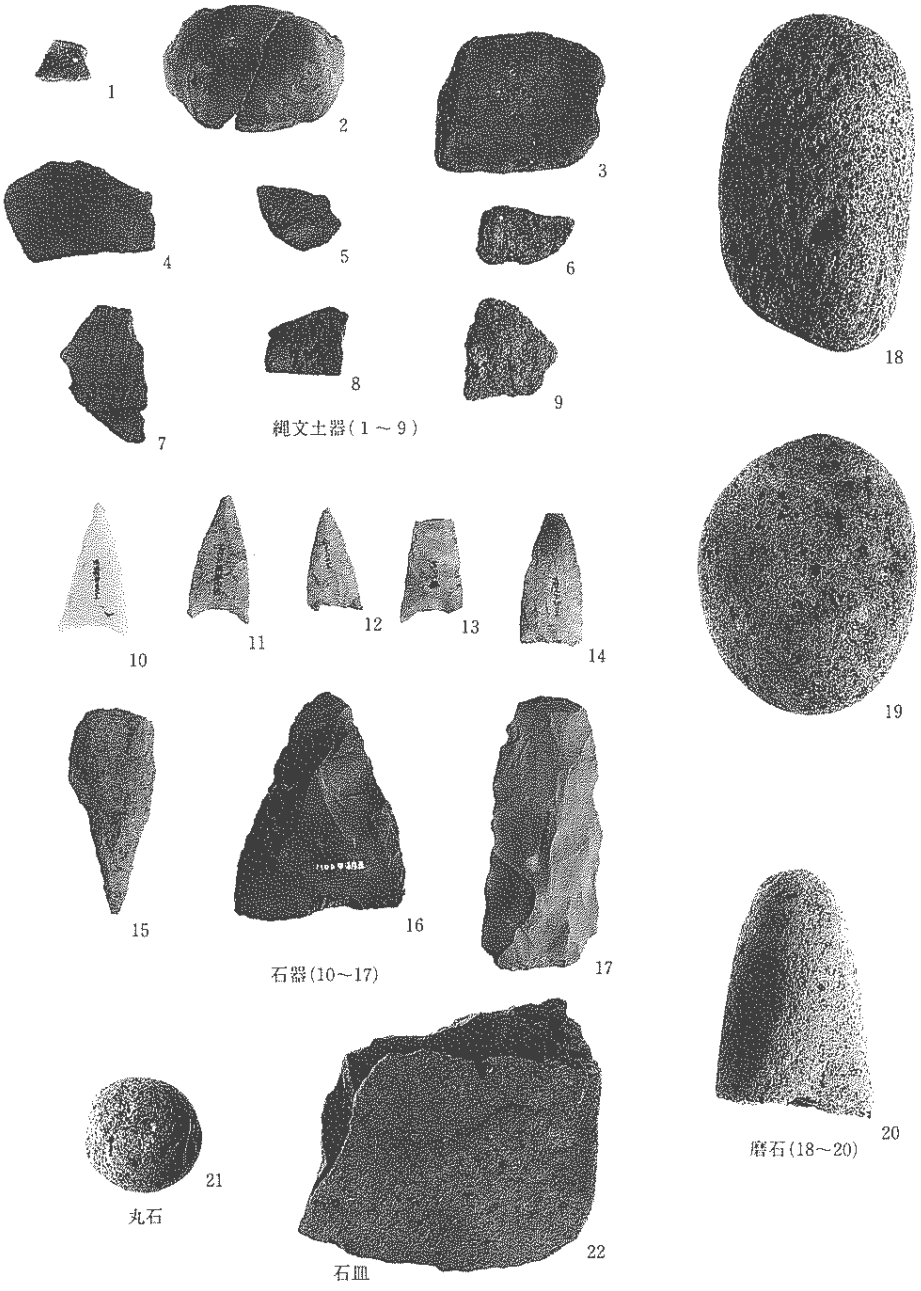
①６号塚調査前

②表上除去

③塚断面



写真図版１



写真図版2　　6号塚積み土出土遺物

猿喰東館跡
さる　はみ　ひがし　たて　あと

目　　次

Ⅰ．位置と環境 …… 205
Ⅱ．猿喰東館跡の概要 …… 206
Ⅲ．調査方法と成果 …… 209

調 査 要 項

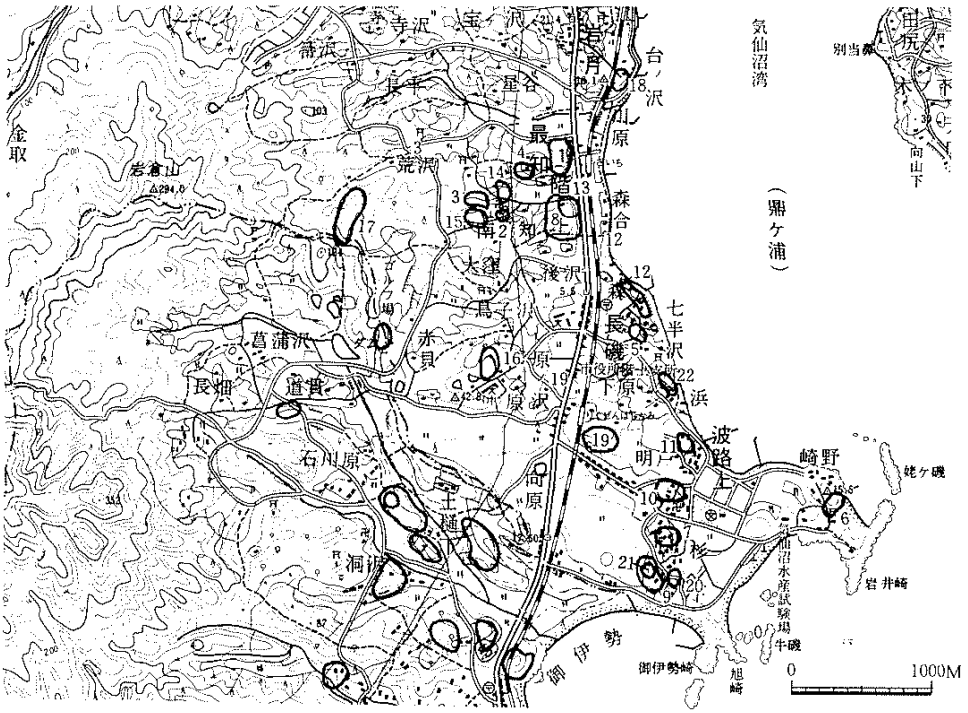
遺　跡　名：猿喰東遺跡
遺跡所在地：気仙沼市字最知北最知 202 番地外
調査主体者：気仙沼市教育委員会
調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課
　　気仙沼市教育委員会
調 査 期 間：平成元年 11 月 30 日～平成元年 12 月 2 日
測 量 期 間：平成 2 年 1 月 22 日～平成 2 年 1 月 28 日
調 査 面 積：2,071 ㎡のうち 160 ㎡

猿喰東館跡（さるはみひがしたてあと）

Ⅰ．位置と環境

猿喰東館跡はＪＲ気仙沼線最知駅の国道 45 号を挟んだすぐ西側に位置し、気仙沼湾に突出する標高 10m～16m の海岸段丘上に立地している。現状は本丸周辺は大部分が畑地及び山林に利用され、まだ開発されずに残っているが、館の裾部は国道に隣接しているため近年住宅建築が著しい。

この館跡の周辺には、すぐ南の段丘上に縄文・古墳時代の南最知遺跡、中世の末永館跡、西側丘陵上に古代の海蔵寺遺跡、海蔵寺北遺跡、中世の最知中館跡、塚館跡等がある。また、北東の海岸沿いに中世の相馬館跡があり、縄文時代から古代・中世までの遺跡が多く所在する地域である。



1．**猿喰東館跡**	7．杉の下貝塚	13．末永館跡	18．相馬館跡
2．海蔵寺遺跡	8．南最知貝塚	14．最知中館跡	19．内田遺跡
3．海蔵寺北遺跡	9．波路上西館跡	15．塚館跡	20．杉の下南遺跡
4．録館遺跡	10．波路上東館跡	16．南最知城跡	21．波路上西遺跡
5．長磯高遺跡	11．掘合館跡	17．猿喰西館跡	22．長磯浜遺跡
6．岩井崎遺跡	12．森館跡		

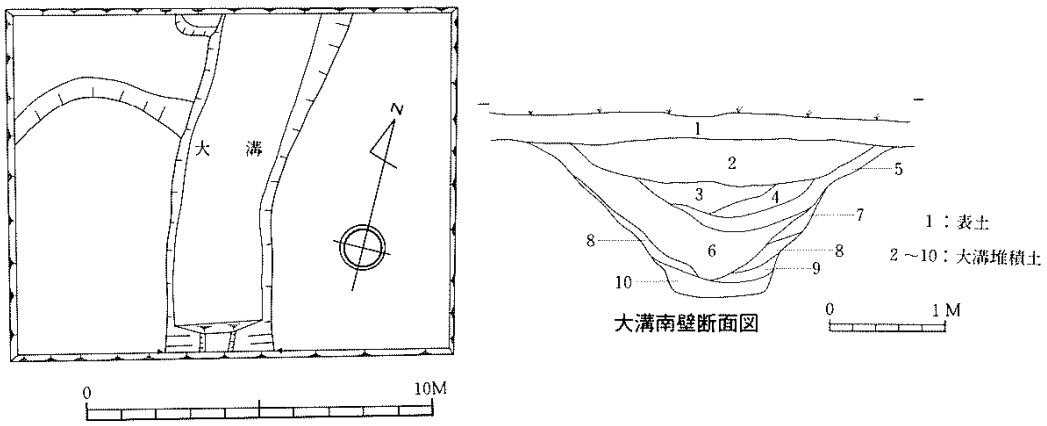
第１図　猿喰東館跡の位置

Ⅱ．猿喰東館跡の概要

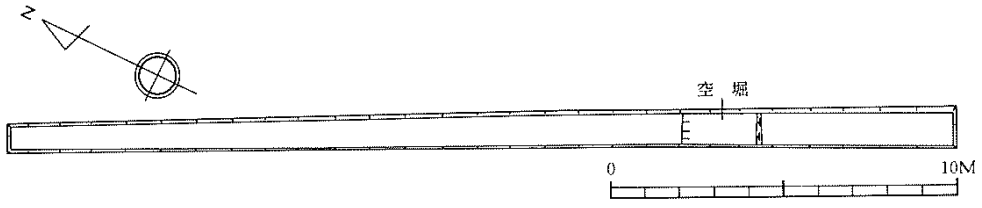
猿喰東館跡は、延享３年の最知村風土記に「一．古館壱ケ所　猿喰館申侯館主阿部太郎左衛門申伝候　云々」等、すでに江戸時代の文献にも記載がある館跡である。

平山城の形態で、本丸は標高 16m 程の段丘頂上部にあり、東西 50m、南北 80m 程の小さな広場である。地目は畑になっているが、現在耕作されていないらしく草が生い茂っている。もとはこの北端に法領権現が祭られていたが、現在はない。その北側は二段の平場が続いており、国道に隣接した水田に外堀と思われる遺構が確認できる。本丸の南側には大きな空堀があり、さらに南西に丘陵が続いている。紫桃正隆氏の「仙台領内古城・館・第二巻」によると、この丘陵が二の丸であるというが、現状からは検討が必要と思われる。本丸南側には古くから使われている通路があり、この付近には城門跡と言われている場所や錆びた太刀・甲冑、人骨が出土したという畑がある。

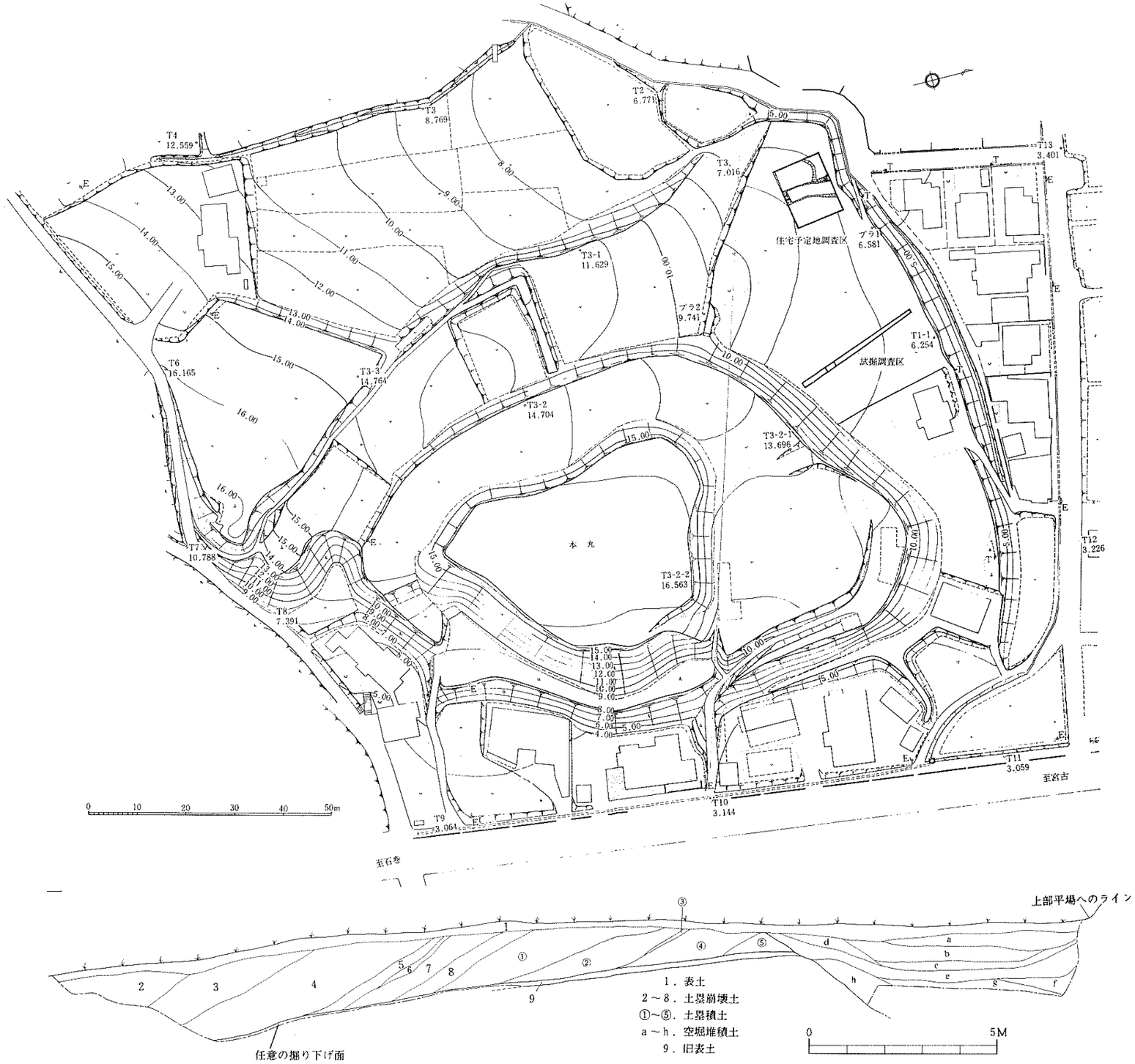
この館跡は、天正 16 年の浜田の乱の前の岩月の戦いで攻防の拠点になった所と伝えられている。



第２図　住宅建設予定地調査区検出遺構



第３図　試掘調査区検出遺構



第5図　試掘トレンチ東壁断面図

207・208

III. 調査方法と成果

調査は、住宅建築に伴う事前調査として、できるだけ現状を壊さないように協議を重ねて実施した。また、発掘調査に伴い本丸中心に地形測量も併せて実施した。

調査区は、本丸北側の三段目の平場の住宅建築予定地（南北 10m×東西 13m）と平場の性格を把握するため二段目の裾部から三段目の端にかけて試掘抗（南北 28m×東西 1m）の 2 か所を設定し、約 160 ㎡を発掘した。

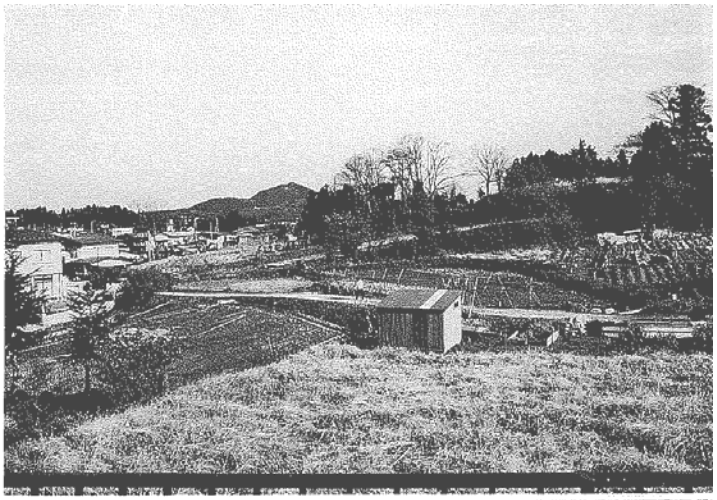
その結果、住宅予定地の調査区では掘り込み面が削平されていたが、現地表面から約 25 cm 下で地山を確認し、その面で調査区中央に南北に走る大溝を検出した。大溝は確認面で上端幅 3.2m、底部幅 0.7m、深さ 1.6m を計り、埋土は自然堆積によるもので、断面形は台付き盃形を呈している。この大溝は付近の地形等から推測するに本丸西側から続くものと思われ、本丸方面からの排水溝かと考えられる。

試掘抗でも掘り込み面が削平されていたが、二段目の裾部に現地表面から約 30 cm下で幅 8m 以上、深さ 2m 以上の空堀と、それの外側に伴う幅 11m の土塁を確認できた。この空堀と土塁は二段目の裾部を囲むように周っているものと思われる。

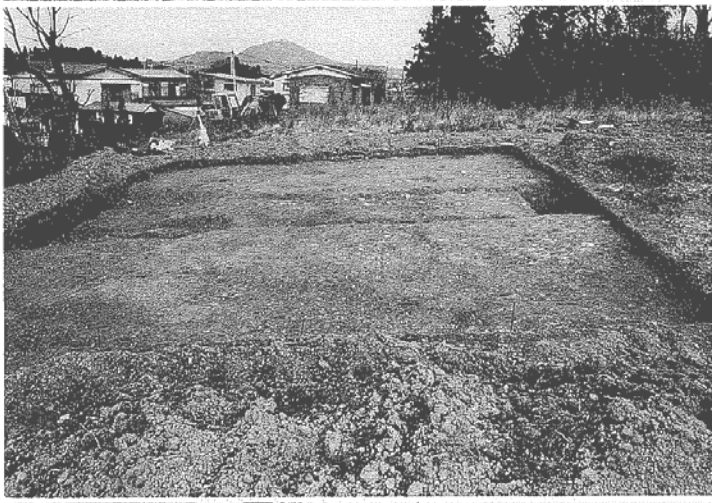
なお、試掘抗からは現地表面下約 2m に旧表土が北に行くほど低くなるように確認されており、この施域が後世土塁の崩壊により、あるいは土塁を崩して整地されて現在のような地形になったものと思われる。どちらの調査区からも遺物は出土しなかった。

写　真　図　版

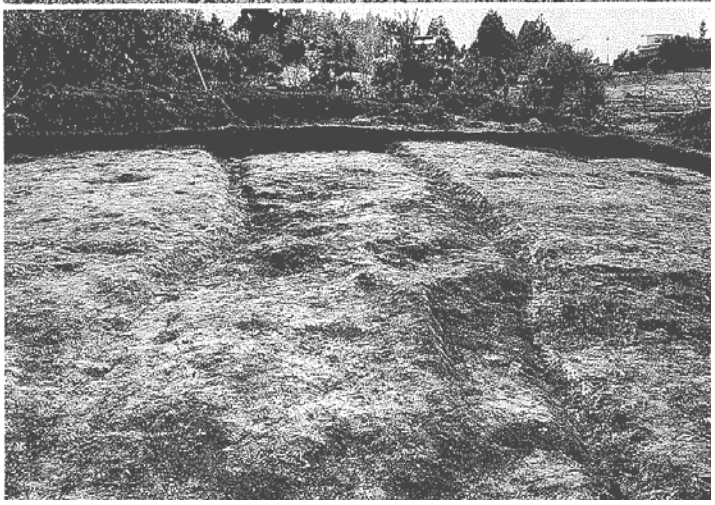
館跡北西部を望む
（西より）



住宅建設予定地調査区
（西より）

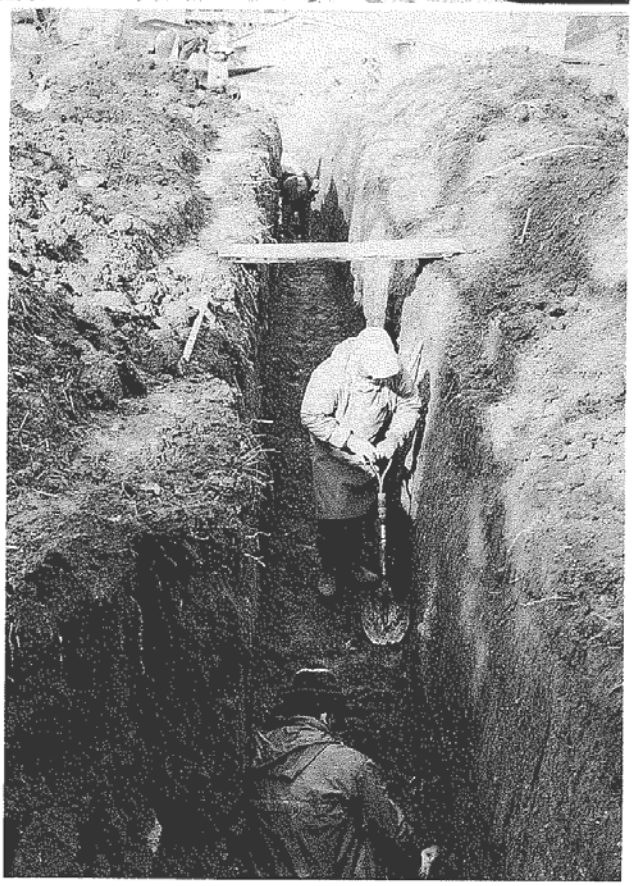


住宅建設予定地調査区大溝
（北より）



写真図版１

住宅建設予定地大溝
南壁断面　（北より）



試掘調査区（西より）

写真図版２

保呂羽館跡（ほろはたてあと）

目　　次

1. はじめに …… 217
2. 保呂羽館の構造 …… 217
3. 発掘調査の内容 …… 224
4. まとめ …… 226

調 査 要 項

遺 跡 名：保呂羽館跡　MH（宮城県遺跡番号：52003）
所 在 地：宮城県登米郡登米町寺池字道場
発掘面積：約 500 ㎡
調査期間：平成元年 4 月 12 日～18 日
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：進藤秋輝・白鳥良一・菊池逸夫・古川一明・吉田雅之・大和幸生

保呂羽館跡（ほろはたてあと）

1．はじめに

保呂羽館跡は、宮城県登米郡登米町保呂羽・道場・草飼山に所在し、葛西氏の居城と考えられている中世の城館跡である。

登米町の原始古代の遺跡としては今のところ軍場山貝塚が知られるのみである。城館跡についてみると、登米町には保呂羽館跡の北に寺池城跡、西に小島館跡、東には北上川の東岸にどうめき館跡（日根牛城跡）と吾妻館跡がある。南には北上川を挟むように城館があり、西岸には美濃館跡（豊里町）、茶臼山館跡（桃生町・津山町）があり、東岸には苔ノ沢館跡、柳津館山館跡（以上津山町）がある。

保呂羽館跡は登米町役場の南方約 0.5㎞ の地点にあり、北側は平地で、登米町の市街地となり、南側は丘陵が続く。東は北上川が北から南に流れ、そして若干の平坦地があってそしてまた山地が南北に連なる。西には水田が広がる。館跡は北上川の西を南北に延びる丘陵の北端に立地し、丘陵の自然地形を利用して構築されており、東西 1200㎜・南北 1100㎜ の広さをもつ。その中心は現登米水道企業団浄水場の南、標高 100㎜ 付近になり、本丸と見られる平場とそれを囲む平場・段状遺構・堀切がある。この中心部を取り囲むように、沢によって区切られた尾根を利用し、平場を構築している。

保呂羽館跡についての研究は非常に多く、一つ一つ挙げるわけにはいかないが、大別すると館跡の調査研究（藤沼邦彦他：1981、紫桃正隆：1973）と、城主である葛西氏（紫桃正隆：1975）との関わりで取り上げられるという傾向があった。

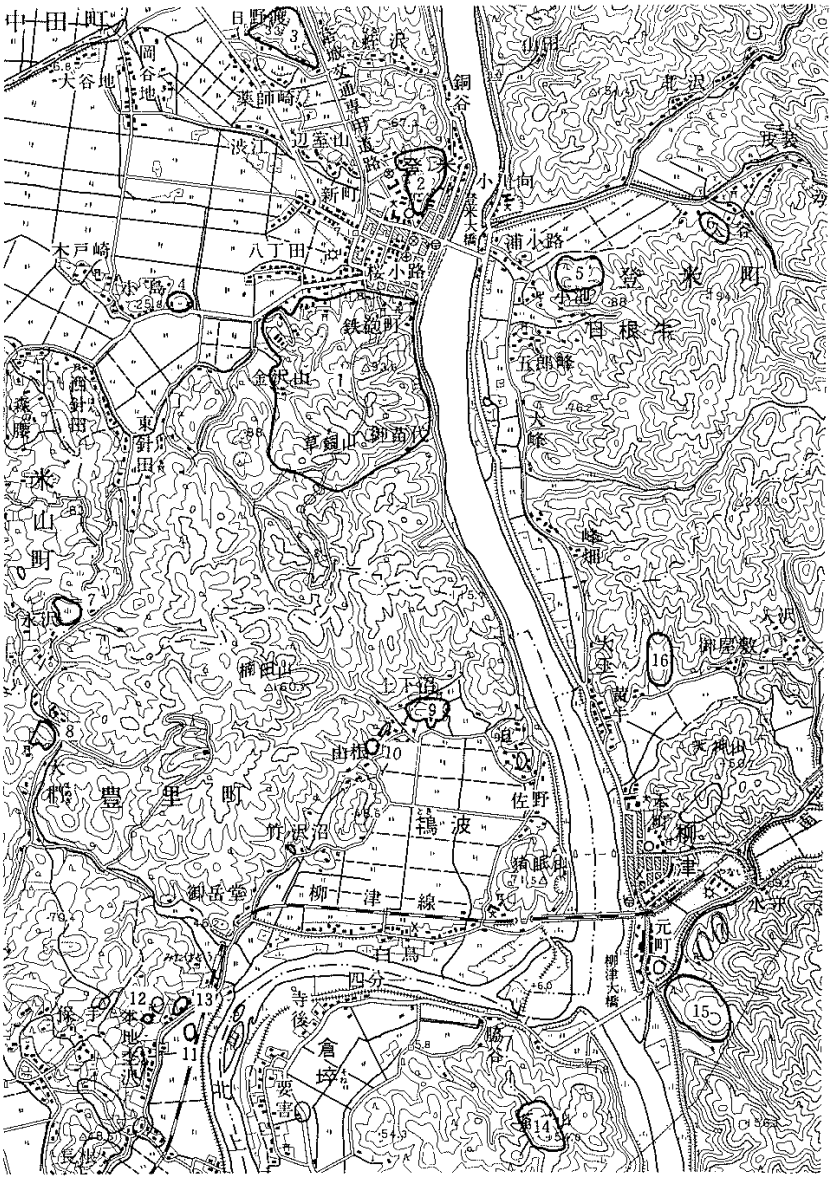
本調査は登米町内の養豚・精肉業者が畜舎の増築を行い、本丸の東に位置する平場付近で土地の造成を行なうことになったため実施したもので、遺跡の保存協議のため、造成にかかる部分の遺構（平場・建物跡など）・遺物の確認を目的とした。

2．保呂羽館の構造

保呂羽館の構造を以前に行なわれた踏査に基づく館略図（第 2・3 図）によりながら述べていくことにする。現在では、建設などで破壊されてしまった遺構もあり、一方でこの館跡が非常に大きいため、丹念な踏査にもかかわらずまだ不明な部分もある。それらについては地形図に図示していない。その意味で今後とも踏査や測量は必要である。

この広大な館跡をいくつかの部分に分けて述べていく。

本丸区　本丸とされる部分は登米町市街地より山を登り登米水道企業団浄水場を左にみながら登りきった標高 100～102㎜ のところにある。本丸部は本丸とその南の二の丸、本丸の東の物見、西の堀切からなる。本丸と物見の北の一段下には細長い平場が配置されている。



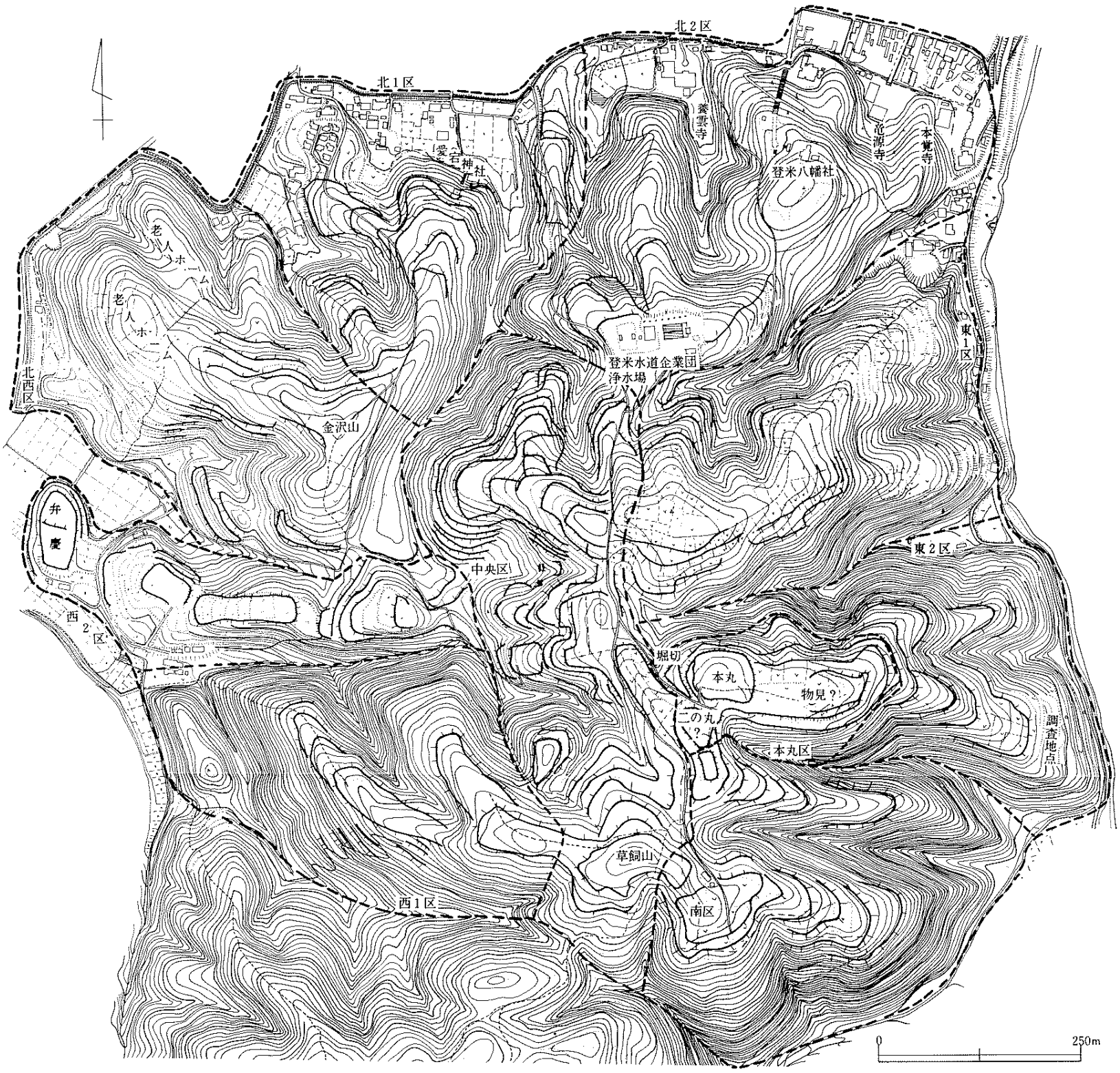
No.	市町村	遺跡名	立地	種別	時代
1	登米町	保呂羽館跡	丘陵	城館	中世
2	〃	寺池館跡	丘陵	城館	近世
3	〃	軍場山貝塚	丘陵	貝塚	縄文中・後
4	〃	小島館跡	丘陵	城館	中世
5	〃	どうめき館跡	丘陵	城館	中世
6	〃	呰要館跡	丘陵斜面	城館	中世
7	米山町	大沢館跡	丘陵	城館	中世
8	豊里町	赤生津館跡	丘陵麓	城館	中世
9	〃	美濃館跡	丘陵	城館	中世
10	〃	医王寺跡	丘陵麓	寺院	中世
11	〃	前館跡	自然堤防	城館	中世
12	〃	香林寺山門	山麓	寺院	室町
13	〃	赤生津要害館跡	丘陵	城館	中世
14	津山町	茶臼山館跡	丘陵頂	城館	中世
15	〃	柳津館山館跡	丘陵	城館	中世・平安
16	〃	菩ノ沢館跡	丘陵	城館	中世

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

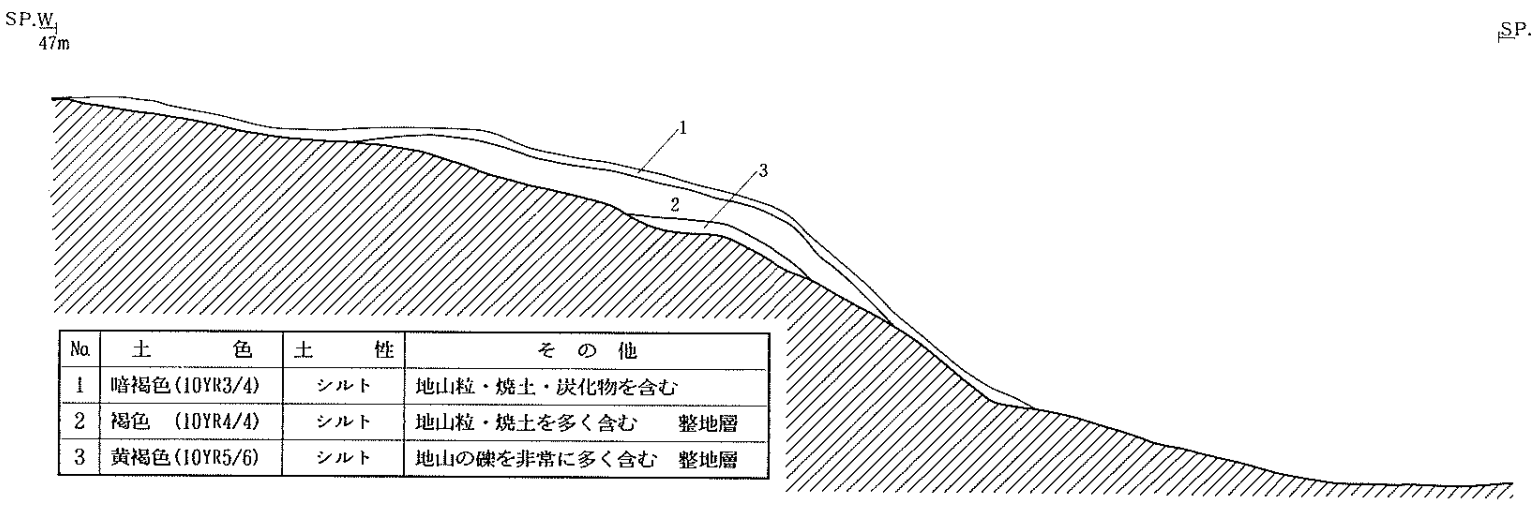
※米山町・豊里町・津山町の遺跡は城館・中世関係の遺跡に限定した。

国土地理院発行登米１／50000を複製

第２図　保呂羽館跡全体図（１）

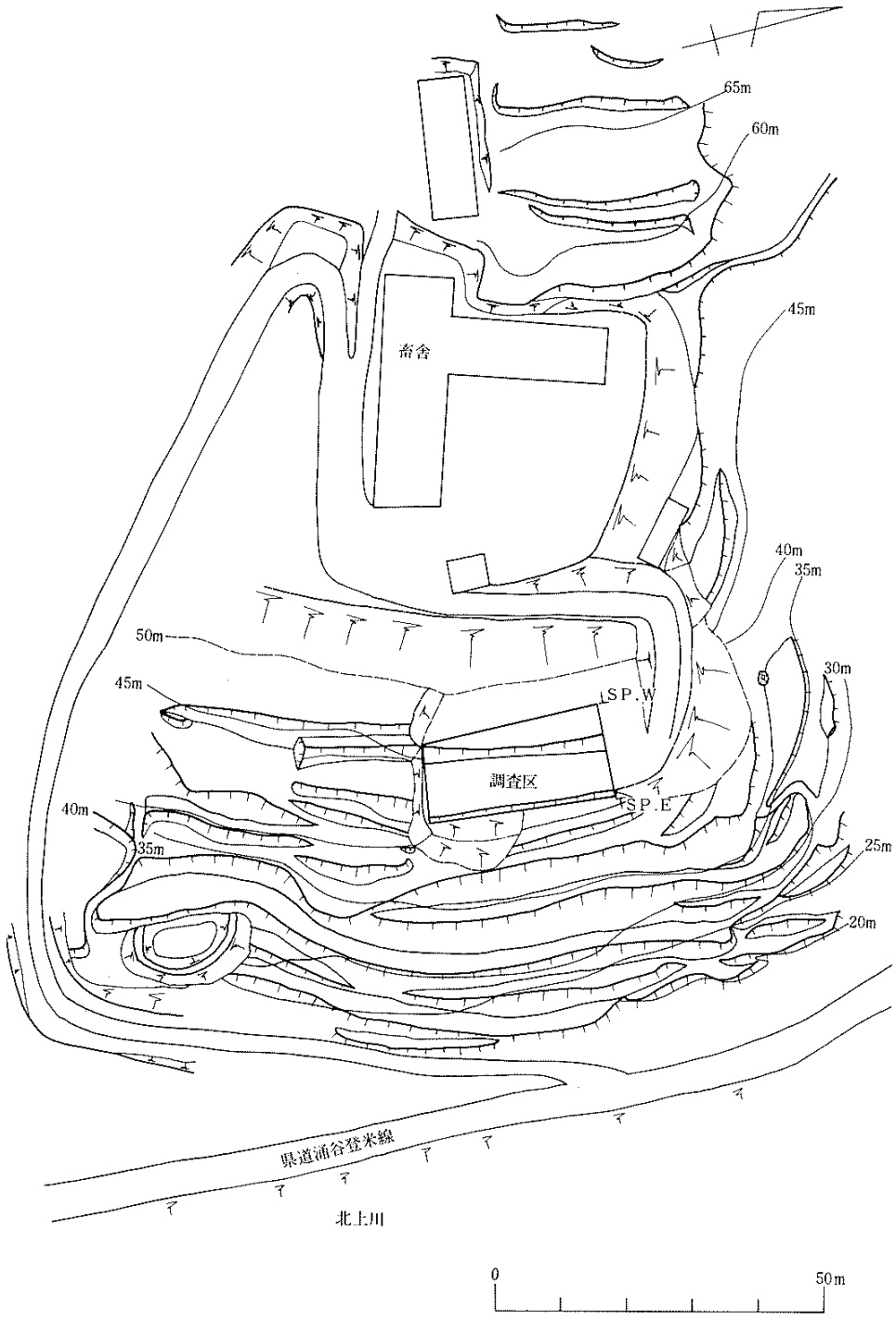


第3図　保呂羽館跡全体図(2)



No.	土　　色	土　　性	そ の 他
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山粒・焼土・炭化物を含む
2	褐色　(10YR4/4)	シルト	地山粒・焼土を多く含む　　整地層
3	黄褐色(10YR5/6)	シルト	地山の礫を非常に多く含む　整地層

第4図　調査区断面図



第5図　調査区周辺地形図

中央区　中央区とするところは登米水道企業団浄水場の西側の平揚から、館跡の最高所である草飼山の平場群までである。本丸区の西隣に位置し南北に長く、さらに 3 つの部分からなる。この地区は館跡のあらゆる部分に通じている中枢的な部分になると思われる。中央区の東のおくまった所に本丸区があることになる。

南区　南区は中央区草飼山から南に延びる尾根と、本丸のすぐ南の尾根からなる。遺構は標高 70m 以上の高所で確認されている。自然の地形を生かし、東もしくは南へ平場が連続している。南区の平場も大型の平場の一段下を細い平場が取り囲むようになっている。

西 1 区　草飼山から北西に延びる 2 つの尾根からなる。平場はその地形を生かして北西に延び、標高 70～100m 付近で造られている。

西 2 区　本丸区の西方にある。標高 60m 付近の所から弁慶の地名をもつ小丘陵（現在は破壊されている。）のところまで、4 つの小さい平場が独立して東西に並列している。この遺構の配置と比較的低い地点に遺構がある点で保呂羽館の中ではタイプを異にする郭といえよう。

北西区　西 2 区の北にあり中央区北端から沢を挟んで北西に延びる尾根上にある。この地点は老人ホームの建設などにより遺構がわかりにくい。標高 50m 付近まで平場があり、その一段下を細長い平場が取り囲んでいたと推定できる。

北 1 区　北西区の東隣で愛宕神社まで延びる尾根とその東隣で北に延びる尾根の 2 つからなる。その尾根上に数段の平場がある。

北 2 区　北 2 区は現在の浄水場付近から麓の養雲寺・竜源寺・本覚寺の付近までまで延びる尾根になる。明瞭な平場は浄水場の北、標高 50m 付近まで確認されている。

東 1 区　東 1 区は中央区北端の郭と接続し、標高 50m 付近まで東方に延びている。尾根の北と南に沢が入るため、それぞれ 2～4 段の細い平場が設けられている。

東 2 区　今回の発掘調査が行なわれた郭で、本丸から東へ延びる尾根は途中から南北に並ぶ 2 つの尾根にわかれ、その尾根上に数段の広い平場がある。

館の構造を簡単に見てきたが、丘陵のややおくまった所に本丸部分、その西には南北に長い中央区、そして中央区を中心に東西南北それぞれの郭が沢を挟みながら隣接していることがわかる。

3．発掘調査の内容

調査は厚く盛り土がなされてしまった増築予定地において、盛り土を除去して盛り土前の表土を確認し地形を復元した。復元した範囲をトレンチとし、その後表土も除去し柱穴などの遺構の確認と遺物の採集を行なった。縮尺 1/20 で断面図（第 4 図）を作成し、調査区を 1/500 で平板実測した（第 5 図）。写真撮影も行なった。

一方上記の作業と並行して発掘調査区の周辺の測量調査を行ない、1/500 で平板実測を行

なった。これは調査区の位置を確定し、周辺の平場の形態・分布を記録に取ることを目的としたものである。

これらの調査の成果を以下に述べていくことにする。まず発掘調査では盛り土を除去した段階で 2 段の平場を確認した。平場一つの規模は南北 40〜50m、東西 10〜20m と推定できる。次に表土を除去したところ、上段の平場で整地層を検出した。整地層は平場の東端にみられ、なだらかな斜面上方を削って下方に土盛りを行い平場を造り出している。整地層の範囲は南北は調査区外に延びるが、東西は幅約 6m になる。この整地層を調査区北端の断面で検討すると、焼土を含む褐色土層とその下の地山礫を含む黄褐色土層の 2 層からなり、最も厚いところで約 50cmある。精査の結果これら 2 つの平場からは柱穴等の遺構はなく遺物の出土もなかった。

測量の結果を見ると標高 65〜40m 付近までは比較的広い平場があり、発掘調査で検出した平場は最末端の平場になる。その下の 40〜25m 付近にはきわめて細長い平坦地が認められた。このような平坦地は保呂羽館跡の他の地点でも認められるもので、通路状の細い平場と考えておく。発掘と測量の成果をまとめてみると、本丸の東から大形の平場が数段あり、発掘調査によって確認された最末端の平場まで接続すること、そして最末端の平場のためか建物などの施設は認められず、通路状の細長い平場に接続していくことがわかった。

4．まとめ

1. 保呂羽館は登米町の南の丘陵上に立地した広大な城館跡である。
2. 保呂羽館は沢で区切られた尾根ごとに構築された郭を一つの単位として、いくつかの郭群からなる構造を示す。その尾根には地形を生かして数段の大小からなる平場が構築されている。
3. 発掘調査は本丸から東に延びる尾根上で行なわれ、2 段の現場を検出し、その上段の平場が整地作業によって構築されていたことを確認した。しかし柱穴などの遺構や遺物は出土しなかった。
4. 測量調査は発掘調査を行なった地点の周辺を対象とし、以下のことがわかった。丘陵の高所に平場があり、その下に細長い平場が接続していることを確認した。発掘調査によって検出された平場は大形の平場群の最末端に位置することがわかった。

引用参考文献（五十音順）

佐藤正助　（1979）：『葛西四百年』　ＮＳＫ出版

紫桃正隆　（1965）：『葛西氏と山内首藤一族』　耽書房

紫桃正隆　（1973）：『史料　仙台領内古城・館』第二巻　仙台宝文堂

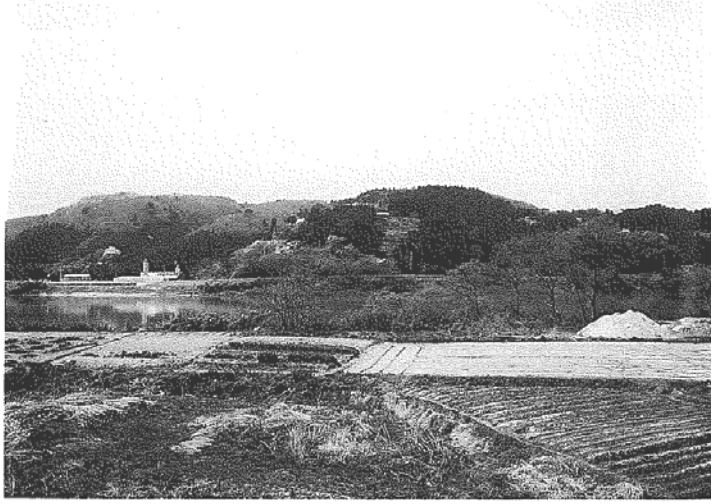
紫桃正隆　（1975）：『仙台領の戦国誌　－葛西大崎一揆を中心とした－』　仙台宝文堂

藤沼邦彦他（1981）：『日本城郭大系　3』宮城県　新人物往来社

宮城県教委（1977）：「宮城県文化財発掘調査略報」『宮城県文化財調査報告書』第48集

写　真　図　版

保呂羽館遠景
（北上川東岸より）



調査区
（北より）

調査区平場（下段）

写真図版 1

唐木崎貝塚（からきざきかいづか）

調　査　要　項

遺跡所在地：宮城県登米郡迫町新田字彦道

発 掘 面 積：約 160 ㎡、宮城県遺跡番号：51012、遺跡記号：ＭＴ

調 査 期 間：平成元年 4 月 24 日～27 日

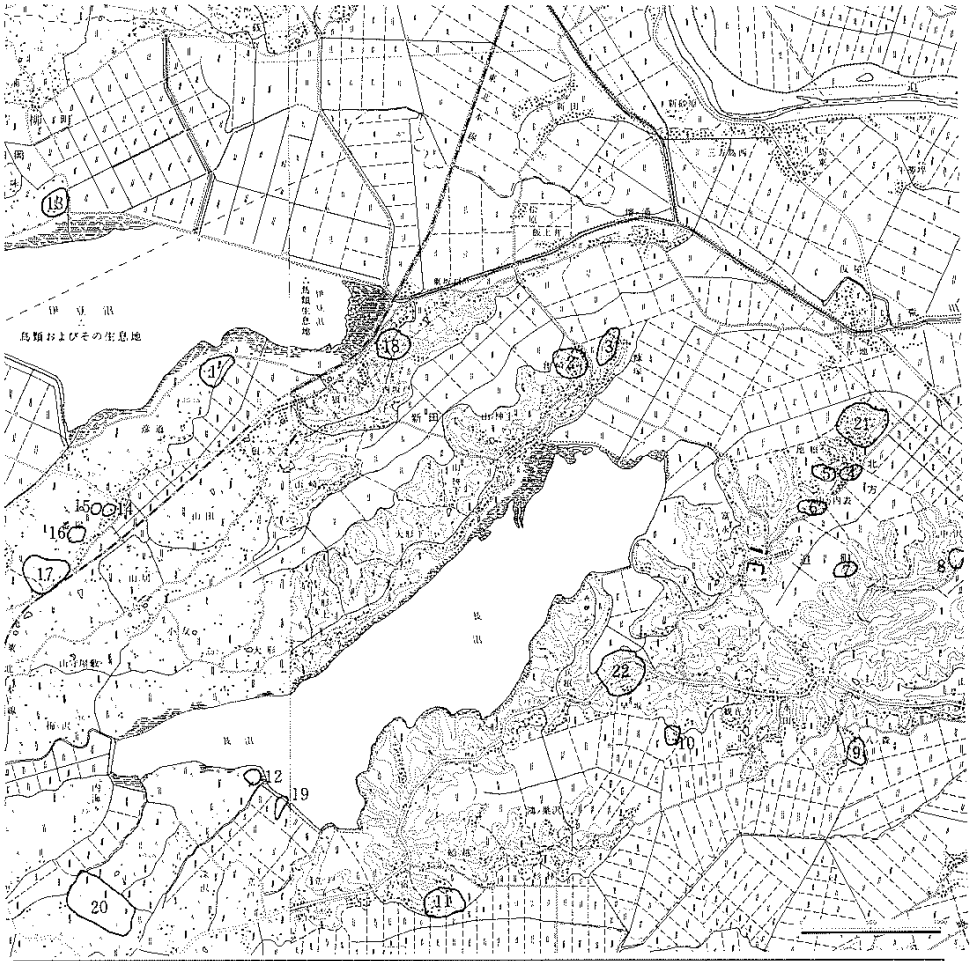
調 査 主 体：迫町教育委員会

調 査 担 当：宮城県教育庁文化財保護課　調査員：白鳥良一・斉藤吉弘・阿部恵

唐木崎貝塚（からきざきかいづか）

唐木崎貝塚は迫町新田字彦道に所在し、ＪＲ東北本線新田駅の北西 500m に位置している。

貝塚の立地する丘陵は、鳥類およびその生息地として国の天然記念物に指定されている伊豆沼の南岸に臨んでいる。遺跡周辺の地形を概観すると、奥羽脊梁山脈から派生する築館丘陵は



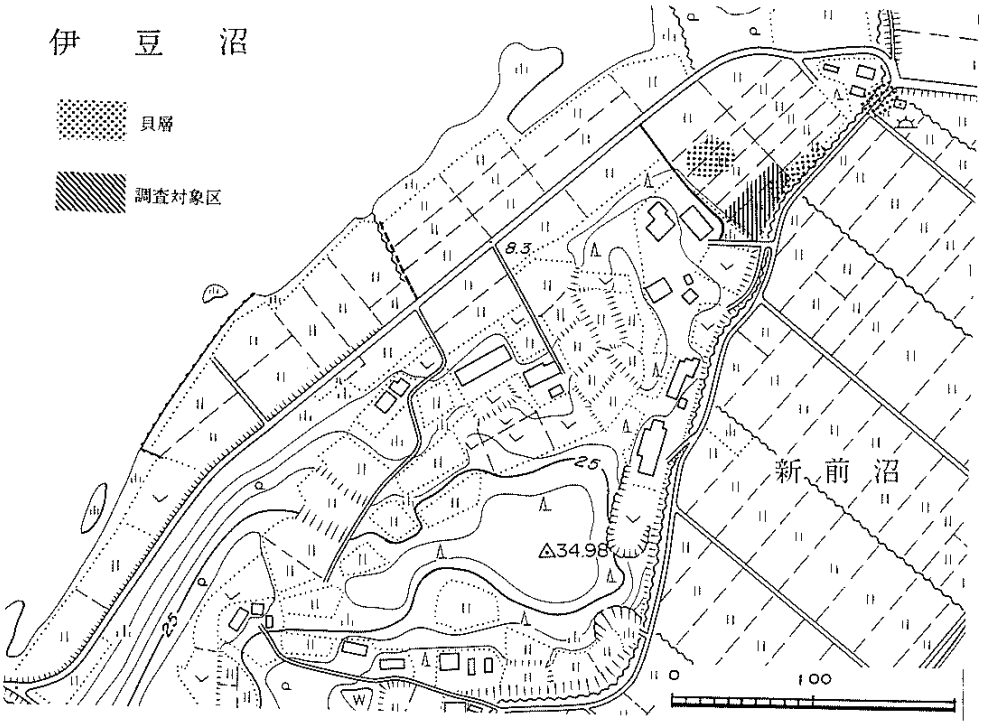
番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	唐木崎貝塚	縄文後・晩	10	観音寺貝塚	縄文前～晩	18	西坂戸遺跡	縄文後・晩
2	倉崎　貝塚	縄文後・晩	11	上ノ台貝塚	縄文前～晩		坂戸　遺跡	縄文前～晩
3	狼塚　貝塚	縄文前～後	12	深沢Ｂ貝塚	縄文後・晩	19	深沢　遺跡	縄文後
4	堤花　貝塚	縄文前～後	13	敷味　貝塚	縄文後・晩	20	館林　館跡	中世
5	地粮　貝塚	縄文前～晩	14	茂楽横穴古墳	古墳	21	南行　遺跡	古墳
6	山ノ内表貝塚	縄文前・中	15	茂楽　古墳	古墳後？		南行　館跡	中世
7	大多古貝塚	縄文後・晩　古代	16	茂楽　遺跡	縄文	22	早坂　館跡	中世
8	川戸沼貝塚	縄文前	17	番谷　遺跡	縄文後			
9	八ノ森貝塚	縄文前　古代		番谷　館跡	中世			

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

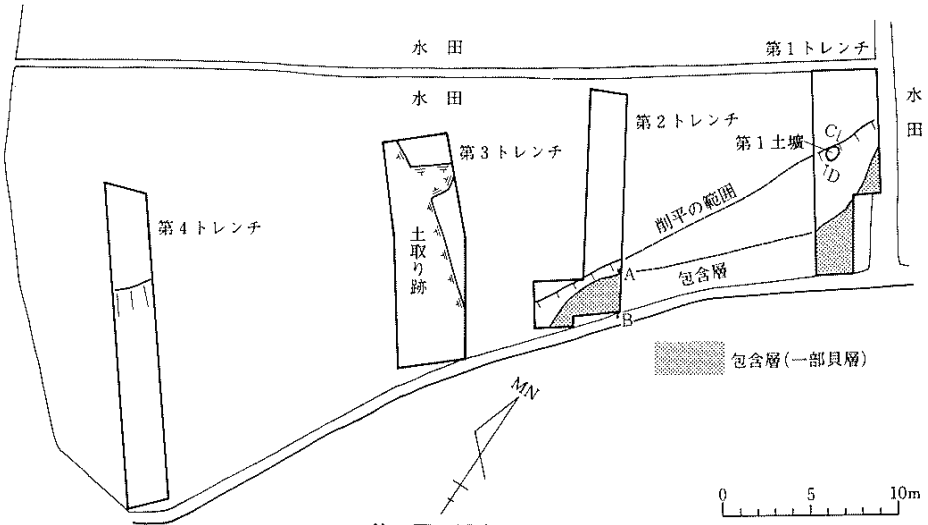
東に向かって次第に低平になり、迫川とその支流によって形成される迫川低地に接している。築館丘陵は迫川低地と接する部分では複雑に開析され樹枝状になっている。また、迫川の遊水地である迫川低地には湖沼地帯が発達していたと推定され、今でも残る伊豆沼・内沼・長沼等はその名残と考えられる。

湖沼地帯に接する築館丘陵の縁辺には、縄文時代前期に鹹水産の貝種による貝塚が形成されるようになり、次いでヤマトシジミを主体とする汽水性の貝塚が形成され、後・晩期にはタニシやイシガイ科の淡水性の貝塚が多く形成されるようになる。迫町西部にはこの淡水性の貝塚が集中して分布する事で知られており、唐木崎貝塚はそのひとつである（第１図）。

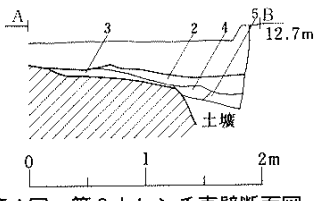
今回の調査は貝塚の所在する土地の所有者である星文郎氏が、現在水田となっている部分に農作業場の建築を計画したために実施したものである。この水田は昭和 40 年代の開田の際に丘陵を削平して造成したものであるため、貝塚が残っているかどうかの確認のための調査を実施することとし、調査対象地内に任意に幅約 2m の南北方向のトレンチを 4 か所設定して東から第1～第 4 の番号を付した（第 2 図）。調査の結果、第 1・2 トレンチの南半部分でヌマガイと思われる貝を少量含む包含層（第 3・4 図）と第 1 トレンチの包含層の上の斜面で土壙を 1 基検出した（第 5 図）。また、第 3 トレンチでは水田に客土するための土取りの跡が見つ



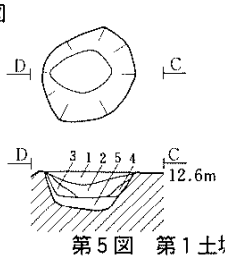
第 2 図　遺跡全体図



第３図　調査区平面図



第４図　第２トレンチ東壁断面図



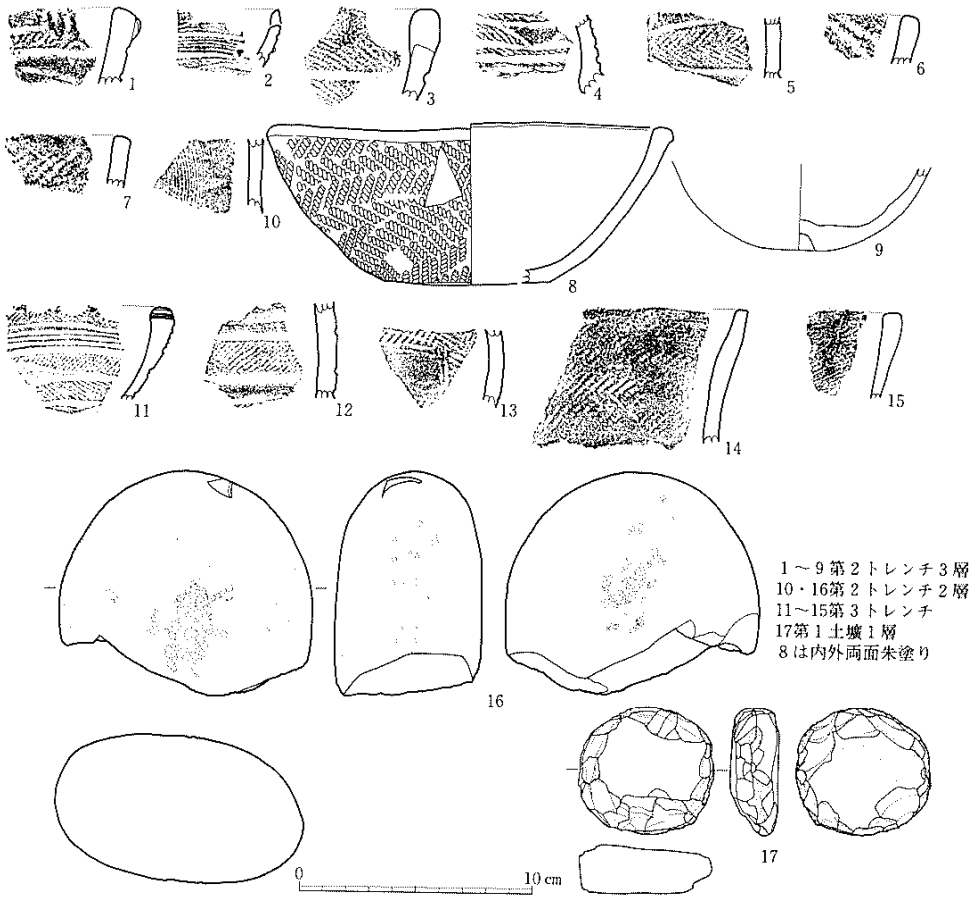
第５図　第１土壙

層No.	土色	土性	備考
1	褐色（10YR4/4）	シルト	下部ににぶい橙色（7.5YR7/3）の地山土をブロック状に含む　盛土
2	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	
3	黒褐色（10YR2/3）	シルト	木炭粒・ヌマガイを含む　包含層　一部貝層
4	灰黄褐色（10YR4/2）	シルト	グライ化した層　新しいピット？
5	暗褐色（10YR3/3）	シルト	木炭粒を少量含む

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色（10YR3/3）	シルト	木炭・焼土粒を含む　遺物多い
2	暗褐色（7.5YR3/4）	シルト	木炭・焼土・にぶい橙色の粒を含む
3	褐色（7.5YR4/3）	シルト	
4	褐色（7.5YR4/3）	シルト	
5	にぶい橙色（7.5YR7/3）	シルト	

かったが、この部分の埋土から開田の際に丘陵中央部にあった貝層を押してきたと考えられるブロック状なった貝層が見つかっている。今回建物の建つ部分は、いずれも削平された部分であることが判明したため、土壙の精査を行い調査を終了した。

出土遺物には縄文土器・石器（第６図）・自然遺物等がある。縄文土器には深鉢・鉢・壷等の器形があり、突起・瘤状突起や貼付文・入組状文・弧線文などの文様の特徴は気仙沼市田柄貝塚で第Ⅲ～Ⅶ群土器土器とされたものに類似している（阿部・手塚：1986）。この土器群は縄文時代後期中・後葉の段階（宝ケ峯式・金剛寺式）に位置付けられており、本遺跡の土器も同時期のものと考えられる。石器には表裏両面に敲打痕と磨面をもつ磨石と周縁に敲打痕をもつ円盤状石製品とがあり、その年代は土器と同じと考えられる。自然遺物はブロックサンプリ



第6図　出土遺物

ングをし、篩を使用して水洗いして採集した。貝類にはイシガイ科の一種・オオタニシ・イガイがあり、魚類にはコイ科・ギギ・スズキなどがある。その他にはヘビの椎骨や鳥骨の破片がある。最も多いのは魚骨で、その中でもフナは多い。次いで目につくのは淡水産の貝の破片で、鳥骨も目につく。注目されるのは汽水域に生息するスズキや鹹水産のイガイが少量ではあるが含まれている点である。

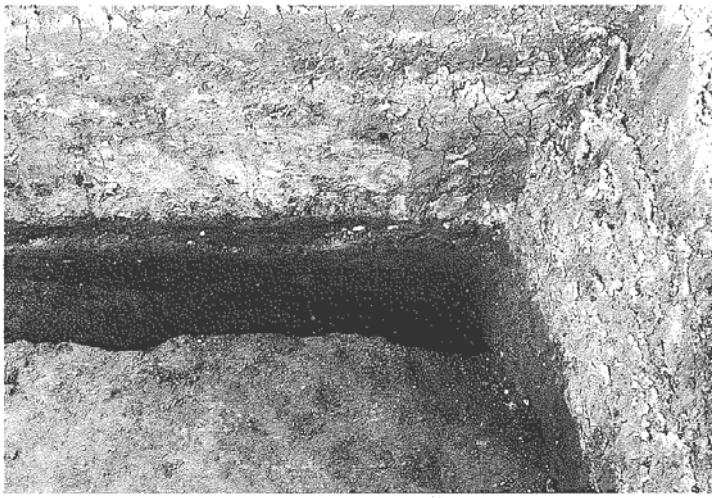
引用参考文献

阿部恵・手塚均他（1986）：「田柄貝塚I」『宮城県文化財調査報告書第111集』

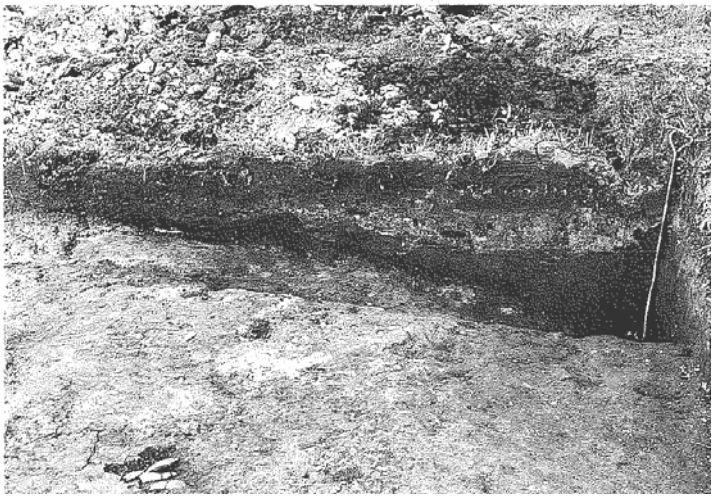
写　真　図　版

調査区全景
（西より）

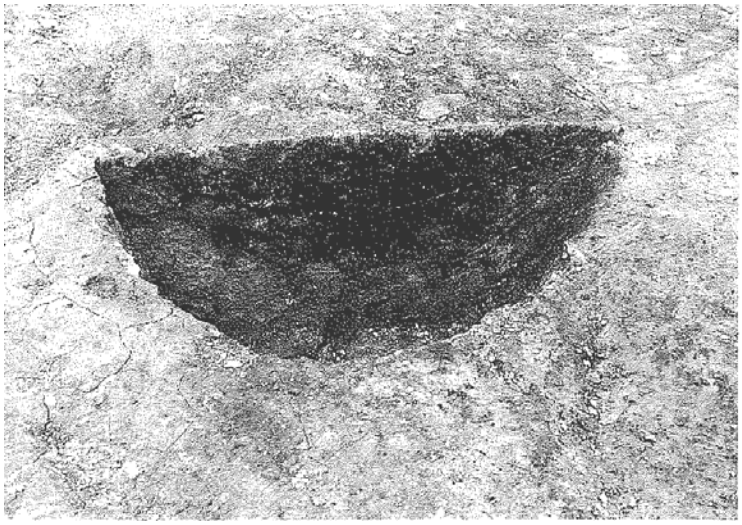
第1トレンチ東壁



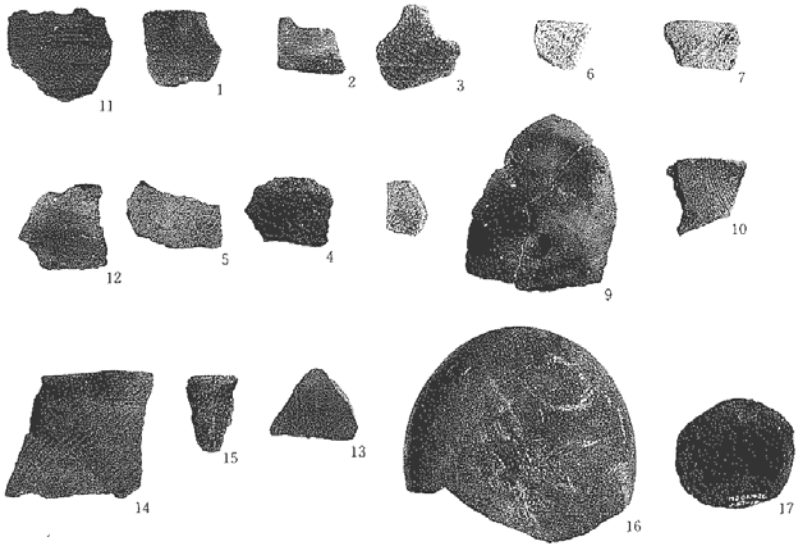
第2トレンチ東壁

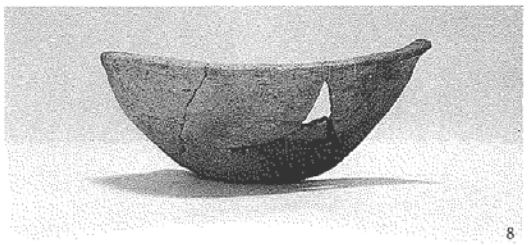


写真図版1



第1土壙





出土遺物

番号は第6図に対応

写真図版 2

日影貝塚（ひかげかいづか）

目　　次

Ⅰ：遺跡の立地と現況 …… 243
Ⅱ：調査の目的と方法 …… 244
Ⅲ：発掘区及び、基本層位 …… 245
Ⅳ：出土遺物 …… 245
Ⅴ：考察 …… 246
Ⅵ：まとめ …… 247

調 査 要 項

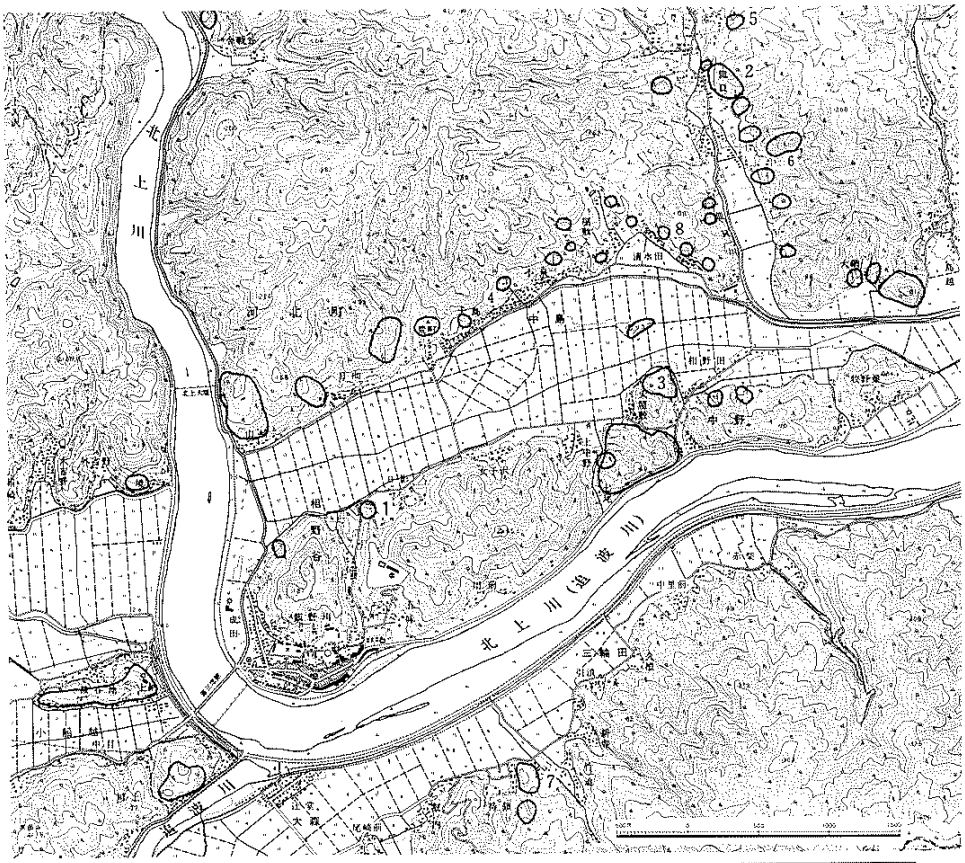
遺 跡 名：日影貝塚
遺跡記号：ＬＵ
遺跡番号：66031
所 在 地：宮城県桃生郡河北町相野谷字日影
調査面積：発掘面積約 30 ㎡
調査期間：平成元年 6 月 26 日～28 日
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：白鳥良一　真山悟　菊地逸夫　古川一明　吉田雅之　大和幸生
調査協力：河北地区教育委員会

日影貝塚（ひかげかいづか）

Ⅰ　遺跡の立地と現況

河北町は宮城県北東部に位置し、北上山系を流れる北上川（追波川）が町の中央を流れ太平洋に注いでいる。

日影貝塚は河北町相野谷字日影に所在し、北上川の旧河道であった標高1～5mの沖積地に舌状に突き出た相野谷丘陵の北麓末端部の台地に立地している（第1図）。この沖積地を囲む丘陵には、北上川流域の貝塚群の縄文時代前・中期の中島貝塚や後期の相野田貝塚、後・晩期の皿貝貝塚などが知られている。本遺跡からは縄文時代前期初頭の上川名Ⅱ式の土器が採集されていて当時からこの周辺が生活の場として利用されていたと考えられる。



No	遺跡名	立地	時代	No	遺跡名	立地	時代
1	日影貝塚	丘陵斜面	縄文前	5	大畑遺跡	丘陵斜面	縄文
2	皿貝遺跡	丘陵縁	縄文後・晩、古代	6	十二神古遺跡	丘陵斜面	縄文、古代
3	相野田貝塚	丘陵斜面	縄文後	7	持領館跡	丘陵	縄文、古代、中世
4	中島貝塚	丘陵斜面	縄文前・中	8	清水田D遺跡	丘陵中腹	縄文前

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

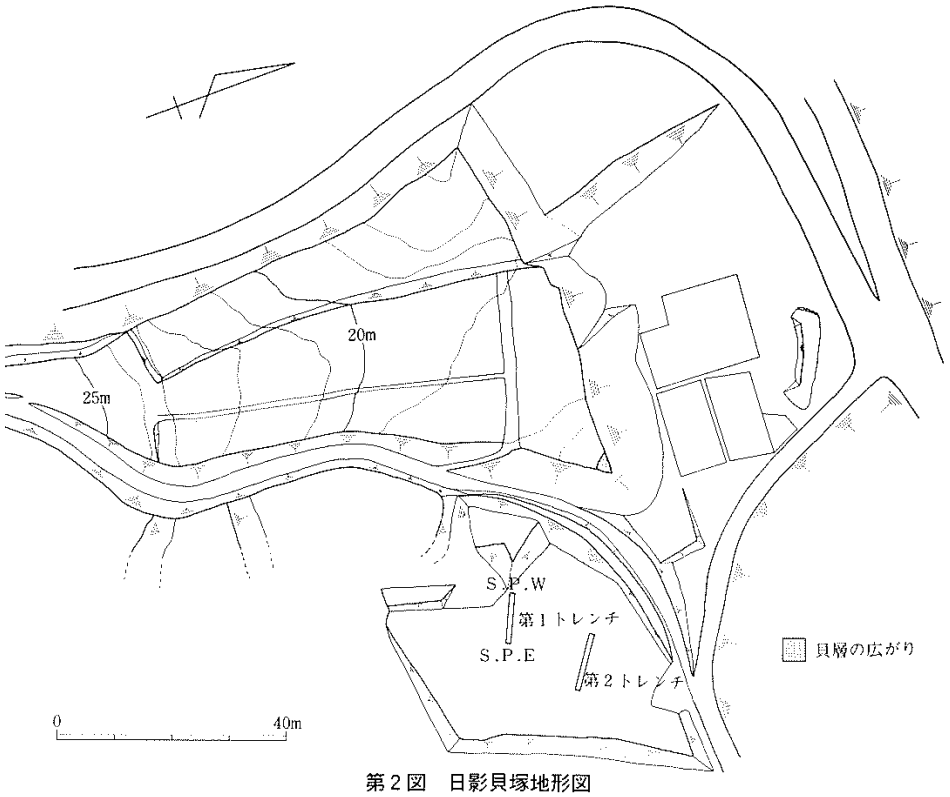
日影貝塚は沖積地に突き出た舌状の台地上に立地しているが、今回の宅地造成にともない台地東側末端部が切り盛りされて壊されてしまった。また、台地西側は道路建設のためすでに削平されており、台地南側も土取りとライスセンター・牛舎建設により壊されていた。

II　調査の目的と方法

今回の調査は遺跡範囲内において台地東側の裾が切り盛りされ、遺跡の原地形が損なわれてしまったため、遺跡の破壊の状況を把握する目的で実施した。また、それと並行して今まで不明瞭であった貝層の分布状況及び遺跡の範囲を確認するための地形測量図を作成した。

貝層の分布状況及び遺跡の範囲を確認するための測量調査の結果、貝層の主体部は台地の北東斜面に形成されていたものと考えられた（第２図）。しかし、貝層は前述のように度重なる破壊のために台地上部のごく一部しか残っておらず、本来の貝層の広がりや、今回の調査区の堆積層との層位関係も不明である。

なお、本遺跡の性格を把握するために貝層のサンプリングをおこなった。サンプリングは露出している貝層（図版１図）から土嚢袋 1/3 を資料として抽出した。



第２図　日影貝塚地形図

III　発掘区及び、基本層位

発掘区は貝層との関連を調べるために、貝層が形成されている北東斜面の東側を切り盛りしたところに東西方向に長さ 10m と 9m、幅 0.5m のトレンチを設定した。基本層位は 6 層に大別できるが、他時代の遺物が混入することなどから、1 層～2 層までが古代以降の堆積土、3 層が無遺物層になり、4 層～6 層が縄文時代の遺物包含層の末端部として捉えた。

1 層：灰黄褐色のシルト質土で層の厚さが約 60 cmである。宅地造成前の表土である。

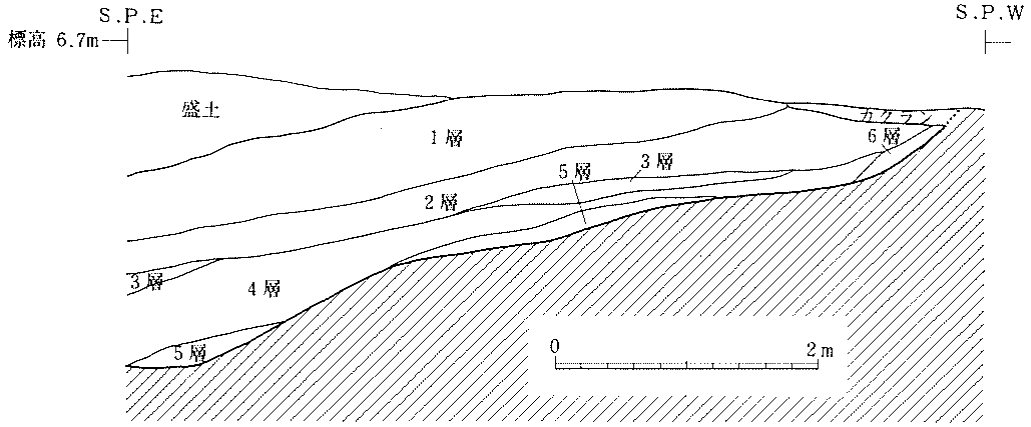
2 層：黒褐色のシルト質土で層の厚さが 20～30 cmである。凝灰岩の小礫を若干含くむ。遺物は縄文土器、黒色処理を施したロクロ成形の土師器坏の体部破片が出土している。

3 層：灰黄褐色のシルト質土で層の厚さが約 15 cmである。約 5 cm大の凝灰岩の礫を非常に多く含む。遺物は入らない。

4 層:黒褐色のシルト質土で層の厚さが 20～50 cmである。凝灰岩の小礫を 2 層よりも多く含む。遺物は縄文土器を少量含む。

5 層：暗褐色のシルト質土で層の厚さが約 15 cmである。凝灰岩の小礫を若干含み、粘性がやや強く旧表土と考えられる。遺物は縄文土器、黒曜石のチップを含む。

6 層：黒褐色のシルト質土で層の厚さが約 13 cmである。凝灰岩の小礫を若干含み、底面近くに炭化物を多量に含む。遺物は縄文土器を少量含む。



第 3 図　基本層位（第 1 トレンチセクション図)

IV　出土遺物（第3図,1～6）

1 層～6 属の各層から遺物が出土しているが、貝層サンプリング、表採で得た資料を含めて主要な遺物についてその概略と、併せて貝層サンプリングの結果について述べてみたい。

1. 縄文土器

1〜2、4〜5 は器種が深鉢で胎土に植物繊維を含み、外面には非結束の羽状縄文が施されている。1〜2,5 の内面は横方向のケズリが入るのに対して 4 は縦方向のミガキが入る。3 は深鉢の底部で胎土に植物繊維を含んでおり、0 段多条の縄文が放射状に施されている。1 は 4 または 5 層の出土で、2〜3 は貝層サンプリング資料、4〜5 は表採資料である。

2. 石器

6 は現存値で長さ 12 ㎝、幅 8.6 ㎝、厚さ 4.6 ㎝、重さ 560g の安山岩の円礫を用いた敲石＋凹石＋磨石である。縁辺に敲打痕、両面に凹孔と磨面が認められる。4 または 5 層の出土である。

3. 貝層サンプリング

本貝塚の性格を把握するために残存している貝層からサンプリングを行った。資料の抽出はサンプリングエラーがないように 1 ㎜のメッシュを用い水洗を行った。結果は次の通りである。

・人工遺物

縄文土器（第 3 図,2〜3）、チップ

・自然遺物

・軟体動物門

腹足綱：ヘソアキクボガイ・アカニシ・陸産微小貝他

二枚貝綱：マガキ・ヤマトシジミ・ウネナシトマヤガイ他

・脊椎動物門

硬骨魚綱：ニシン科、サヨリ他

哺乳綱：シカ

以上が今回の貝層サンプリングで得られた資料である。露出している貝層からサンプリングをしたために、あえて定量分析は行わなかった。本貝塚の貝層はマガキなど鹹水産の貝類が主体を占めるが、汽水産のヤマトシジミが少量入り、北上川岸流に位置する縄文時代早期末の桃生町十所貝塚などに貝組成が類似しており、同様の生活基盤であったものと思われる。

Ⅴ　考察

本貝塚から発見された縄文土器はすべて深鉢で、胎土に植物繊維を含み、内面がケズリ・ミガキ調整され、外面には非結束の羽状縄文が施されているという共通性を持ちあわせている。このような共通性を持ちあわせている土器群は川崎町前田遺跡Ａ群土器（相原：1987）、川崎町西林山遺跡第Ⅱ群土器（相原：1987）、名取市宇賀崎貝塚Ｂ群土器（阿部：1980）などに類例を求めることができ、本貝塚から発見された土器を羽状縄文土器群の範疇におくことがきる。

羽状縄文土器群は上川名Ⅱ式→大木 1 式に編年されており、本貝塚の土器は出土量の乏しさ

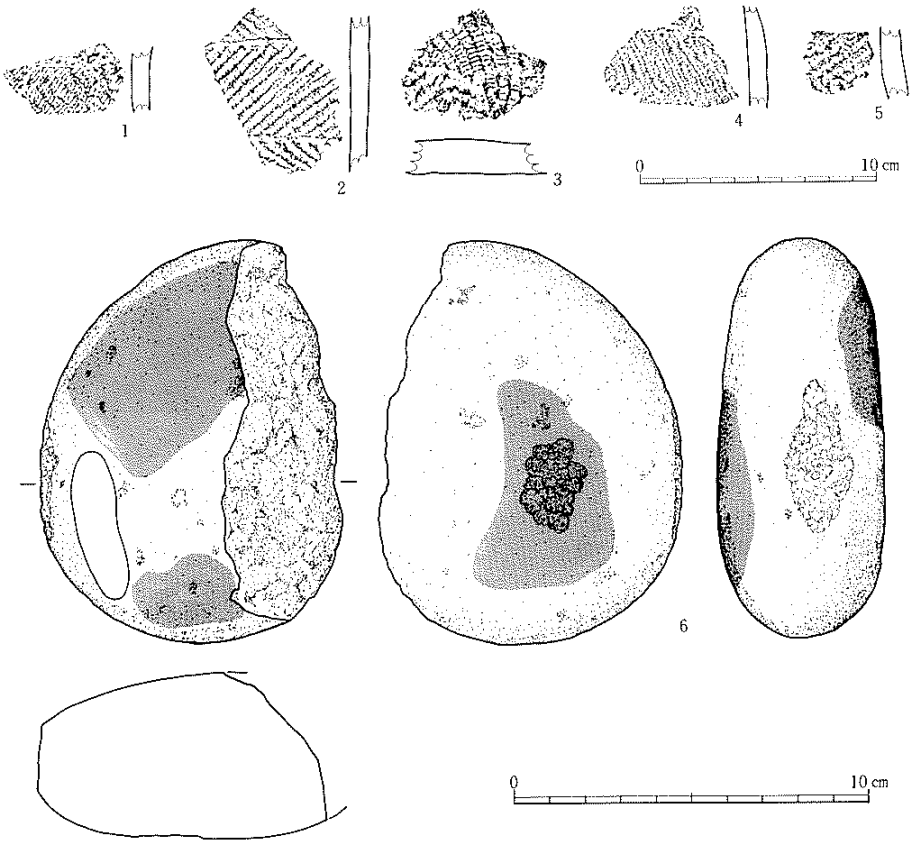
から土器群の構成、口縁・胴部文様など不明な点が多いが、非結束羽状縄文が施されている点や胎土に植物繊維を含むことから上川名Ⅱ式～大木１式のあいだに位置するものと考えられる。

Ⅵ　まとめ

1、日影貝塚は相野谷丘陵から北上川（追波川）の旧河道に突き出た舌状台地の先端に立地している。

2、遺物は遺物包含層の末端とみられる層から少量出土した。遺物から本貝塚は縄文前期初頭の上川名Ⅱ式～大木１式の間に位置するものと考えられる。また、貝塚が形成されていた台地上に土師器や須恵器が散布することから古代の集落であったと考えられる。

3、貝層部分は一部を残すのみで、相次ぐ破壊のため大部分が失われている。



第４図　出土資料、貝層サンプリング資料、表採資料

引用・参考文献

相原淳一（1987）：「前田遺跡」『中ノ内A遺跡・本屋敷遺跡他』宮城県文化財調査報告書第121集

相原淳一（1987）：「西林山遺跡」『中ノ内A遺跡・本屋敷遺跡他』宮城県文化財調査報告書第121集

阿部　恵（1980）：「宇賀崎貝塚」『金剛寺貝塚･宇賀崎貝塚･宇賀崎1号墳他』宮城県文化財調査報告書第67集

伊東信雄（1957）：「古代史ー縄文式文化の変遷」『宮城県史』1

伊東信雄（1981）：「縄文時代ー縄文土器」『宮城県史』34

加藤　孝（1951）：「宮城県上川名貝塚の研究」『宮城学院女子大学研究論文集』1

加藤　孝（1961）：「考古学上からみた桃生村内の古代遺跡」『桃生町史』第2巻資料編

白鳥良一（1977）：「宮城県七ヶ浜町左道貝塚の縄文前期土器について」『宮城史学』第6号

千葉宗久（1975）：「河北町の原始時代」『河北町史』上巻

東北歴史資料館編（1989）：「宮城県の貝塚」東北歴史資料館資料集25

鳴瀬町教育委員会（1977）：「金山貝塚」鳴瀬町文化財報告書第1集

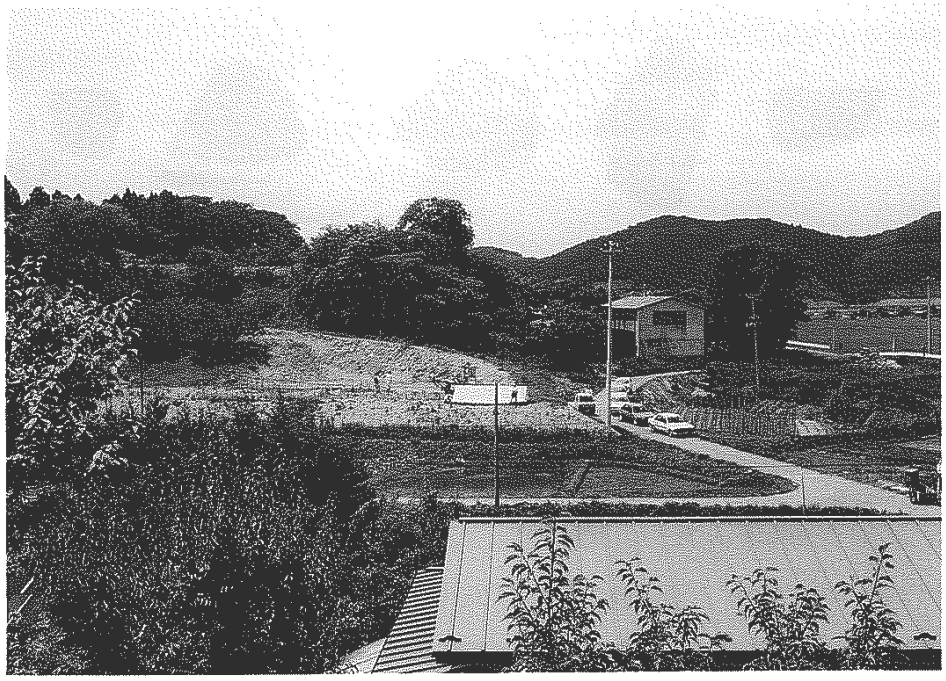
林　謙作（1960）：「宮城県桂島貝塚出土の前期縄文土器群」『考古学雑誌』第46巻第3号

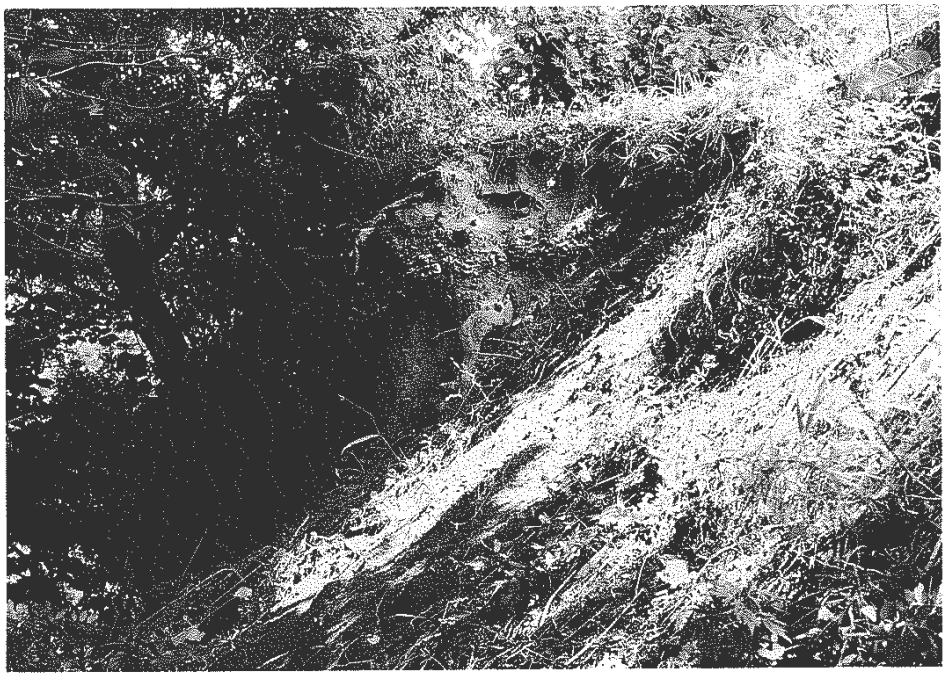
林　謙作（1965）：「縄文時代ー東北」『日本の考古学』II

村田晃一（1986）：「原頭遺跡」『小梁川遺跡ー遺物包含層土器編』宮城県文化財調査報告書第117集

山内清男（1929）：「繊維土器に就いて追加第二」『史前学雑誌』第2巻第1号

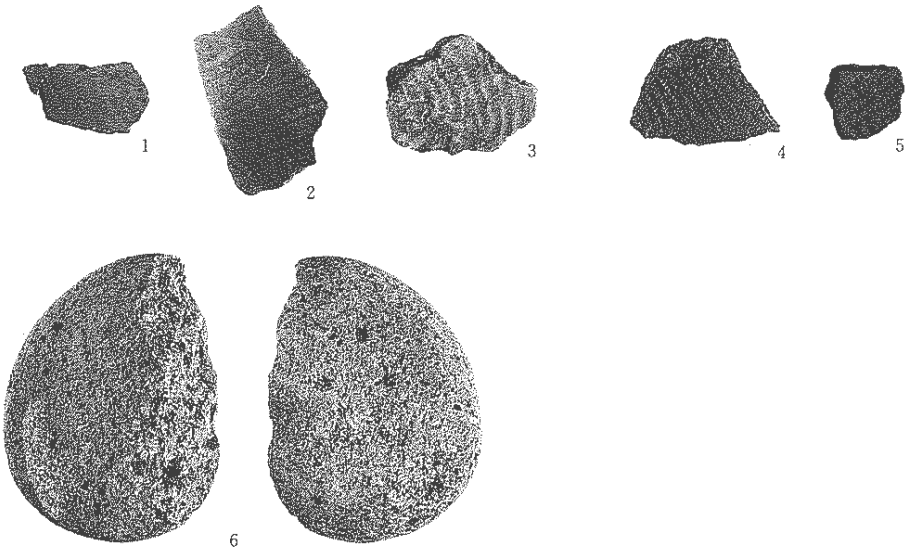
写　真　図　版



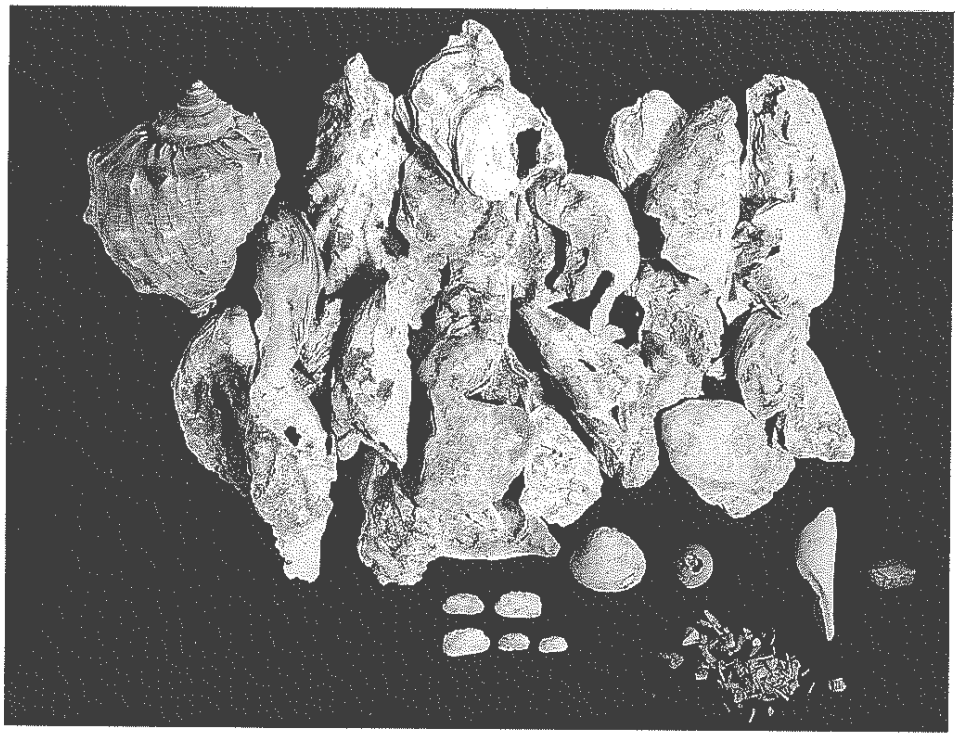


貝層断面

図版 1



出土資料・貝層サンプリング資料・表採資料



貝層サンプリング資料

図版 2

白山遺跡ほか
（はくさんいせき）

目　　次

Ⅰ　はじめに ……255
Ⅱ　検出された遺構と出土遺物……258
Ⅲ　まとめ ……272
　引用参考文献 ……272
　写真図版 ……273

調 査 要 項

遺跡の名称、遺跡記号・宮城県遺跡地名表掲載番号、所在地

(1) 白 山 遺 跡　はくさんいせき　ＬＹ・05087　蔵王町円田字白山、清水上
(2) 本宿前遺跡　もとじゅくまえいせき　ＬＺ・05091　蔵王町円田字本宿前、石橋、曲木
(3) 中 組 遺 跡　なかぐみいせき　ＭＰ・05092　蔵王町円田字新石橋、田町前、屋敷
(4) 中沢Ａ遺跡　なかざわＡいせき　ＭＱ・05045　蔵王町平沢字中沢、宮ヶ内下、宮ヶ内上
(5) 中沢Ｂ遺跡　なかざわＢいせき　ＭＲ・05071　蔵王町平沢字中沢
(6) 立目場遺跡　たちめばいせき　ＭＳ・05013　蔵王町平沢字立目場、谷地田
(7) 屋木戸内遺跡　やぎとうちいせき　ＭＵ・05043　蔵王町平沢字屋木戸内、吹張、越戸
(8) 赤鬼上遺跡　あかきかみいせき　ＡＫ・05042　蔵王町平沢字赤鬼上

調査面積　合計 10778 ㎡
調査期間　平成元年（1989 年）7 月 6 日～8 月 10 日、10 月 23 日～10 月 24 日
調査主体　宮城県教育委員会
調査担当　宮城県教育庁文化財保護課
　白鳥良一　真山悟　阿部博志　須田良平　鈴木真一郎　木皿直幸
調査協力　宮城県農政部耕地課、宮城県大河原土地改良事務所
　蔵王町円田地区圃場整備事業組合
　蔵王町教育委員会社会教育課　芦立敏彦
調査参加者　小島勇蔵　金塚千治　草野よしい　釼持つたえ　佐藤富士子
　佐藤留吉　高橋けさの　山家栄治　山家きね子　山家善栄　　（敬称略）

白山遺跡（はくさんいせき）ほか

Ⅰ　はじめに

〔遺跡の位置と環境〕白山・本宿前・中組の3遺跡は蔵王町円田に所在し、円田盆地の西側丘陵麓に位置する遺跡であり、中沢Ａ・中沢Ｂ・立目場・屋木戸内・赤鬼上の5遺跡は蔵王町平沢に所在し、盆地の東側丘陵麓に位置する遺跡である。

円田盆地は蔵王町の北東部に位置する東西1.5㎞、南北4㎞ほどの狭隘な盆地で、刈田郡の北端にもあたり、柴田郡村田町と境を接している。南北に並行に走る断層が幾筋か生じた結果、地溝となったところが盆地となっており、その周囲のうち南側を除く三方は標高150m～250mの低い丘陵地帯であり、薮川およびその支流の小河川によって複雑に開析されている。その裾部は台地または微高地となっており、集落立地には条件がよく、遺跡も数多く見られる。盆地底では薮川が北西側から南へ流れており、流域には標高75～80mほどの沖積地が形成され、今日では大部分が水田となっている。

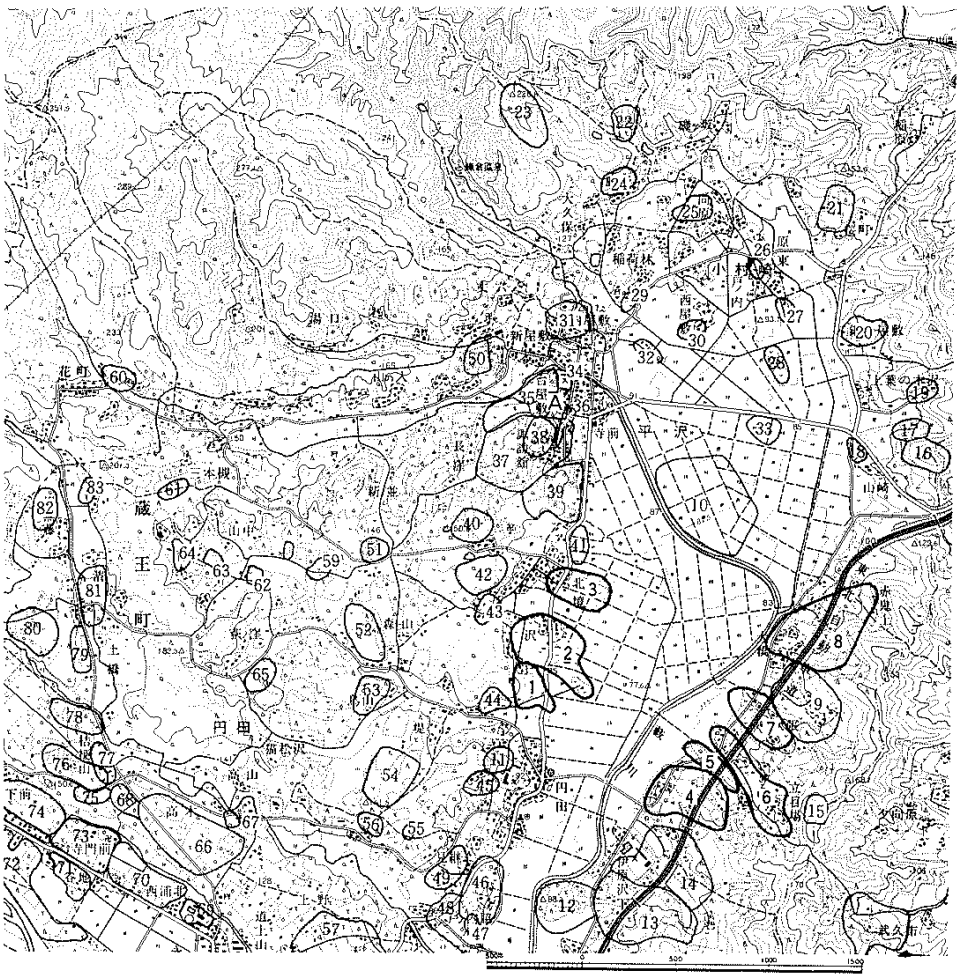
蔵王町には旧石器時代から中近世まで各時代の遺跡があり、特に今回調査の対象となった先の8遺跡が立地する円田盆地の丘陵裾部や松川流域の河岸段丘上には非常に多くの遺跡が分布し、県内で最も遺跡が多い地域の一つにあげられよう。以下、円田盆地周辺の遺跡について時代ごとに説明を加えたい。（第1図）

旧石器時代の遺跡には小村崎の台地上に位置する前戸内遺跡があるほか、町内でも数か所の遺跡が知られ、いずれも丘陵や台地上に立地している。

縄文時代の遺跡には早期の北境・円田入Ｂ遺跡、中期の湯坂山Ｂ・営団遺跡、後期の前戸内・愛宕山・谷地・湯坂山遺跡、晩期の鍛冶沢遺跡などがある。各期を通じて、松川西岸の河岸段丘上や高木川沿いの丘陵上に多く分布している。

弥生時代の遺跡には西浦・上野・下永向山・上曲木Ａ・堂の入遺跡などがあり、円田盆地の丘陵裾部に多く分布している。とくに松川北岸の河岸段丘上に立地する西浦遺跡は弥生時代後期の円田式の標式遺跡として著名である。

古墳時代の遺跡には大橋・塩沢北・伊原沢下・諏訪館前遺跡などの集落遺跡があるほか、宗膳堂古墳などの古墳や、台遺跡に見られる水田跡がある。集落の分布域は弥生時代とほぼ重複している。大橋遺跡では塩竈式期の竪穴住居跡が3軒検出されており、それから出土した土師器は古墳時代の最も古い時期に考えられている。諏訪館前遺跡は昨年度に行われた調査で古墳時代前期および中期の竪穴住居跡が発見されている。塩沢北遺跡では後期の栗囲式期の竪穴住居跡が3軒発見されている。台遺跡では古墳時代以前から中近世まで8時期にわたる水田跡が



1	白山遺跡	2	本宿前遺跡	3	中組遺跡	4	中沢Ａ遺跡
5	中沢Ｂ遺跡	6	立目場遺跡	7	屋木戸内遺跡	8	赤鬼上遺跡
9	大橋遺跡	10	郡遺跡	11	堀ノ内遺跡	12	合遺跡
13	塩沢北遺跡	14	伊原沢下遺跡	15	愛宕山遺跡	16	北割山遺跡
17	山崎遺跡	18	中巣木の沢遺跡	19	上巣木の沢遺跡	20	鍛冶屋敷遺跡
21	清上遺跡	22	鹿野遺跡	23	兵衛館跡	24	大久保遺跡
25	後原遺跡	26	原遺跡	27	六角上遺跡	28	六角下遺跡
29	前戸内遺跡	30	西小屋館後	31	平沢館跡	32	十郎田遺跡
33	新城館跡	34	平沢遺跡	35	諏訪館前遺跡	36	諏訪館横穴古墳群
37	諏訪館遺跡	38	諏訪館跡	39	小高遺跡	40	大柿内遺跡
41	堂の入遺跡	42	北境遺跡	43	沢遺跡	44	清水遺跡
45	寺坂遺跡	46	宗膳堂遺跡	47	宗膳堂古墳	48	戸の内遺跡
49	土ケ市遺跡	50	丈六遺跡	51	新並遺跡	52	築館館跡
53	鳥山遺跡	54	花柄館跡	55	八幡山古墳群	56	見継遺跡
57	上野遺跡	58	角山Ａ遺跡	59	角山Ｂ遺跡	60	野尻遺跡
61	三木規遺跡	62	青木遺跡	63	山中遺跡	64	入青木遺跡
65	萩の窪遺跡	66	高木遺跡	67	高木Ｂ遺跡	68	営団遺跡
69	愛宕山遺跡	70	西浦・西浦Ｂ遺跡	71	谷地遺跡	72	十文字遺跡
73	寺門前遺跡	74	曲木遺跡	75	上曲木Ａ遺跡	76	上曲木Ｂ遺跡
77	桔梗山遺跡	78	土橋遺跡	79	湯坂山遺跡	80	湯坂山Ｂ遺跡
81	円田入Ｂ遺跡	82	根無藤楯跡	83	円田入Ｃ遺跡	Ａ	保昌寺

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

検出されており、円田盆地にも現在の水田下に古い水田跡が存在することが明らかとなった。

奈良・平安時代の遺跡には都・赤鬼上・東山遺跡などがあり、盆地周縁の台地上にかなりの数が分布している。都遺跡は円田盆地中央部に位置し、薮川北岸の自然堤防上に立地している。奈良時代直前からの土師器・須恵器・瓦が採集されており、瓦葺きの郡衛か寺院の存在が考えられ、地名の由来や伝説からも興味深い遺跡である。赤鬼上遺跡では平安時代の竪穴住居跡が検出され、墨書土器が出土している。東山遺跡でも平安時代の竪穴住居跡が 4 軒発見され、灰釉陶器とともに、多数の墨書土器が出土している。本年度調査した堀ノ内遺跡では国分寺下層式の竪穴住居跡が検出されている。また、平沢の保昌寺には安養寺（廃寺）の本尊と伝わる丈六仏の阿彌陀如来坐像が安置されている。後世の補修が認められるものの平安時代末頃の造像と思われる。

中世には鎌倉時代の集落跡である持長地遺跡のほか、低い丘陵を利用した館跡が見られる。円田盆地周辺にも兵衛館跡・西小屋館跡・平沢館跡・諏訪館跡・築館館跡・花楯館跡・根無藤館跡などがある。

近世には平沢に伊達氏の重臣高野氏が「要害」を構え、家中の侍・足軽屋敷をその麓に配した。当時の地割りや道筋は今日に残っている。

〔調査の方法と経過〕今回の調査は各遺跡の範囲確定を目的とした遺構確認調査である。調査方法は、トレンチを設定し、重機によって表土を除去して遺構面を検出していくものである。トレンチの設定は深い掘削が予定されている用水路および道脇施工部分を中心に行い、遺構が検出された場合は調査結果として縮尺 1/1000 の地図に遺跡の範囲を描けるように、微地形や標高を考慮しながら密にトレンチを設けており、遺構が検出されない場合は間隔をあけてトレンチを設定している。沖積地では層の堆積状況を把握するため、適宜重機のアームが届くまでの深掘りを行った。各トレンチにはおよその調査区域ごとにアルファベットを付した後に個別に番号をつけた。遺構の実測は、完掘したものについては縮尺 1/20 で行っているが、確認しただけの遺構については縮尺 1/100 で簡易な測量を行っている。各トレンチの基本層位についても適宜断面図や柱状図を作成した。併せて、遺構等の写真撮影も行った。記録作成後、遺構検出部分は重機による埋め戻しを行っている。

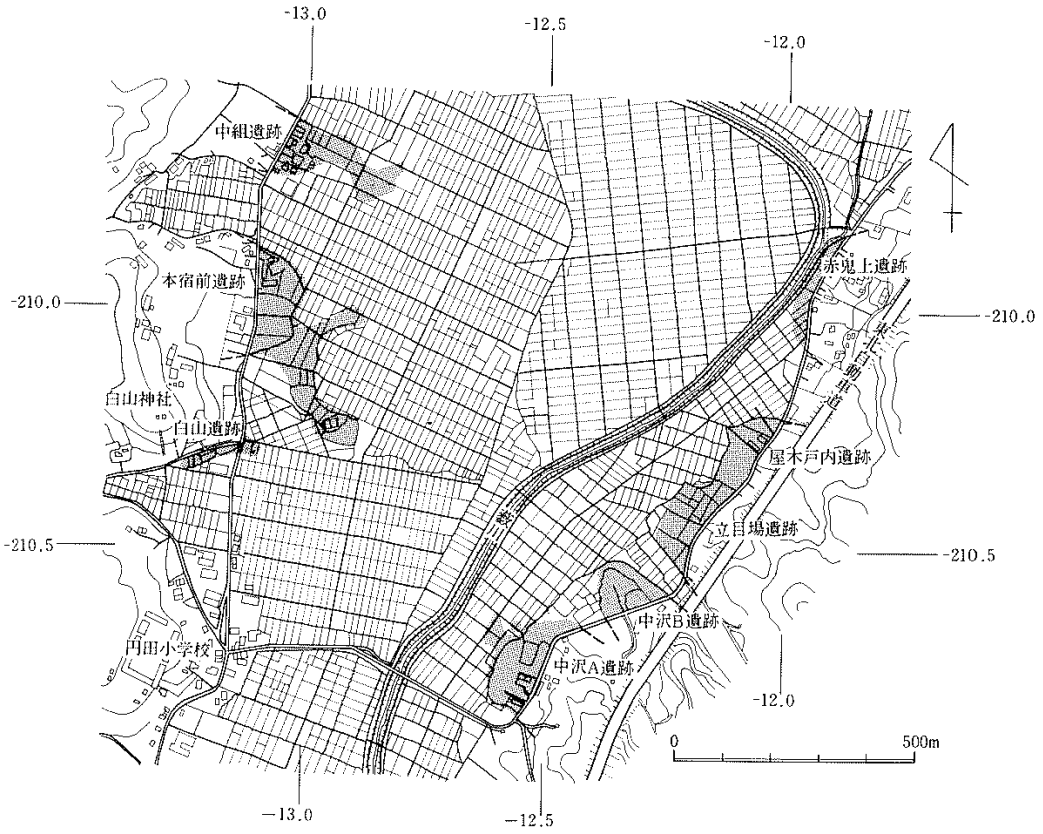
発掘調査は 7 月 6 日に開始した。まず白山遺跡のうち県道西側部分を調査した（トレンチはＡ番号）。その結果、古墳時代の土師器が出土した土壙 1 基、ピット 3 基を発見した。ここでは土師器が数個体露出しており、かつ遺構の数が少なかったこともあって、直ちに精査し、県道西側丘陵裾部分の調査を完了させた。7 月 10 日から県道東側のうち本宿前から東に延びる基幹道路以南を調査した（Ｂ番号）。その結果、白山遺跡の東端、本宿前遺跡の東南端を確認した。7 月 14 日には盆地中央部を南北に走る基幹水路部分（Ｃ番号）、7 月 15 日から本宿前から

中組にかけての範囲を調査した（D番号、註：中組遺跡の主要部分を除く）。その結果、本宿前遺跡の範囲、中組遺跡の範囲の一部を確認した。7月27日から薮川右岸の盆地東縁部の調査を行った（E番号）。その結果、中沢A・中沢B・立目場・屋木戸内・赤鬼上の5遺跡の範囲を確認した。8月7日から中組遺跡の主要部分について行った（F番号）。その遺跡の範囲を確認して、8月10日で調査に区切りを付けた。稲の収穫が終了した10月23・24日に白山遺跡南側の水田部分（G番号）と本宿前・中組の両遺跡の間の沢田部分（H番号）を調査した。ここでは遺構が発見されなかった。

以上で今年度の調査を終了し、確認調査の結果に基づいて遺跡の保存協議を現在行っている段階である。

II　検出された遺構と出土遺物

遺構確認調査の結果、第2図に示したように各遺跡の範囲を確認している。いずれの遺跡の場合も沖積地に向かって張り出す丘陵裾部で遺構が検出されている。遺構確認面は本宿前遺跡



第2図　遺跡の範囲

のD9 トレンチが旧表土（黒褐色のシルト質粘土層）上面である以外は、現在の田畑耕作土直下にみられる地山面である。沖積地では中沢A遺跡で古い水田跡が検出されているが、ほかでは流れ込みによるとみられる遺物が散見されるのみで遺構は発見されていない。沖積地の基本層位は今回の調査対象区域では大差が無く、水田床土直下から地山面まで灰褐色や褐色からオリーブ黒色を呈する数枚の粘土質土層がほぼ水平に堆積しており、それは未分解植物遺体を多く含みスクモ状になっている。薮川に近づくにつれて地山面は深く潜り込んで沖積層の層厚が3m 以上に増し、土性はより粘土質となっている。特に薮川右岸に広く見られるオリーブ黒色を呈するスクモ状の粘土層には灰白色の火山灰（いわゆる灰白色火山灰かどうかは不明である）が層中に見られる部分がある（D2・D9・D43・D51・D58 の各トレンチ）。また、この層の上面は上層に巻き込まれるように一様に波打つが、層の傾斜のあるところでも巻き込みが見られ、耕作土とみられる土壌も畦畔も見られないことから、水田跡とは考えられない。

円田盆地付近の地質を見ると、東側から北側の丘陵にかけては白沢層といわれる新第三系中新統の凝灰質頁岩がみられ、西側丘陵部の円田から平沢や猿鼻（花町）にかけては円田層が分布し、凝灰質のシルト岩や砂岩の間に良質の珪藻土を含んでいる。この付近で発掘調査によって確認される地山とはこれら凝灰質の基盤岩の風化土で、盆地底ではグライ化して黄褐色を呈する礫や砂・シルトを含む粘土層として観察される。

以下、遺跡ごとに説明してゆきたい。

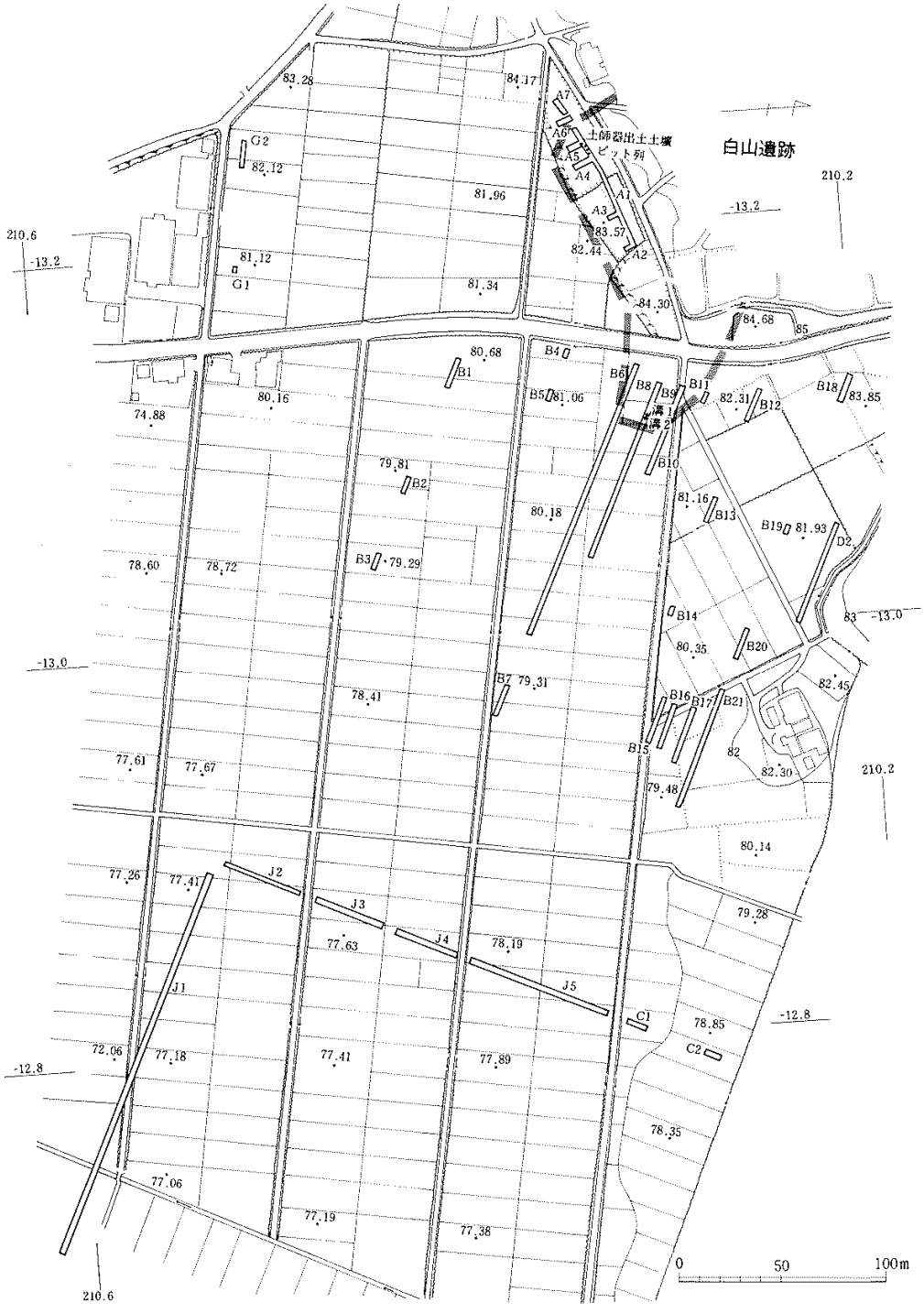
（1）白山遺跡（第 3〜5 図）

〔検出遺構と出土遺物〕溝跡 2 条、土壙 1 基、ピット 3 基を検出している。前述の通り、土壙、ピットについては完掘している。

《土壙》A1 トレンチ西寄りの地山上面で 1 基検出されている。平面形は長軸 80 ㎝短軸 60 ㎝の方形に近い形状で、深さは 45 ㎝である。また、底面は平坦で壁面は急角度に立ち上がる。堆積土は 2 枚認められる。出土遺物には土師器 2 個体があり（第 5 図 5・6）、土壙堆積土 1 層上部（同図▲印の位置）に 5 は倒位、6 は正位に埋められていたものである。特に 5 の内部には周辺に見られないきれいな灰白色 2.5GY8/1 粘土が入っていた。

このほか、土壙のすぐ西側の遺構確認面（第 4 図〇印の位置）で土師器が 4 個発見されている（同図 1〜4）。土壙出土遺物を含め、いずれも胎土がにぶい褐色や赤褐色を呈しているなどたがいに特徴が類似しており、付近でほかの遺物が出土していないこともふまえれば、これらの土器は時期的にまとまりのあるものと考えられる。

1〜3 は坏である。体部は内弯ぎみに立ち上がり、その上部で屈曲して、1 は口縁部がほぼ直立し、2・3 は外傾する。4・5 は甕である。4 は鉢に近い形状である。5 は長胴形で、体部中ほどが最大径となる。口縁部は肥厚している。6 は壷である。体部は扁平な楕円体を呈し、



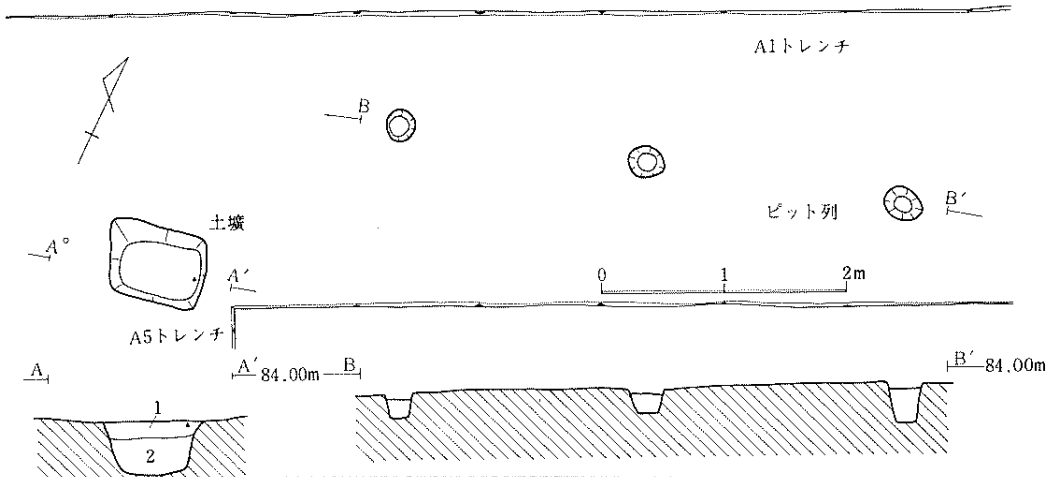
第３図　白山遺跡トレンチ配置図

短い頸部がとりつく。これらの土器の特徴から、その年代は土師器第2型式（氏家1957）である南小泉式に位置づけられよう。その型式の中でも近年の細分研究における、大河原町台ノ山遺跡（阿部・千葉1980）第5号住居跡出土遺物など第3段階＝C期（丹羽1982）としたものに類似していると思われる。さらに、坏類に注目すれば口径に比べ器高が低い浅めのもので占められ、第3段階でも新しい要素がある。同様の特徴を持つものに、距離的にも近い蔵王町諏訪館前遺跡（相原1988）の古墳時代中期の1～3・6号竪穴住居跡出土遺物がある。

《ピット》A1トレンチの土壙東側の地山上面で3個検出されている。いずれも平面形は直径30㎝の円形で、深さは20～30㎝、堆積土は暗褐色のシルト質土である。これらはそれぞれ2m程の間隔をおいて一直線上に並んでおり、ピット列を形成している。出土遺物がなく、時期は不明である。

《溝跡》B8トレンチの西よりの地山上面で2条検出されている。いずれも南西から北東方向に延びているものである。溝跡1は断面形が逆台形を呈し、上幅60㎝下幅30㎝深さは40㎝で、堆積土は黒褐色の粘土質土で底面には砂礫がみられる。出土遺物はなく、時期は不明である。溝跡2は断面形が逆台形状で、上幅90㎝下幅10㎝深さは40㎝で、堆積土はオリーブ褐色の粘土質土である。堆積土から縄文土器片を用いて製作した円盤状土製品（第5図8）が出土しているが、溝跡の年代は縄文時代以降としかいえない。

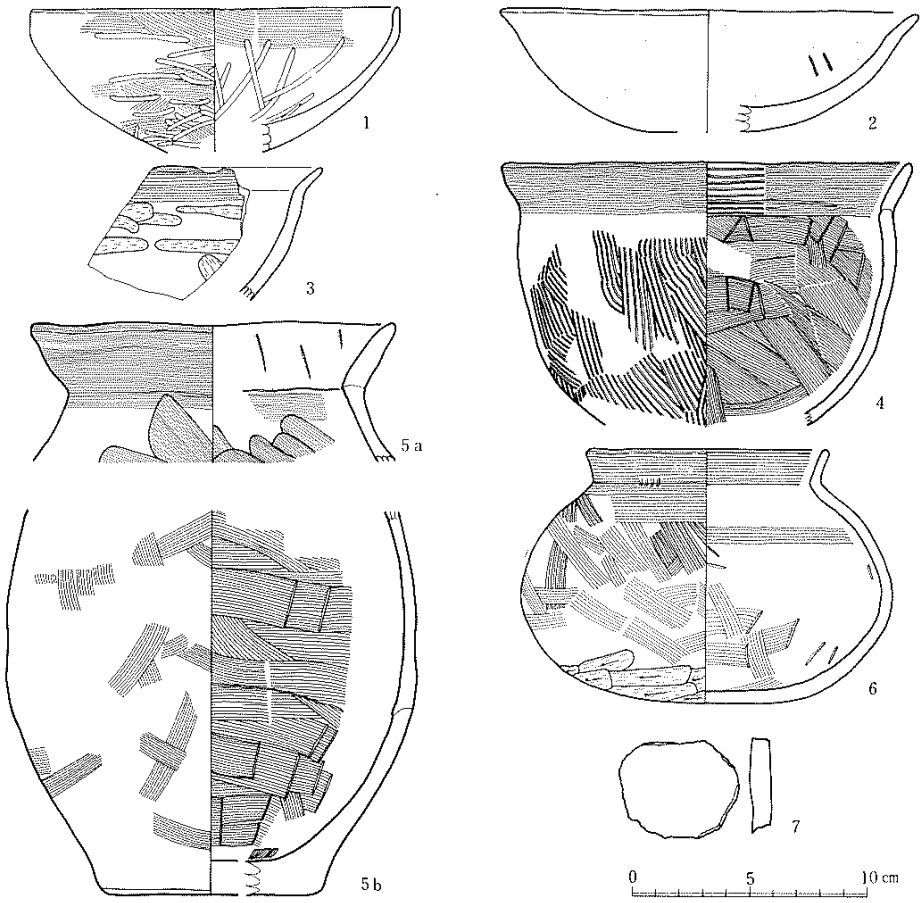
＜基本層位出土遺物＞　縄文土器小片が2点出土している。本遺跡には今回の調査で発見されなかった縄文時代の遺構も存在する可能性がある。



No.	土　色	土性・備考
1	黒褐色　10YR3/1	粘土質シルト
2	暗青灰色 10BG3/1	粘土・酸化鉄沈着

遺　構	土　色	土　性
ピット堆積土	暗褐色　10YR2/2	シルト

第4図　白山遺跡の土壙とピット列

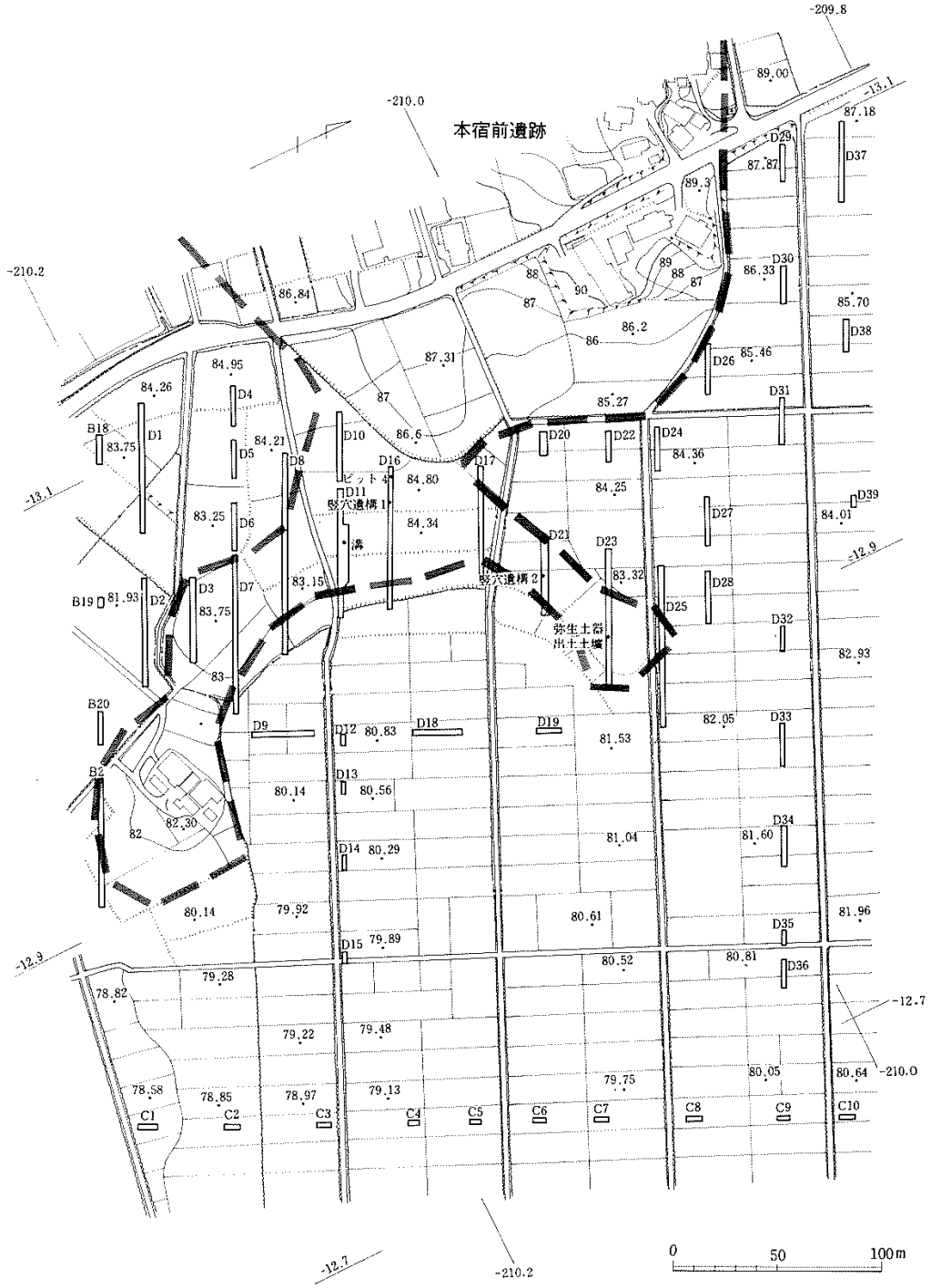


No.	トレンチ	層位・遺構	器種	器形	法量	文様・調整 その他	時期・年代	写真	登録No.
1	A1	土壙確認面	土師器	坏	口径13.7cm器高(6.3cm)	外:ナデ →ミガキ 内:ナデ→ミガキ	古墳（中）	—	4
2	A1	土壙確認面	土師器	坏	口径17.4cm器高5.3 cm	外:ナデ? マメツ 内:ヘラナデ	古墳（中）	—	5
3	A1	土壙確認面	土師器	坏	—	外:ヨコナデ ヘラナデ内:マメツ	古墳（中）	—	6
4	A1	土壙確認面	土師器	甕	口径17.4cm	外:ヨコナデ ハケメ 内:ヘラナデ	古墳（中）	7-3	7
5	A1	土壙 1層	土師器	甕	口径15.5cm底径11.0cm	外:ヨコナデ ヘラナデ内:ヘラナデ	古墳（中）	7-2	1・2
6	A1	土壙 1層	土師器	壺	口径10.5cm底径 6.0cm 胴径16.1cm器高11.0cm	外:ヨコナデ ハケメ →ヘラナデ 内:ヨコナデ ヘラナデ底:ヘラケズリ	古墳（中）	7-1	3
7	B8	溝跡2 堆	縄文土器	円盤状土製品	5.1 cm×4.1 cm×0.9 cm	表:ナデ 裏:ミガキ	—	7-4	8

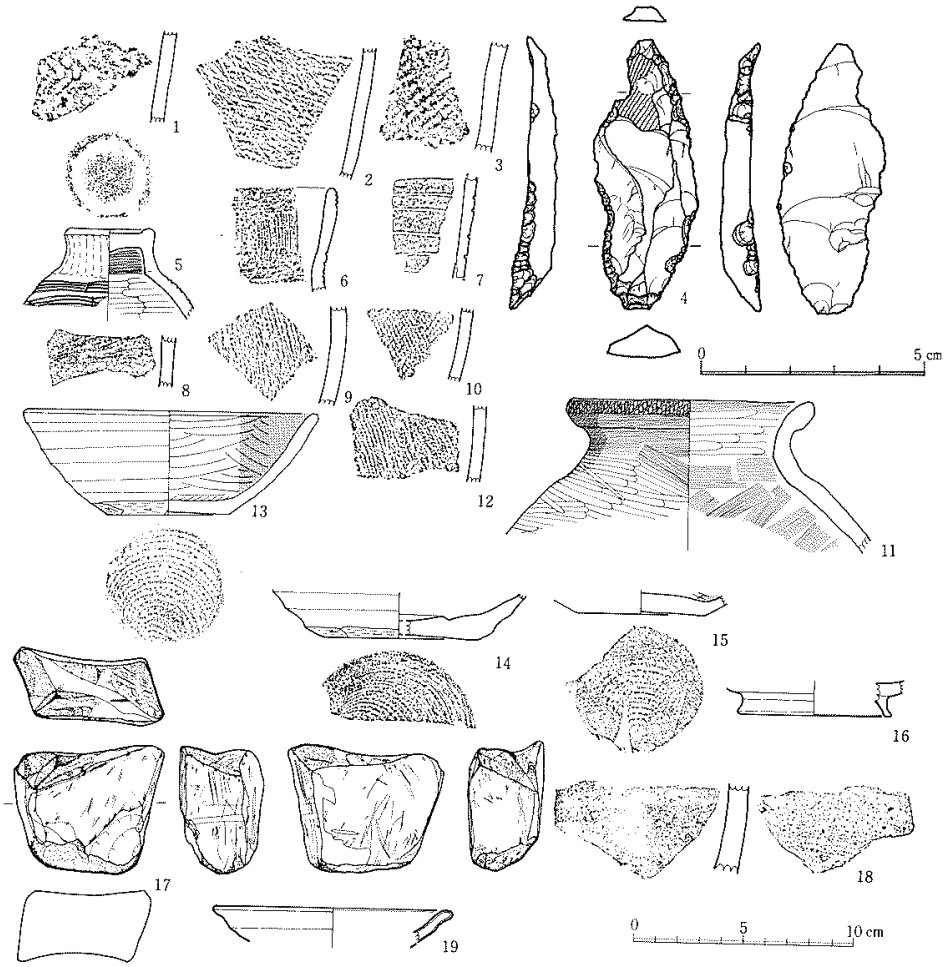
第5図 白山遺跡出土遺物

(2) 本宿前遺跡（第6・7図）

〔検出遺構と出土遺物〕竪穴遺構（住居跡？）2基、溝跡9条、土壙・ピット216基を検出している。これらの遺構はD16・D11トレンチで最も密度濃く分布しており、遺物も多く出土している。

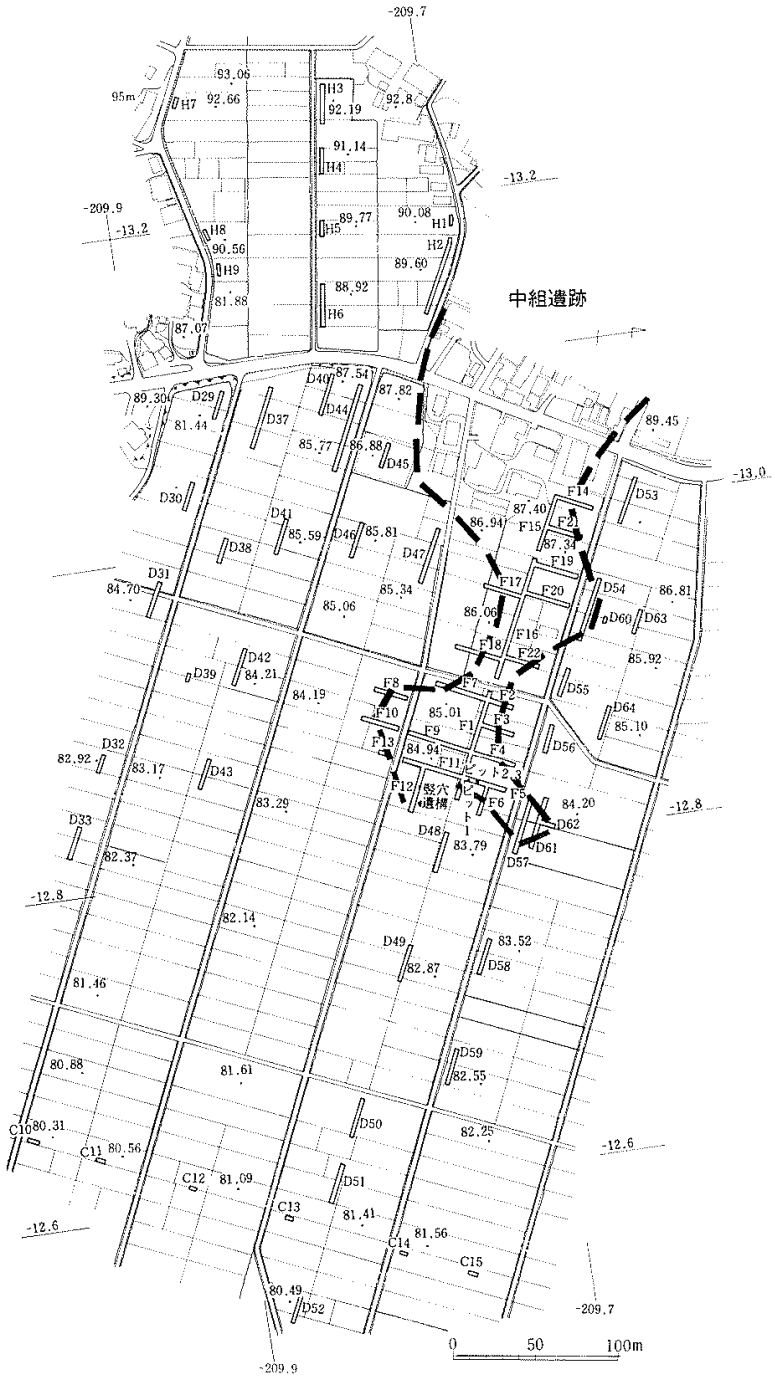


第６図　本宿前遺跡トレンチ配置図



No.	トレンチ	層位・遺構	器種	器形	法量・文様・調整 その他	時期・年代	写真	登録No.
1	D25	遺構確認面	縄文土器	—	外：結束縄文 内：ナデ 胎土：繊維混入	早期末葉～前期前葉	7-5	25
2	D16	遺構確認面	縄文土器	—	外：網目状撚糸文内：ナデ	—	7-6	15
3	D37	遺構確認面	縄文土器	—	外：縄文LR 内：ナデ	—	7-7	28
4	D16	遺構確認面	剝片石器	ナイフ状石器	長 6.3cm 幅 2.3cm 厚 0.7cm 重 9.8g 珪質頁岩製	縄文時代か	7-8	18
5	D 2	基本層位	弥生土器	蓋	摘み径 4.2cm 外：並行沈線文 ヘラミガキ（タテ）内：ユビナデ ミガキ 摘み：布目痕	Ⅲ期後半 円田式	7-10	9
6	D25	遺構確認面	弥生土器	壺	外：並行沈線文 被膜状炭化物 内：ミガキ	円田式	7-11	26
7	D16	遺構確認面	弥生土器	—	外：並行沈線文 内：ナデ	円田式	7-17	17
8	D16	Pit 4 堆	弥生土器	—	外：撚糸文r, 内：ミガキ	—		14
9	D25	遺構確認面	弥生土器	—	外：撚糸文r, 内：ナデ	—	7-13	27
10	D16	遺構確認面	弥生土器	—	外：縄文LR, 内：ナデ	—	7-14	16
11	D23	Pit 6 堆	弥生土器	壺	口径11.4cm 外：縄文RL（口唇部）ナデ→ミガキ すす状炭化物付着 内：ナデ→ミガキ	Ⅲ期模形囲 ～円田式	7-9	24
12	D16	基本層位	弥生土器	—	外：撚糸文r, 内：ナデ	—	7-15	22
13	H 8	基本層位	土師器	坏	口径13.9cm 底径 5.5cm 器高 4.8cm 外：ロクロナデ ヘラケズリ 内：ヘラミガキ 黒色処理 底：回転糸切り	平安時代 表杉ノ入式	8-1	28
14	D11	基本層位	土師器	甕	底径 7.2cm 外内：ロクロナデ 底：回転糸切り→手持ちヘラケズリ	表杉ノ入式	8-2	10
15	D11	溝跡1 堆	土師器	坏	底径 5.8cm 外：ロクロナデ 内：ヘラミガキ 黒色処理 底：回転糸切り→ヘラナデ	表杉ノ入式	8-3	11
16	D16	遺構確認面	須恵器	高台付坏	高台径 7.0cm 外内：ロクロナデ	—	—	19
17	D16	竪穴遺構1	石製品	砥石	5.9cm× 6.5cm× 3.3cm 152g 珪化した凝灰質泥岩	古代	8-6	13
18	D16	基本層位	施釉陶器	甕	外：ロクロナデ灰色釉 内：ロクロナデ	中世	8-4	23
19	D16	遺構確認面	施釉陶器	皿	口径11.0cm 釉厚 0.8mm 外内：志野釉 貫入あり	近世	8-5	20

第７図　本宿前遺跡出土遺物



第８図　中組遺跡トレンチ配置図

《竪穴遺構》竪穴遺構１はD16 トレンチ地山面で、北東角を確認している。平面形は方形と思われ、堆積土はオリーブ褐色のシルト質土である。出土遺物には土師器甕の小片や砥石（第7 図 17）があり、古代の住居跡と思われる。竪穴遺構 2 はD21 トレンチ地山面で北半部を確認している。平面形は直径 5m ほどの円形と思われ、堆積土は灰黄褐色のシルト質土である。出土遺物には土師器甕の小片があり、古代の遺構と思われる。

《溝跡》溝跡 1 はD11 トレンチ地山面で検出している。上幅約 1m でほぼ南北方向に延びており、堆積土は黒褐色のシルト質土である。出土遺物にはロクロ土師器坏（第 7 図 15）があり、平安時代の遺構と考えられる（氏家 1957）。同トレンチには別に 2 条の溝跡があり、そのうち 1 条は溝跡 1 と切り合い、溝跡 1 よりも古いことがわかる。

《土堀・ピット》形態や規模はさまざまであるが、遺物が出土したものについてみると、Ｐ1 はD11 トレンチ地山面で確認され、平面形は直径 1m 強の円形である。出土遺物には施釉陶器小片があり、時期は近世以後である。P2～5 はD16 トレンチ地山面で確認され、平面形はいずれも長軸が 1m 前後の方形に近い形態である。出土遺物にはロクロ土師器や須恵器の小片があり、これらの時期は平安時代と考えられる。なおP4 堆積土には弥生土器も 1 片混入している（第 7 図 8）。P6 はD23 トレンチ地山面で北半分が確認され、平面形は直径 2m ほどの円形を呈し、堆積土は褐色のシルト質土である。出土遺物には弥生土器壷（第 7 図 11）があり、その時期はⅢ期（桝形囲式～円田式）と思われる。このほかD16 トレンチで検出したピット 2 基には円形の柱痕跡が認められ、ピット群の一部は掘立柱建物跡の柱穴になる可能性がある。

〔基本層位出土遺物〕縄文土器および石器（1～4）、弥生土器（5～7・9・10・12）、土師器（13・14）・須恵器（16）、中近世の陶器（18・19）がある。

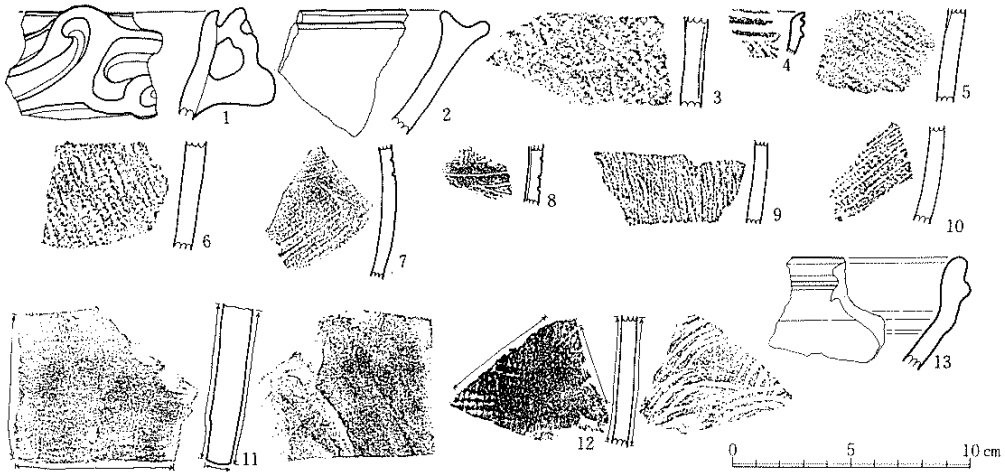
(3) 中組遺跡（第 8・9 図）

〔検出遺構と出土遺物〕竪穴遺構（住居跡？）1 基、溝跡 7 条、土壙・ピット 242 基を検出している。これらの遺構はF1・F5・F9～F12 トレンチで密度濃く分布している。

《竪穴遺構》竪穴遺構１はF12 トレンチ地山面で、南辺を確認している。平面形は方形に近いと思われ、堆積土は黒褐色のシルト質土である。

《土壙・ピット》形態や規模はさまざまであるが、遺物が出土したものについてみると、Ｐ1～3 はF5 トレンチ地山面で確認され、平面形はP1 が長軸 50 ㎝短軸 20 ㎝程の細長い楕円形、P2 は直径 20 ㎝、P3 は直径 40 ㎝ほどの円形である。各々から縄文土器が出土している（2・4・5）。P4 はF12 トレンチ地山面で確認され、平面形は直径 30 ㎝ほどの円形である。出土遺物には土師器の小片がある。このほかF1・F5・F11 トレンチで検出した合計 5 基のピットには円形の柱痕跡が認められ、ピット群の一部は掘立柱建物跡の柱穴になる可能性がある。

〔基本層位出土遺物〕縄文土器（第９図１・３・６）および剥片石器、弥生土器（7～10）、土師器、須恵器（11・12）、赤焼土器、中世陶器（13）がある。



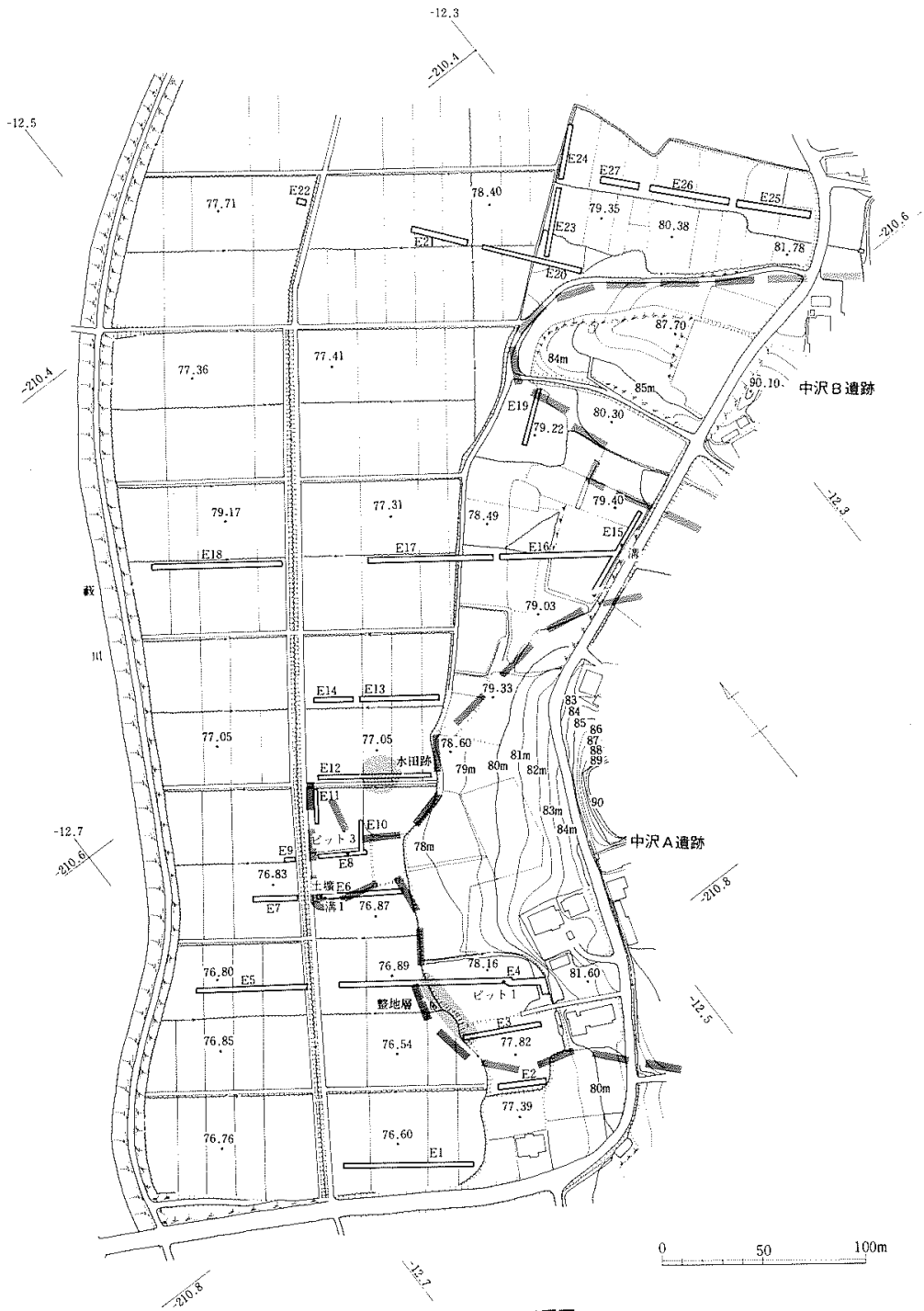
No.	ﾄﾚﾝﾁ	層位・遺構	器　種	器　形	法量・文様・調整　その他	時期・年代	写真	登録No.
1	F５	基本層位	縄文土器	－	外：袋状突起・渦巻文　内：ミガキ	大木8b式	8-7	33
2	F５	Pit2　堆	縄文土器	－	外内：ミガキ	1 に同じか	8-8	36
3	F６	基本層位	縄文土器	－	外：並行垂下沈線文　縄文LR　内：マメツ	—	8-9	38
4	F５	Pit1　堆	縄文土器	－	外：横位隆沈線文　撚糸文r?　内：ナデ	—	8-11	35
5	F５	Pit3　堆	縄文土器	－	外：縄文LR　内：ナデ	—	－	37
6	F５	基本層位	縄文土器	－	外：縄文LR　内：ナデ	—	－	34
7	F	表　採	弥生土器	－	外：並行沈線文　撚糸文r 、内：ナデ	Ⅳ期十三塚式	8-12	41
8	F	表　採	弥生土器	－	外：並行沈線文　内：マメツ	Ⅲ期桝形囲式	8-13	42
9	D40	遺構確認面	弥生土器	－	外：撚糸文r 、内：ナデ	—	8-14	30
10	F	表　採	弥生土器	－	外：撚糸文r,内：ミガキ	—	8-15	43
11	F７	基本層位	須恵器	甕→（転用）	8.0cm× 6.4cm　厚 1.1cm 外：並行叩き目→（転用）外内と二側縁：ミガキ	古　代	8-16	39
12	D53	基本層位	須恵器	甕→（転用）	6.8cm× 5.4cm　厚 0.7cm　外：平行叩き目 内：青海波文→（転用）外内と二側縁：ミガキ	古　代	8-19	31
13	F	表　採	施釉陶器	擂　鉢	外：横位隆線　外内：ロクロナデ　暗褐色釉	近　世	8-18	44

第９図　中組遺跡出土遺物

(4) 中沢A遺跡（第10・11図）

〔検出遺構と出土遺物〕丘陵裾部で整地層１か所、溝跡３条、土壙・ピット132基を検出しているほか、後背湿地で古い水田跡１枚を確認している。前者の遺構はE4・E3トレンチで密度濃く分布している。

《整地層》E3トレンチ西端からE4トレンチ中程にかけて幅4m 最大厚30 cmほどの整地層が認められる。地形の段差に沿って地山粒まじりの黄褐色シルト質土を、旧表土の上に積み上げたものである。



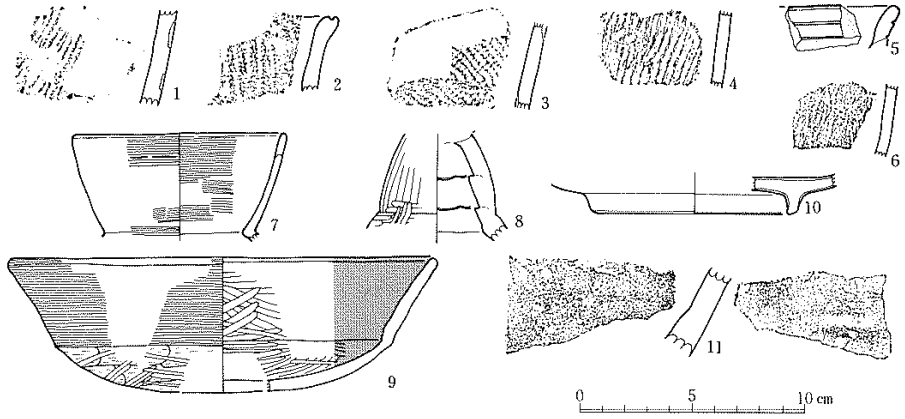
第10図　中沢Ａ・Ｂ遺跡トレンチ配置図

《溝跡》溝跡1はE6トレンチ地山面で確認され、上幅2mで、南東から北西へ延びている。堆積土から土師器甕が出土しており、古代の遺構であるとみられる。

《土壙・ピット》形態や規模はさまざまであるが、遺物が出土したものについてみると、P1はE4トレンチ地山面で確認され、平面形は直径40cmほどの円形である。堆積土から高坏脚部（第11図8）が出土しており、古墳時代の遺構である可能性がある。P2はE6トレンチ地山面で確認され、平面形は直径80cmほどの円形である。堆積土から土師器坏（9）が出土しており、奈良時代の遺構である可能性がある。P3はE8トレンチ地山面で確認され、平面形は直径40cmほどの円形である。出土遺物には土師器甕の小片があり、これも古代の遺構とみられる。このほかE4トレンチで検出した2基のピットには円形の柱痕跡が認められ、ピット群の一部は掘立柱建物跡の柱穴になる可能性がある。

《水田跡》E12トレンチのみで確認されている。耕作土はオリーブ黒色を呈するスクモ状の粘土で、地山とみられるスクモ状の灰白色粘土層の直上にみられる。層厚20cmで、攪拌による下層の巻き上げが著しく、また畦畔らしきものが認めらてれる。

〔基本層位出土遺物〕縄文土器（第11図1～4）および剥片石器、弥生土器（5・6）、土師器、（7）、中世陶器・青磁（10・11）がある。



No.	トレンチ	層位・遺構	器種	器形	法量・文様・調整　その他	時期・年代	写真	登録No
1	E6	基本層位	縄文土器	—	外：撚糸文ℓ内：ミガキ　胎土：繊維混入	早期末葉～前期前葉	9-1	51
2	E6	基本層位	縄文土器	—	外：縄文RL　内：ミガキ　胎土：繊維混入	早期末葉～前期前葉	9-2	52
3	E12	基本層位	縄文土器	—	外：縄文RL　内：ミガキ	—	9-3	56
4	E6	基本層位	縄文土器	—	外：撚糸文r内：ミガキ	—	9-4	53
5	E6	基本層位	弥生土器	—	外：平行沈線文　内：マメツ	Ⅲ期円田式か	9-5	54
6	E6	基本層位	弥生土器	—	外：網目状撚糸文ℓ内：ミガキ	—	9-6	49
7	E6	基本層位	土師器	甕	口径 9.6cm　外内：ヨコナデ	古墳時代	9-7	55
8	E4	Pit1堆	土師器	高坏	外：ヘラミガキ　内：ヘラナデ	古墳時代	9-8	46
9	E6	Pit2堆	土師器	坏	外：稜ありヨコナデ　ヘラケズリ（～底）内：ヘラミガキ→黒色処理	奈良時代	—	48
10	E4	基本層位	青磁	皿	外内（畳付以外）：青灰色釉　釉厚 1.0cm　中国産	中世	9-9	47
11	E1	基本層位	無釉陶器	擂鉢	外：ロクロナデ　内：使用痕　筋目なし　産地不明	中世	9-10	45

第11図　中沢Ａ遺跡出土遺物

(5) 中沢B遺跡（第 10・12 図）

〔検出遺構〕 E15 トレンチの断面で溝跡 1 条を確認しているのみである。

〔基本層位出土遺物〕弥生土器（第 12 図 1）、土師器（2）、須恵器（3）がある。

No.	ﾄﾚﾝﾁ	層位・遺構	器種	器形	文様・調整　その他	時期・年代	写真	登録No.
1	E 18	基本層位	弥生土器	—	外:撚糸文 ℓ 内:ﾐｶｷ	—	9-11	57
2	E 22	基本層位	土師器	坏	外:ﾐｺﾅﾃﾞ →ﾏﾒﾂ 内:ﾖｺﾅﾃﾞ 赤彩	古墳時代	9-12	58
3	E 22	基本層位	須恵器	甕	外:平行叩き目　内:ﾏﾒﾂ	古　代	9-13	59

第12図　中沢Ｂ遺跡出土遺物

(6) 立目場遺跡（第 13・14 図）

〔検出遺構と出土遺物〕 E32 トレンチで土壙・ピット 10 基を確認している。P1 は平面形は直径 2m ほどの円形である。堆積土から土師器甕の小片が出土しており、古代の遺構である可能性がある。その他のピットは平面形が直径 30～50 cmの円形を呈するものであるが、遺物は出土していない。

〔基本層位出土遺物〕縄文土器（第 13 図 1）、弥生土器（2）がある。

No.	ﾄﾚﾝﾁ	層位・遺構	器種	器形	文様・調整　その他	時期・年代	写真	登録No.
1	E 33	基本層位	縄文土器	—	外:縄文RL　内:ナデ	—	9-14	61
2	E 25	基本層位	弥生土器	—	外:同時平行沈線文　内:ﾏﾒﾂ	Ⅲ期円田式	9-15	60

第13図　立目場遺跡出土遺物

(7) 屋木戸内遺跡（第 14 図）

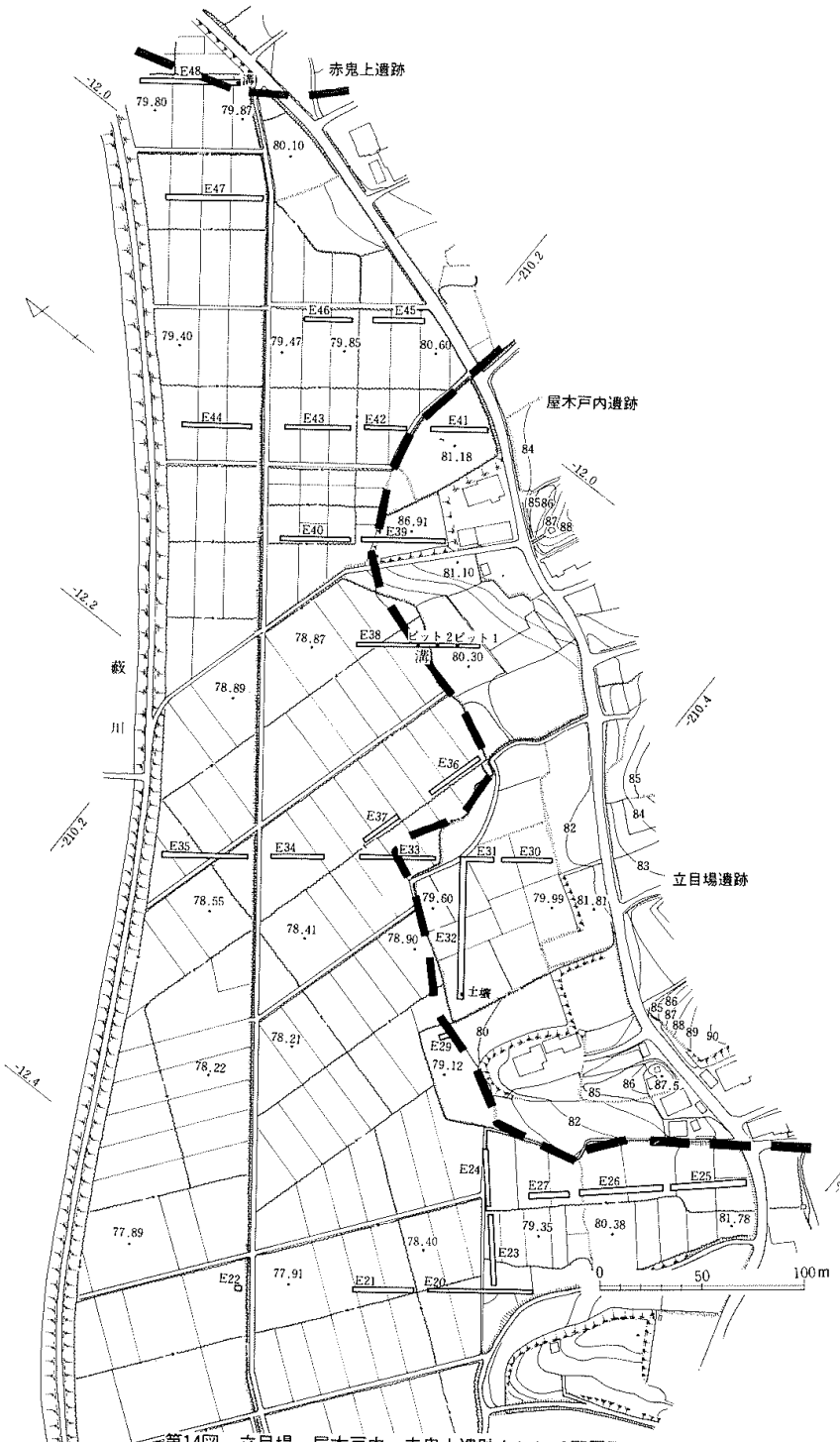
〔検出遺構と出土遺物〕 E38 トレンチほかで溝跡 1 条、土壙・ピット 14 基を検出している。

《溝跡》溝跡 1 はE38 トレンチで確認され、上幅 60 cmで、南北に延びている。出土遺物はない。

《土壙・ピット》E38 トレンチで 13 基、E41 トレンチで 1 基を確認している。P1 はE38 トレンチで確認され、平面形が直径 25 cmほどの円形を呈するもので、堆積土から弥生土器小片が出土している。P2 もE38 トレンチで確認され、平面形が直径 55 cmほどの円形を呈するもので、堆積土から土師器小片が出土している。その他のピットは平面形が直径 20～40 cmほどの円形を呈するものであるが、出土遺物はない。

(8) 赤鬼上遺跡（第 14 図）

〔検出遺構〕 E48 トレンチで溝跡 1 条を確認しており、上幅 1.2m で、南北に延びている。出土遺物はない。



第14図　立目場・屋木戸内・赤鬼上遺跡トレンチ配置図

Ⅲ　まとめ

1　白山、本宿前、中組、中沢Ａ、中沢Ｂ、立目場、屋木戸内、赤鬼上の８遺跡は刈田郡蔵王町円田盆地に所在する遺跡で、今回の調査ではこれらの遺跡の範囲を確認している。

2　検出された遺構には、丘陵裾部の微高地上に立地している竪穴遺構・溝跡・土壙・ピットや整地層があり、後背湿地では水田跡がある。また、それらの遺構や基本層位から出土した遺物には、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、中近世の陶磁器のほか、石器、石製品がある。

3　各遺跡の丘陵およびその裾部に立地する遺構群は集落跡の一部と考えられる。確認調査のため遺物が発見されていない遺構が大部分ではあるが、今回の出土遺物の年代をもって集落跡の年代を考えておきたい。遺跡ごとに列挙すると、白山遺跡は縄文・古墳、本宿前遺跡は縄文・弥生・奈良平安・中近世、中組遺跡は縄文・弥生・奈良平安・中世、中沢Ａ遺跡は縄文・弥生・古墳・奈良平安・中世、中沢Ｂ遺跡は弥生・古墳・奈良平安、立目場遺跡は縄文・弥生、屋木戸内遺跡は弥生・奈良平安である。

4　後背湿地部分には水田跡が検出されることが予想されたが、確認できたのは中沢Ａ遺跡の一部のみである。古代以前の水田域は盆地内でも耕作に条件の良い場所に限定されていたものと考えられる。

引用・参考文献

相原淳一（1988）：蔵王町諏訪館前遺跡　昭和63年度宮城県内発掘成果発表会発表要旨

阿部・千葉（1980）：台ノ山遺跡　宮城県文化財調査報告書第62集（新幹線Ⅱ）

氏家和典（1957）：東北土師器の型式分類とその編年　「歴史」第14輯　東北史学会

太田昭夫（1988）：宮城県における弥生式土器編年研究の現状と課題
第2回縄文文化検討会シンポジウム
「東北地方の弥生式土器の編年について」縄文文化検討会編所収

奥津春生（不明）：仙台周辺（仙台－槻木－円田－秋保－根白石－塩釜）の地質　私家版

蔵王町史編さん委員会（1987）：蔵王町史　資料編1

須藤隆（1984）：東北地方における弥生時代農耕社会の成立と展開
「宮城の研究」1　考古学篇　大阪・清文堂

丹羽茂（1983）：宮前遺跡　宮城県文化財調査報告書第96集

写　真　図　版

遺跡遠景（西から）

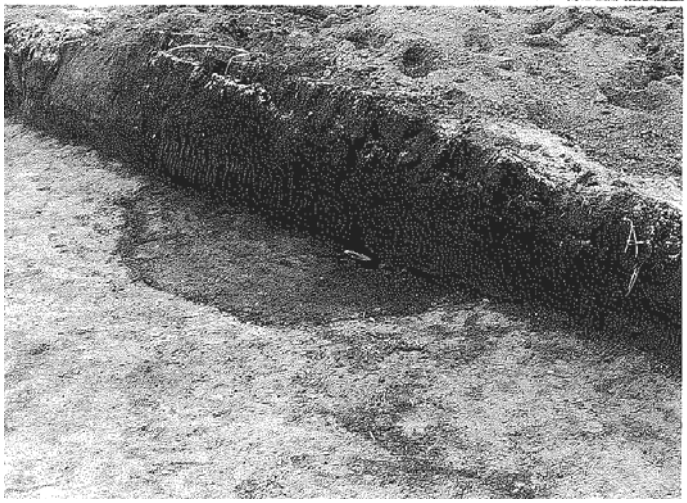
白山遺跡・発掘前（西から）

Ｂ８トレンチ

写真図版１

A１トレンチ土師器出土土壙

D21トレンチ

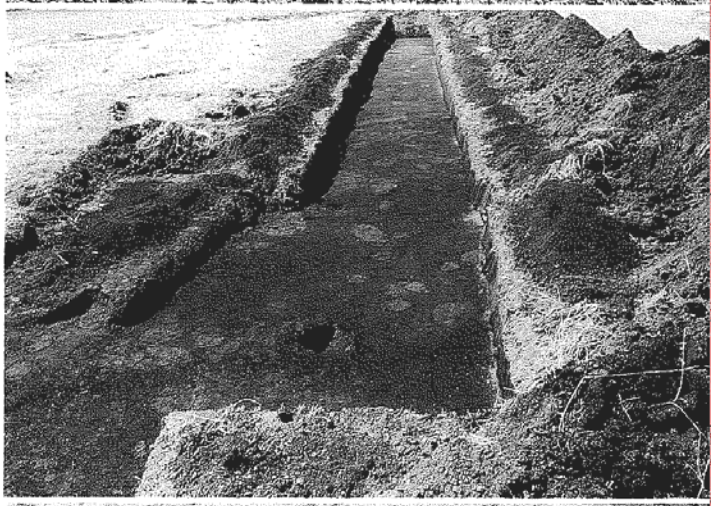


D23トレンチ弥生土器
出土土壙

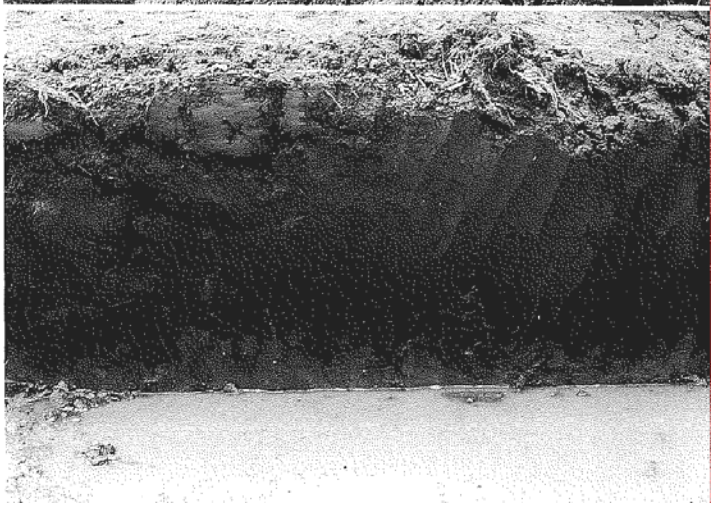
写真図版２

F12トレンチ

E 4 トレンチ

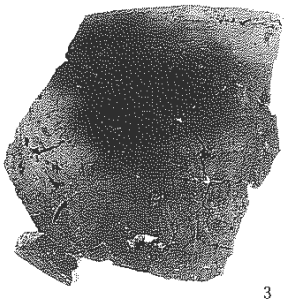


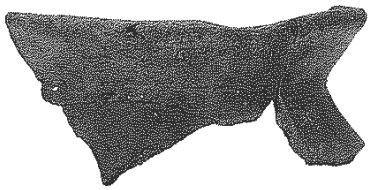
E12トレンチ水田



写真図版 3

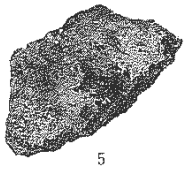
1

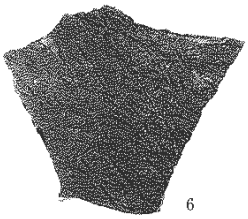

3

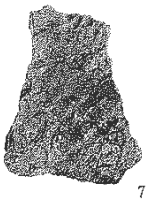

2

4

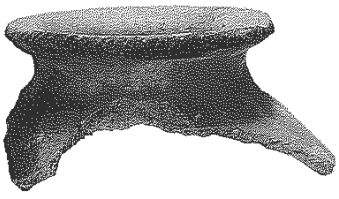
白山遺跡出土遺物


5


6


7

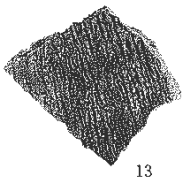
8


9

10

11

12

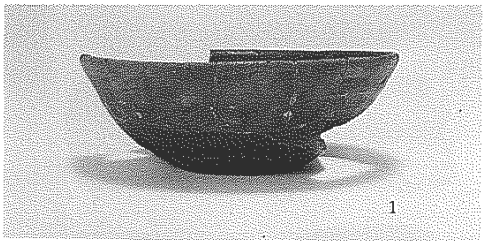

13

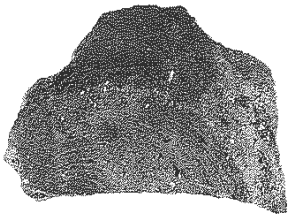
14

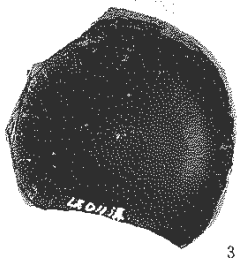
15

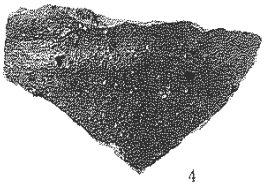
本宿前遺跡出土遺物

写真図版 4

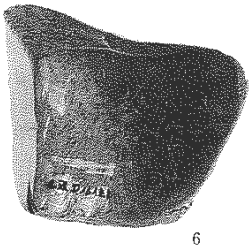

1


2

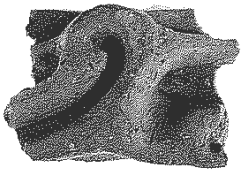

3


4

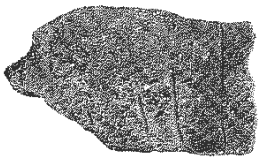
5

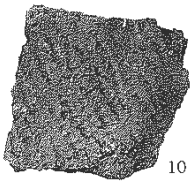

6

本宿前遺跡出土遺物


7

8

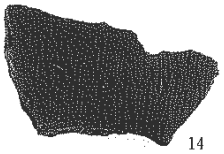

9


10

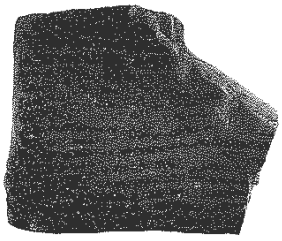
11

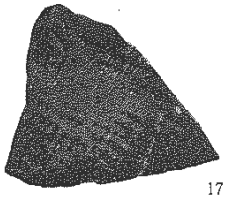
12

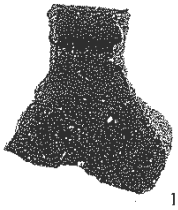
13


14

15

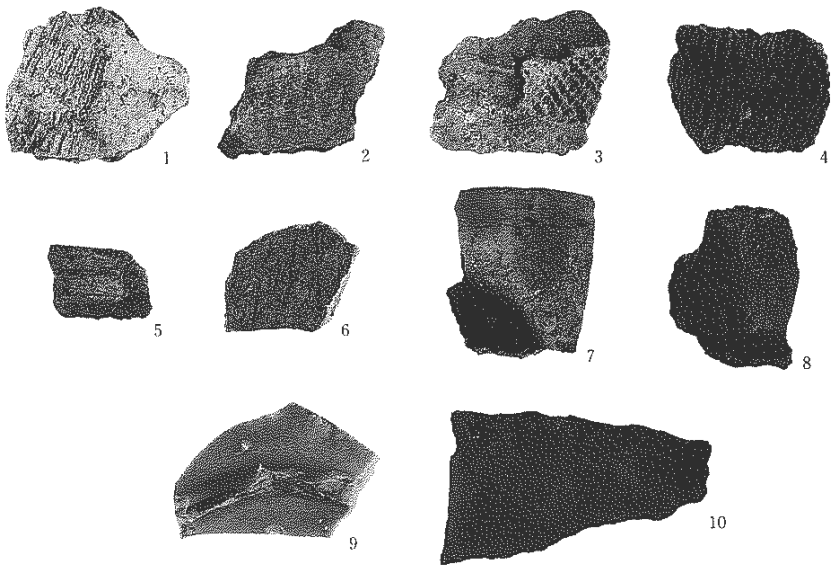

16


17

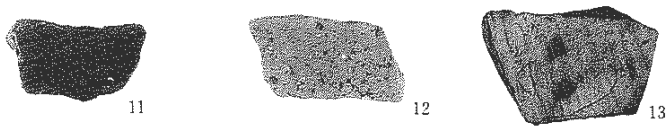

18

中組遺跡出土遺物

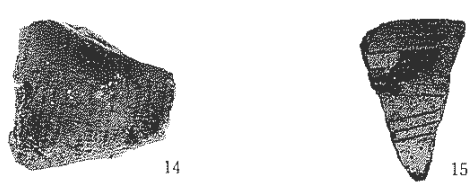
写真図版５



中沢Ａ遺跡出土遺物



中沢Ｂ遺跡出土遺物



立目場遺跡出土遺物

写真図版６